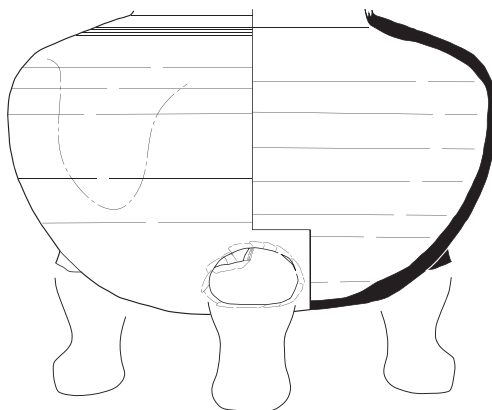


静岡県 富士市

東平遺跡 第20地区



2017年3月

富士市教育委員会



例 言

- 1 本書は静岡県富士市伝法字東平 2327-1、2327-2 において実施した東平遺跡（第 20 地区）の発掘調査にかかわる報告である。発掘調査は宅地造成に先立つ事前調査として、事業者からの委託により富士市教育委員会が実施した。
- 2 発掘調査は、平成 8 年(1996 年)5 月 27 日から 10 月 27 日にかけて実施した。実際の調査掘削面積は 1,559㎡である。
- 3 整理作業は平成 27 年（2015 年）4 月に開始し、本書の刊行をもって終了した。
- 4 本書の執筆は佐藤祐樹（市民部文化振興課主査）、小島利史（市民部文化振興課臨時職員）が担当した。編集は、若林美希（市民部文化振興課臨時職員）の協力を得て、佐藤が行った。
- 5 本書に関わる現地における写真撮影は各調査員が行い、遺物写真は小田貴子（市民部文化振興課臨時職員）による。なお、巻頭カラーの遺物集合写真は杉本和樹（西大寺フォト）による。
- 6 本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定でいる。
- 7 発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。
河合 修 田尾誠敏 平井義敏

凡 例

- 1 座標は任意座標を使用した調査であるが、全体図等は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標である世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。
S B：竪穴建物跡 S H：掘立柱建物跡 S D：溝状遺構 S K：土坑 P i t：小穴
- 3 本書で用いる土器編年は、主として以下の文献を参考にした。
井上喜久男 2015「瓷器」『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系
尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』豊田市教育委員会
木ノ内義昭 2002「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相」『東平遺跡』富士市教育委員会
斎藤孝正 1989「灰釉陶器の研究Ⅱ－猿投窯第Ⅴ期碗・皿類の型式編年－」『名古屋大学文学部研究論集』104（史学 35）
佐藤祐樹 2014「潤井川流域における須恵器流入以降の土器様相」『沢東 A 遺跡 第 1 次』富士市教育委員会
鈴木敏則 1998「第 1 章第 4 節 律令時代土器編年の概要」『梶子北遺跡』遺物編（本文）（財）浜松市文化協会
鈴木敏則 2004「第 5 章第 2 節 静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

目次

例言
凡例
目次

第1章 調査経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2

第2章 立地と概要

第1節 地理的環境	3
第2節 遺跡の概要	4

第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡	9
第2節 掘立柱建物跡	92
第3節 溝状遺構・土坑・ピット	96
第4節 掘立柱建物跡・土坑・遺構外出土遺物	99
第5節 柱穴列	100

第4章 総括

103

付表 遺構概要一覧表
出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1章 調査経緯と経過

第1節 調査の経緯

第1図 静岡県富士市の位置	1
---------------	---

第2章 立地と概要

第1節 地理的環境

第2図 駿河湾上空から富士市を望む	3
第3図 周辺地形図	3

第2節 遺跡の概要

第4図 東平遺跡 調査履歴図	5
第5図 遺構全体図	8

第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡

第6図 SB01 平面図・断面図	9
第7図 SB01 カマド 平面図・断面図	10
第8図 SB01 出土遺物実測図	10
第9図 SB02 平面図・断面図	11
第10図 SB02 カマド 平面図・断面図	11
第11図 SB02 出土遺物実測図	12
第12図 SB03 平面図・断面図	12
第13図 SB03 カマド 平面図・断面図	13
第14図 SB03 出土遺物実測図	13
第15図 SB04 平面図・断面図	14
第16図 SB04 カマド 平面図・断面図	15
第17図 SB04 出土遺物実測図	15
第18図 SB05 平面図・断面図	16
第19図 SB05 カマド 平面図・断面図	16
第20図 SB05 出土遺物実測図	16
第21図 SB06 平面図・断面図	17
第22図 SB06 カマド 平面図・断面図	18
第23図 SB06 出土遺物実測図	19
第24図 SB07 平面図・断面図	20
第25図 SB07 出土遺物実測図	20
第26図 SB08 平面図・断面図	21
第27図 SB08 カマド 平面図・断面図	21
第28図 SB08 出土遺物実測図	22
第29図 SB09 平面図・断面図	23
第30図 SB09 カマド 平面図・断面図	24
第31図 SB09 出土遺物実測図	24
第32図 SB10 平面図・断面図	25
第33図 SB10 カマド 平面図・断面図	25
第34図 SB10 出土遺物実測図	26
第35図 SB11 平面図・断面図	26
第36図 SB11 カマド 平面図・断面図	27
第37図 SB11 出土遺物実測図	27
第38図 SB12 平面図・断面図	28
第39図 SB13 平面図・断面図	29
第40図 SB13 出土遺物実測図	29
第41図 SB14 平面図・断面図	30
第42図 SB14 カマド 平面図・断面図	30
第43図 SB14 出土遺物実測図	31
第44図 SB15 平面図・断面図	31
第45図 SB15 カマド 平面図・断面図	32
第46図 SB15 出土遺物実測図	32
第47図 SB17・19 平面図・断面図	33
第48図 SB17・19 カマド 平面図・断面図	34
第49図 SB17 出土遺物実測図	34
第50図 SB18 平面図・断面図	35

第51図 SB18 出土遺物実測図	36
第52図 SB20 平面図・断面図	36
第53図 SB20 カマド 平面図・断面図	37
第54図 SB20 出土遺物実測図	37
第55図 SB21 平面図・断面図	38
第56図 SB21 カマド 平面図・断面図	38
第57図 SB21 出土遺物実測図	39
第58図 SB22 平面図・断面図	40
第59図 SB22 カマド 平面図・断面図	40
第60図 SB22 出土遺物実測図	41
第61図 SB23 平面図・断面図	42
第62図 SB23 カマド 平面図・断面図	42
第63図 SB23 出土遺物実測図	43
第64図 SB24 平面図・断面図	44
第65図 SB24 カマド 平面図・断面図	44
第66図 SB24 出土遺物実測図	45
第67図 SB25 平面図・断面図	46
第68図 SB25 出土遺物実測図 1	46
第69図 SB25 出土遺物実測図 2	47
第70図 SB26 平面図・断面図	48
第71図 SB26 カマド 平面図・断面図	48
第72図 SB26 出土遺物実測図	49
第73図 SB27 平面図・断面図	50
第74図 SB27 カマド 平面図・断面図	50
第75図 SB27 出土遺物実測図	51
第76図 SB28 平面図・断面図	51
第77図 SB28 カマド 平面図・断面図	52
第78図 SB28 出土遺物実測図	52
第79図 SB29 平面図・断面図	53
第80図 SB29 カマド 平面図・断面図	54
第81図 SB29 出土遺物実測図	54
第82図 SB30 出土遺物実測図	55
第83図 SB30 平面図・断面図	55
第84図 SB31 平面図・断面図	56
第85図 SB31 カマド 平面図・断面図	57
第86図 SB31 出土遺物実測図	57
第87図 SB32 平面図・断面図	58
第88図 SB32 カマド 平面図・断面図	59
第89図 SB32 出土遺物実測図	59
第90図 SB33 出土遺物実測図	59
第91図 SB33 平面図・断面図	60
第92図 SB33 カマド 平面図・断面図	60
第93図 SB34 平面図・断面図	61
第94図 SB34 出土遺物実測図	61
第95図 SB35 平面図・断面図	62
第96図 SB35 カマド 平面図・断面図	63
第97図 SB35 出土遺物実測図	63
第98図 SB36 平面図・断面図	64
第99図 SB36 カマド 平面図・断面図	65
第100図 SB36 出土遺物実測図	65
第101図 SB37 平面図・断面図	66
第102図 SB37 出土遺物実測図	67
第103図 SB38 平面図・断面図	67
第104図 SB38 出土遺物実測図	67
第105図 SB39 平面図・断面図	68
第106図 SB39 カマド 平面図・断面図	68
第107図 SB39 出土遺物実測図	69

挿表目次

第108図	SB40 平面図・断面図	70
第109図	SB40 カマド 平面図・断面図	70
第110図	SB40 出土遺物実測図	71
第111図	SB42・58 平面図・断面図	72
第112図	SB42 カマド 平面図・断面図	73
第113図	SB42 出土遺物実測図	74
第114図	SB43 平面図・断面図	75
第115図	SB43 出土遺物実測図	75
第116図	SB44 平面図・断面図	76
第117図	SB44 出土遺物実測図	77
第118図	SB45 平面図・断面図	78
第119図	SB45 カマド 平面図・断面図	78
第120図	SB45 出土遺物実測図	79
第121図	SB46・47 平面図・断面図	80
第122図	SB46 カマド 平面図・断面図	81
第123図	SB46 出土遺物実測図	81
第124図	SB48 平面図・断面図	82
第125図	SB48 出土遺物実測図	82
第126図	SB49 平面図・断面図	83
第127図	SB49 出土遺物実測図	83
第128図	SB50 平面図・断面図	85
第129図	SB50 カマド 平面図・断面図	85
第130図	SB50 出土遺物実測図	86
第131図	SB51 平面図・断面図	86
第132図	SB51 出土遺物実測図	86
第133図	SB53 平面図・断面図	87
第134図	SB53 出土遺物実測図	88
第135図	SB54・56 平面図・断面図	89
第136図	SB54 カマド 平面図・断面図	89
第137図	SB54 出土遺物実測図	90
第138図	SB57 平面図・断面図	91
第139図	SB57 出土遺物実測図	91
第2節 掘立柱建物跡		
第140図	SH01 平面図・断面図	93
第141図	SH02 平面図・断面図	94
第142図	SH03 平面図・断面図	94
第143図	SH04 平面図・断面図	95
第3節 溝状遺構・土坑・ピット		
第144図	SD01・02 平面図・断面図	97
第145図	SD03 平面図・断面図	97
第146図	土坑・ピット 平面図	98
第4節 掘立柱建物跡・土坑・遺構外出土遺物		
第147図	SH・SK 出土遺物実測図	99
第148図	遺構外 出土遺物実測図	100
第5節 柱穴列		
第149図	SA01～03 平面図・断面図	101

第2章 立地と概要

第2節 遺跡の概要

第1表 東平遺跡 調査履歴一覧表	6
------------------	---

第4章 総括

第2表 東平遺跡における時期別建物数	103
--------------------	-----

写真図版目次

カラー図版

1. 出土遺物集合

PL.1

1. 1区調査区全景（南から）
2. SB01（南から）
3. SB01 カマド（南から）
4. SB02（南東から）
5. SB03（南東から）

PL.2

1. SB04（南東から）
2. SB05（南から）
3. SB06（南から）
4. SB06 カマド（南から）
5. SB08（南から）
6. SB09（南から）
7. SB10（南から）
8. SB11（南から）

PL.3

1. SB12（南から）
2. SB13（南東から）
3. SB14（南から）
4. SB15（南から）
5. SB17 カマド（南西から）
6. SB20（南から）
7. SB22（南から）
8. SB22 カマド（南から）

PL.4

1. SB23（南から）
2. SB25（南から）
3. SB24（南から）
4. SB24 カマド（南から）
5. SB27（南から）
6. SB28（南から）
7. SB29（南から）
8. SB29 カマド（南から）

PL.5

1. 2区調査区全景（南から）

PL.6

1. SB31（南東から）
2. SB32（南東から）
3. SB33（南から）
4. SB34・SB35（南から）
5. SB36 カマド（南から）
6. SB37 カマド（南から）
7. SB38（南から）
8. SB39（南から）

PL.7

1. SB40（南から）
2. SB40 カマド（南から）
3. SB42（南から）
4. SB42 カマド（南から）
5. SB43（南から）
6. SB44（南から）
7. SB45（西から）
8. SB53（南から）

PL.8

1. SB46 カマド（南から）
2. SB46 カマド遺物出土状況
3. SB49（南から）
4. SB50（南から）
5. SH04（南から）
6. SD01（南から）
7. SD02（西から）
8. SD03（西から）

PL.9

1. 出土遺物集合

PL.10～34

出土遺物

第1章 調査経緯と経過

第1節 調査の経緯

事業者は周知の埋蔵文化財包蔵地「東平遺跡」の範囲に該当する富士市伝法字東平 2327-1、2327-2(1,047㎡)において宅地造成を計画した。

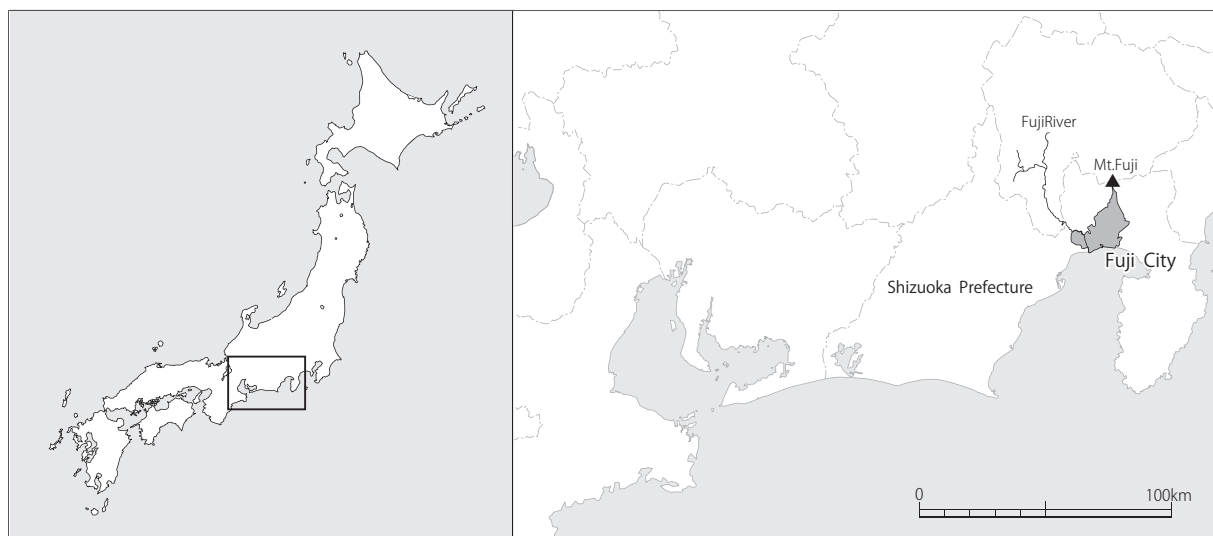
平成7年4月11日、事業者から文化財保護法（以下、法）に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」があり、富士市教育委員会（以下、市教委）はこれを静岡県教育委員会教育長（以下、県教育長）に進達した（平成7年4月25日付け、富教文第19号）。県教育長からは工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があり、市教委はこれを事業者に伝達した（平成7年5月25日付け、富教文第36号）。

市教委は、試掘調査を実施することとし、法第98条の2第1項(当時)に基づき「埋蔵文化財発掘調査の通知」を県教育長ならびに文化庁長官に提出した（平成7年8月30日付け、富教文第112号）。試掘調査は、平成7年9月7日から9月14日にかけて実施した。当該地に設定した3ヶ所のトレンチ（調査面積310㎡）において調査を行い、ほぼ全面から奈良・平安時代の堅穴建物跡を含む遺構が検出された。

平成8年2月には事業計画に変更があり、富士市伝法字東平 2328（512㎡）を含めて宅地造成が行われることとなり、平成8年2月9日、「埋蔵文化財発掘の届出」があり、市教委はこれを県教育長に進達した（平成8年2月16日付け、富教文第256号）。県教育長からは工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があり、市教委はこれを事業者に伝達した（平成8年3月7日付け、富教文第279号）。

市教委は、試掘調査の結果から事業を実施するには全面的な本発掘調査による記録保存が必要とし、事業者との協議を行った。協議の結果、事業者は富士市に本発掘調査を依頼することとなり、市教委は文化財保護法第98条の2第1項に基づき「埋蔵文化財発掘調査の通知」を県教育長ならびに文化庁長官に提出した（平成8年5月14日付け、富教文第39号）。

平成8年5月、事業者と富士市長は「東平遺跡埋蔵文化財発掘調査契約書」を締結し、当該地（合計1,559㎡）において記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。



第1図 静岡県富士市の位置

第2節 調査の経過

発掘調査

本発掘調査は富士市教育委員会教育長 太田 均のもと、文化振興課職員が担当し、調査は平成8年5月27日から10月27日にかけて行い、排土処理の関係から東西に2分割して実施した。重機により表土を掘削した後遺構確認面を検出し、東へ13.5度傾けた10m方眼のグリッドを基準として、人力により遺構・遺物の検出・記録を行った。

調査の結果、奈良時代から平安時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡などの遺構と中世もしくは近世の土坑を検出し、コンテナ12箱分の土師器・須恵器などの遺物が出土した。

法第65条ならびに遺失物法第1条に基づき、「埋蔵文化財発見届」（平成8年11月5日付け、富教文第161号）を富士警察署長に、「埋蔵文化財保管証」（平成8年11月5日付け、富教文第162号）を県教育長に提出した。

発掘調査は以下の体制で実施した。

平成7年度（試掘調査）

〔事業主体〕 富士市教育委員会 教育長 山本 厚
 教育次長 影島 英三
 文化振興課 課長 立田 守彦
 課長補佐 平澤 信子
 係長 池田 晴夫
 〔調査担当〕 主査 渡井 義彦

平成8年度（本発掘調査）

〔事業主体〕 富士市教育委員会 教育長 太田 均
 教育次長 大竹 庄二
 文化振興課 課長 立田 守彦
 課長補佐 平澤 信子
 係長 池田 晴夫
 〔調査担当〕 主査 渡井 義彦
 指導主事 鳥居己至夫
 主事 久保田伸彦

整理作業・報告書刊行事業

発掘調査報告書（本書）刊行のための整理作業は、諸般の事情により遅れていたが、平成27年4月から開始した。出土遺物の接合再検討・復元・図化・写真撮影、発掘記録図面類・観察表等の整理、遺構図・遺物図のトレース作業、報告の執筆などを行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、出土遺物の集合写真は西大寺フォト杉本和樹氏による。

平成29年3月31日、東平遺跡第20地区埋蔵文化財発掘調査に関わる一連の作業は、本書の刊行をもって終了した。

本書にて報告する図面・発掘記録・出土遺物等の資料は、すべて市教委（富士市埋蔵文化財調査室）にて保管している。今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管される予定である。

整理作業・報告書刊行事業は以下の体制で実施した。

平成27年度

〔事業主体〕 富士市教育委員会 教育長 山田 幸男
 富士市市民部 部長 加納 孝則
 文化振興課 課長 町田しげ美
 文化財担当 統括主幹 前田 勝己
 埋蔵文化財調査室 主査 石川 武男
 上席主事 佐藤 祐樹
 臨時職員 服部 孝信
 小島 利史
 若林 美希

平成28年度

〔事業主体〕 富士市教育委員会 教育長 山田 幸男
 富士市市民部 部長 加納 孝則
 文化振興課 課長 町田しげ美
 文化財担当 統括主幹 久保田伸彦
 主幹 石川 武男
 埋蔵文化財調査室 主査 佐藤 祐樹
 臨時職員 服部 孝信
 小島 利史
 若林 美希

第2章 立地と概要

第1節 地理的環境

東平遺跡が所在する富士市は、静岡県東部に位置する。その地理的環境を概観すると、駿河湾を南に臨み、北には富士山がそびえ、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵と岩淵火山地が、東には既に火山としての活動を停止している愛鷹山が存在する。西方には北から流下する富士川と富士山西麓を源とする潤井川が駿河湾に注ぎ、東方には愛鷹山に源流をもつ須津川や赤淵川、浮島ヶ原低湿地を西流する沼川など、多数の河川が流れる。

こうした環境にある富士市域の地形は、富士山や愛鷹山の火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬され形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に沖積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地など、変化に富んだ様相をみせている。

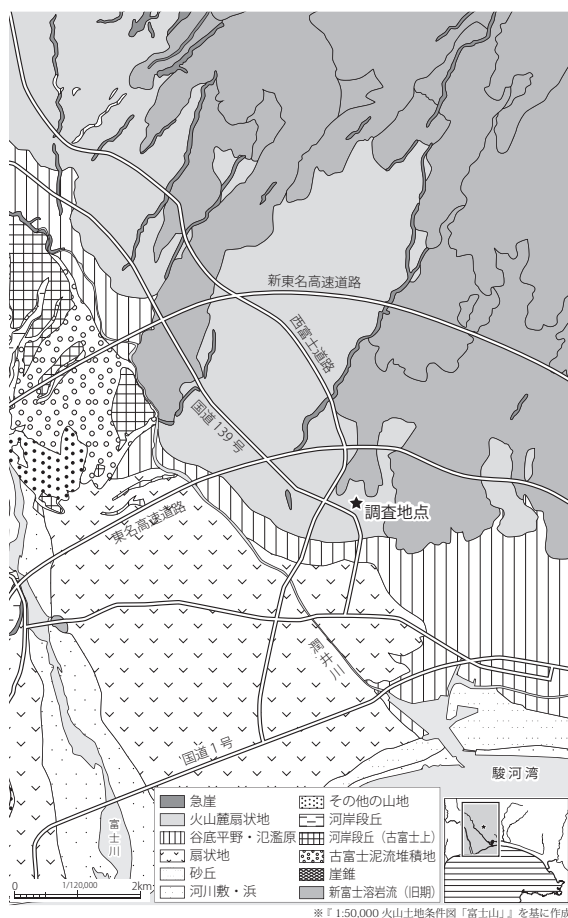
地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火(数十万年前)に始まり、古富士火山(8万年～1万6千年前)、新富士火山(1万4千年前～現在)と大きく3期に分けられる。不透水性の古富士泥流の上に、透水性の新富士火山溶岩流が広がるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地が存在する。また、浮島ヶ原低湿地は、内湾交通に適した土地であった。

東平遺跡は新富士火山溶岩流の末端の標高20m付近に位置し、遺跡内に所在する富知六所浅間神社の境内からは現在も湧水が認められ、駿河湾へと注ぐ和田川の起点ともなっている。

また、遺跡の南西には潤井川が流れ、その河川沿いには古墳時代中期後半以降、集落の展開をみせる。また、遺跡西側の中桁・中ノ坪遺跡との間には伝法沢が存在し、遡ると6世紀後半の鉄器生産や馬匹生産などの産業全体に関わる技術者集団の統括者の被葬者が想定される中原第4号墳が立地する。



第2図 駿河湾上空から富士市を望む



第3図 周辺地形図

第2節 遺跡の概要

東平遺跡・三日市廃寺跡は、富士山南麓の緩斜面の大淵扇状地上に立地し、その広がりには東西南北ともに約1.2km程度の範囲が登録されている。東側の三日市廃寺跡と東平遺跡は、文化財保護法上は別の遺跡として登録されているが、切り離して考えることは出来ない。東平遺跡からは古墳時代前期から7世紀の遺構・遺物も検出されているが、小規模で、遺跡の主体は8世紀から9世紀にかけてと考えられている。

近年、東平遺跡の概要がまとめられているので（藤村・佐藤 2013）、それに沿って東平遺跡が大規模に発展する8世紀の前後の状況を述べていきたい。

東平遺跡隆盛前夜 富士山の南西麓から駿河湾に注ぎ込む潤井川流域には、東平遺跡が発展する以前の5世紀後半から6世紀にかけて、「王権との関連を有した先進性の高い文物を積極的に利活用した集団によって」開発が進められたと考えられている（藤村 2012）。潤井川流域に限らず、富士山南麓では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が確認される一方で、中期には継続しないことが多い。中期前半の空白期を挟んで集落が確認されるようになるのが中期後半のことである。潤井川流域では、沢東A遺跡の発展に見ることが出来る。潤井川下流に立地する東平遺跡から中桁・中ノ坪遺跡、沢東A遺跡と遡るように位置している。沢東A遺跡からは初期須恵器や子持ち勾玉など新たな知識・考え方を背景にした文物が出土している。古墳時代後期初頭前後にそれまでの首長墓空白期への終わりを告げる記念碑的な伊勢塚古墳が、東平遺跡の西側に築造されたことも、王権との関わりを考える上で重要になってくる。

古墳時代後期から7世紀にかけて東平遺跡を見ていくと、遺跡東側の第16・28地区にその広がりを確認することが出来る。これらの遺構が和田川の始点付近に位置するのは、東方の沼津市・三島市方向への路の出発点に位置すること、和田川をくだり駿河湾に出ることができることなど、流通の利便性が背景にある。一方、前述の伊勢塚古墳を初めとして、遺跡を取り囲むように東平第1号墳や西平第1号墳、伊勢塚古墳周辺の石室墳などが存在することは集落遺跡と墓域が明確に区分されていたことを示している。

古墳時代後期から7世紀にかけて大規模に発展する沢東A遺跡が8世紀に入ると規模を縮小し、それと対峙するように東平遺跡が一気に拡大を見せる。

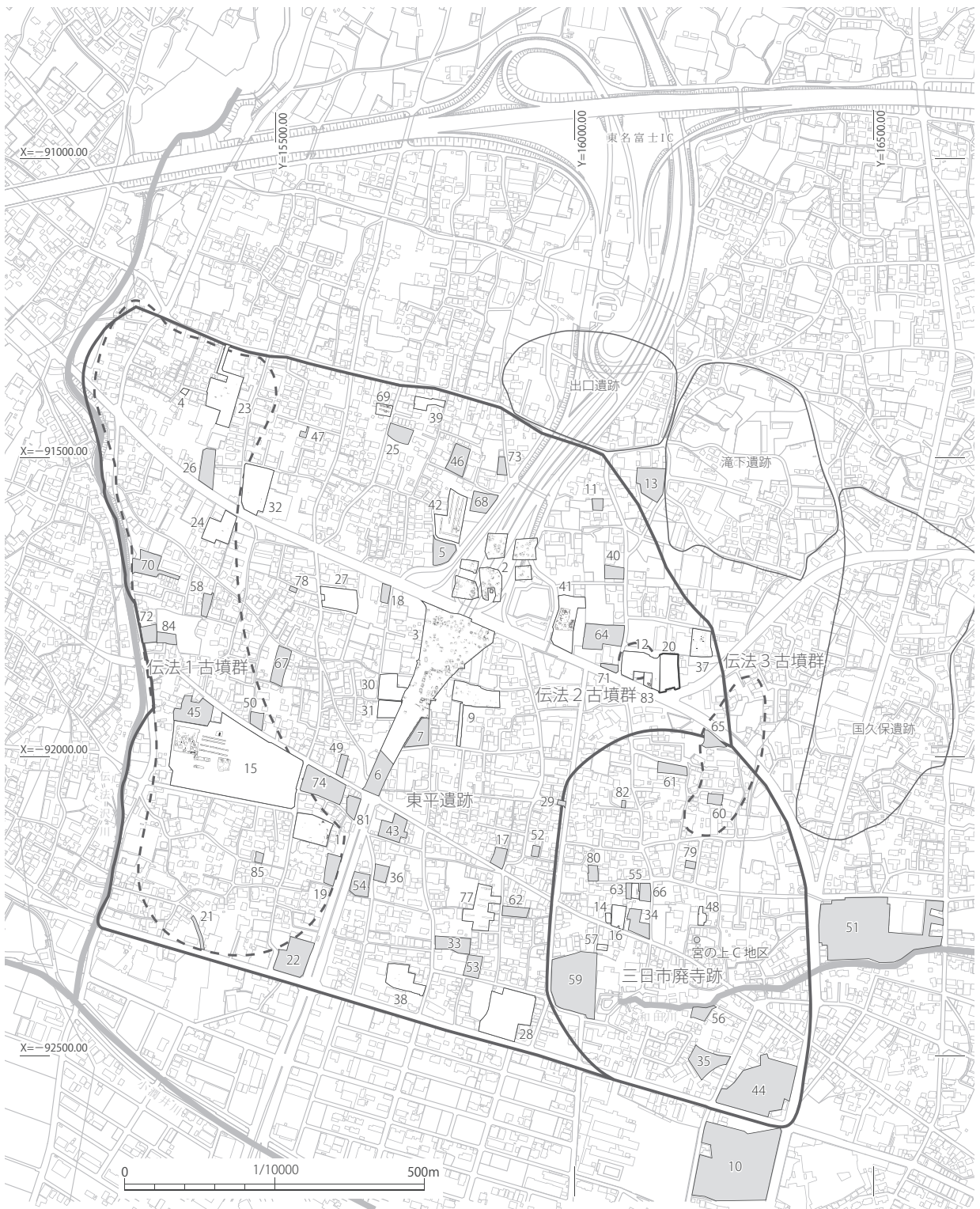
東平遺跡の隆盛 8世紀に入るとそれまで墓域と考えられていた遺跡内の縁辺部（第2・3・15地区）において大規模な集落が突如出現する。この計画的な集落化は、中央政権の地方支配の一貫として捉えられている（佐野 2008）。方形配列の掘立柱建物群や銅製腰帯具・鞆羽口・鉄屑・土馬・「布自」墨書須恵器の出土等を総合的に考えれば、このエリアが8世紀の富士郡衙の中核付近と考えることが出来る。

一方、それまで集落域として捉えられてきた、遺跡東側では8世紀前半の布目瓦が半径100m程度の範囲にまとまって出土しており、郡衙周辺寺院（志賀 2005）として機能転換が行われた可能性が考えられる。これまでに寺院の存在を直接的実証する遺構は検出されていないものの、『日本三代実録』貞観5年（863）6月2日にある「以駿河国富士郡法照寺預之定額」がこのエリアと考えられる。

東平遺跡の変容・衰退 9世紀に入ると富士郡衙中核域と推定した地区（第2・3地区）において遺構がほとんど継続しないという現象を示す。その一方で、8世紀の寺域として推定した地区（第16地区周辺）では、竪穴建物跡のカマド芯材に布目瓦を転用するなどの現象からも、再度、集落化が認められるようになる。

さて、9世紀は集落内において墨書土器が認められ始める時期であり、東平遺跡（三日市廃寺跡）でも、130点以上の墨書・刻書土器が見つかっているが、そのほとんどが9世紀に入ってからのものである。これは沼津・三島方面への当時の東海道「根方街道」沿いの舟久保遺跡・宇東川遺跡・祢宜ノ前遺跡・宮添遺跡や潤井川流域の中桁・中ノ坪遺跡と同様の状況を示す。

その後、『扶桑略記』延喜2年（902）9月26日には「駿河国云上富士郡官舎為群盜被焼亡之由」という記事がみられ、郡司支配からのひずみから10世紀初頭には終焉を迎える。近年では、郡司支配に対する歪みと富士山の度重なる噴火という自然災害史的側面からも遺跡の消長を捉える意見もある（佐藤・藤村 2013）。



第4図 東平遺跡 調査履歴図

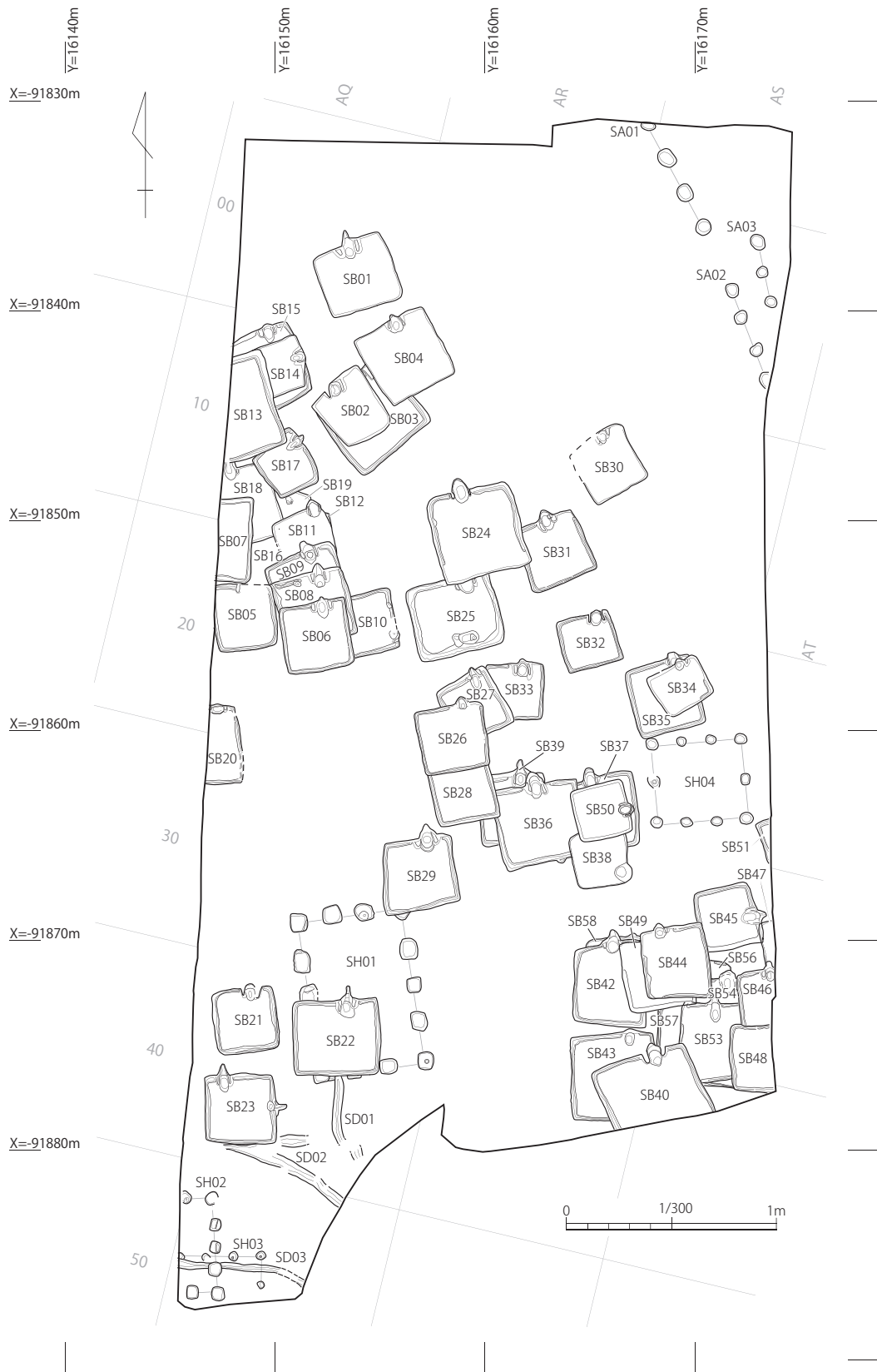
第1表 東平遺跡 調査履歴一覧表

地区	次	調査年度	調査種類	所在地	調査の契機	調査期間	遺構	遺物	報告書
1地区	1次	S33	本調査	伝法 3103-1 外	墓地造成	1958***	葺石・石堤		
1地区	2次	S55	本調査	伝法 3103-1 外	墓地造成	19800721～19800820	葺石	埴輪片	C
1地区	3次	H12	試掘	伝法 3102-1 外	庫裡改築	20000906～20000908		土製品	
2地区		S40	本調査	伝法 2	東名富士 I・C建設	19650904～19651026	竪穴建物跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器・鉄器	A
3地区		S53	本調査		西富士道路建設	19781201～19800812	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 土坑・溝状遺構	土師器・須恵器・鉄器	A・B
4地区		S54	本調査	伝法 2658	墓地造成	19790901～19790919	古墳(西平第1号墳)	直刀・蔵手刀・銅製腰帯具	C・D
5地区		S54	工事立会	伝法 2515-1	旅館建設	19800317	なし		
6地区		S55	本調査		田子浦臨港線建設	19800401～19800531	なし	土師器	B
7地区		S55	本調査	伝法 2816	盛土	19800501～19800630	掘立柱建物跡・竪穴建物跡		
9地区		S63	本調査	伝法 2837 外	保育園建設	19880601～19880826	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 土坑	土師器・須恵器・鉄鍬・刀子 勾玉・キセル・骨	H
10地区		S63	試掘	永田北町 130-1 外	店舗建設	19890301～19890308	なし		E
11地区		H01	試掘	伝法 2425-5	住宅建設	19890818～19890824	土坑・ビット・溝状遺構	土師器・須恵器・陶磁器	F
12地区		H01	本調査	伝法 2369-1 外	貸事務所建設	19891115～19891229	古墳(東平第1号墳) 竪穴建物跡	直刀・鍬・丁字型利器	G
13地区		H02	試掘	伝法 2401-2	マンション敷地造成	19910318～19910319	なし	なし	
14地区		H01	学術調査	浅間上町 11-8	三日月庵寺跡範囲確認	19890414～19890502	竪穴建物跡・柱穴・土坑	土師器・須恵器・布目瓦	F
15地区	1次	H04	試掘	伝法 2743	小学校運動場整備	19920806～19920811	なし	円筒埴輪	
15地区	2次	H18	試掘	伝法 2743	屋内運動場・給食棟建設	20060607～20060620			P
15地区	3次	H18	試掘	伝法 2743-2 外	小学校校舎改築	20060724～20060727	竪穴建物跡		P
15地区	4次	H18	本調査	伝法 2743-2 外	屋内運動場・給食棟建設	20060802～20061130	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 古墳(中村上第1号墳)	土師器(土師器・須恵器) 金属製品(馬具・刀子等)・石器	P
15地区	5次	H20	試掘	伝法 2743-2 外	小学校校舎改築	20080826～20080827	なし	なし	P
15地区	6次	H20	本調査	伝法 2743-2 外	小学校校舎改築	20081219～20090220	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 溝状遺構・性格不明遺構	土師器・須恵器	P
15地区	7次	H22	試掘	伝法 3116-1	小学校体育器具庫建設	20100722	なし	なし	R
16地区	1次	S55	試掘	浅間上町 2991-1 外	東平遺跡範囲確認	198008**	竪穴建物跡	土師器・灰釉陶器・瓦	J
16地区	2次	H04	試掘	浅間上町 2991-1 外	駐車場造成	19930311～19930329	竪穴建物跡・ビット	土師器・須恵器・瓦	J
16地区	3次	H05	学術調査	浅間上町 2991-1 外	三日月庵寺跡緊急調査	19940117～19940331	竪穴建物跡・土坑・ビット	土師器・須恵器 瓦・刀子・鉄釘	J
16地区	4次	H06	学術調査	浅間上町 2991-1 外	三日月庵寺跡緊急調査	19940411～19940622	竪穴建物跡・土坑・ビット		J
17地区		H05	試掘	伝法 2865-1 外	店舗建設	19930916			
18地区		H05	試掘	伝法 2529-2 外	住宅建設	19940203～19940208	溝状遺構	土師器・須恵器	
19地区		H06	試掘	伝法 3104-1 外	ガソリンスタンド建設	19941101～19941108		土師器片・須恵器片	
20地区	1次	H07	試掘	伝法 2327-1 外	宅地造成	19950907～19950914	竪穴建物跡・土坑	土師器・須恵器	本書
20地区	2次	H08	本調査	伝法 2327-1 外	宅地造成	19960527～19961027	竪穴建物跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器	本書
21地区		H07	工事立会	伝法 3180-8	河川改修	199510**	なし	なし	
22地区		H07	試掘	伝法 3201-1 外	給油所建設	19960301～19960309	なし	土師器・須恵器・陶器	
23地区	1次	H07	試掘	伝法 2610-1 外	共同住宅建設	19960311～19960319	古墳(西平第2号墳)	須恵器片	D
23地区	2次	H08	測量調査	伝法 2610-1 外	共同住宅建設	19960415～19960510	古墳(西平第2～5号墳)		
23地区	3次	H08	本調査	伝法 2610-1 外	共同住宅建設	19960507～19960531	古墳(西平第2～5号墳)		D
24地区	1次	H08	試掘	伝法 2619-1 外	斎場建設	19961125～19961209	竪穴建物跡	土師器・須恵器	D
24地区	2次	H08	本調査	伝法 2619-1 外	斎場建設	19961216～19970116	古墳(西平第6号墳) 竪穴建物跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器	D
25地区		H09	試掘	伝法 2497-3	共同住宅建設	19970612～19970618	なし	なし	
26地区		H10	試掘	伝法 2619-95	店舗建設	19990118～19990121	なし	なし	
27地区	1次	H11	試掘	伝法 2527-1 外	本市場大潤線代替地造成	19990810～19990827	竪穴建物跡		J
27地区	2次	H11	本調査	伝法 2527-1 外	本市場大潤線代替地造成	20000111～20000125	竪穴建物跡	土師器・須恵器・菰編み用の石	J
27地区	3次	H15	試掘	伝法 2527-1 外	倉庫解体	20040203～20040204			M
28地区	1次	H11	試掘	伝法 3024-1 外	店舗建設	19991004～19991014	竪穴建物跡	土師器・須恵器	I
28地区	2次	H11	本調査	伝法 3024-1 外	店舗建設	20000203～20000517	竪穴建物跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器	I
29地区		H12	試掘	伝法 2879-3 地先	防火水槽築造	20010227	ビット(時期不明)		
30地区	1次	H12	試掘	伝法 2828-1 外	宅地造成	20010219～20010223	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 土坑	土師器・須恵器	D
30地区	2次	H12	本調査	伝法 2828-1 外	宅地造成	20010307～20010319	竪穴建物跡・掘立柱建物跡 土坑	土師器・須恵器	D
31地区		H12	試掘	伝法 2829-1 外	宅地造成	20010307～20010313	住居跡	土師器・須恵器	D
32地区		H13	試掘	伝法 2559-2	店舗建設	20011203～20011210	竪穴建物跡・掘立柱建物跡		D
33地区		H16	試掘	伝法 3034-3 外	宅地造成	20041116～20041122	土坑	須恵器片・宋銭	K
34地区		H16	試掘	浅間上町 11-2	共同住宅建設	20041201～20041202		土師器片・須恵器片・布目瓦片	K
35地区		H16	試掘	浅間本町 3415-9 外	共同住宅建設	20041004～20041008			K 32地区と掲載。
36地区		H15	試掘	伝法 3054-1	共同住宅建設	20030609			M
37地区	1次	H17	試掘	伝法 2331-2	共同住宅建設	20050601～20050617	竪穴建物跡	土師器片	L
37地区	2次	H17	本調査	伝法 2331-2	共同住宅建設	20050804～20050812	竪穴建物跡・掘立柱建物跡	土師器・須恵器	L
37地区	3次	H19	試掘	伝法 2323-1 外	葬祭場建設	20071107～20071109	竪穴建物跡・ビット	土師器・須恵器	N
37地区	4次	H19	本調査	伝法 2323-1 外	葬祭場建設	20080110～20080310	竪穴建物跡・ビット・土坑	土師器・須恵器	N
38地区		H17	試掘	伝法 3068-1 外	共同住宅建設	20050830～20050909	竪穴建物跡	土師器・須恵器	L
39地区		H17	試掘	伝法 2496-2	共同住宅建設	20050926～20050928	掘立柱建物跡		L
40地区		H18	試掘	伝法 2396-12 外	住宅建設	20060425			L
41地区	1次	H18	試掘	伝法 2442-1 外	店舗建設	20070206～20070213			L
41地区	2次	H27	確認	伝法 2391-1 外	ホテル建設	20150914～20150915	竪穴建物跡・土坑・ビット	土師器	
41地区	3次	H27	確認	伝法 2391-1 外	ホテル建設	20151214～20151215	竪穴建物跡・土坑・ビット	土師器・石製品	
41地区	4次	H28	本調査	伝法 2391-1 外	ホテル建設	20160509～20160906	竪穴建物跡・土坑・ビット 性格不明遺構	土師器・須恵器・灰釉陶器 鉄器・石製品	
42地区		H19	試掘	伝法 2474-1 外	マンション建設	20070927～20071009	掘立柱建物跡・ビット	土師器・須恵器	M
43地区		H20	試掘	伝法 2806-3 外	ホテル建設	20080415～20080416	溝	なし	O
44地区		H20	試掘	浅間本町 148-1 外	店舗建設	20090226～20090304	なし	なし	O
45地区		H21	試掘	伝法 2743-2	まちづくりセンター改築	20090806～20090817	なし	なし	Q
46地区		H21	試掘	伝法 2484-5	不動産売買	20100114～20100115	なし	なし	Q
47地区		H21	試掘	伝法 2588-1	個人住宅建設	20100305	なし	なし	Q
48地区		H22	試掘	浅間上町 2697-2	個人住宅建設	20100422～20100428	竪穴建物跡	土師器・須恵器	R
49地区		H22	試掘	伝法 2804-12	不動産売買	20100608	なし	なし	R

地区	次	調査年度	調査種類	所在地	調査の契機	調査期間	遺構	遺物	報告書
50地区		H22	試掘	伝法 2782-1 外	不動産売買	20100706～20100707	なし	なし	R
51地区		H22	試掘	国久保二丁目 2161 外	店舗解体新築	20100826～20100827	なし	土師器・須恵器	R
52地区		H22	試掘	伝法 2869-1	個人住宅建設	20101006～20101007	なし	なし	R
53地区	1次	H22	試掘	伝法 3031-1	共同住宅建設	20101201	なし	なし	R
53地区	2次	H22	試掘	伝法 3031-1	共同住宅建設	20101220	なし	なし	R
54地区		H22	試掘	伝法 3106-1	動物病院建設	20101217	なし	なし	R
55地区		H22	試掘	浅間上町 2978-6 外	個人住宅建設	20110127～20110128	竪穴建物跡	土師器・須恵器・瓦・灰釉陶器	R
56地区		H22	試掘	浅間本町 3423-1	共同住宅建設	20110301	なし	土師器・石製品	R
57地区		H23	試掘	浅間本町 2992-37 外	宅地販売	20110418	竪穴建物跡	土師器・須恵器・瓦	R
58地区		H23	試掘	伝法 2708-1	個人住宅建設	20110614～20110615	なし	なし	R
59地区	1次	H24	試掘	浅間本町 5-1	社殿改築	20120724～20120821	竪穴建物跡・ビット	須恵器・土師器・瓦	S
59地区	2次	H25	確認	浅間本町 5-1	社殿改築	20131216	なし	なし	S
60地区	1次	H24	試掘	浅間上町 2921-2 外	個人住宅建設	20130220	竪穴建物跡	土師器・須恵器	S
60地区	2次	H25	本調査	浅間上町 2921-2 外	個人住宅建設	20130611～20130709	竪穴建物跡・ビット・土坑	土師器・須恵器・石器	S
61地区		H25	確認	浅間上町 2902-23 の一部	宅地造成分譲	20130405	竪穴建物跡・ビット	灰釉陶器、土師器	S
62地区	1次	H25	確認	伝法 2988-1 外	宅地造成分譲	20130716～20130718	土坑・ビット	土師器・須恵器・瓦	S
62地区	2次	H25	確認	伝法 2988-1 外	宅地造成分譲	20130828	なし	なし	S
63地区		H25	確認	浅間上町 2978-4 外	個人住宅建設	20130805～20130807	竪穴建物跡・土坑・ビット 溝状遺構	土師器・須恵器・瓦	S
64地区		H25	確認	伝法 2383-1 外	共同住宅建設	20131121～20131129	竪穴建物跡・ビット	土師器・須恵器・灰釉陶器	S
65地区		H25	確認	浅間上町 2912-2 外	個人住宅新築	20131211	なし	土師器	S
66地区		H25	確認	浅間上町 2978-3	宅地造成・分譲	20140212～20140214	竪穴建物跡・溝 土坑・ビット	土師器・須恵器・瓦	S
67地区		H25	確認	伝法 2789-1 外	宅地造成	20131114	不明遺構	土師器	S
68地区		H26	確認	伝法 2481-3 外	不動産売買	20140409～20140410	なし	なし	T
69地区		H26	確認	伝法 2594 外	不動産売買	20140415～20140417	竪穴建物跡・土坑・ビット	土師器・須恵器	T
70地区		H24	試掘	伝法 2700-11 外	宅地分譲	20130319	なし	なし	S
71地区		H26	確認	伝法 2380-1 外	不動産売買	20140714～20140715	なし	土師器	T
72地区		H26	確認	伝法 2731-3 外	宅地造成	20140903	なし	なし	T
73地区		H26	確認	伝法 2483-2 外	不動産売買	20140929	なし	なし	T
74地区	1次	H26	確認	伝法 2800-1	店舗建替	20141007～20141008	なし	なし	T
74地区	2次	H26	確認	伝法 2800	店舗建替	20141119～20141120	なし	なし	T
75地区		H26	確認	伝法 2866-1	宅地造成	20141016～20141017	土坑・ビット	土師器・須恵器・鉄器	T
76地区		H26	確認	伝法 3066	個人住宅建設	20141027	なし	須恵器	T
78地区		H27	確認	伝法 2548-2	個人住宅建設	20150423	ビット	なし	T
77地区		H27	確認	伝法 3040-1 外	宅地造成	20150727～20150729	竪穴建物跡	土師器・須恵器	T
79地区		H28	確認	浅間上町 18-5	個人住宅新築	20160421	なし	なし	
80地区		H28	確認	浅間上町 2983-2 外	個人住宅新築	20160422	なし	なし	
81地区		H28	確認	伝法 2804-3	駐車場整備	20160803	なし	なし	
82地区		H28	確認	浅間上町 2895-14	不動産売買	20160920～20160921	なし	なし	
83地区	1次	H28	確認	伝法 2370-1	敷地造成	20161003～20161004	竪穴建物跡・溝・ビット	土師器・須恵器	
83地区	2次	H28	本調査	伝法 2370-1	敷地造成	20161204～20161207	竪穴建物跡・溝・土坑 ビット・性格不明遺構	土師器・須恵器・灰釉陶器 石器・鉄製品	
84地区		H28	確認	伝法 2723-1 の内 外	個人住宅新築	20151214	なし	なし	
85地区		H28	確認	伝法 3122-3	個人住宅新築	20141215	なし	なし	

【報告書】

- A 『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』（1981）
- B 『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』（伝法遺跡群）（1981）
- C 『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』（1983）
- D 『東平遺跡発掘調査報告書』（2003）
- E 7716 『昭和63年度発掘調査概報』（1988）
- F 7716 『平成元年度発掘調査概報』（1989）
- G 『東平第1号墳 発掘調査概報』（1990）
- H 『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 東平遺跡第3次調査』（1992）
- I 『東平遺跡 第28地区発掘調査報告書』（2001）
- J 『東平遺跡 第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書』（2002）
- K 『平成16年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2006）
- L 『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2008）
- M 『平成15・19年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2009）
- N 『東平遺跡』（2009）
- O 『平成14・20年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2010）
- P 『東平遺跡第15地区』（2010）
- Q 『平成21年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2011）
- R 『富士市内遺跡発掘調査報告書 ー平成22・23年度ー』（2013）
- S 『富士市内遺跡発掘調査報告書 ー平成24・25年度ー』（2015）
- T 『富士市内遺跡発掘調査報告書 ー平成26・27年度ー』（2017）



第5図 遺構全体図

第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡

SB01

遺構 (第6・7図)

位置 AQ・0グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 17.5° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。

主軸 (南北) 幅 3.36m、直交 (東西) 幅 3.66m、深さ 50cmを測る。カマド南側の床面には石材が点在するものの用途は明らかではない。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

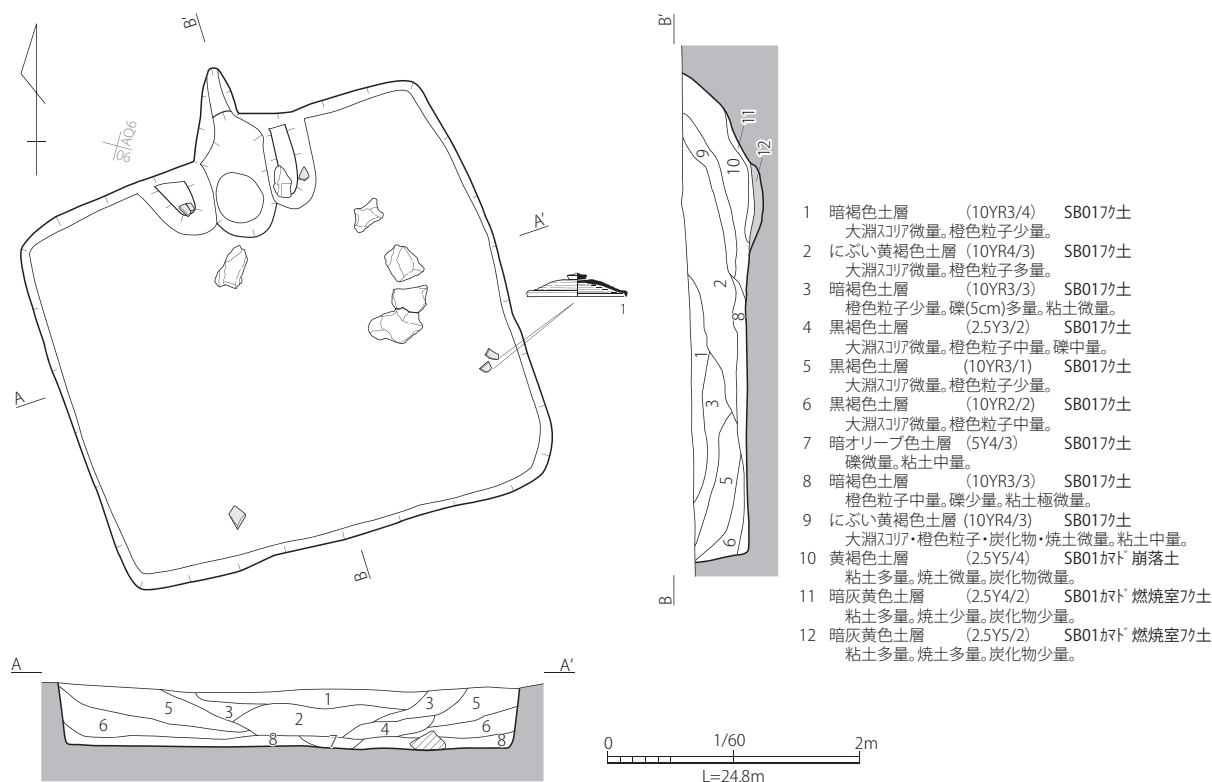
カマド 北壁中央に位置し遺存状態は良好である。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長 136cm、幅 136cm、燃烧室幅 48cmを測る。

出土遺物 (第8図)

1は摘蓋である。ノタ目が明瞭で、天井部は回転ヘラケズリの痕跡が認められる。2は駿東型球胴甕である。口縁部内側はあまり肥厚しない。3は土馬の脚部と考えられる。先端はやや尖り、面はもたない。脚の高さは4.6cmで、胴部に接合すると考えられる。

所見

8世紀前半と考えられる。



第6図 SB01 平面図・断面図

SB02

遺構 (第9・10図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB03 → SB02 → SK012 (新)

主軸方位 N - 33.0° - W

残存状況 遺存状況は良好で、平面形はやや不整形な方形を呈する。主軸(南北)幅3.31m、直交(東西)幅2.75m、深さ44cmを測る。

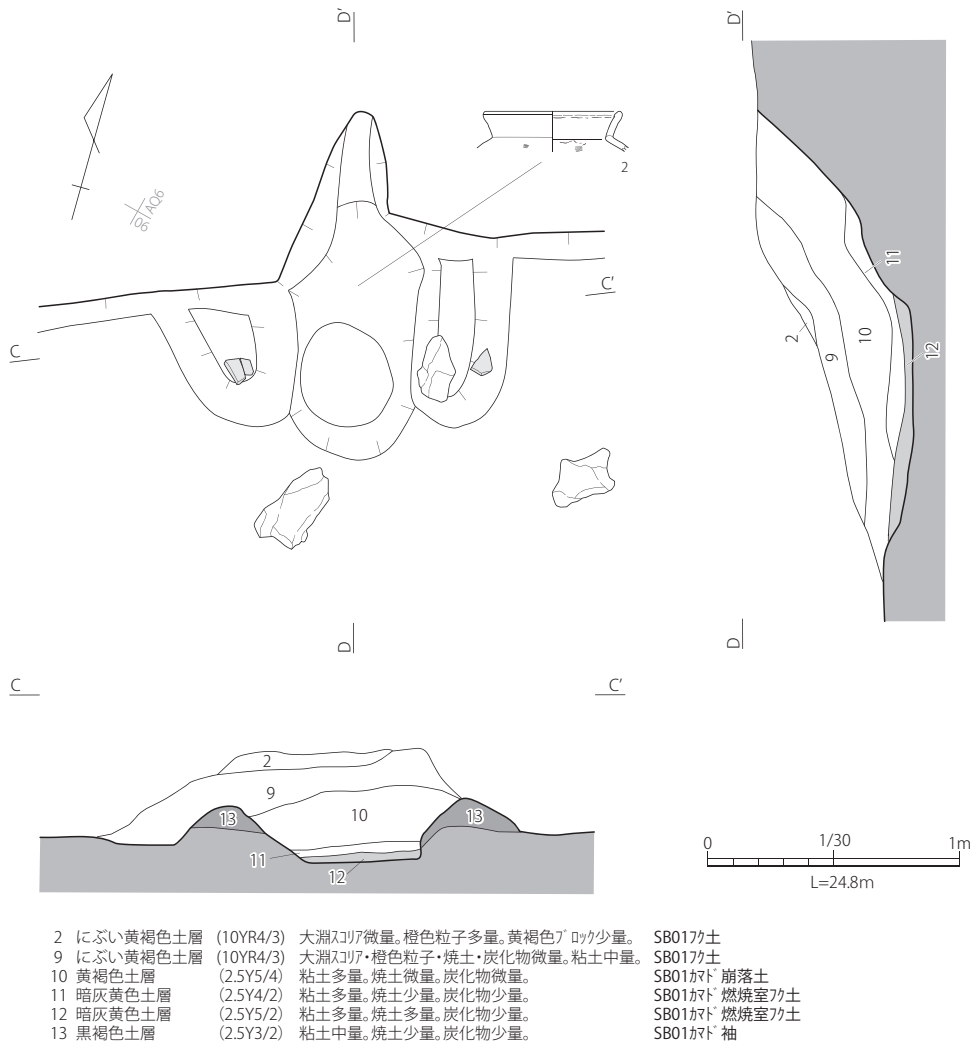
覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 確認されない。

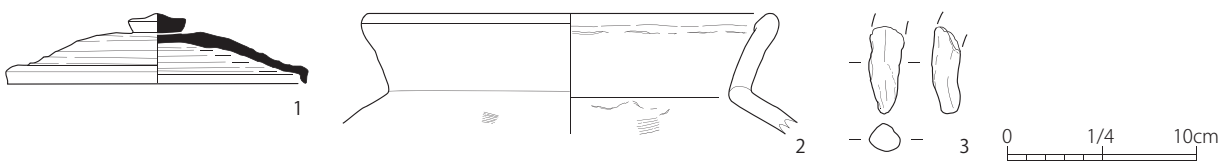
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

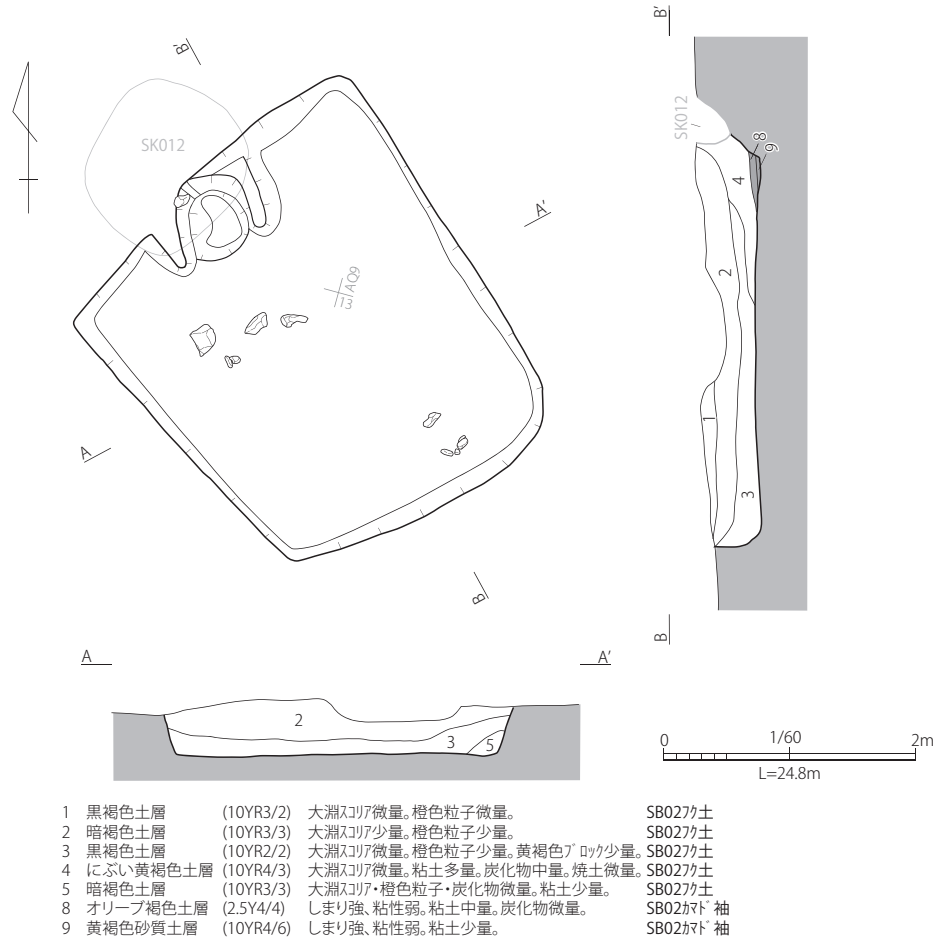
カマド 北壁中央に位置し上面がSK012により一部が削平されているものの遺存状態は良好である。袖に芯材は認められない。全長67cm、幅111cm、燃烧室幅51cmを測る。



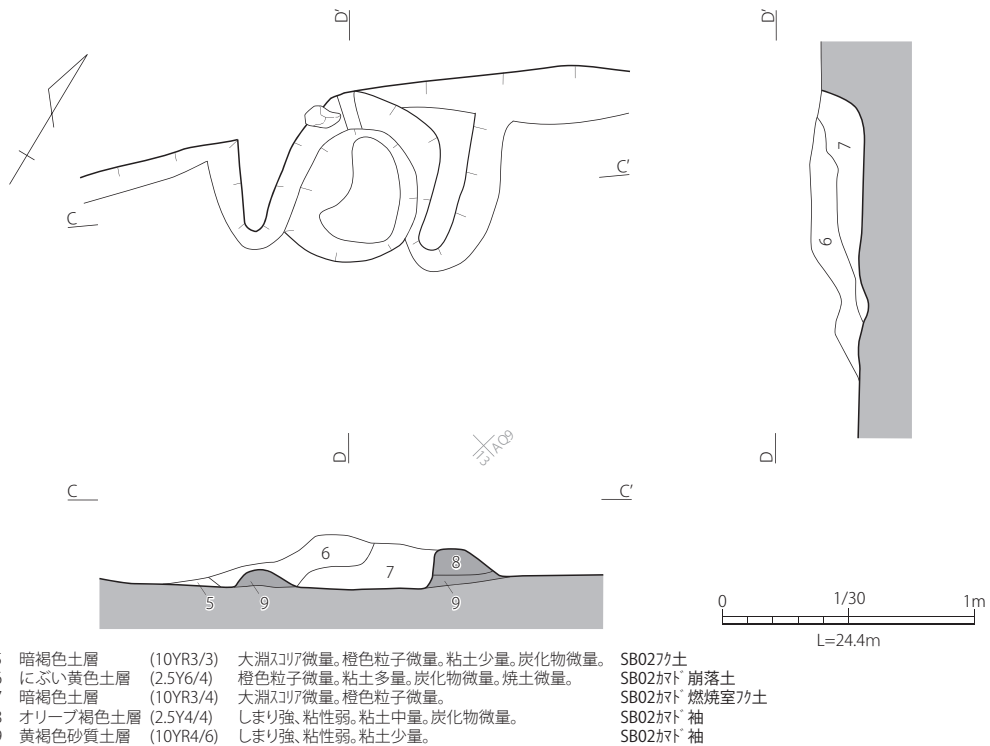
第7図 SB01 カマド 平面図・断面図



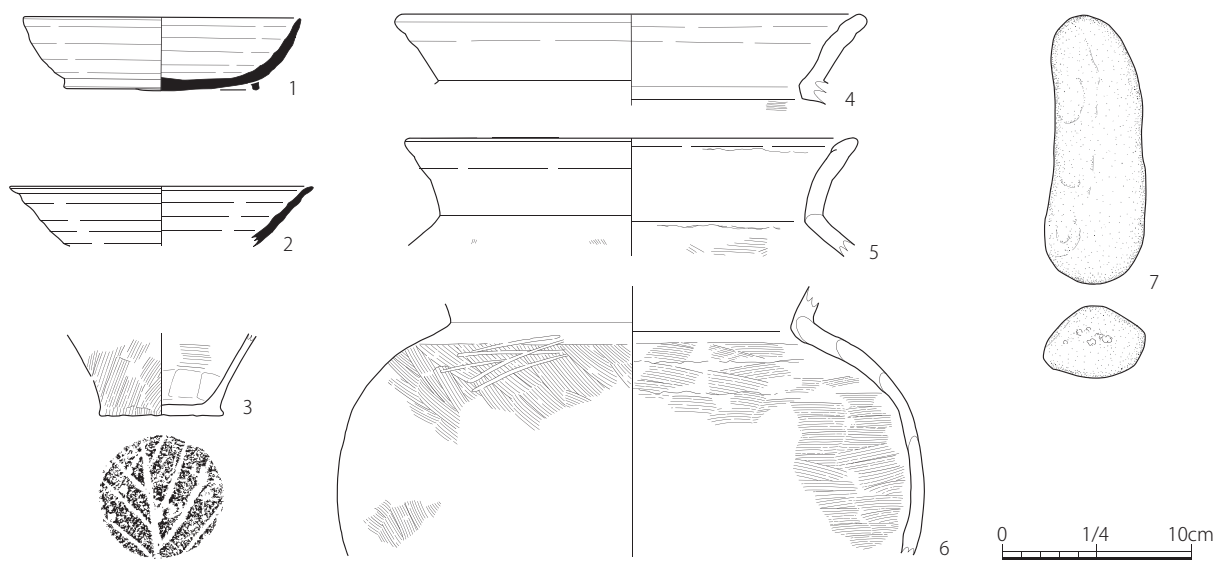
第8図 SB01 出土遺物実測図



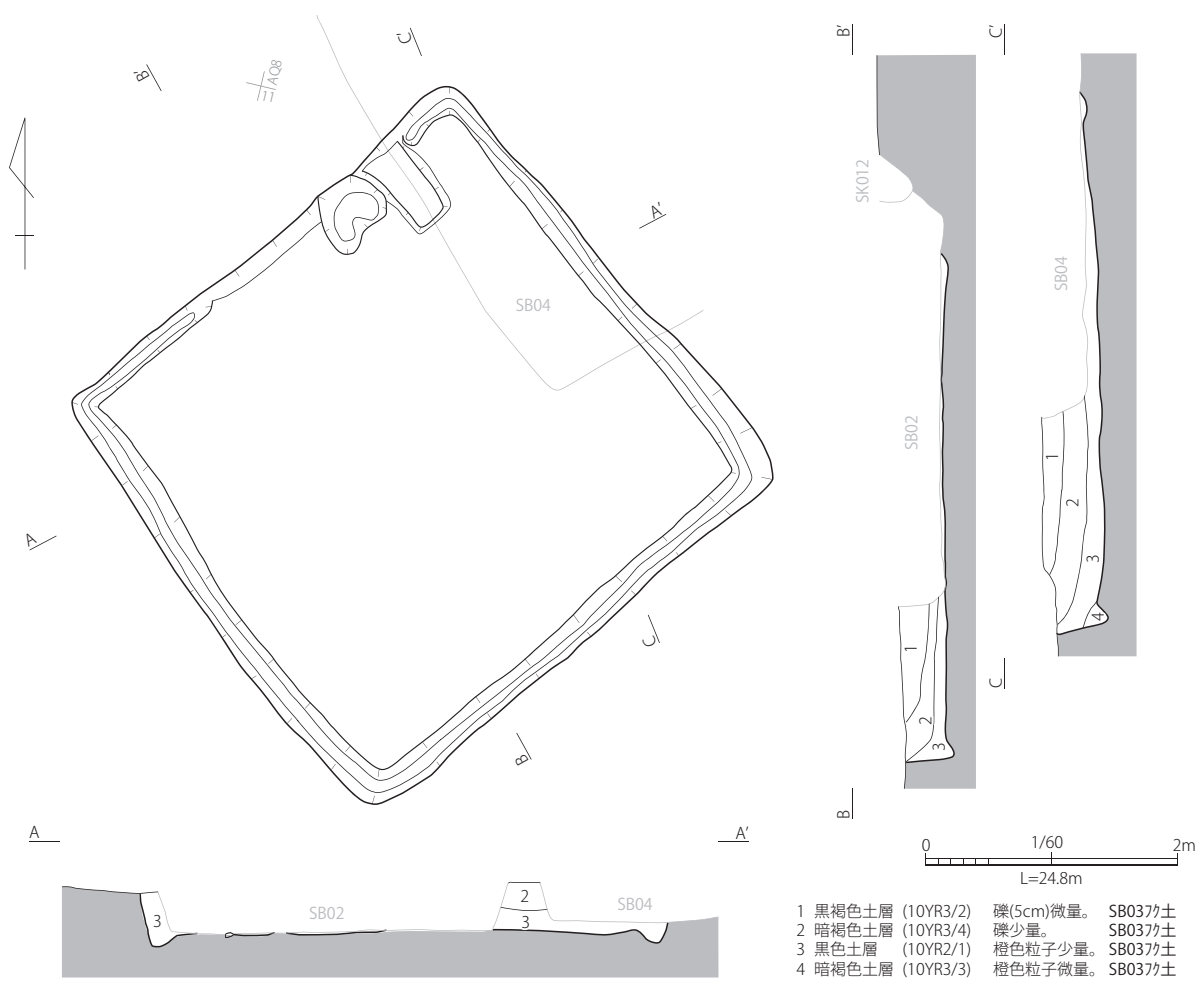
第9図 SB02 平面図・断面図



第10図 SB02 カマド 平面図・断面図



第11図 SB02 出土遺物実測図



第12図 SB03 平面図・断面図

出土遺物 (第 11 図)

1は須恵器の有台坏身で底部が高台部よりやや突出する。胎土が白っぽい。2の坏は直線的に広がる有台坏身もしくは碗形坏身と考えられる。3は駿東型長胴甕の底部で内外面ともに細かなハケ目が認められる。4から6はいずれも駿東型球胴甕で4・5が口縁部、6が胴上半部の破片である。口縁部内側はいずれも肥厚させる意図が認められるもののあまり明瞭ではない。6の胴上半部は頸部付近にヘラミガキが認められるものの肩部などには明瞭ではない。7は敲き石である。

所見

出土遺物より8世紀前半と考えられる。

SB03

遺構 (第 12・13 図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB03 → SB02・SB04 (新)

主軸方位 N - 40.5° - W

残存状況 覆土の多くをSB02及びSB04に削平されているが、壁溝が残存していたため全体的な規模等を把握

することができる。平面形は方形を呈し、主軸(南北)

幅4.18m、直交(東西)幅4.00m、深さ46cmを測る。

覆土 大淵スコリアを含まない黒色土。

壁溝 幅20cm、深さ12cmで全体的に検出される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

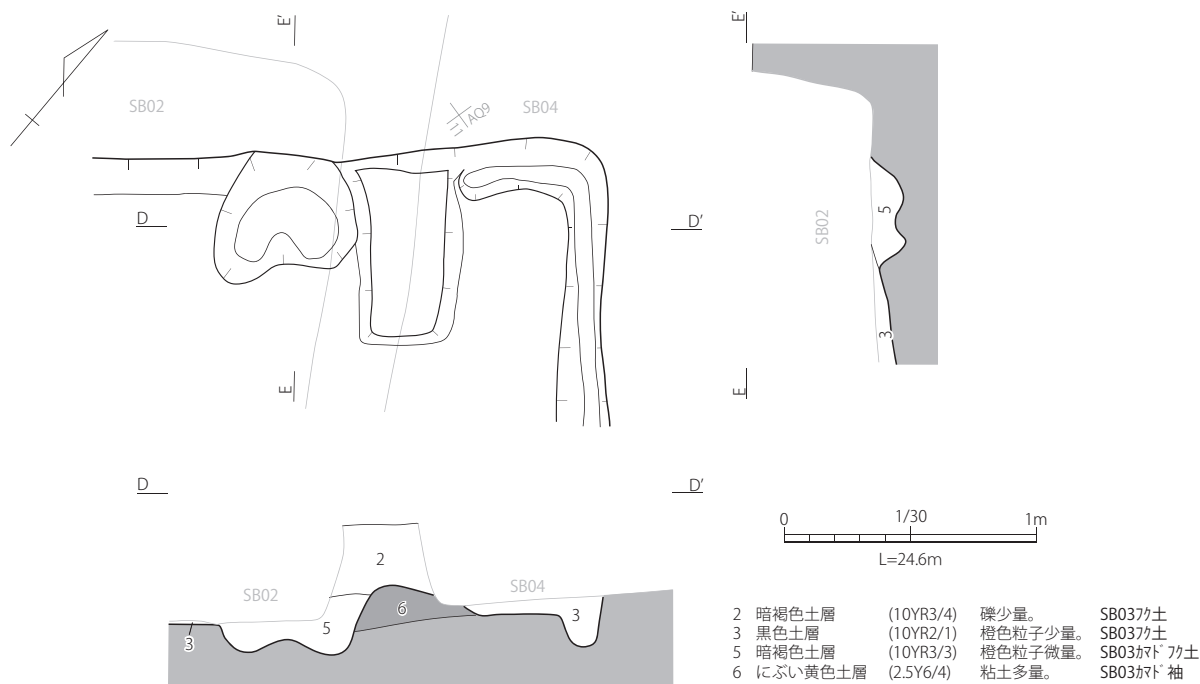
カマド 北壁東寄りに位置し右袖の一部と掘り方のみ残存する。袖に芯材は認められず粘土主体でつくられている。検出範囲内で全長54cm、燃焼室幅55cmを測る。

出土遺物 (第 14 図)

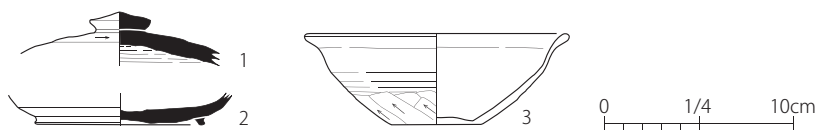
1は摘蓋、2は有台坏身の破片である。3は甲斐型の特徴を有する坏である。しかし、胎土や底部裏面のハケ目の痕跡など駿東型の特徴も有することから甲斐型坏を模倣した坏と位置づけられる。器壁が薄く、口縁部付近で一度、内湾するものの端部においてさらに外反させる。底部外面付近にはヘラケズリが明瞭に認められる。

所見

1・2は8世紀前半、3は9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられるが、SB02との切り合いから8世紀前半の建物跡と考えられる。



第 13 図 SB03 カマド 平面図・断面図



第 14 図 SB03 出土遺物実測図

SB04

遺構 (第 15・16 図)

位置 AR・10 グリッド

重複関係 (古) SB03 → SB04 (新)

主軸方位 N - 27.5° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。

主軸 (南北) 幅 3.66m、直交 (東西) 幅 3.63m、深さ 45cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

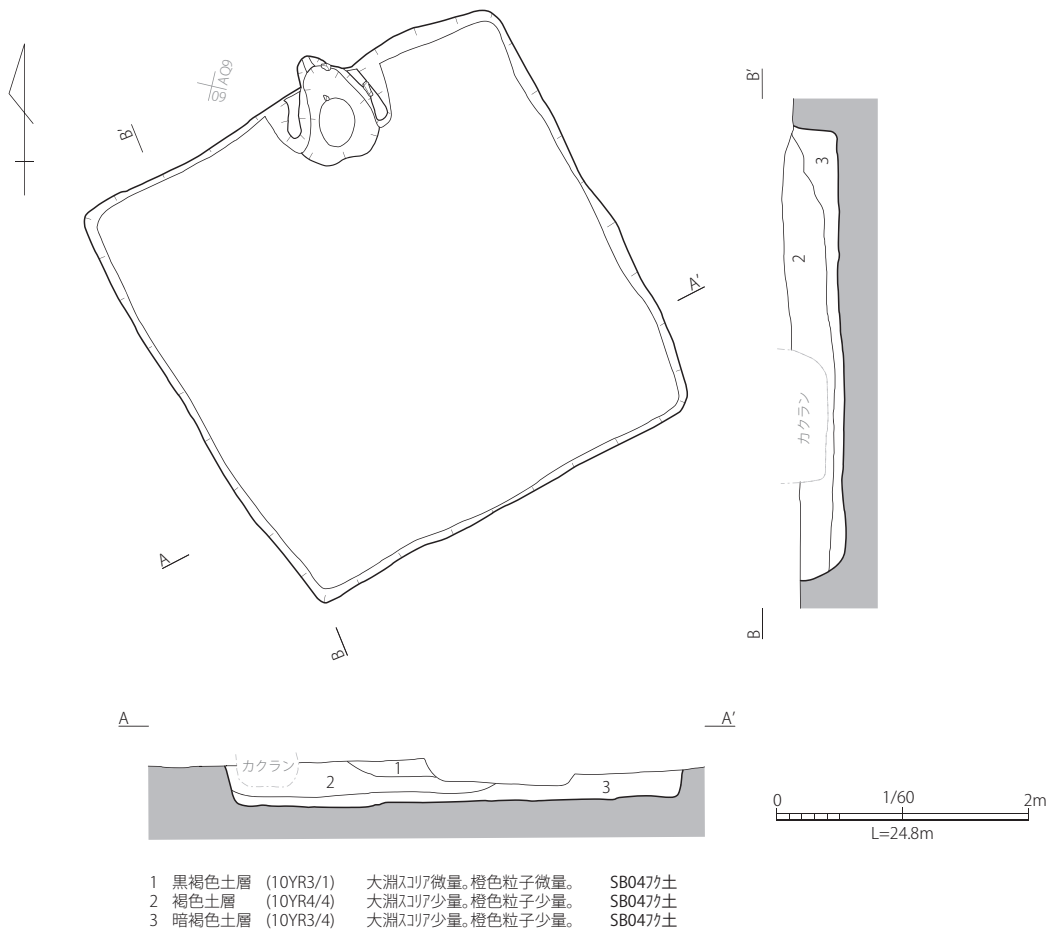
カマド 北壁中央からやや東寄りに位置し、遺存状態は比較的良好である。袖に芯材は認められない。全長 87cm、幅 102cm、燃焼室幅 50cm を測る。カマド周辺からは土師器甕片が出土する。

出土遺物 (第 17 図)

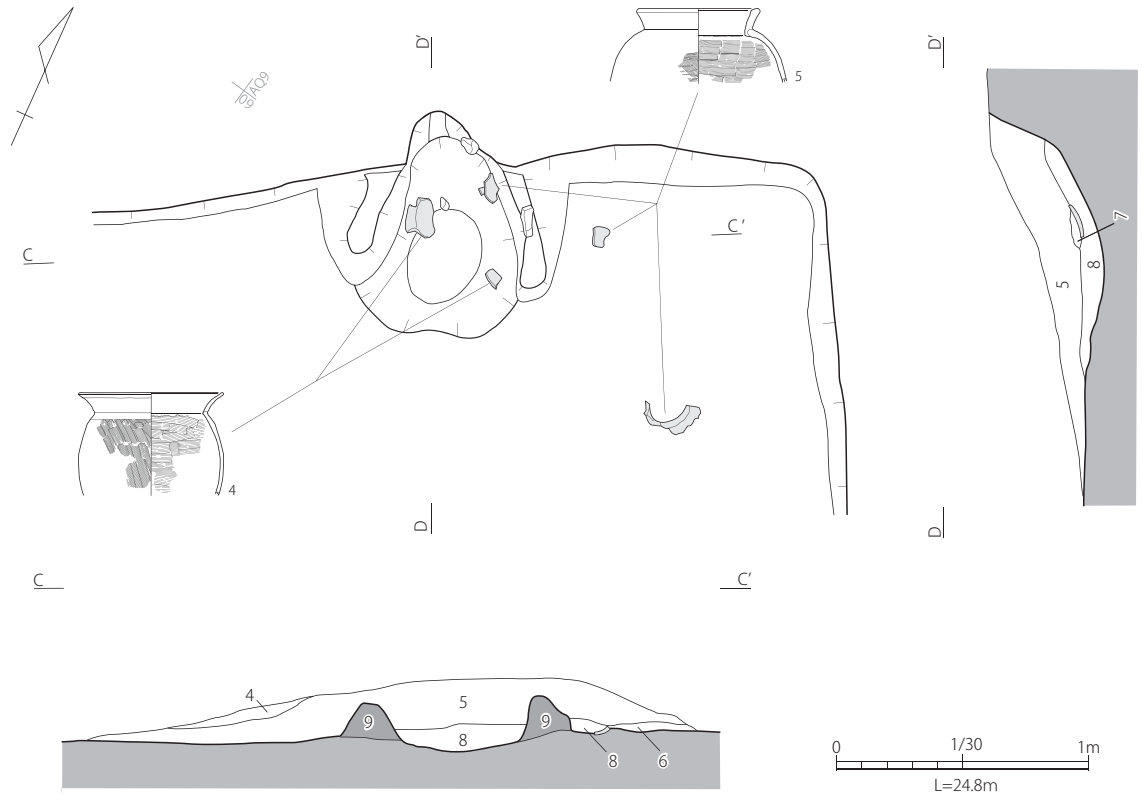
1 は有台坏身で坏底部がやや突出する。胎土が白っぽいのが特徴である。2 は有台坏身で坏部が箱形を呈する。3・4 は駿東型長胴甕、5 は駿東型球胴甕である。4 の長胴甕は内外面でハケ目工具を使い分けており、外面は内面より細かい。口縁部はいずれもやや反りながら広がる。5 の球胴甕は肩があまり張らず、口唇部内面もあまり肥厚させない。口縁部が比較的短くやや直立気味に立ち上がる。外面は器壁が荒れているため、調整があまり観察できないがハケ目の後、ヘラミガキが施される。

所見

8 世紀前半頃と考えられる。

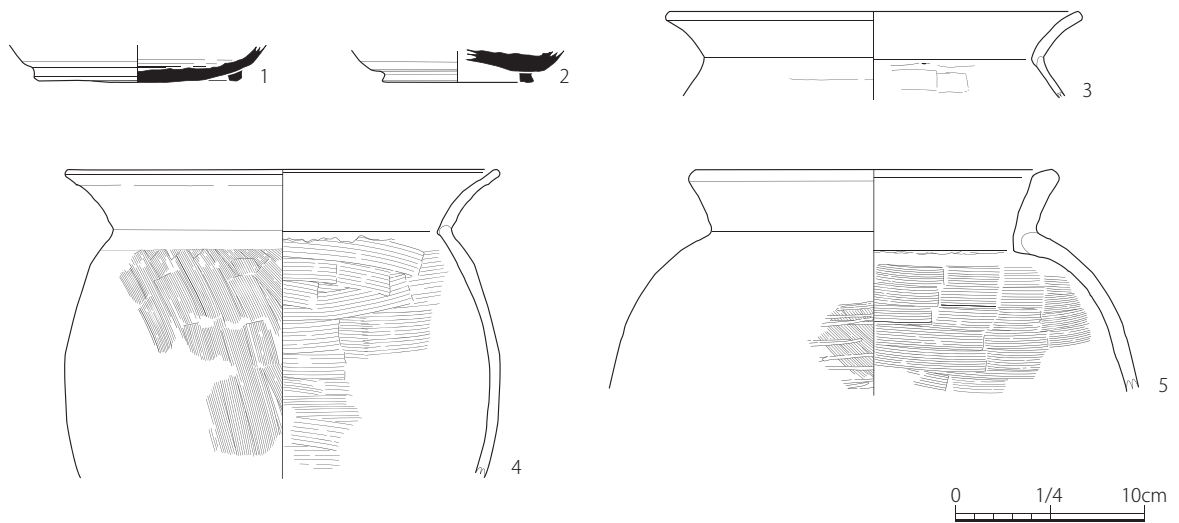


第 15 図 SB04 平面図・断面図



- | | | |
|----------------------|--------------|--------------|
| 4 黒褐色土層 (10YR3/1) | 橙色粒子微量。 | SB04ツ土 |
| 5 オリーブ褐色土層 (2.5Y4/4) | 橙色粒子少量。粘土中量。 | SB04炉ドツ土 |
| 6 黒褐色土層 (10YR2/3) | 橙色粒子微量。 | SB04炉ドツ土 |
| 7 褐色土層 (7.5Y4/3) | 焼土多量。粘土微量。 | SB04炉ド 燃烧室ツ土 |
| 8 黒褐色土層 (10YR2/3) | 橙色粒子微量。 | SB04炉ド 燃烧室ツ土 |
| 9 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 橙色粒子微量。粘土微量。 | SB04炉ド 袖 |

第16図 SB04 カマド 平面図・断面図



第17図 SB04 出土遺物実測図

SB05

遺構 (第18・19図)

位置 AQ・20グリッド

重複関係 (古) SB05 →

SK025・SK026・SK027・SK028・SK029・SK031 (新)

主軸方位 N - 6.5° - W

残存状況 複数の土坑により削平されているが、壁溝が残存していたため全体的な規模を把握することができ、平面形は方形を呈する。主軸(南北)幅3.20m、直交(東西)幅3.00m、深さ14cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒色土。

壁溝 幅20cm、深さ12cmの壁溝が全体的に検出される。

柱穴 確認されない。

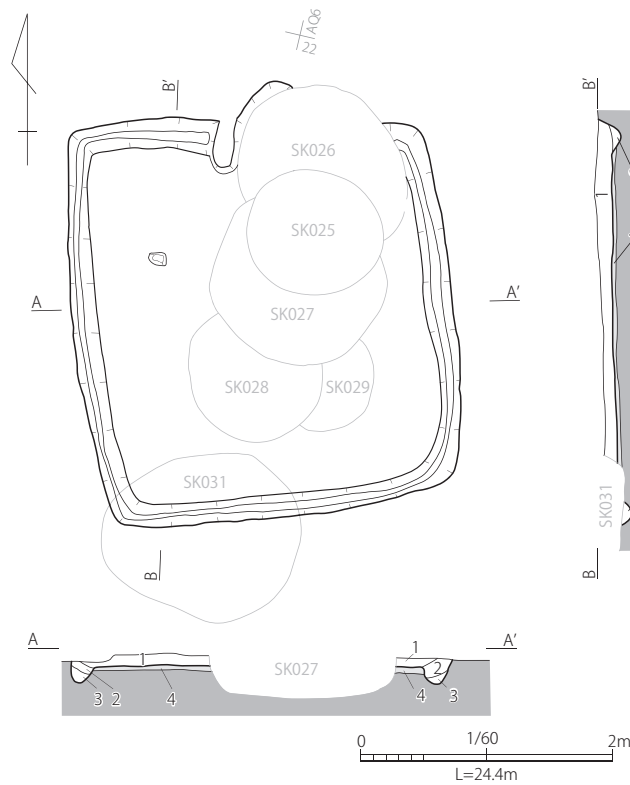
床 ほぼ全面に4cm程の厚さで貼り床が施されている。カマド 北壁やや東寄りに位置し、東側半分がSK026により削平され左袖のみ残存する。袖に芯材は認められない。全長90cmを測る。

出土遺物 (第20図)

1から3はいずれも底部が比較的小さい駿東型坏の破片である。2は1に比べて高さがあり、底部外面付近はへら工具により段を作り出す造作があり、削り出し高台を意識しているようである。3は、器高が低く皿のような形態である。

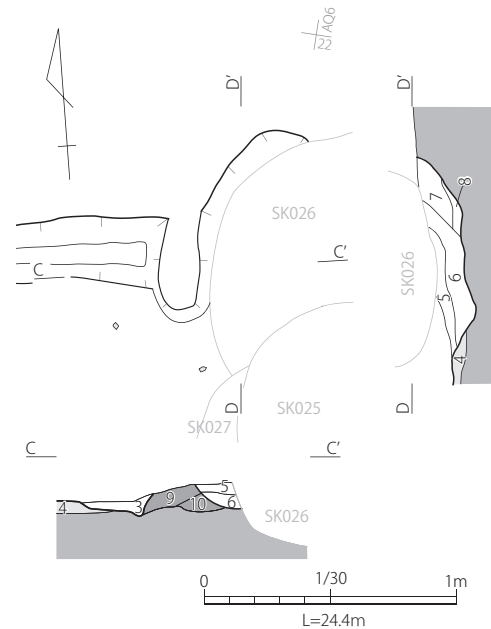
所見

9世紀中葉から後半にかけてと考えられる。



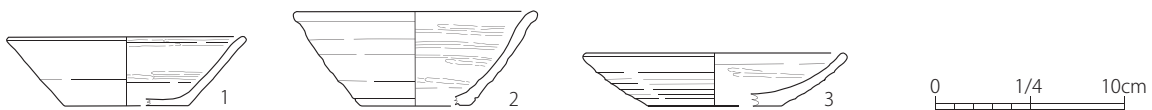
- | | | |
|-----------------------|----------------------------------|----------|
| 1 黒色土層 (2.5Y2/1) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB057土 |
| 2 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB057土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 黄褐色土少量。 | SB057土 |
| 4 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3) | 黄褐色土中量。 | SB05掘方埋土 |

第18図 SB05 平面図・断面図



- | | |
|---------------------------|---------------|
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | SB057土 |
| 黄褐色土少量。 | |
| 4 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3) | SB05掘方埋土 |
| 黄褐色土中量。 | |
| 5 黄褐色土層 (2.5Y3/3) | SB05カマド 燃烧室7土 |
| 焼土少量。炭化物微量。粘土中量。 | |
| 6 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | SB05カマド 燃烧室7土 |
| 大淵スコリア微量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | |
| 7 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | SB05カマド 燃烧室7土 |
| 焼土少量。炭化物微量。粘土中量。 | |
| 8 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | SB05カマド 燃烧室7土 |
| 焼土微量。炭化物少量。粘土少量。 | |
| 9 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) | SB05カマド 袖 |
| 黒色土少量。炭化物少量。粘土中量。 | |
| 10 灰黄色土層 (2.5Y6/2) | SB05カマド 袖 |
| 粘土少量。 | |

第19図 SB05 カマド 平面図・断面図



第20図 SB05 出土遺物実測図

SB06

遺構 (第21・22図)

位置 AQ・20 グリッド

重複関係 (古) SB09・SB10 → SB08 → SB06 (新)

主軸方位 N - 8.5° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。
主軸 (南北) 幅 3.27m、直交 (東西) 幅 3.22m、深さ 32cmを測る。建物跡中央付近の床面には径 35cm 程の範囲に焼土が広がる。

覆土 大淵スコリアが混じる暗灰黄色土。

壁溝 幅 18cm、深さ 8cmの壁溝が全体的に検出される。

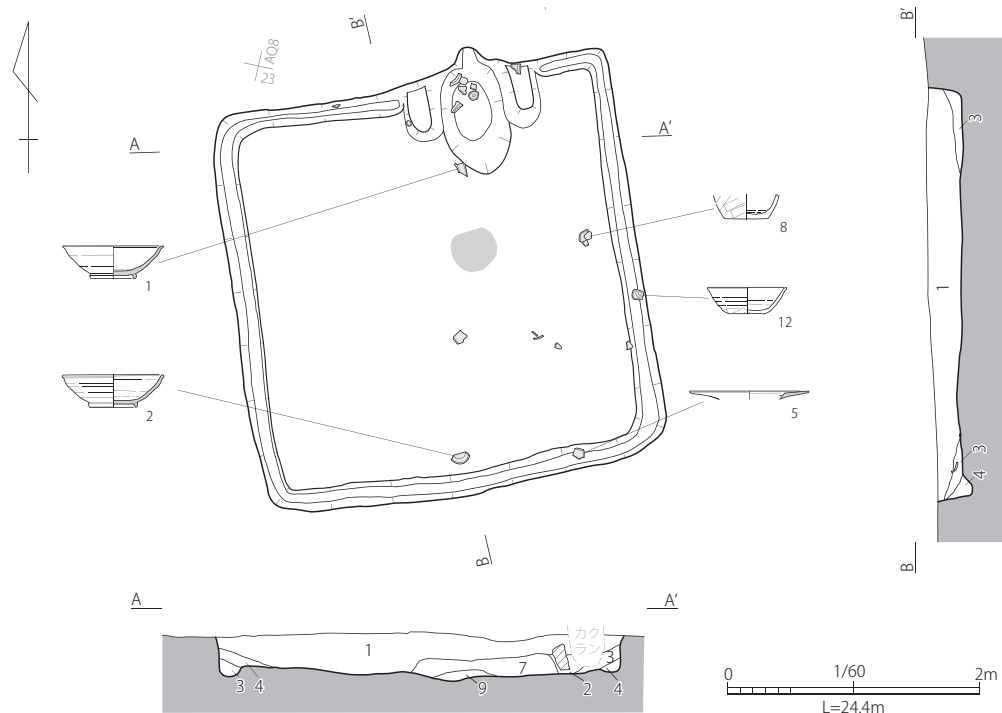
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁やや東寄りに位置し、遺存状態は比較的良好である。右袖端部には芯材が認められる。全長 102cm、幅 110cm、燃焼室幅 51cmを測る。燃焼室から甲斐型甕 (15・16) や駿東型環 (7) が出土している。

出土遺物 (第23図)

1 から 4 は灰釉陶器の碗、5 は段皿である。1 の高台は低く内外面に弱いナデを施し端部がやや尖っている。外面の釉は明確ではない。胎土に白色の粒子は含まず、色調はやや黒味がかっている。2 は全体的に厚く口縁端部は外反しない。底部はヘラケズリ調整で高台は内面が強くナデられ、内湾して低い三日月高台を呈する。胎土には白色粒子を多く含み色調はやや黄色味がかっている。3 は底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する。底部は糸切り未調整で、高台は低く内外面に弱いナデが施される。胎土には白色粒子を含み、色調はグレーである。4 は器壁が全体的に厚く作られている。底部は糸切り未調整で高台は低く、端部が丸い。胎土に白色粒子を含み、色調はグレーを呈する。5 は段皿でやや緑色がかった釉がかかる。器壁は全体的に薄く口唇部も比較的丁寧に作られている。6 から 12 は駿東型環であ



- | | | |
|-----------------------|------------------------|----------------|
| 1 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。 | SB067カ土 |
| 2 褐灰色土層 (10YR4/1) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB067カ土 |
| 3 黒褐色土層 (10YR3/1) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。 | SB067カ土 |
| 4 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。粘土微量。 | SB067カ土 |
| 5 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB067カ土 |
| 6 にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) | 焼土中量。炭化物微量。 | SB06カマド 燃焼室7カ土 |
| 7 にぶい黄褐色土層 (10YR5/3) | 炭化物少量。 | SB06カマド 燃焼室7カ土 |
| 8 にぶい黄褐色土層 (7.5YR5/3) | 焼土多量。 | SB06カマド 燃焼室7カ土 |
| 9 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 焼土少量。炭化物少量。 | SB06カマド 燃焼室7カ土 |

第21図 SB06 平面図・断面図

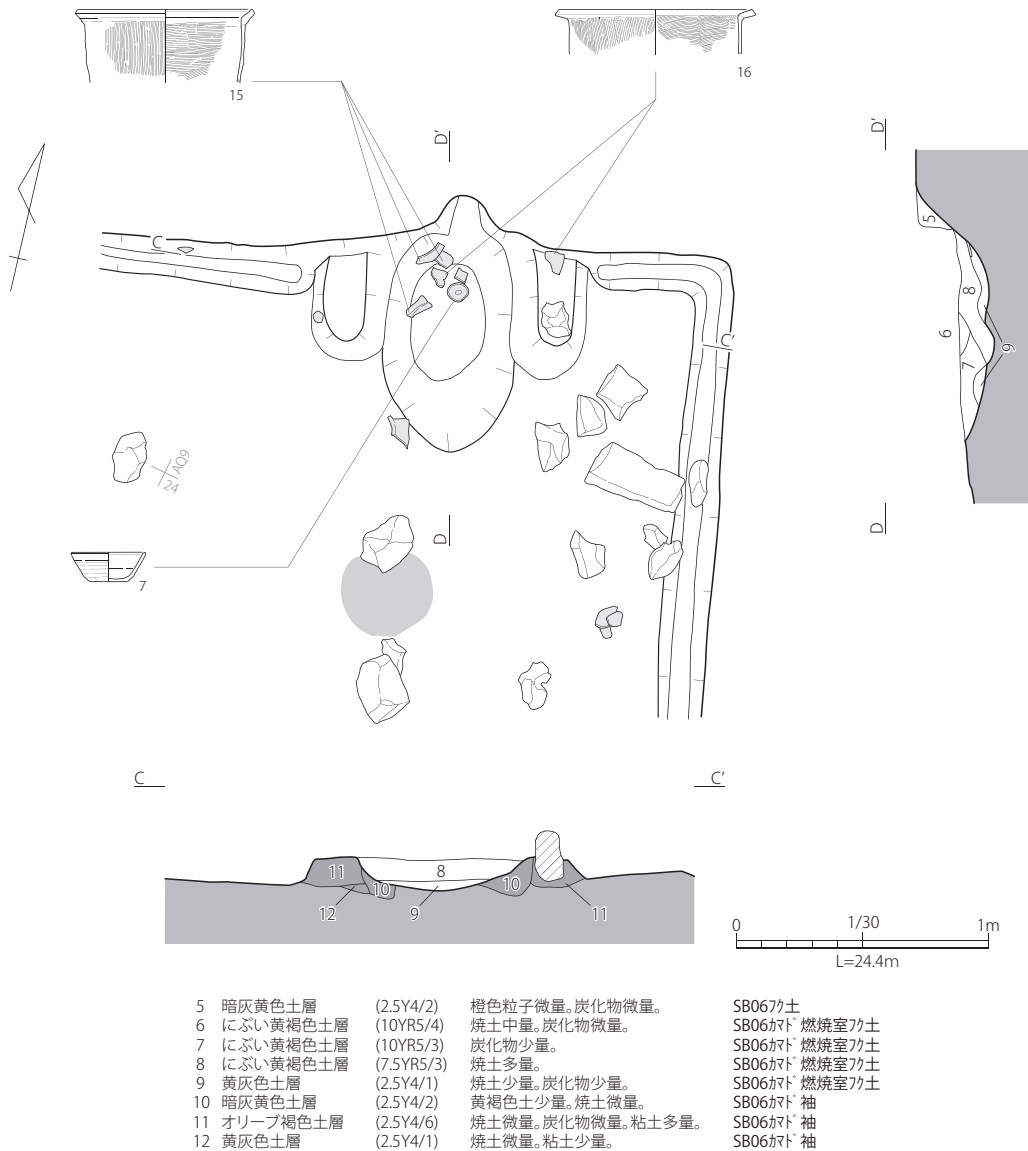
る。6から8はいずれも底部付近に横、斜め方向のヘラケズリが施される。8のみ底部裏面にハケ目が残る。9は底部付近のヘラケズリがなく、全体的に直線的に口縁部に至る。10の見込みには墨書が認められるが判読できない。12は他の駿東型環と異なり、器壁が厚く重量感がある。内面にノタ目が残るものの外面はヘラケズリ調整により平滑に仕上げられている。13は皿である。底部から比較的緩やかに広がり、その後直立気味に立ち上がる。底部裏面にはハケ目残り、その周りにヘラケズリが施されるという駿東型環と共通した技法が見られる。外面は横方向の細かなヘラミガキ、内面見込み部に

は放射状のヘラミガキが認められる。14は駿東型長胴甕の口縁部で、ヨコナデが不十分なため、段差が認められる。15・16は甲斐型甕である。口縁部の形状が異なることから2個体以上存在したと考えられる。15は口縁部が斜め方向に延びるが、16は水平方向に延びている。調整は共通しており、外面は粗いタテハケ、内面は粗いヨコハケが施される。胎土には金雲母と考えられる粒子を多量に含んでいる。

所見

甲斐型甕はXI期、灰釉陶器はO-53期。

10世紀前半と考えられる。



第22図 SB06 カマド 平面図・断面図

SB07

遺構 (第24図)

位置 AQ・20 グリッド

重複関係 (古) SB07 → SK021・SK030 (新)

主軸方位 N - 2.5° - E

残存状況 西側は調査区域外となり建物跡の東側のみを検出した。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸(南北)幅3.98m、直交(東西)幅1.48m、深さ26cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅25cm、深さ16cmの壁溝が検出範囲内では全体的に確認された。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

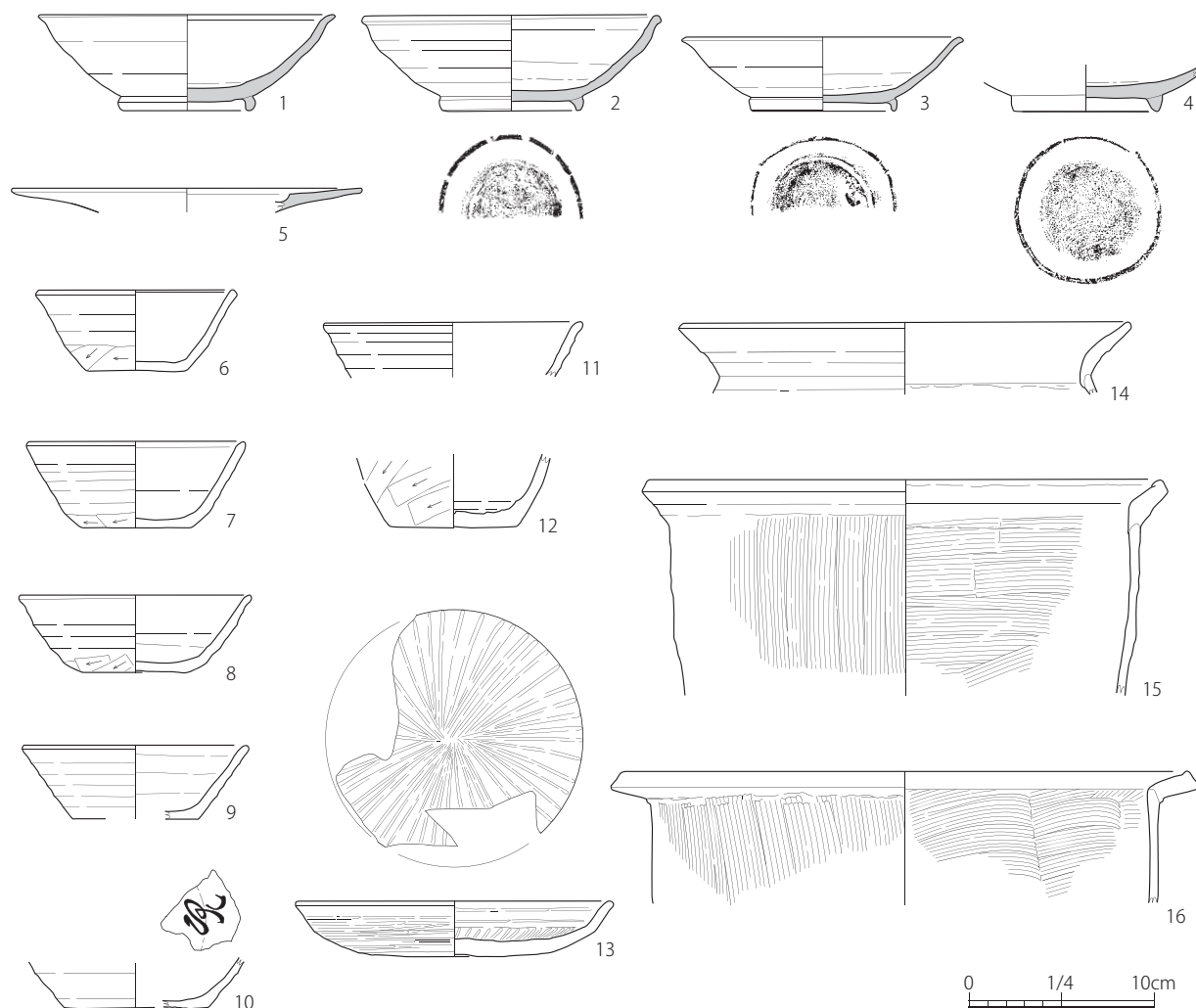
カマド 検出範囲内では確認されない。

出土遺物 (第25図)

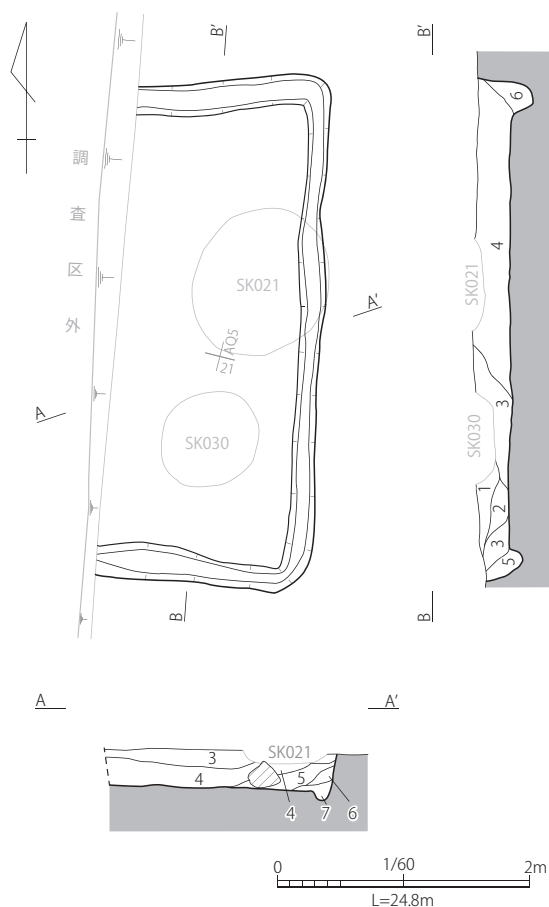
1は壺Gの破片である。内外面ともヨコナデで調整されている。底部裏面には回転糸切り痕が認められる。2から4は須恵器の摘蓋の破片である。5は有台坏身で底部が高台よりやや突出する。体部は一度屈曲し直線的に口縁部に至る。6は小型の甕で外面タテハケ、内面ヨコハケが認められる。7は遠江系水平口縁甕の破片である。胎土には銀色に輝く粒子を多く含む。8は駿東型球胴甕の口縁部で口唇部内面を肥厚させている。外面頸部は横方向のヘラミガキが認められる。

所見

8世紀前半と考えられる。

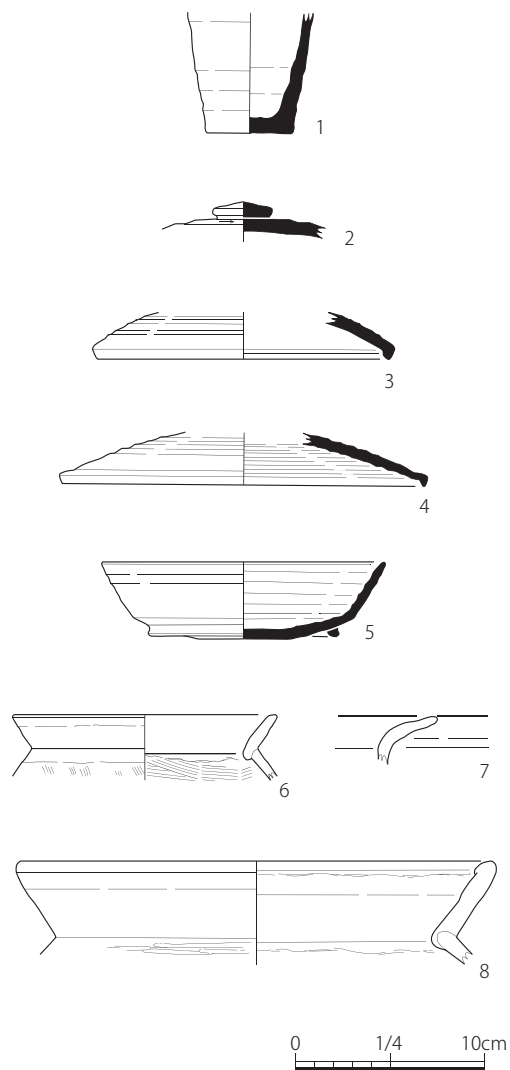


第23図 SB06 出土遺物実測図



- | | |
|---|---------|
| 1 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2)
大淵スコリア少量。黄褐色土少量。 | SB077ヶ土 |
| 2 黒褐色土層 (2.5Y3/2)
大淵スコリア微量。黄褐色土少量。 | SB077ヶ土 |
| 3 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
大淵スコリア微量。 | SB077ヶ土 |
| 4 暗褐色土層 (10YR3/3)
大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。 | SB077ヶ土 |
| 5 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3)
大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB077ヶ土 |
| 6 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2)
橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB077ヶ土 |
| 7 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2)
焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB077ヶ土 |

第24図 SB07 平面図・断面図



第25図 SB07 出土遺物実測図

SB08

遺構 (第26・27図)

位置 AQ・20グリッド

重複関係 (古) SB09・SB10 → SB08 → SB06 (新)

主軸方位 N - 16.0° - W

残存状況 建物跡南側の土層はSB06により削平されているものの、立ち上がりや床面は良好に遺存する。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅3.10m、直交(東西)幅2.98m、深さ42cmを測る。

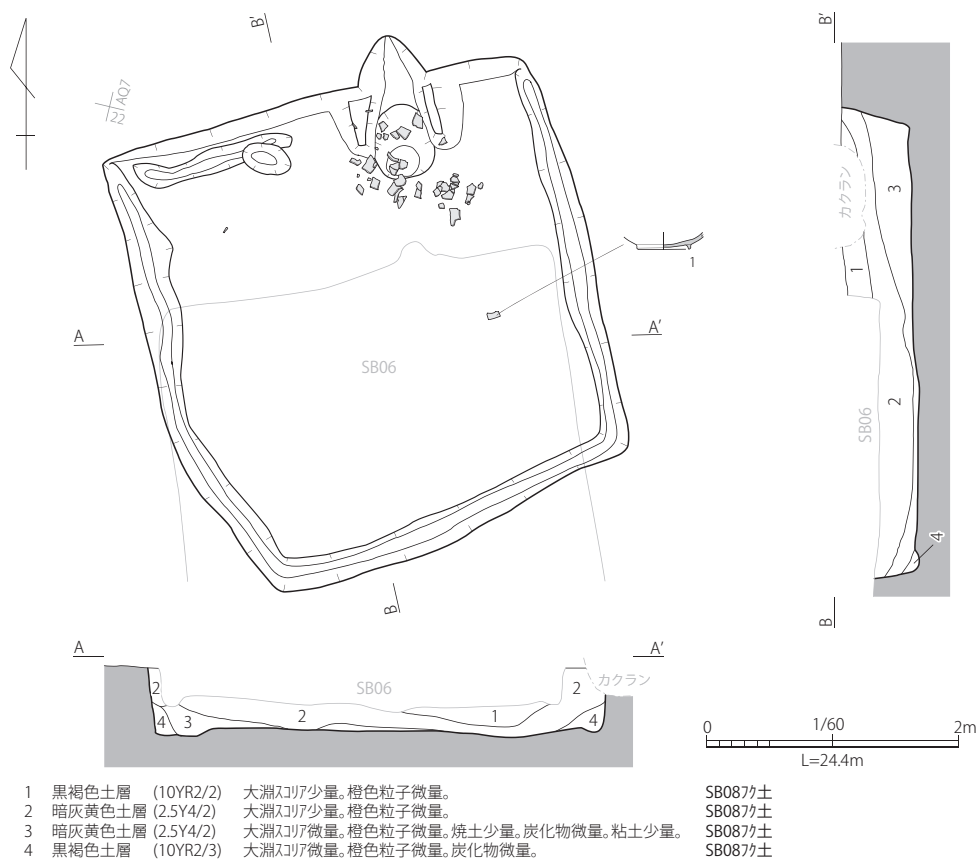
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅25cm、深さ5cmの壁溝が北西コーナーにおいて途切れるが全体的に確認される。

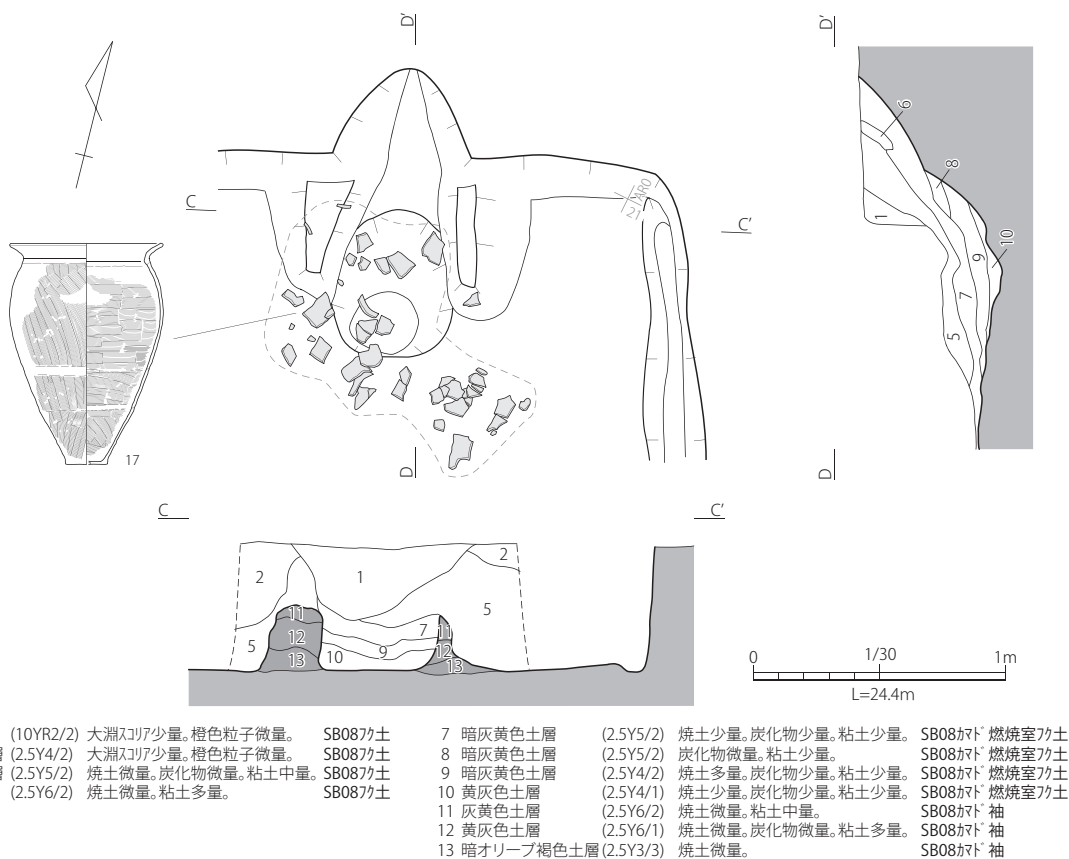
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁東寄りに位置し、遺存状態は比較的良好である。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長114cm、幅102cm、燃焼室幅42cmを測る。燃焼室から焚き口南側の床面には駿東型長胴甕(7)の破片が出土している。



第26図 SB08 平面図・断面図

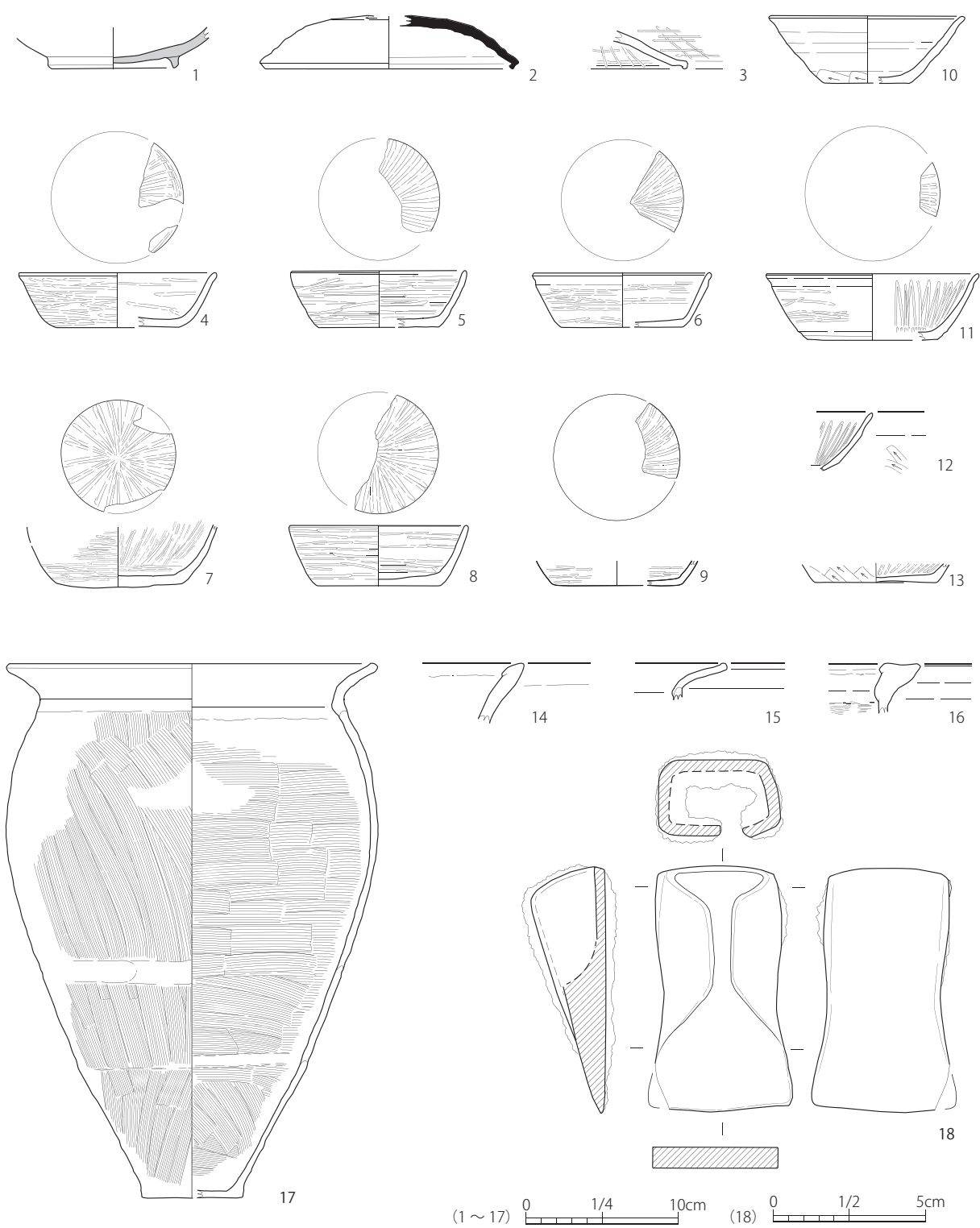


第27図 SB08 カマド 平面図・断面図

出土遺物 (第28図)

1は灰釉陶器の碗で内面全面に釉が認められる。高台は低く、内面がよくナデられ、内湾した三日月高台である。胎土には白色粒子を比較的多く含む。2は須恵器の摘蓋の破片である。摘みは欠損している。3は須恵器模倣の土師器蓋である。内外面ともに横方向のヘラミガキの後放射状のミガキが施される。4から9は駿東型坏である。全体的に器高が低く口径と底径を比べると底径が比較的大きい。いずれも内面の見込みに暗文状のヘラミガキを有する。10はそれらに比べると底径が小さく調

倣の土師器蓋である。内外面ともに横方向のヘラミガキの後放射状のミガキが施される。4から9は駿東型坏である。全体的に器高が低く口径と底径を比べると底径が比較的大きい。いずれも内面の見込みに暗文状のヘラミガキを有する。10はそれらに比べると底径が小さく調



第28図 SB08 出土遺物実測図

整も雑である。11から13は甲斐型の坏を模倣して作った坏と考えられる。胎土が甲斐型坏と異なり全体的に砂質である。内面見込みには放射状のヘラミガキを有し、底部外面付近にはヘラケズリを施すという甲斐型の特徴を持つ。13の底部には回転糸切りの痕跡が残る。14は駿東型球胴甕、15は駿東型長胴甕、16は駿東型の塼と考えられる。17は駿東型の長胴甕である。長い胴部に小さな底部、くの字に屈曲する口縁部を有する。内面は細かなヨコハケ、外面は斜め方向のハケ目が観察される。底部、胴下半、胴上半の大きく3つの工程に分けて粘土が積み上げられており、外面にナデ調整が施されている。口縁部は内外面ともに強いヨコナデが施される。18は袋状鉄斧（無肩鉄斧）である。袋部と刃幅がほぼ等しく中央部分に括れを持つ。袋部基部の断面は方形を呈する。全長8.0cm、袋部長3.9cm、袋部幅4.1cm、刃部長4.1cm、刃部幅4.7cmを測る。

所見

駿東型坏や駿東型長胴甕から8世紀末から9世紀前半頃と考えられる。

SB09

遺構 (第29・30図)

位置 AQ・20 グリッド

重複関係 (古) SB11 → SB09 → SB08 (新)

主軸方位 N - 22.5° - W

残存状況 建物跡南側半分はSB08により床面まで削平されているが、壁溝の立ち上がりが全体的に残存している。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅3.08m、直交(東西)幅3.48m、深さ40cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅20cm、深さ8cmの壁溝が全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

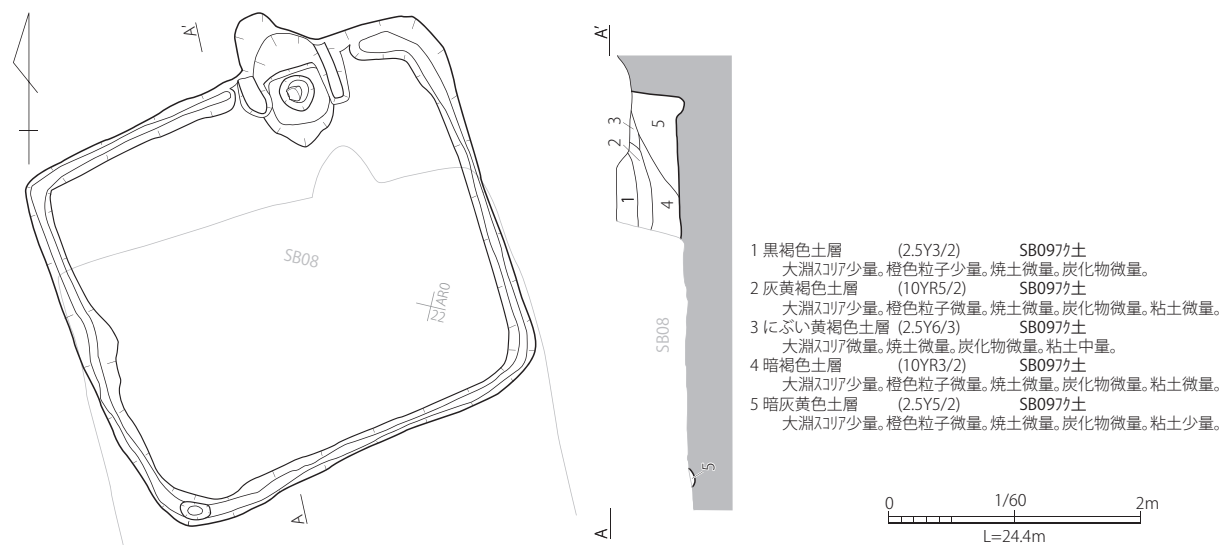
カマド 北壁東寄りに位置し、遺存状態は比較的良好である。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長114cm、幅90cm、燃烧室幅48cmを測る。

出土遺物 (第31図)

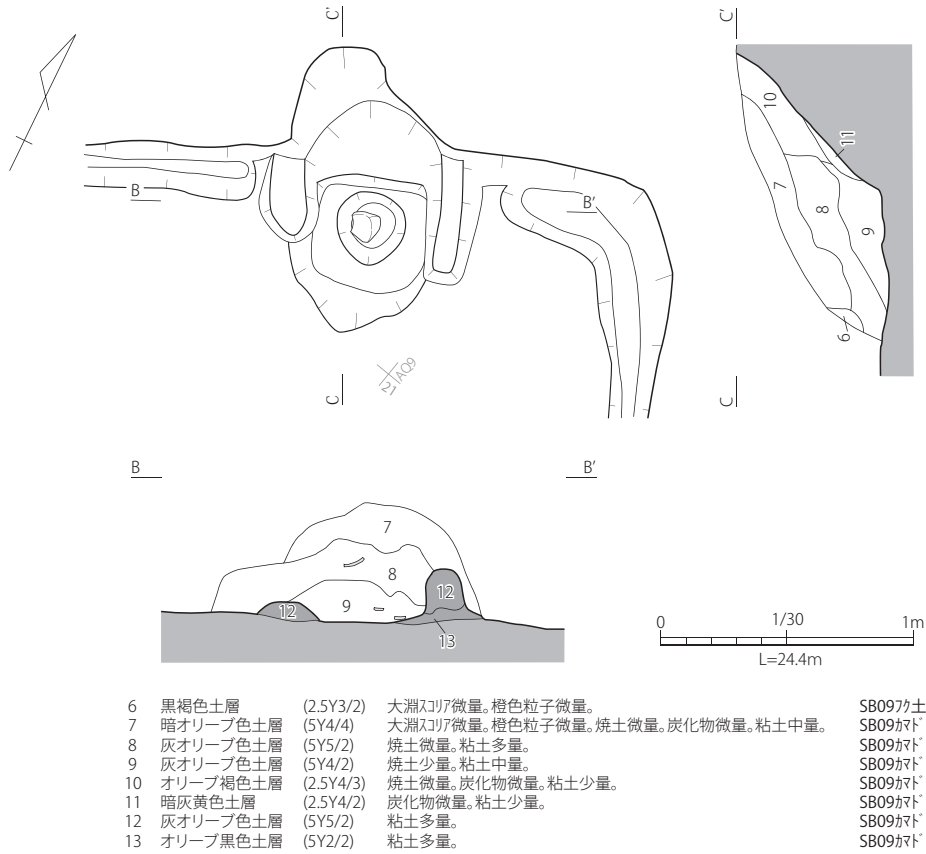
1・2は須恵器の坏である。1は有台坏身と考えられ、胎土は砂っぽく色調は白色を呈する。2は碗形の可能性が高い。底部裏面にはヘラケズリの痕跡が残る。3は口縁部の短い甕である。頸部が緩やかに屈曲し、短い口縁端部に至る。胎土は金雲母と思われる粒子を多く含み遠江の小型の甕と考えられる。4から6は遠江系水平口縁甕で胎土は金雲母と思われる粒子を多く含み、色調は白っぽい。4は5に比べて肩が大きく張る形態を示す。7は駿東型長胴甕の口縁部と考えられる破片である。全体的に厚い器壁を有する。駿東型球胴甕に似たヘラミガキが外面肩部にある。

所見

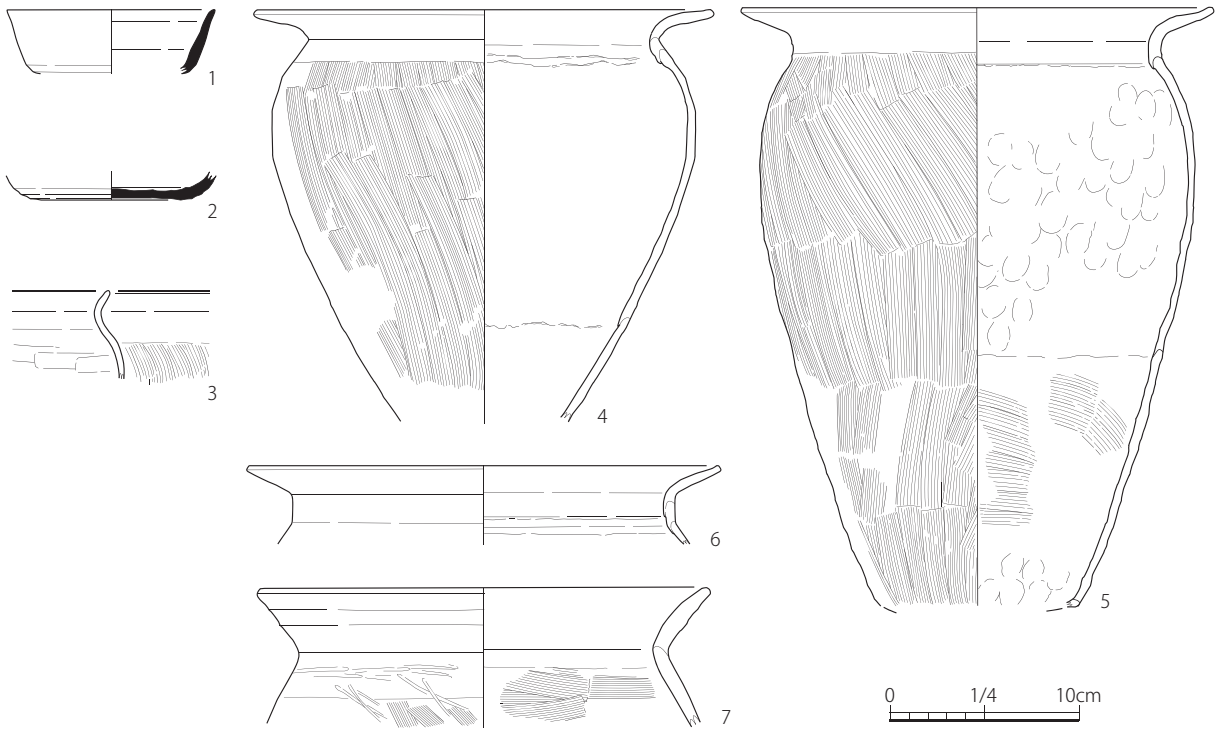
8世紀前半から中葉頃と考えられる。



第29図 SB09 平面図・断面図



第30図 SB09 カマド 平面図・断面図



第31図 SB09 出土遺物実測図

SB10

遺構 (第32・33図)

位置 AR・20 グリッド

重複関係 (古) SB10 → SB08 → SB06 (新)

主軸方位 N - 79.5° - E

残存状況 建物跡北西側はSB06、SB08により削平されて残存しない。平面形は方形を呈するものと考えられ、主軸(東西)幅3.36m、直交(南北)幅2.91m、深さ35cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

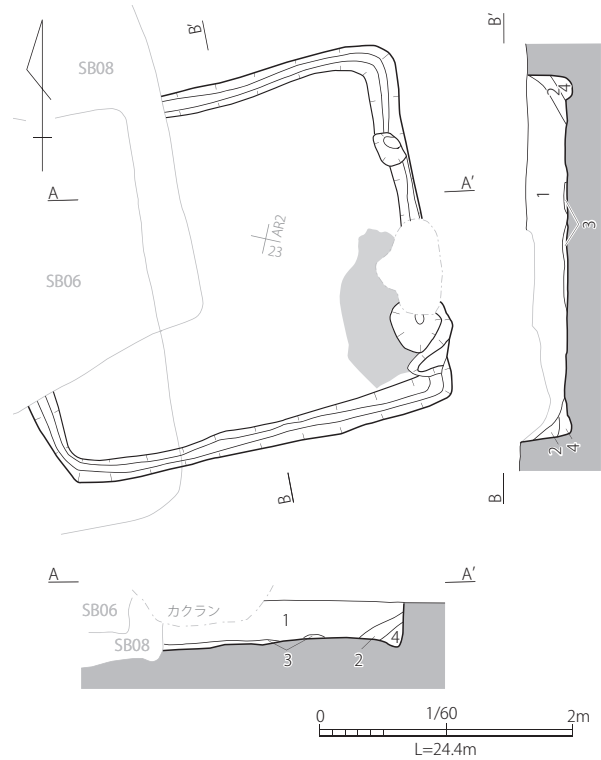
壁溝 幅18cm、深さ8cmの壁溝が検出範囲内で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

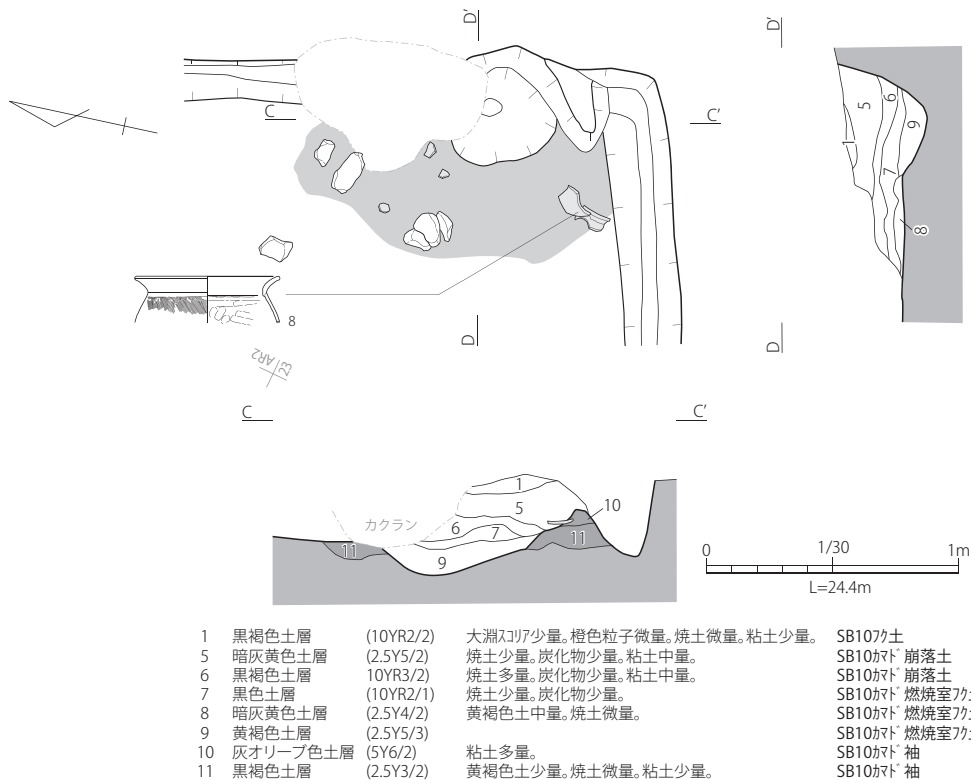
カマド 東壁南端に位置し、攪乱により右袖のみ残存する。全長は検出範囲で48cmを測り、幅等は不明である。

カマド西側の床面には粘土と石材が検出されている。



- | | | | |
|---|---------------------|----------------------------|--------|
| 1 | 黒褐色土層 (10YR2/2) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土少量。 | SB10カ土 |
| 2 | 黒色土層 (10YR2/1) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。 | SB10カ土 |
| 3 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB10カ土 |
| 4 | 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3) | 橙色粒子微量。 | SB10カ土 |

第32図 SB10 平面図・断面図



- | | | | |
|----|------------------|----------------------------|---------------|
| 1 | 黒褐色土層 (10YR2/2) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土少量。 | SB10カ土 |
| 5 | 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) | 焼土少量。炭化物少量。粘土中量。 | SB10カマド 崩落土 |
| 6 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 焼土多量。炭化物少量。粘土中量。 | SB10カマド 崩落土 |
| 7 | 黒色土層 (10YR2/1) | 焼土少量。炭化物少量。 | SB10カマド 燃焼室カ土 |
| 8 | 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 黄褐色土中量。焼土微量。 | SB10カマド 燃焼室カ土 |
| 9 | 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | | SB10カマド 燃焼室カ土 |
| 10 | 灰オリーブ色土層 (5Y6/2) | 粘土多量。 | SB10カマド 袖 |
| 11 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 黄褐色土少量。焼土微量。粘土少量。 | SB10カマド 袖 |

第33図 SB10 カマド 平面図・断面図

出土遺物 (第34図)

1は灰釉陶器の皿の破片で内外面ともに釉が認められる。2は甕などの大型品の把手と考えられる。3は見込みに放射状のヘラミガキをもつ坏、4は典型的な駿東型坏である。5は器壁が厚く底部がやや突出するなど作りが粗雑な駿東型坏である。6は灰釉陶器の碗を模倣した坏である。高台は比較的丁寧にナデ調整されている。7は小型の甕でナデられている。口唇部の整形が不十分であり、部分的に凹みがある。8は駿東型長胴甕の口縁部片である。頸部内面に接合痕が明瞭に残る。口縁部は比較的厚くやや外反する。

所見

9世紀前半と考えられる。

SB11

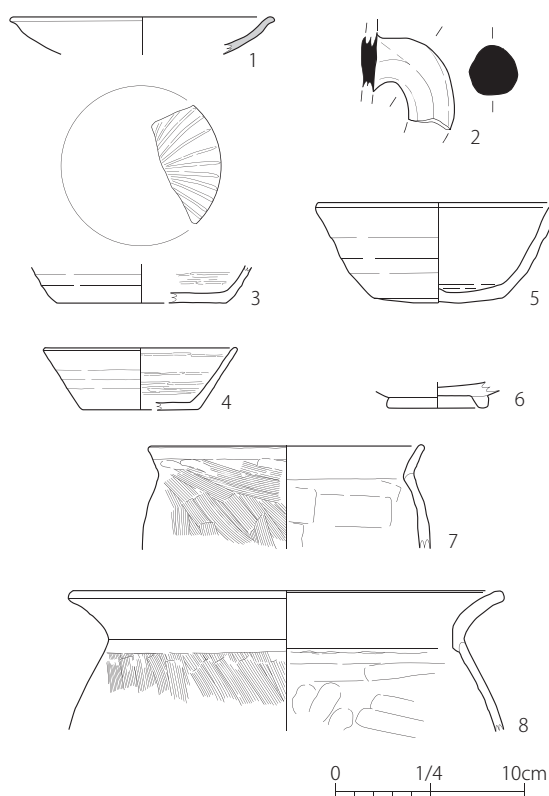
遺構 (第35・36図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB12・SB19 → SB11 → SB09 (新)

主軸方位 N - 22.0° - W

残存状況 建物跡南側はSB09により削平されていて残存しない。平面形は方形を呈するものと考えられる。検



第34図 SB10 出土遺物実測図

出範囲内で主軸(南北)幅1.67m、直交(東西)幅2.71m、深さ21cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

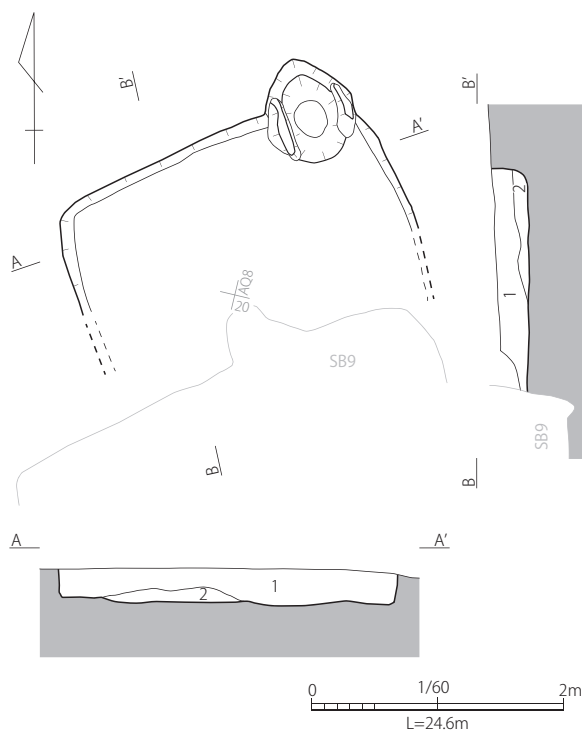
カマド 北壁東端に位置し、遺存状態は比較的良好である。両袖端部に芯材と考えられる石が検出される。全長83cm、幅70cm、燃烧室幅35cmを測る。袖部より駿東型球胴甕(5)が出土している。

出土遺物 (第37図)

1は須恵器の摘蓋である。摘みは扁平で高さが無い。胎土が砂っぽく色調はやや白色を呈する。2は有台坏身で底部が高台より突出する。箱形を呈する。3は長頸壺の破片と考えられる。4は坏と考えられる破片で外面に墨書があるものの、判読できない。5は典型的な駿東型球胴甕である。全体的に器壁が厚く肩はさほど張らない。外面はナナメ方向のハケ目調整の後、ヨコ、ナナメ方向のヘラミガキが丁寧に施される。内面はヨコハケである。

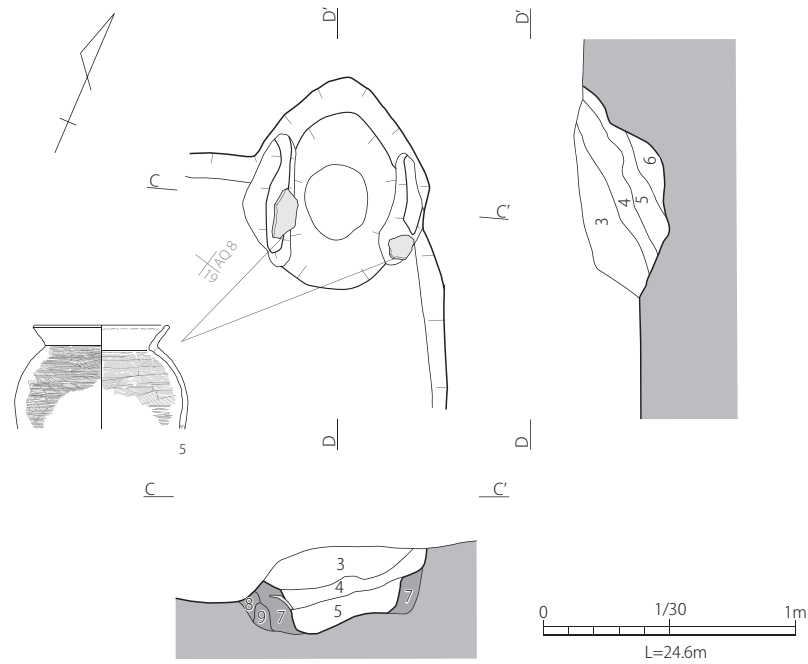
所見

8世紀前半と考えられる。



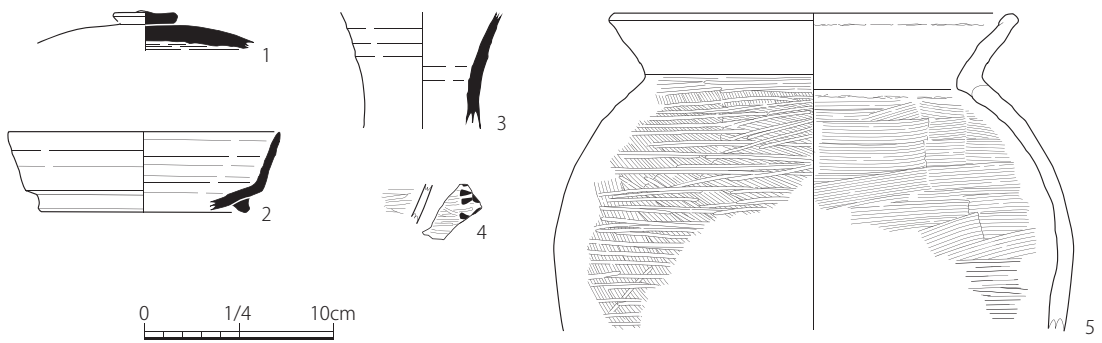
- 1 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3)
大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土少量。SB1177土
- 2 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2)
大淵スコリア微量。橙色粒子微量。粘土少量。SB1177土

第35図 SB11 平面図・断面図



- | | | | |
|------------|-----------|-------------------------|--------------|
| 3 黒褐色土層 | (2.5Y3/2) | 大淵スリ少量。焼土微量。炭化物少量。粘土少量。 | SB117カ土 |
| 4 暗灰黄色土層 | (2.5Y4/2) | 大淵スリ微量。炭化物少量。粘土中量。 | SB11カト 崩落土 |
| 5 灰オリーブ色土層 | (5YR5/2) | 大淵スリ微量。焼土少量。炭化物少量。粘土多量。 | SB11カト 燃烧室カ土 |
| 6 暗灰黄色土層 | (2.5Y4/2) | 大淵スリ微量。焼土少量。炭化物少量。 | SB11カト 燃烧室カ土 |
| 7 暗灰黄色土層 | (2.5Y5/2) | 焼土少量。炭化物少量。粘土中量。 | SB11カト 袖 |
| 8 黄褐色土層 | (2.5Y5/3) | 砂多量。 | SB11カト 袖 |
| 9 灰黄色粘土層 | (2.5Y6/2) | 砂少量。 | SB11カト 袖 |

第36図 SB11 カマド 平面図・断面図



第37図 SB11 出土遺物実測図

SB12

遺構 (第 38 図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB12 → SB11 → SB09 (新)

主軸方位 N - 13.0° - W

残存状況 建物跡南側は SB09 により削平されていて残存しない。また北側の上層も SB11 により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸 (南北) 幅 1.42m、直交 (東西) 幅 2.55m、深さ 15cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 15cm、深さ 6cm の壁溝が検出範囲内で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁東端に位置するが、SB11 により削平されて掘り方以外は残存しない。検出範囲内で全長 113cm、燃焼室幅 50cm を測る。

出土遺物

図化できる遺物はなかった。

所見

遺構の切り合い関係から 8 世紀前半以前の建物跡と考えられる。

SB13

遺構 (第 39 図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB14・SB17 → SB13 (新)

主軸方位 N - 17.5° - W

残存状況 西側は調査区域外のため建物跡の東側のみ検出した。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸 (南北) 幅 4.70m、直交 (東西) 幅 2.85m、深さ 59cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 35cm、深さ 5cm の壁溝が検出範囲内で全体的に確認される。

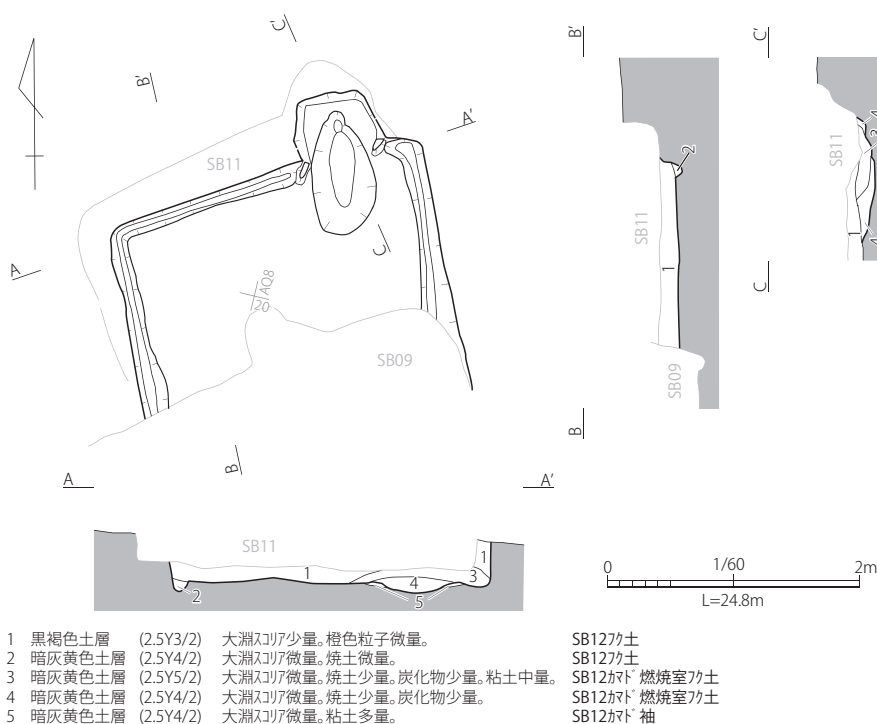
柱穴 1 基検出した。径 28cm、深さ 16cm を測る。

床 掘り方を床面としている。

カマド 検出範囲内では確認されない。

出土遺物 (第 40 図)

1 から 5 は摘蓋および有台坏身の破片である。1・3・5 は胎土が砂っぽく色調が白色を呈し、焼成が不十分な点が共通する。また、器壁が全体的に厚く、各端部にシャープさを欠く。一方、2 の蓋は、胎土に白色粒子を若干含む精緻な胎土で、焼成も良く器壁が薄く全体的にシャープに仕上げられている。6 は駿東型球胴甕である。器壁が全体的に薄く、口縁部は比較的高さをもつ。口唇



第 38 図 SB12 平面図・断面図

部内側は肥厚させていない。内面がハケ目調整ではなく、板状工具によるナデが施されているのが特徴である。

所見

8世紀前半と考えられる。

SB14

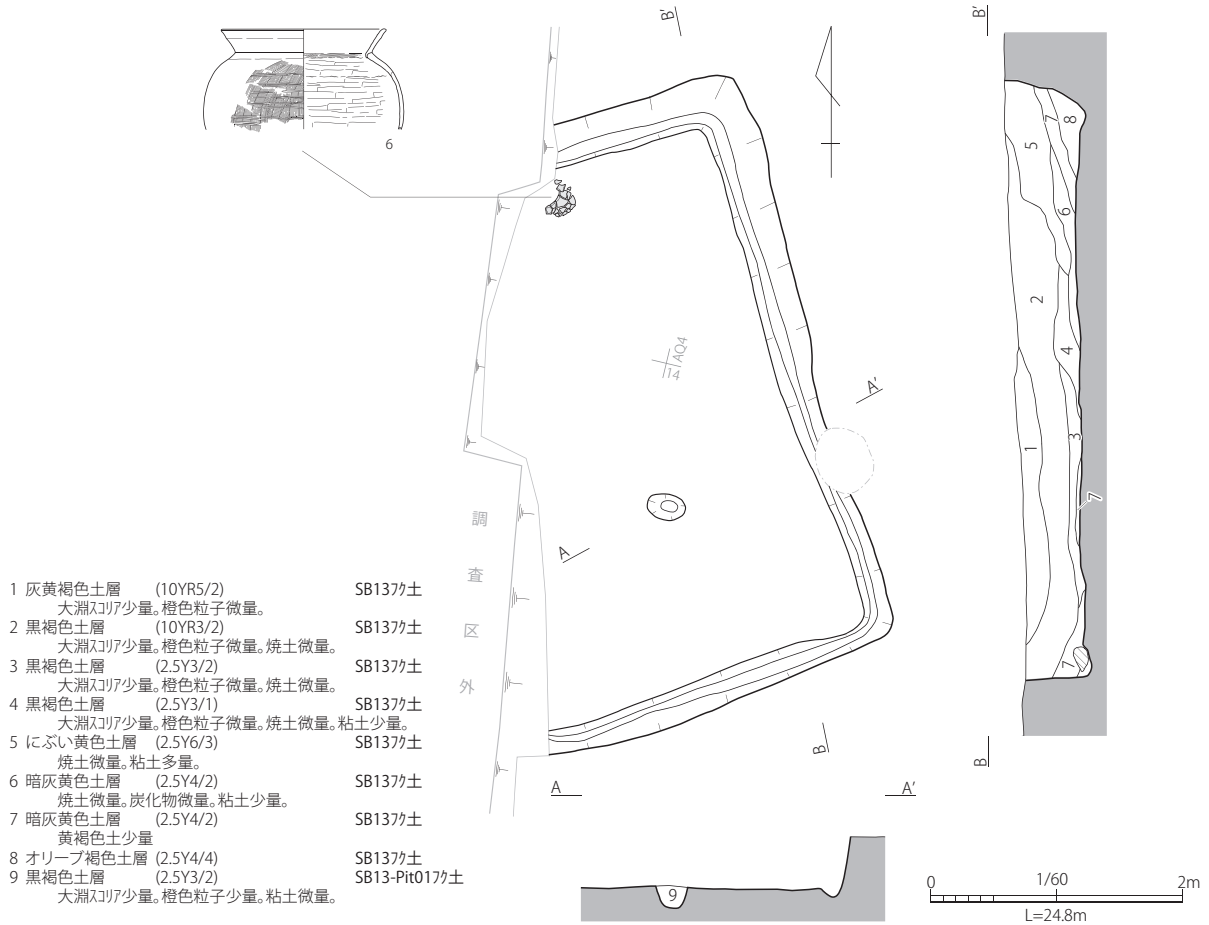
遺構 (第41・42図)

位置 AQ・10グリッド

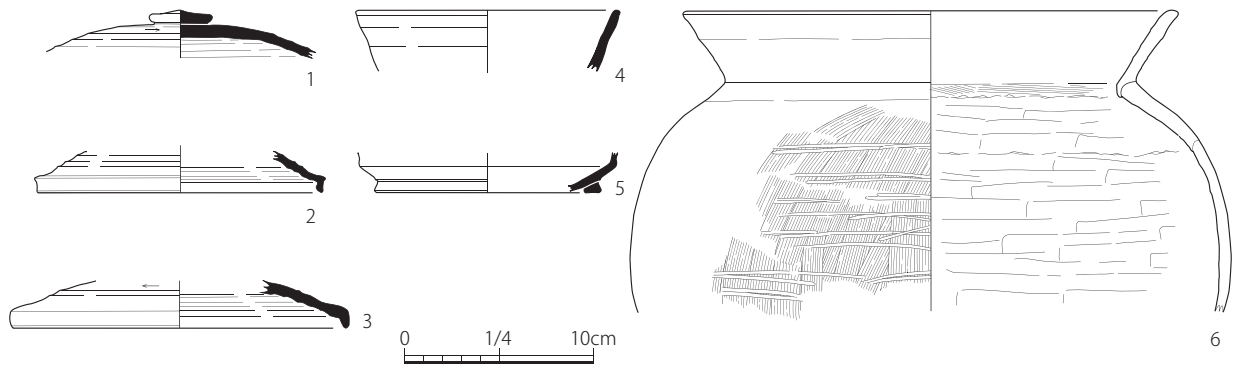
重複関係 (古) SB15 → SB14 → SB13 (新)

主軸方位 N - 71.0° - E

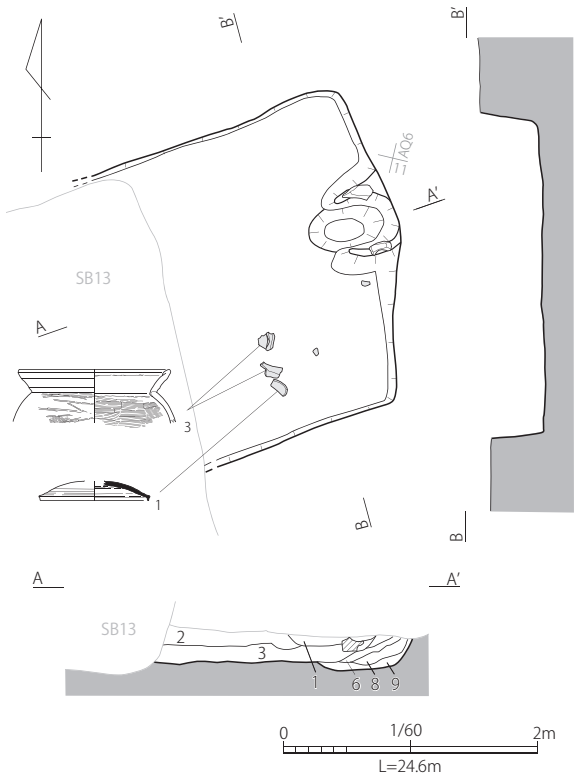
残存状況 西側はSB13により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸(東西)幅1.90m、直交(南北)幅2.45m、深さ30cmを測る。



第39図 SB13 平面図・断面図

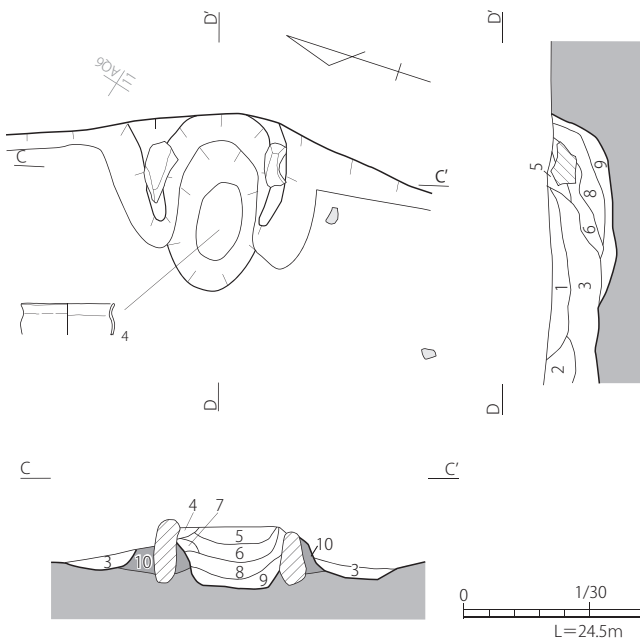


第40図 SB13 出土遺物実測図



- | | |
|---|--------------|
| 1 黄灰色土層 (2.5Y4/1)
大淵スコリア微量。粘土少量。 | SB147㌕土 |
| 2 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2)
大淵スコリア中量。橙色粒子少量。 | SB147㌕土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/2)
大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量 | SB147㌕土 |
| 6 黄灰色土層 (2.5Y4/1)
焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 8 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
大淵スコリア微量。焼土多量。炭化物微量。粘土微量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 9 黒褐色土層 (2.5Y3/1)
大淵スコリア少量。焼土微量。炭化物微量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |

第41図 SB14 平面図・断面図



- | | |
|---|--------------|
| 1 黄灰色土層 (2.5Y4/1)
大淵スコリア微量。粘土少量。 | SB147㌕土 |
| 2 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2)
大淵スコリア中量。橙色粒子少量。 | SB147㌕土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/2)
大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量 | SB147㌕土 |
| 4 黄褐色土層 (2.5Y5/39)
大淵スコリア少量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB147㌕土 |
| 5 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2)
大淵スコリア微量。橙色粒子微量。粘土多量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 6 黄灰色土層 (2.5Y4/1)
焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 7 にぶい黄褐色土層 (10YR5/3)
焼土中量。炭化物微量。粘土少量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 8 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
大淵スコリア微量。焼土多量。炭化物微量。粘土微量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 9 黒褐色土層 (2.5Y3/1)
大淵スコリア少量。焼土微量。炭化物微量。 | SB14㌕ㄗ 燃烧室㌕土 |
| 10 灰オリーブ色土層 (5Y5/2)
粘土多量。 | SB14㌕ㄗ 袖 |

第42図 SB14 カマド 平面図・断面図

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 東壁やや北寄りに位置し、遺存状態は良好である。芯材と考えられる石材が両袖に確認でき、全長70cm、幅85cm、燃烧室幅41cmを測る。燃烧室より小型の甕(4)が出土している。

出土遺物(第43図)

1は須恵器の摘蓋の破片である。胎土がやや砂っぽいものの端部の形態はシャープさを保っている。摘みは欠損している。2は坏身の破片である。おそらく有台坏身になると思われる。胎土が砂っぽく色調は白色を呈し、端部にシャープさはない。3は典型的な駿東型球胴甕である。肩は張らず口縁部内側は肥厚させている。器壁は全体的に厚い。4は小型の甕である。頸部の屈曲はゆるく、全体にナデ調整が施される。5・6は遠江系水水平口縁甕の破片である。口縁部は大きく反り返り内側がやや凹む。体部外面のハケ目工具は幅が粗い。胎土には金雲母と考えられる粒子を多く含む。

所見

須恵器や駿東型球胴甕から8世紀前半と考えられる。

SB15

遺構 (第44・45図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB15 → SB14 → SB13 (新)

主軸方位 N - 21.5° - W

残存状況 西壁は調査区域外となり確認されていない。
覆土の大半がSB13及びSB14により削平されている。
平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸(南北)幅3.70m、直交(東西)幅3.00m、深さ40cmを測る。

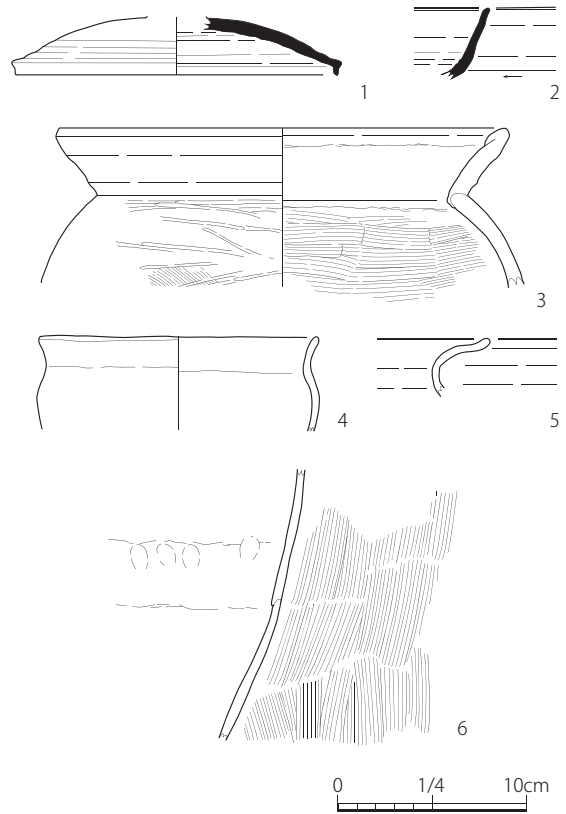
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅15cm、深さ10cmの壁溝が検出範囲内で全体的に確認される。

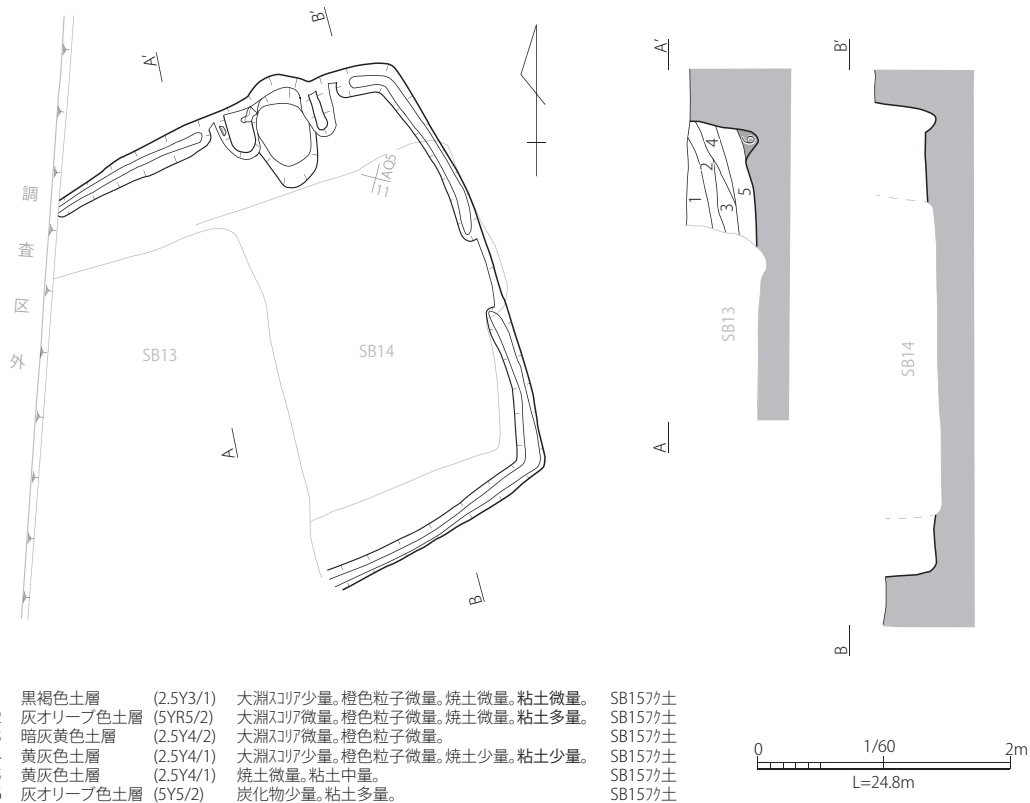
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁やや東寄りに位置し、遺存状態は良好である。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長89cm、幅95cm、燃焼室幅40cmを測る。燃焼室より小型の甕(4)が出土している。

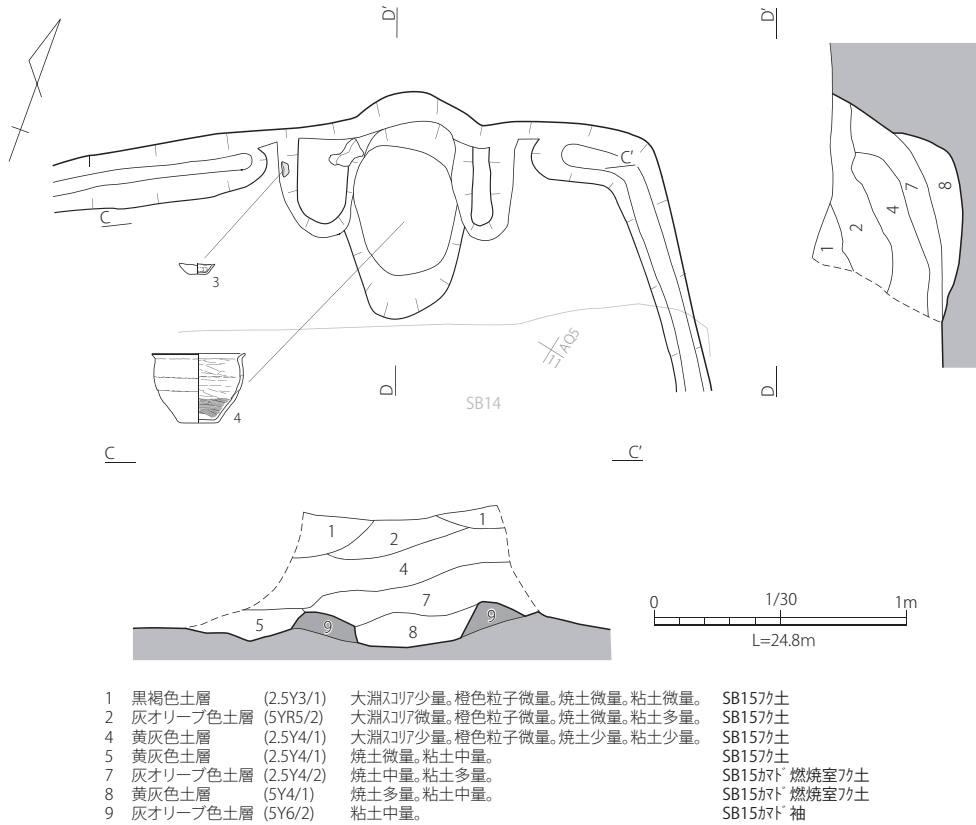


第43図 SB14 出土遺物実測図

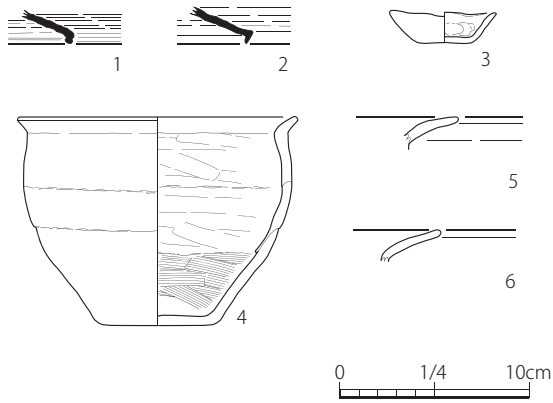


- | | | |
|---------------------|----------------------------|---------|
| 1 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土微量。 | SB157ㄗ土 |
| 2 灰オリーブ色土層 (5YR5/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土多量。 | SB157ㄗ土 |
| 3 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。 | SB157ㄗ土 |
| 4 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。焼土少量。粘土少量。 | SB157ㄗ土 |
| 5 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 焼土微量。粘土中量。 | SB157ㄗ土 |
| 6 灰オリーブ色土層 (5Y5/2) | 炭化物少量。粘土多量。 | SB157ㄗ土 |

第44図 SB15 平面図・断面図



第45図 SB15 カマド 平面図・断面図



第46図 SB15 出土遺物実測図

出土遺物 (第46図)

1・2はいずれも摘蓋の破片である。1の胎土は精緻で黒味がかっている一方で、2は砂っぽく全体的に黄色から白色を呈する。3はユビオサエで作られた手づくね。4は小型の甕である。外面に整形時の輪積み痕を残すなど調整が不十分である。また、二次的な被熱の痕跡も観察される。おそらくカマドの付近で使用されたものと考えられる。

所見

遺構の切り合いから8世紀前半頃と考えられるが、出土遺物には9世紀前半のものがあり切り合いが誤認の可能性はある。

SB17

遺構 (第47・48図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB18・SB19 → SB17 → SB13 (新)

主軸方位 N - 54.0° - E

残存状況 北壁の一部がSB13により削平されているものの、ほぼ全体が検出されている。平面形は方形を呈し、主軸(東西)幅2.50m、直交(南北)幅2.95m、深さ34cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅20cm、深さ4cmの壁溝が検出範囲内で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

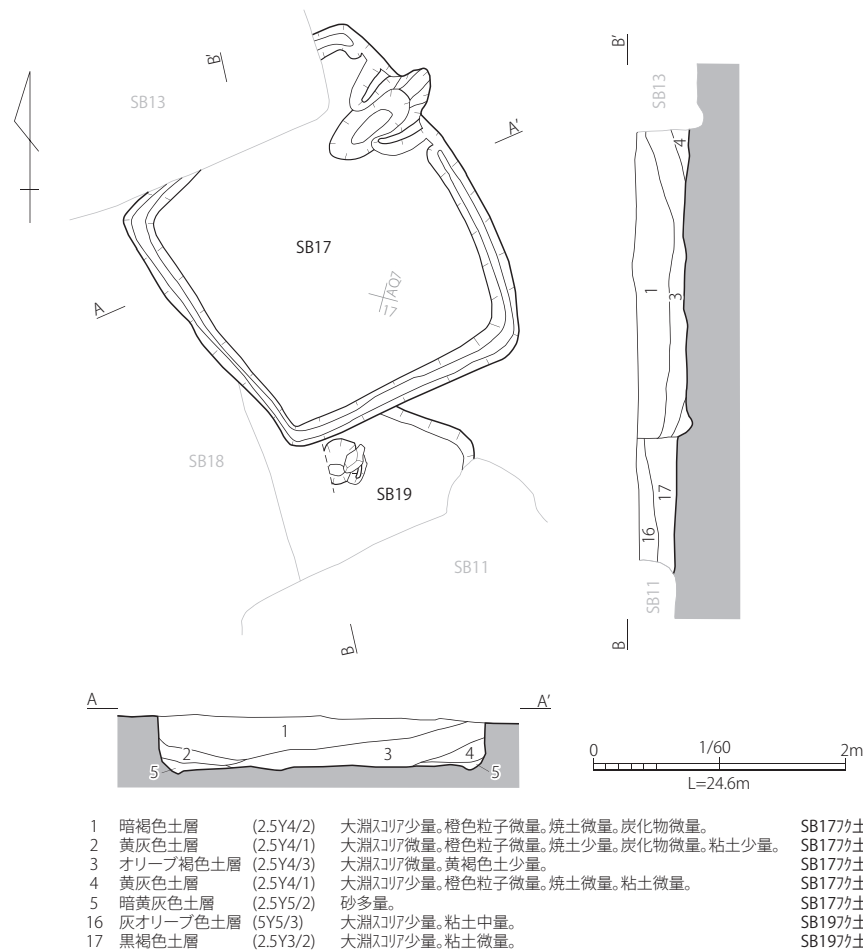
カマド 東壁北端に位置し、遺存状態は良好である。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長101cm、幅76cm、燃焼室幅30cmを測る。右袖部から有台坏身(1)、遠江系水平口縁甕(5)が出土している。

出土遺物 (第49図)

1から3はいずれも有台坏身の破片である。1・3は胎土に白色粒子を多く含み焼成も比較的良好であり、坏部の屈曲もシャープさをもつ。2は高台をはじめとして全体的に厚く仕上げられており、焼成も良好とはいえない。胎土には白色粒子を含まず砂っぽい。4は駿東型球胴甕の破片である。口唇部内側の肥厚はほとんど観察されないものの端部に凹みをもつ。5は小型の遠江系水平口縁甕である。器高に対して底部、胴部ともに径が大きく扁平な形態を示す。

所見

8世紀前半と考えられる。



第47図 SB17・19 平面図・断面図

SB19

遺構 (第 47・48 図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB19 → SB11・SB17・SB18 (新)

主軸方位 N - 10.0° - E

残存状況 SB11、SB17、SB18 により削平されていて、北壁付近の一部のみ検出されている。平面形は方形を呈すると考えられ、検出範囲内で主軸 (南北) 幅 1.50m、直交 (東西) 幅 1.70m、深さ 30cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

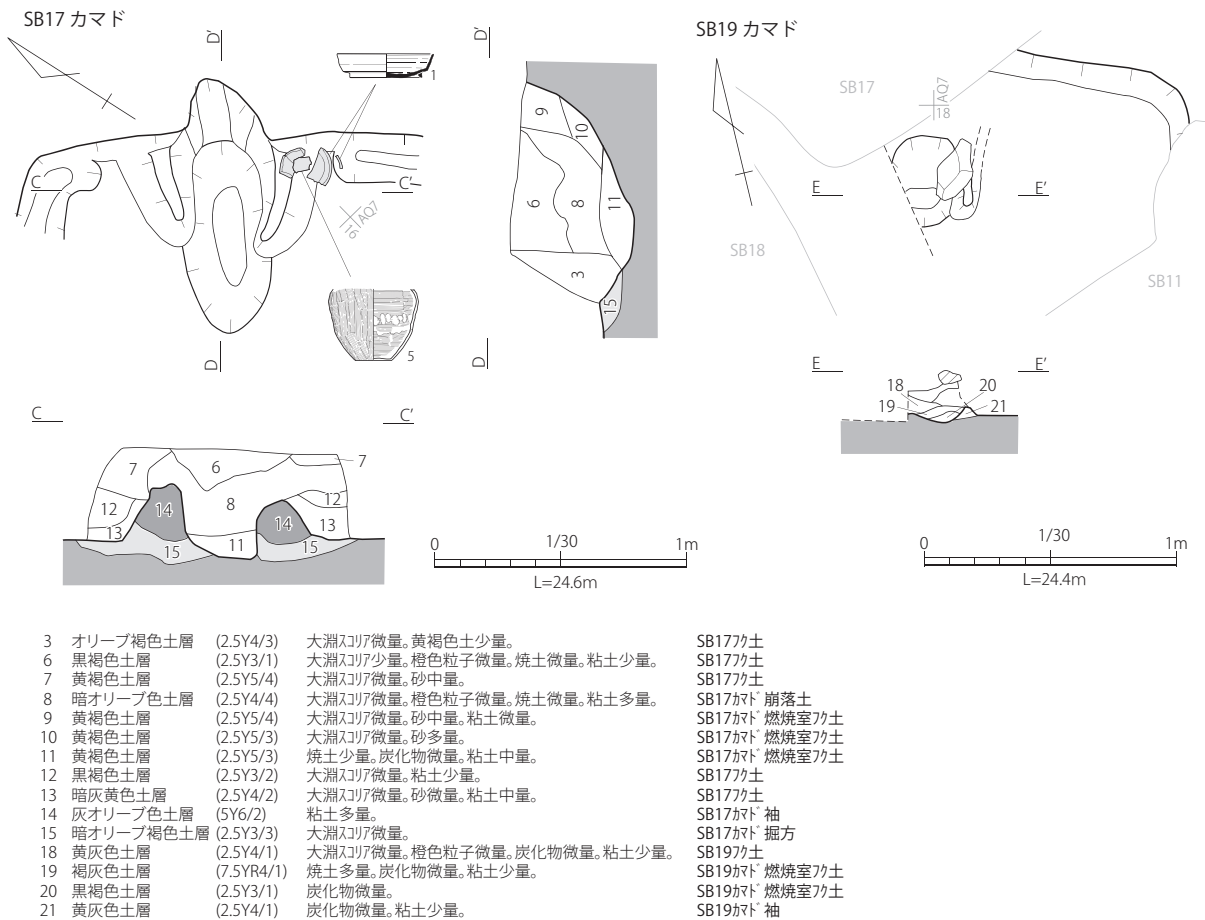
カマド 北壁に位置するものと考えられるが、大半を削平されていて右袖と燃焼室の一部を検出したのみであり規模、構造等は不明である。

出土遺物

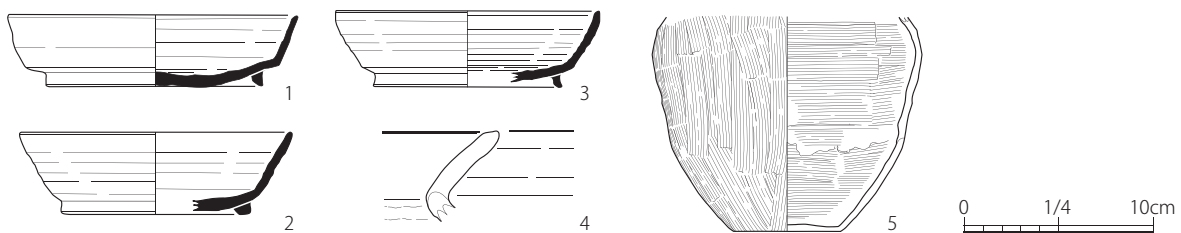
凶化できる遺物は無い。

所見

遺構の切り合い関係から 8 世紀前半以前の建物跡と考えられる。



第 48 図 SB17・19 カマド 平面図・断面図



第 49 図 SB17 出土遺物実測図

SB18

遺構 (第 50 図)

位置 AQ・10 グリッド

重複関係 (古) SB19 → SB18

→ SB07・SB11・SB12・SB13・SB17 (新)

主軸方位 N - 14.5° - W

残存状況 西壁は調査区域外となり検出されていない。

複数の建物跡により削平されているが、平面形は方形を呈するものと判断できる。検出範囲内で主軸 (南北) 幅 3.62m、直交 (東西) 幅 3.00m、深さ 30cm を測る。

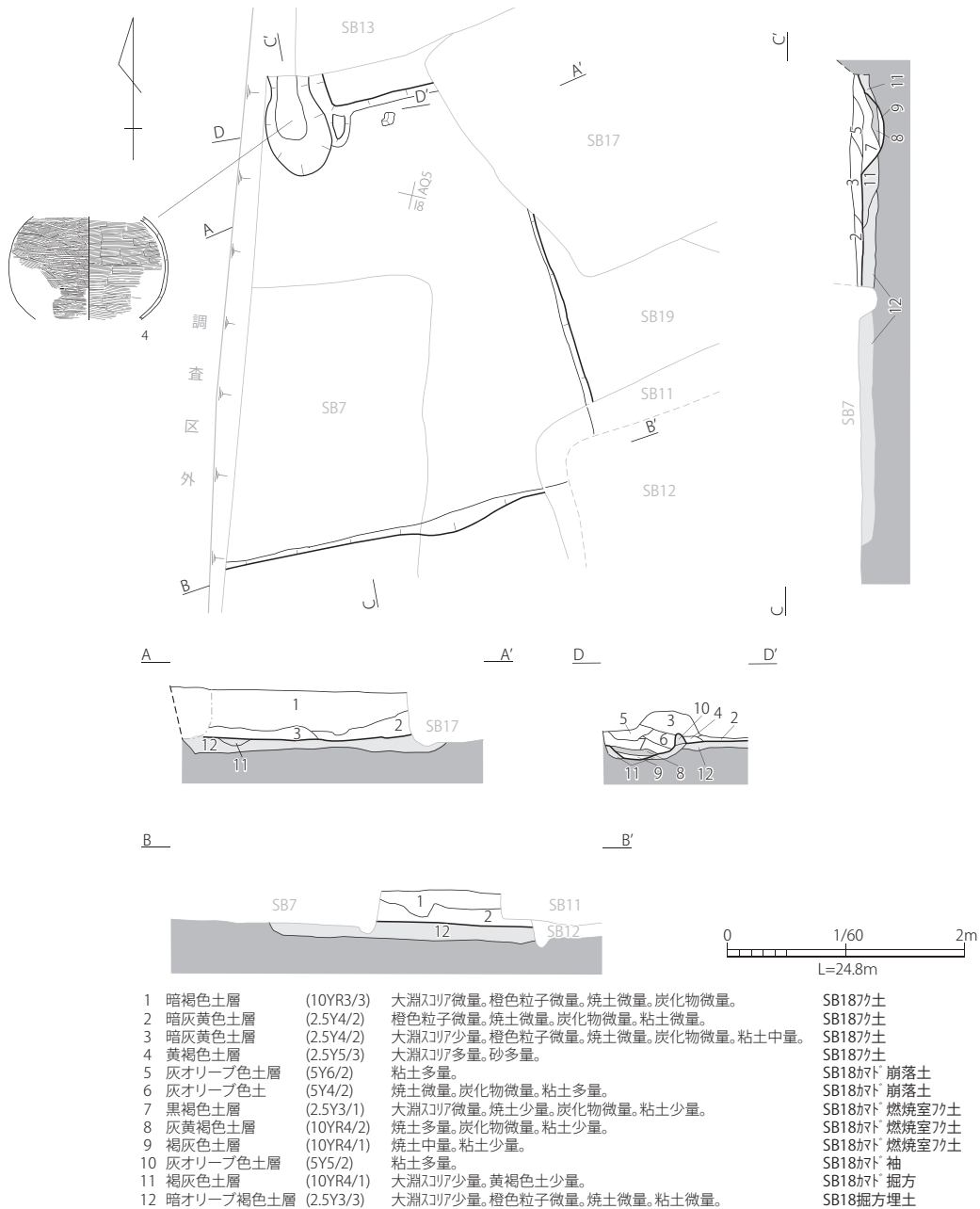
覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に 10cm 程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁に位置する。西側は調査区域外となり右袖と燃焼室の一部が検出される。検出範囲内で全長 90cm、燃焼室幅 55cm を測る。燃焼室から駿東型球胴甕 (4) が出土している。



第 50 図 SB18 平面図・断面図



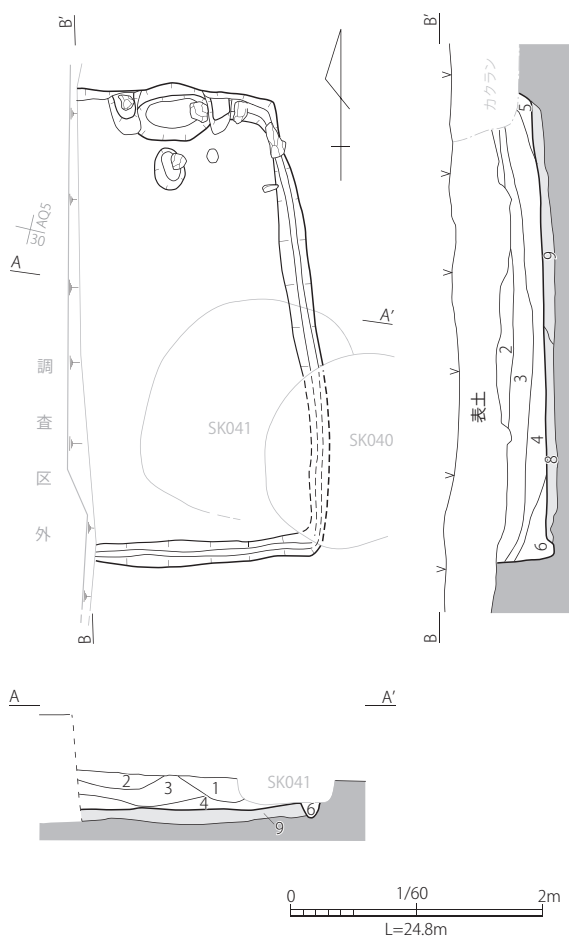
第51図 SB18 出土遺物実測図

出土遺物（第51図）

1は須恵器の摘蓋、2は有台坏身である。有台坏身は器壁が全体的に厚く、底部が高台より突出する。3は駿東型長胴甕の口縁部と思われる。4は駿東型球胴甕の胴部片である。全体的に器壁が厚く、肩があまり張らない。内外面ともにやや粗いハケ目が施され、外面にはさらにヨコ、ナナメ方向のヘラミガキが施される。5は砥石である。六面とも使用の痕跡が観察される。

所見

8世紀と考えられる。



- | | |
|--|-----------|
| 1 暗褐色土層 (10YR3/3)
大淵入り7少量。橙色粒子微量。炭化物少量。 | SB207粘土 |
| 2 黒色土層 (2.5Y2/1)
大淵入り7微量。橙色粒子微量。 | SB207粘土 |
| 3 黒色土層 (2.5Y2/1)
大淵入り7微量。橙色粒子微量。黒色土混入。 | SB207粘土 |
| 4 暗褐色土層 (10YR3/3)
大淵入り7微量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。粘土微量。 | SB207粘土 |
| 5 暗赤褐色土層 (5YR3/2)
焼土微量。炭化物少量。 | SB207粘土 |
| 6 灰黄褐色土層 (10YR5/2)
大淵入り7微量。砂多量。 | SB207粘土 |
| 8 黒褐色土層 (10YR3/1)
大淵入り7微量。橙色粒子微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB207掘方埋土 |
| 9 暗褐色土層 (10YR3/3)
大淵入り7微量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB207掘方埋土 |

第52図 SB20 平面図・断面図

SB20

遺構（第52・53図）

位置 AQ・20 グリッド

重複関係 (古) SB20 → SK040・SK041 (新)

主軸方位 N - 3.5° - W

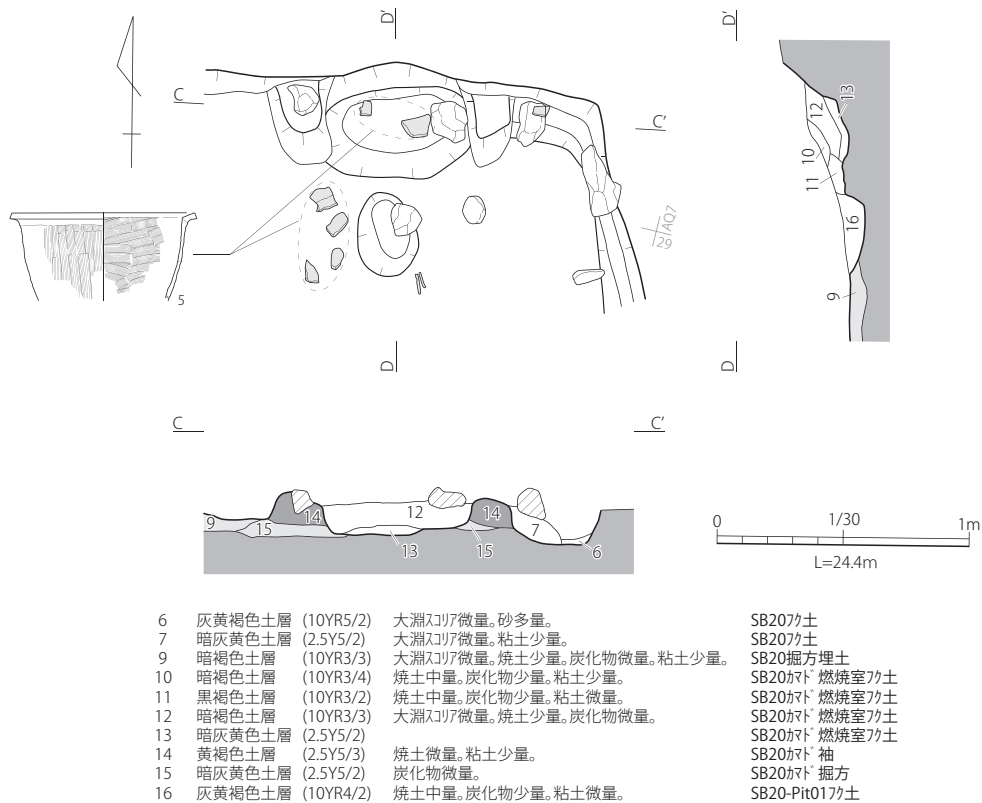
残存状況 西壁は調査区域外となり検出されていない。平面形は方形を呈し、検出範囲内で主軸（南北）幅 3.73m、直交（東西）幅 1.84m、深さ 17cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅 18cm、深さ 12cm の壁溝が検出範囲内で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に 8cm 程の厚さで貼り床が施されている。カマド 北壁東寄りに位置する。左袖内には芯材があり、その他カマド周辺に石材が点在した。全長 94cm、幅 95cm、燃焼室幅 58cm を測る。燃焼室より甲斐型甕 (5) が出土している。



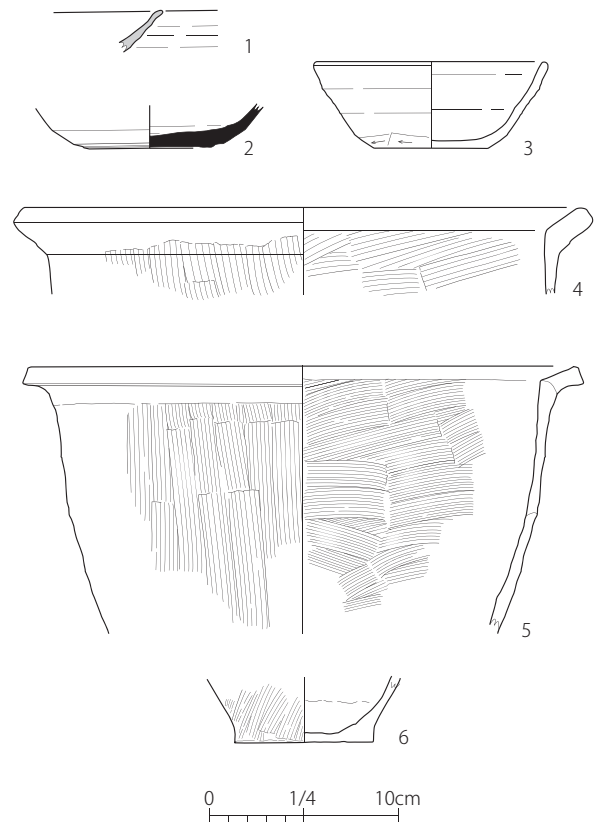
第53図 SB20 カマド 平面図・断面図

出土遺物 (第54図)

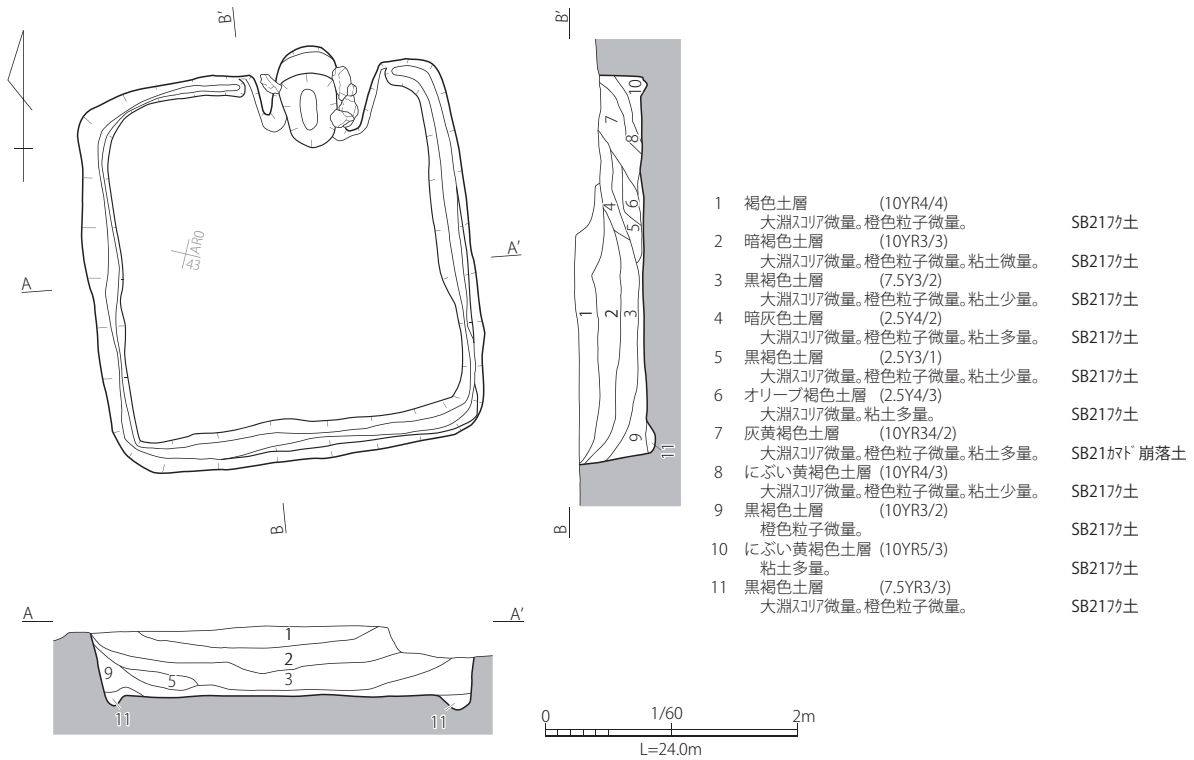
1は灰釉陶器の碗と考えられる。2は低い高台をもつ坏身である。底部には回転糸切りの痕跡が確認できる。高台は削り出しの可能性が高い。3は駿東型坏である。底部裏面の縁をヘラケズリ調整したため、中央部がやや突出する。4・5は甲斐型甕である。両者ともに胎土に金雲母と考えられる粒子を多く含み口縁部が厚い。4は頸部から口縁部にむかって斜め上方に立ち上がり、5は横方向に広がる。4は内外面ともに粗いハケ目が施されるが、5は内面のみ細かなハケ目工具を使用している。6も胎土から小型の甲斐型甕の底部と考えられる。木葉痕をもつ底部からやや薄い器壁で立ち上がる。外面には粗いハケ目が施される。

所見

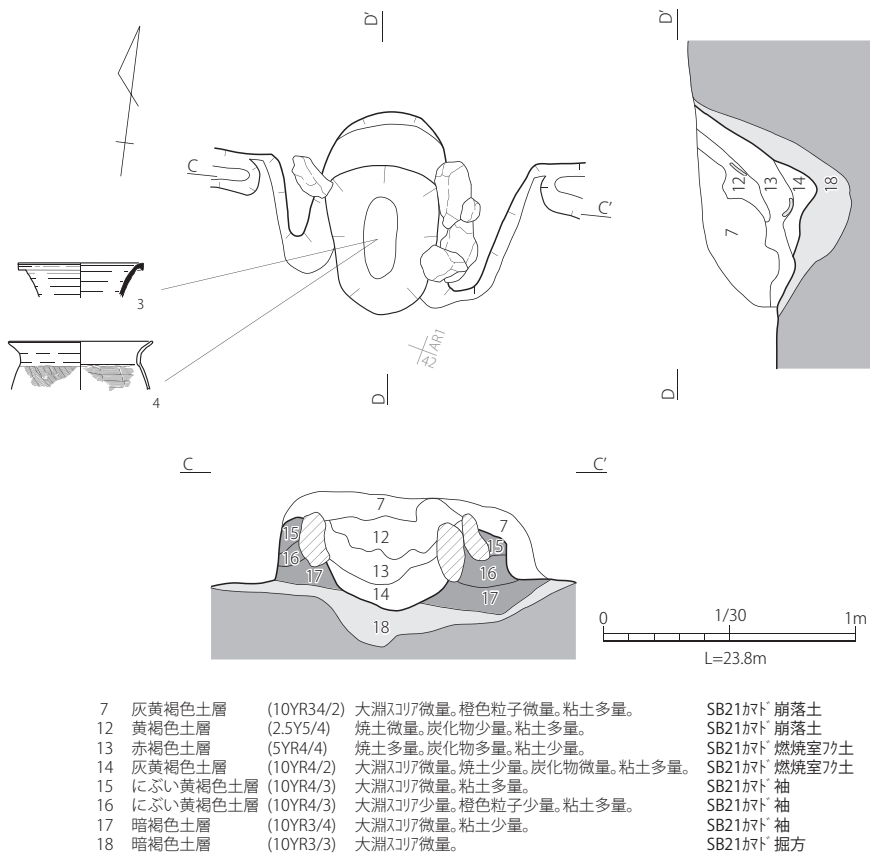
甲斐型甕は10世紀前半ころと考えられる。



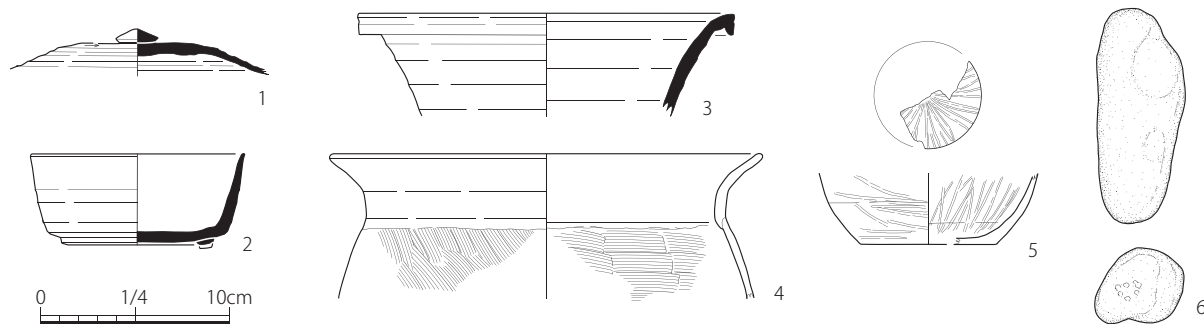
第54図 SB20 出土遺物実測図



第55図 SB21 平面図・断面図



第56図 SB21 カマド 平面図・断面図



第 57 図 SB21 出土遺物実測図

SB21

遺構 (第 55・56 図)

位置 AQ・40 グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 5.5° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。主軸 (南北) 幅 3.10m、直交 (東西) 幅 3.05m、深さ 50cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 28cm、深さ 6cm の壁溝が全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁やや東寄りに位置する。袖内には芯材と思われる複数の石材が配置されていた。全長 80cm、幅 95cm、燃焼室幅 48cm を測る。燃焼室から須恵器壺 (3)、駿東型長胴甕 (4) が出土している。

出土遺物 (第 57 図)

1 は須恵器の摘蓋、2 は有台坏身、3 は壺の破片である。1・2 は胎土が砂っぽく端部のシャープさに欠ける。特に 2 は焼成が不良なため、高台などが摩滅しており本来の形態を残していない。一方、3 は比較的焼成がよく口唇部の整形・調整も丁寧である。4 は駿東型長胴甕の破片である。全体的に器壁が薄い。体部と口縁部の接合部分の痕跡が内面に明瞭に残る。内外面ともに細かなハケ目が施される。5 は胎土や調整から甲斐型坏と推定される坏である。胎土が精緻で見込みのヘラミガキなど光沢を持つ。6 は敲き石である。

所見

4・5 から 8 世紀後半と考えられる。

SB22

遺構 (第 58・59 図)

位置 AR・40 グリッド

重複関係 (古) SH01 → SB22 (新)

主軸方位 N - 0.5° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形はやや東西に長い長方形を呈する。主軸 (南北) 幅 3.52m、直交 (東西) 幅 4.16m、深さ 42cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 20cm、深さ 10cm で全体的に確認される。

柱穴 南壁沿いに 1 基検出した。径 45cm、深さ 40cm を測る。

床 掘り方を床面としている。

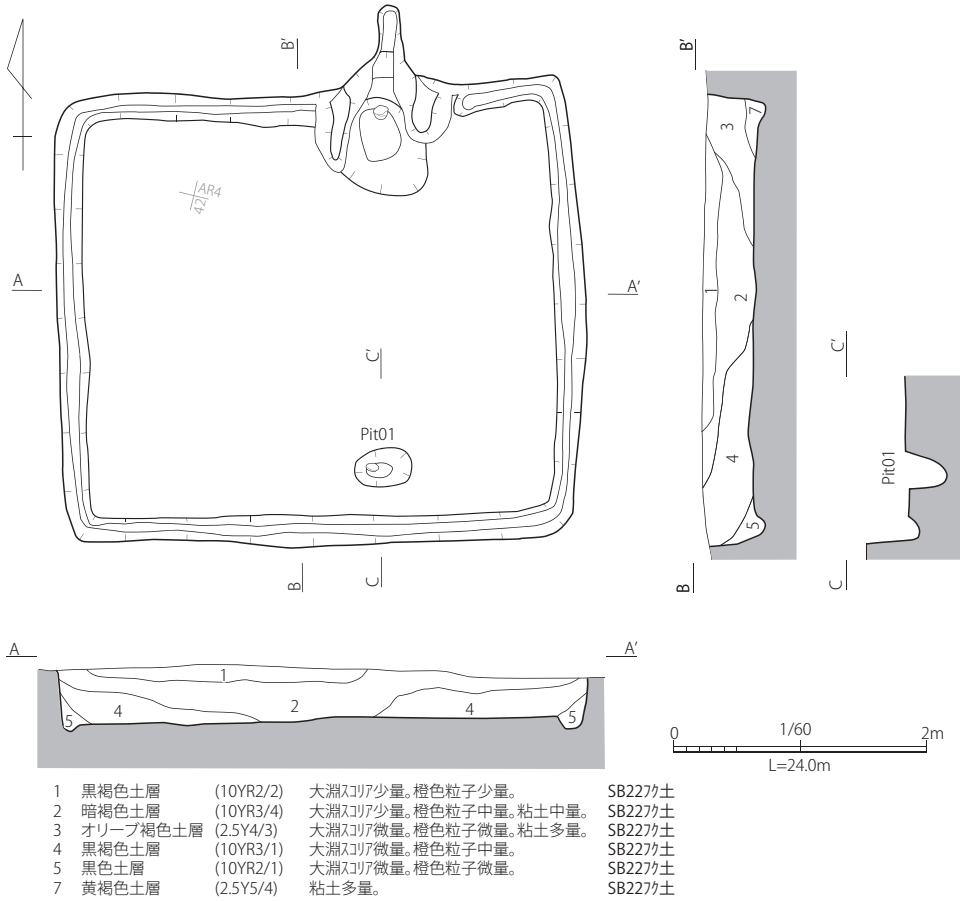
カマド 北壁やや東寄りに位置する。遺存状態は良好で燃焼室中央には支脚石が残存した。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長 151cm、幅 101cm、燃焼室幅 45cm を測る。燃焼室内からは駿東型長胴甕 (8) が出土している。

出土遺物 (第 60 図)

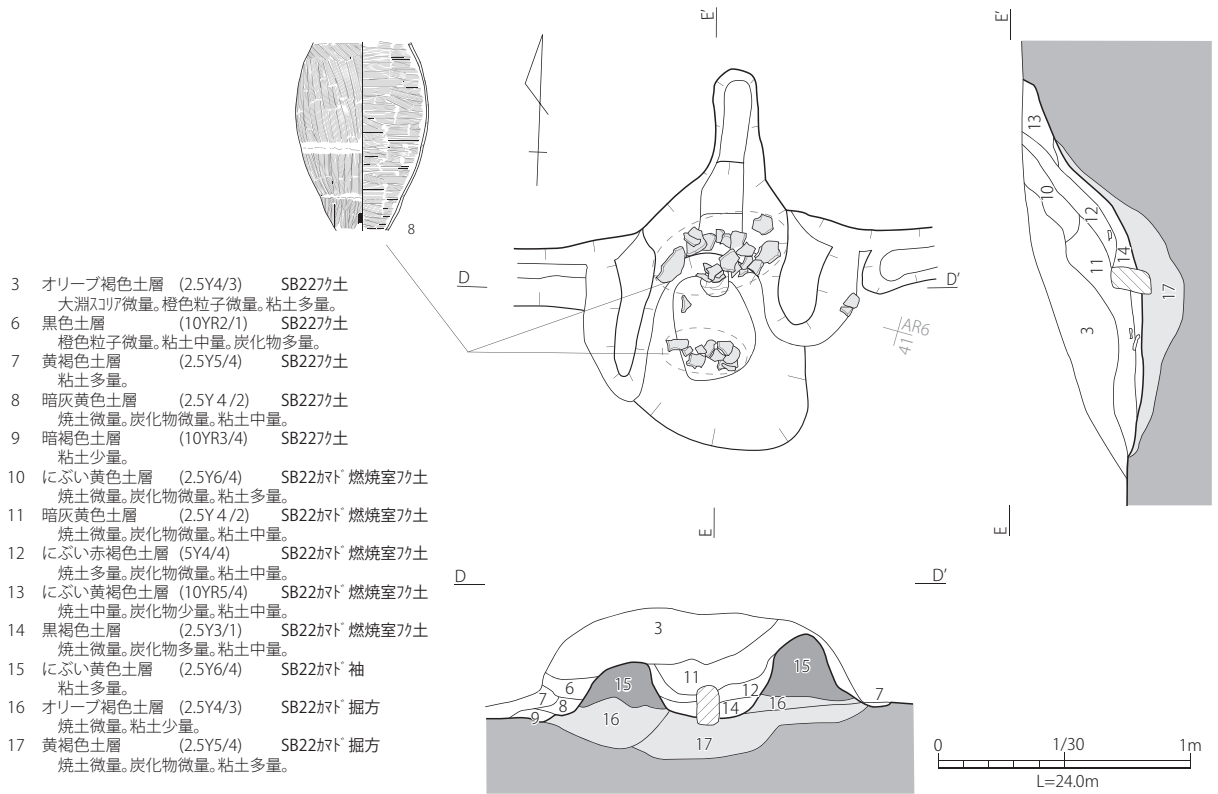
1 は坏蓋の破片でおそらく摘蓋と思われる。2 は坏身、3 は有台坏身である。3 の高台は低い削り出し高台を意識している可能性が高い。4 は甲斐型坏である。器壁が非常に薄く胎土が精緻である。見込み、坏内側に放射状のヘラミガキが丁寧に施される。5 から 8 はいずれも駿東型長胴甕である。5 と 6 は同一個体の可能性が高い。いずれの破片も器壁が薄く細かなハケ目工具を使用した調整が丁寧に施される。8 は底部付近、胴下半、胴上半の 3 つの工程で積み上げられており、それぞれの乾燥工程の輪積みの箇所にはユビナデが丁寧に施される。

所見

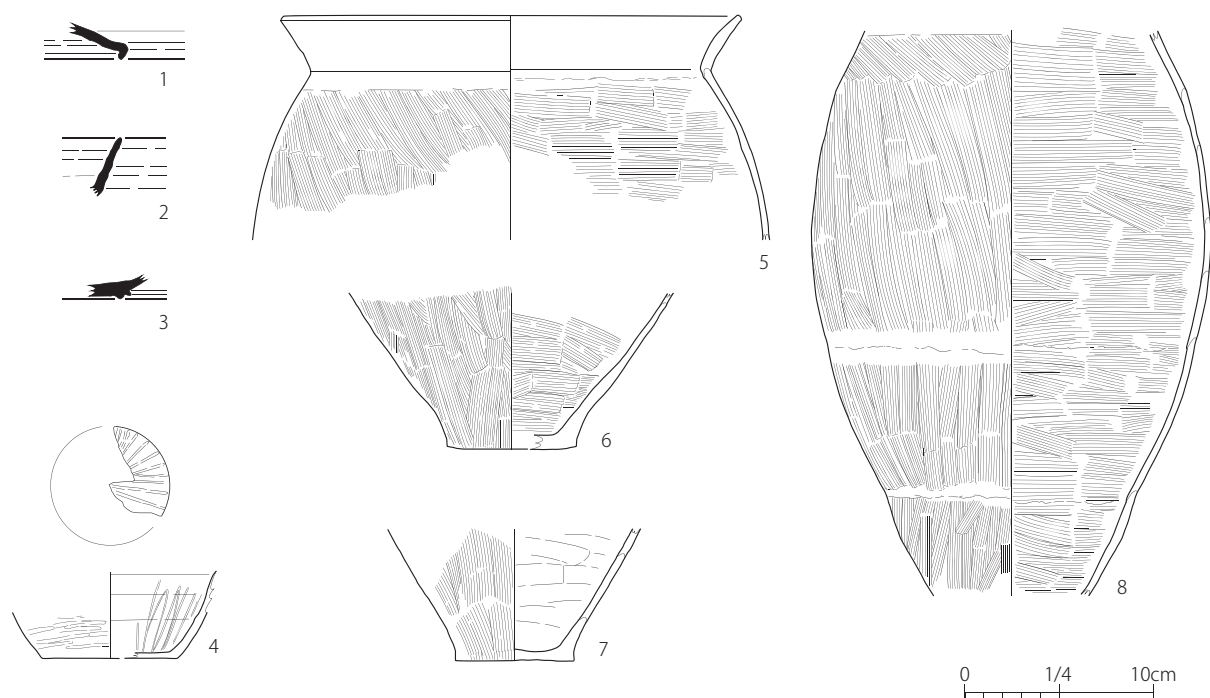
8 世紀後半と考えられる。



第58図 SB22 平面図・断面図



第59図 SB22 カマド 平面図・断面図



第60図 SB22 出土遺物実測図

SB23

遺構 (第61・62図)

位置 AR・40 グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 87.5° - E

残存状況 2つのカマドを有する建物跡で、当初東壁にカマドを構築し、その後北壁につくりかえたものと考えられる。平面形は方形を呈し、主軸（東西）幅3.35m、直交（南北）幅3.36m、深さ62cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅23cm、深さ6cmの壁溝が全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に12cm程の厚さで貼り床が施されている。

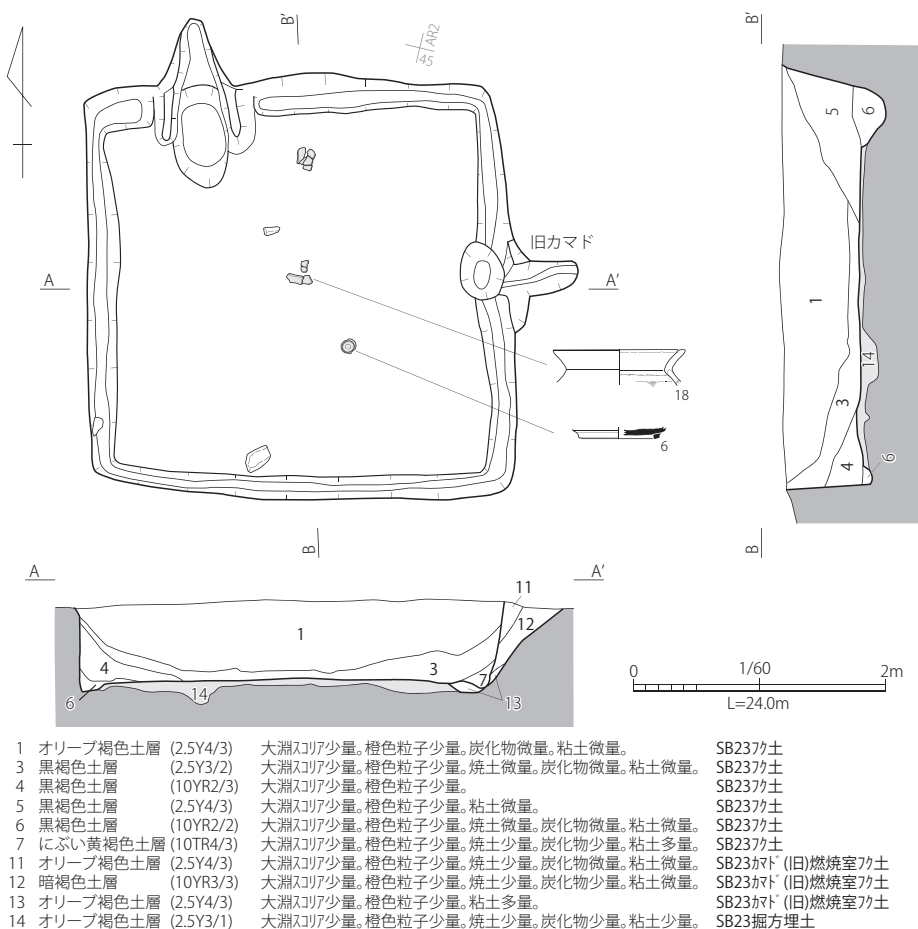
カマド 古いカマドは東壁中央に位置し、壁外へ突出した煙道が認められる程度でほとんど残存しない。新しいカマドは北壁西端に増設されている。遺存状態は比較的良好で、袖に芯材は認められず粘土主体でつくられている。全長128cm、幅80cm、燃焼室幅35cmを測る。

出土遺物 (第63図)

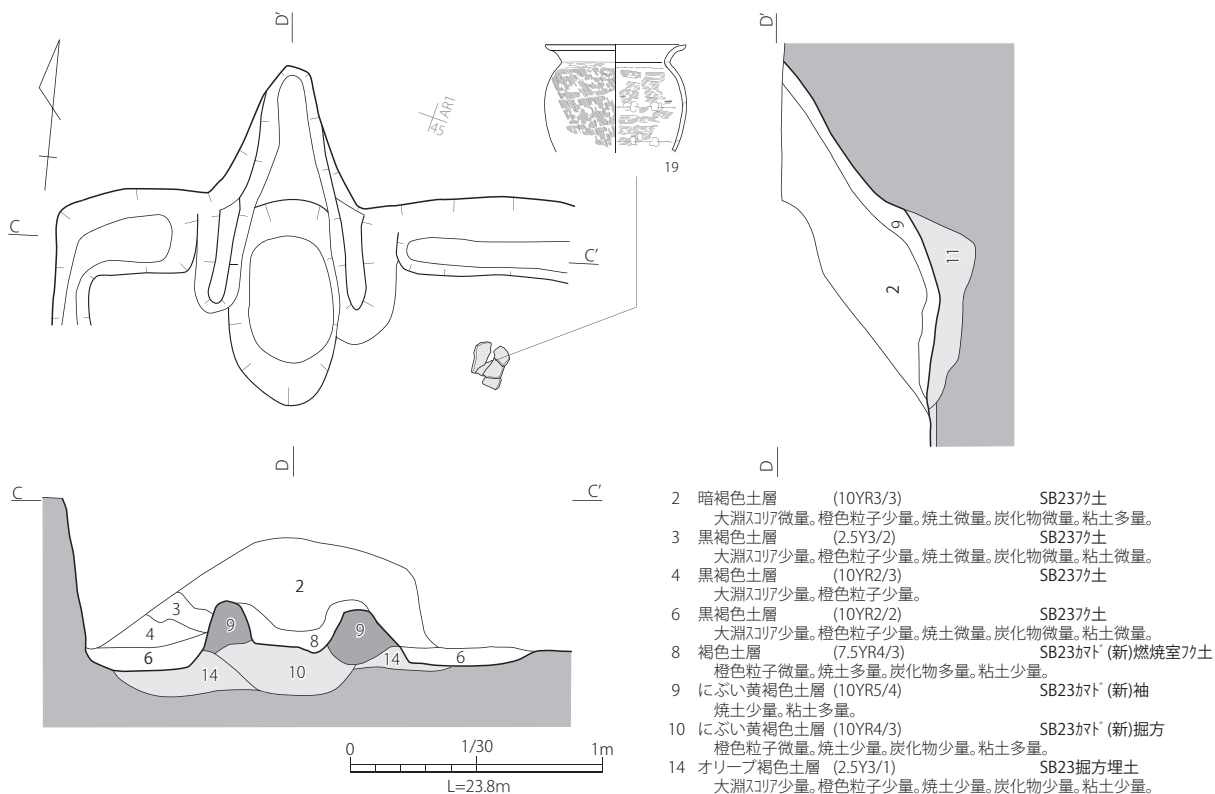
1から4は摘蓋の破片と思われるが、いずれも摘みは欠損している。4のみが胎土が砂っぽく色調が白色を呈する。5・6・7・9は有台坏身の破片で、いずれも焼成があまり良好ではない。特に6は胎土が砂っぽいこともあり端部の摩滅が著しい。いずれも器壁が厚く重量感がある。8は箱坏である。底部のヘラケズリに伴い器壁に凹凸が目立つ。10から12も坏の破片だが、全体の形状が明らかでない。13は手づくね、14は駿東型坏が出現する以前の坏である。底部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。15は胎土に金雲母を含むことや調整から甲斐型の小型の甕と考えられる。内面にはヨコハケが観察される。16は遠江系の小型甕、17は遠江系の水平口縁甕である。頸部が大きく窄まり水平方向に口縁部が延びる。外面はやや粗いハケ目が施される。18は駿東型球胴甕、19は駿東型長胴甕である。長胴甕は全体的に器壁が厚く、内面にもハケ目が認められる。20は磨敲き石である。

所見

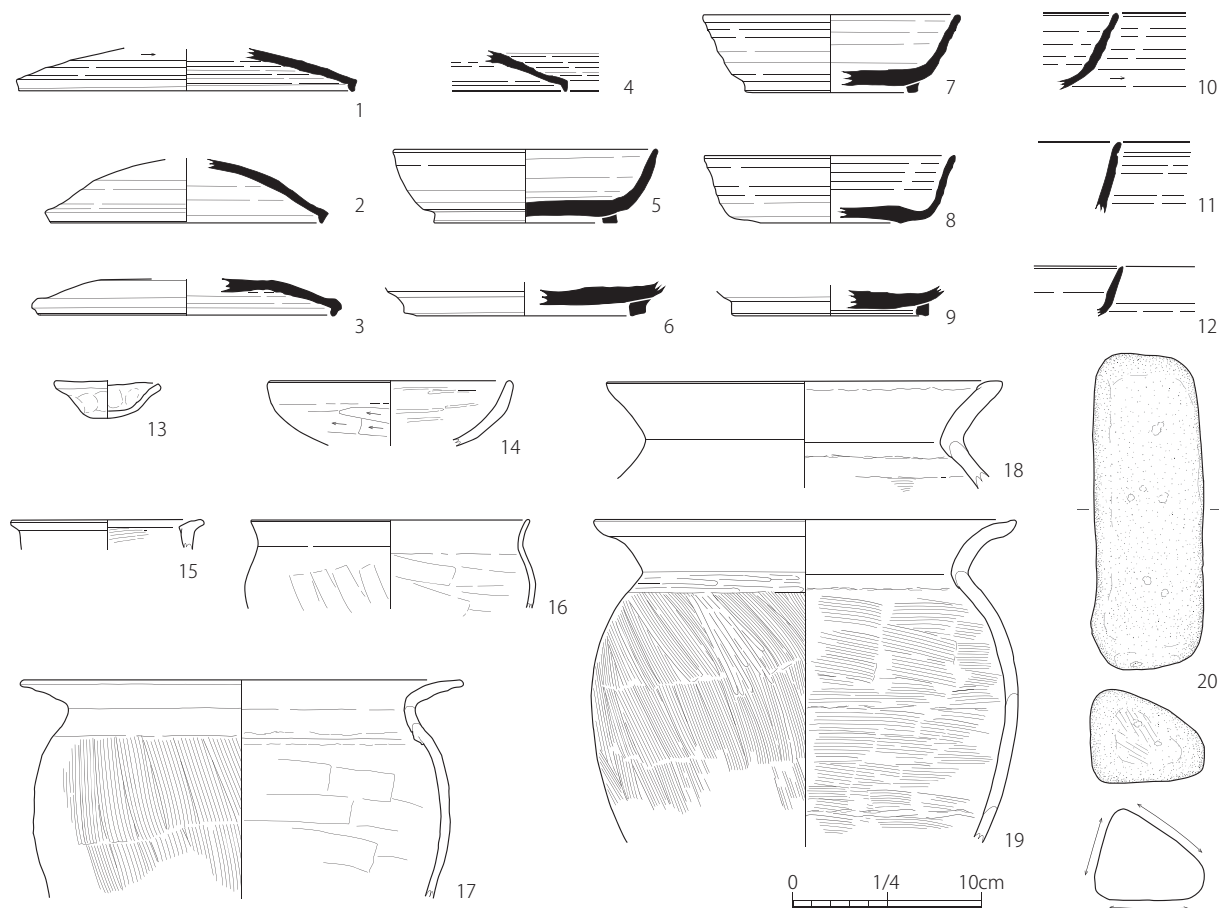
8世紀中葉から後半頃と考えられる。



第61図 SB23 平面図・断面図



第62図 SB23 カマド 平面図・断面図



第63図 SB23 出土遺物実測図

SB24

遺構 (第64・65図)

位置 AR・10 グリッド

重複関係 (古) SB25・SB31 → SB24 (新)

主軸方位 N - 14.0° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。

主軸 (南北) 幅 4.22m、直交 (東西) 幅 4.22m、深さ 44cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅 25cm、深さ 8cm の壁溝が南壁を除く壁沿いに確認される。

柱穴 確認されない。

床 部分的に貼り床が施されている。

カマド 北壁やや西寄りに位置する。遺存状態は良好で、左袖端部には芯材が認められる。全長 118cm、幅 100cm、燃烧室幅 64cm を測る。燃烧室と床面から駿東型埴 (12) が出土している。

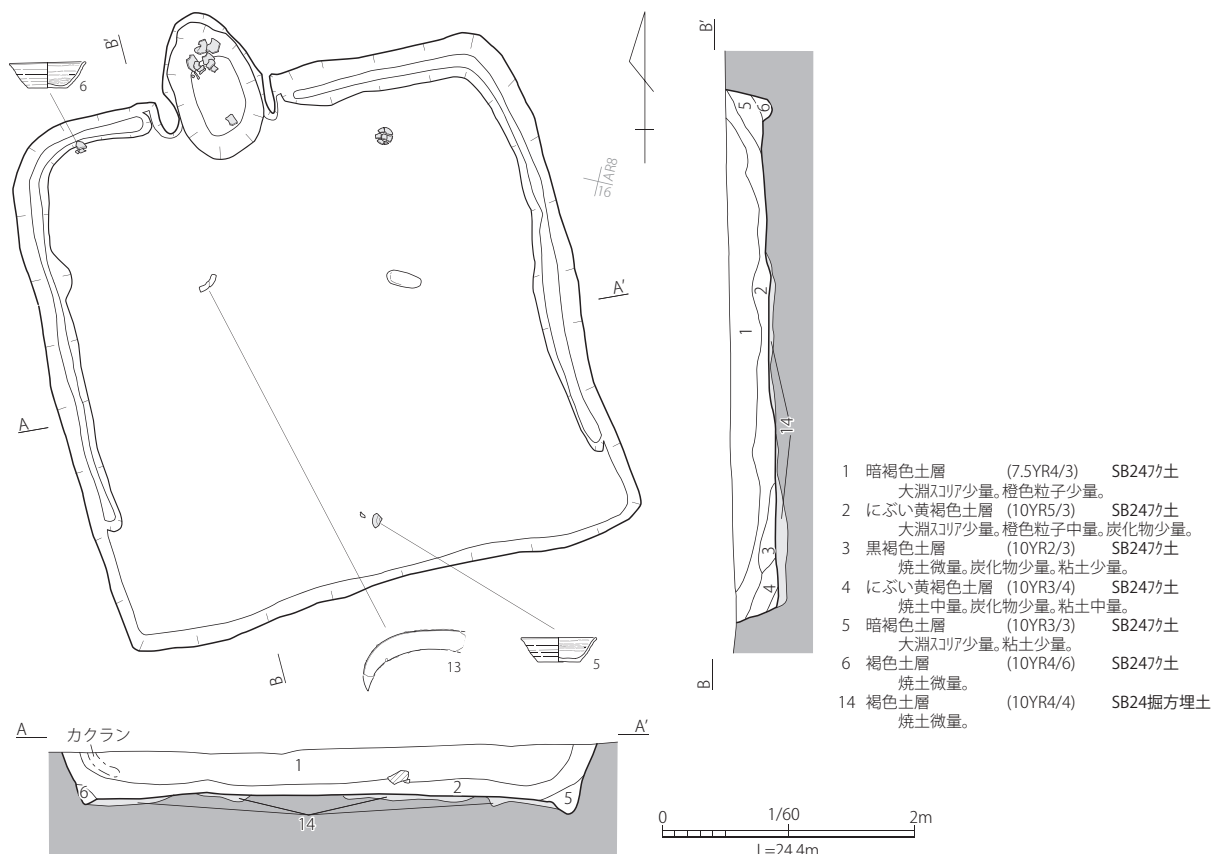
出土遺物 (第66図)

1 は灰釉陶器の段皿である。口縁部近くで明瞭に折れ

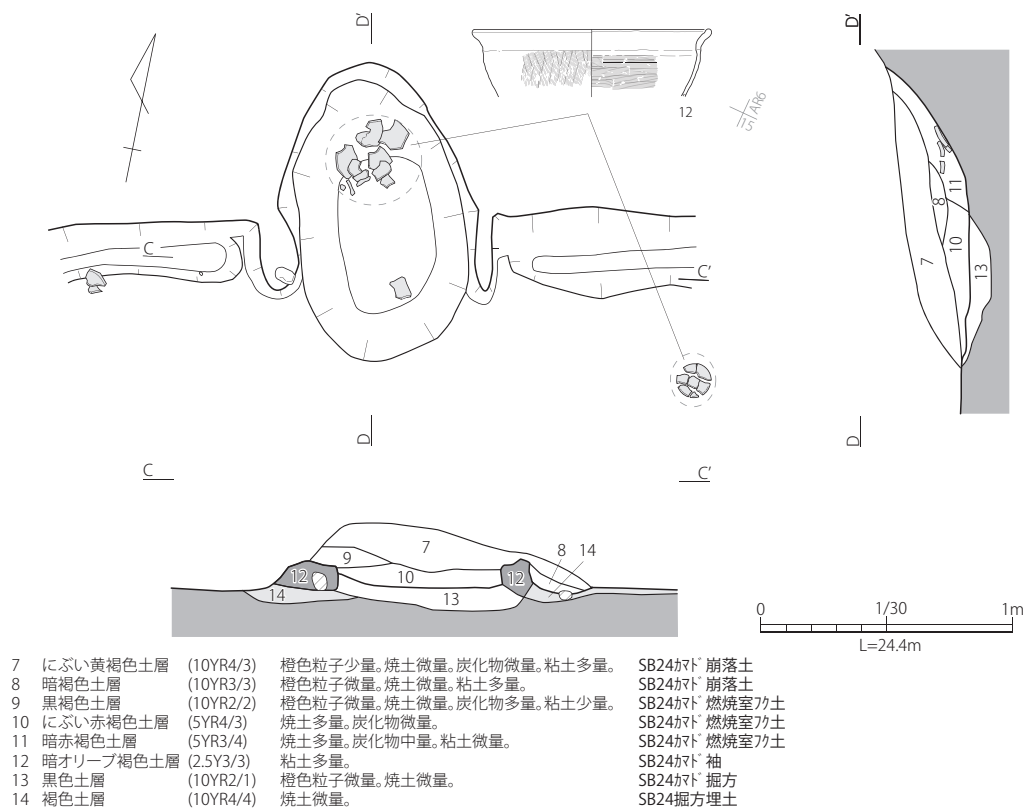
て段になる。段の幅は 2cm 程度と狭い。高台は比較的高く、内外面が弱くナゲられやや内湾している。底部はヘラケズリ、施釉はハケ塗りと思われる。2 は灰釉陶器の碗である。全体的に直立気味に立ち上がり口縁部付近で外反する。比較的古い形態を示す。高台は断面がほぼ四角な角高台である。釉が内面にのみ認められハケ塗りと考えられる。3 は有台坏身で底部は回転糸切り痕が観察される。4 から 6 は口径に対して底径の小さな駿東型坏である。4 の底部裏面には墨書が認められる。7 は甲斐型坏の影響を受けて底部付近をヘラケズリした駿東型坏である。9・10 は須恵器の有台坏身の模倣である。11 は甲斐型坏である。胎土が精緻で内面の暗文状ヘラミガキが丁寧で光沢がある。12 は駿東型球胴甕と共通した胎土、調整技法を持つ埴である。口縁部が厚く内面を若干肥厚させる。13 は曲刃鎌で基部、刃部先端が欠損する。

所見

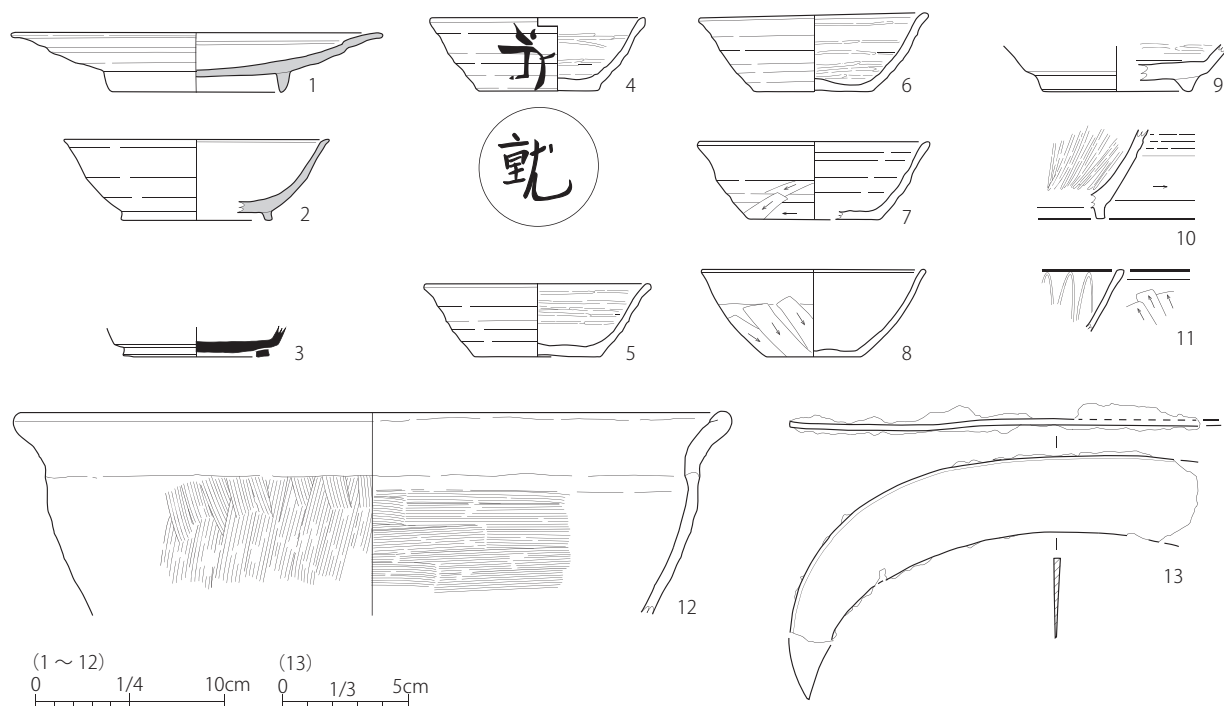
灰釉陶器から 9 世紀中葉頃と考えられる。



第64図 SB24 平面図・断面図



第65図 SB24 カマド 平面図・断面図



第66図 SB24 出土遺物実測図

SB25

遺構 (第67図)

位置 AR・20 グリッド

重複関係 (古) SB25 → SB24 (新)

主軸方位 N - 13.5° - W

残存状況 カマドが位置する北壁の一部がSB24により削平されている。平面形はやや東西に長い長方形を呈し、主軸(南北)幅3.60m、直交(東西)幅4.15m、深さ37cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅30cm、深さ10cmで全体的に確認される。

土坑 南壁中央付近の床面に重複する2基の土坑を検出した。SB25-SK01は長軸95cm、短軸60cm、深さ35cmを測り、SB25-SK02を切っている。SB25-SK01からは土師器の有台坏身(12)、SB25-SK02からは駿東型坏(5)が出土している。

床 ほぼ全面に12cm程の厚さで貼り床が施されている。

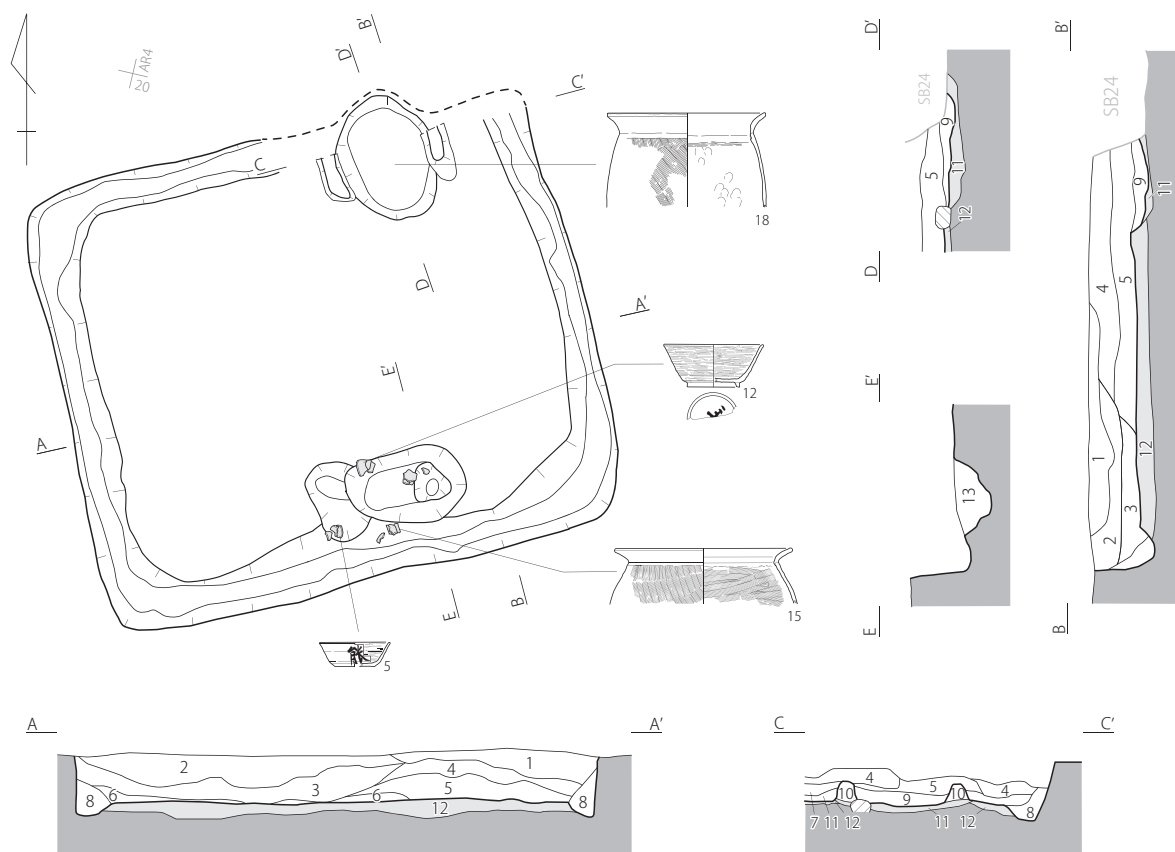
カマド 北壁やや東寄りに位置する。北側はSB25により削平されていて煙道部分は残存しない。検出範囲内で全長105cm、幅104cm、燃焼室幅68cmを測る。燃焼室から駿東型長胴甕(18)が出土している。

出土遺物 (第68・69図)

1は灰釉陶器の口縁部の破片である。傾きから皿と考えられる。内外面ともに釉が認められるが施釉方法は不明。2・3は須恵器の有台坏身である。胎土に白色粒子を含み、色調は灰色を呈する。3はヘラケズリにより切り離されている。4は胎土が若干砂っぽいものの、精緻であり内外面の調整の特徴から甲斐型坏と考えられる。5から10は駿東型坏である。底径は縮小化があまり進んでいない段階といえる。5・6は坏部外面に墨書が認められる。5は判然としないが、6は「申太」と推測される。11は土師器の有台坏身である。11の高台は削り出し高台の可能性が高い。見込み部には放射状のヘラミガキが施される。12は腰の張った深さをもつ有台坏身である。調整や法量、形態が明らかに駿東型と異なり、須恵器の忠実な模倣といえる。底部裏面には「主」の墨書が残る。13・14は外面ナデ調整の小型の甕、もしくは鉢とされるものである。遠江の影響による可能性がある。15・17・18は駿東型長胴甕である。いずれも肩があまり張らず口縁部は若干反りながら広がる。16は駿東型長胴甕の底部である。底部を積み上げた後、乾燥工程を置いた痕跡が明瞭に残る。

所見

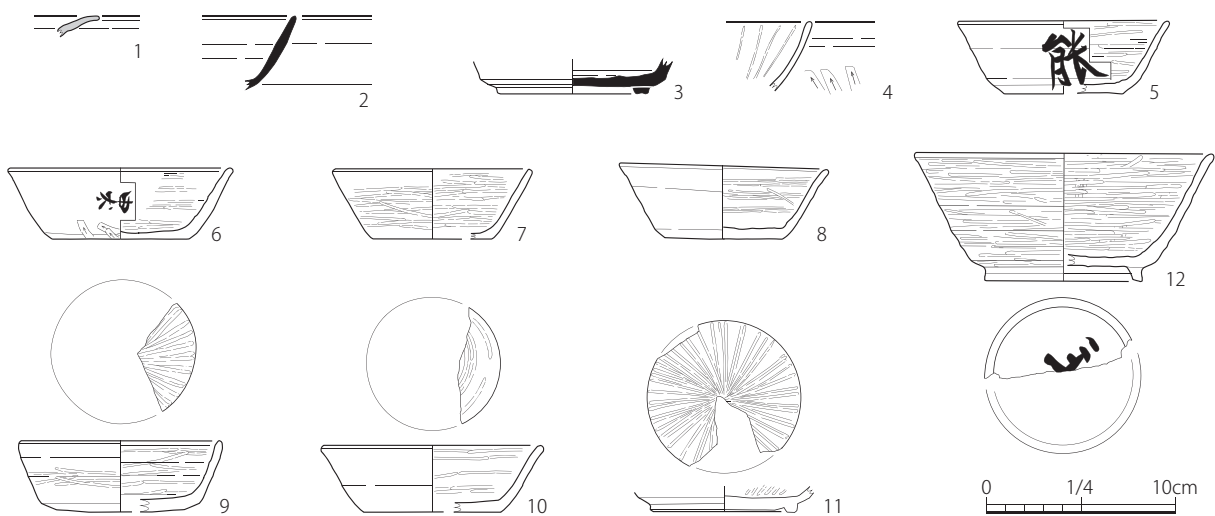
8世紀末頃と考えられる。



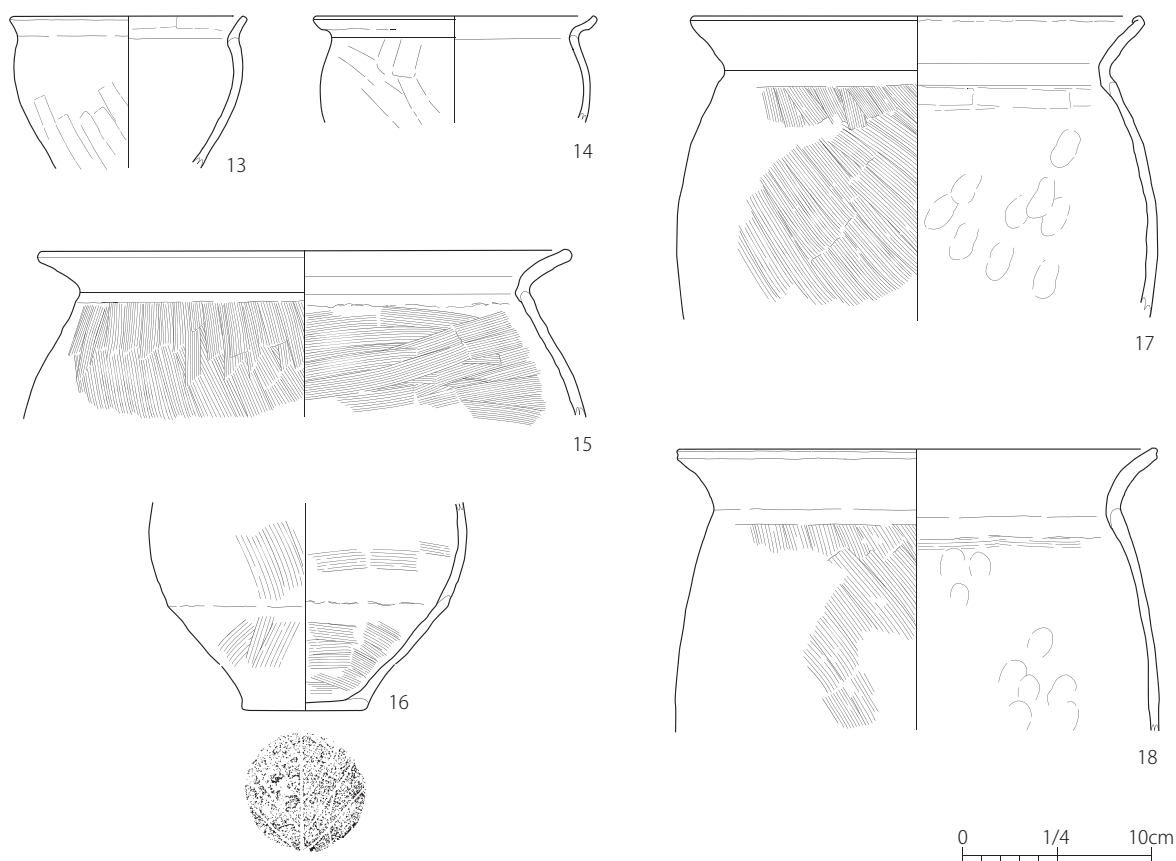
- | | | |
|-----------------------|--------------------------|--------------|
| 1 暗褐色土層 (10YR3/) | 橙色粒子微量。 | SB2577土 |
| 2 暗褐色土層 (10YR3/3) | 橙色粒子微量。焼土微量。 | SB2577土 |
| 3 黒褐色土層 (10YR3/2) | 橙色粒子少量。焼土微量。粘土微量。 | SB2577土 |
| 4 黒褐色土層 (7.5YR3/1) | 大淵刃刃微量。橙色粒子微量。焼土少量。粘土微量。 | SB2577土 |
| 5 黄褐色土層 (2.5YR5/3) | 橙色粒子微量。焼土少量。粘土多量。 | SB2577土 |
| 6 黒褐色土層 (10YR2/2) | 橙色粒子微量。焼土微量。粘土多量。 | SB2577土 |
| 7 灰黄褐色土層 (10YR4/2) | 橙色粒子微量。焼土微量。粘土多量。 | SB2577土 |
| 8 黒褐色土層 (10YR2/3) | 橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB2577土 |
| 9 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) | 焼土多量。炭化物少量。粘土中量。 | SB2577土 |
| 10 にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) | 橙色粒子微量。粘土多量。 | SB2577土 |
| 11 灰黄褐色土層 (10YR4/2) | 焼土少量。炭化物微量。粘土多量。 | SB2577土 |
| 12 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) | 橙色粒子少量。焼土少量。粘土少量。 | SB2577土 |
| 13 暗褐色土層 (10YR3/3) | 橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。 | SB25-SK0177土 |

0 1/60 2m
L=24.4m

第 67 図 SB25 平面図・断面図



第 68 図 SB25 出土遺物実測図 1



第 69 図 SB25 出土遺物実測図 2

SB26

遺構 (第 70・71 図)

位置 AR・20 グリッド

重複関係 (古) SB27・SB28 → SB26 (新)

主軸方位 N - 5.0° - W

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。
主軸 (南北) 幅 3.16m、直交 (東西) 幅 3.22m、深さ 18cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる褐灰色土。

壁溝 幅 15cm、深さ 5cm で全体的に確認される。

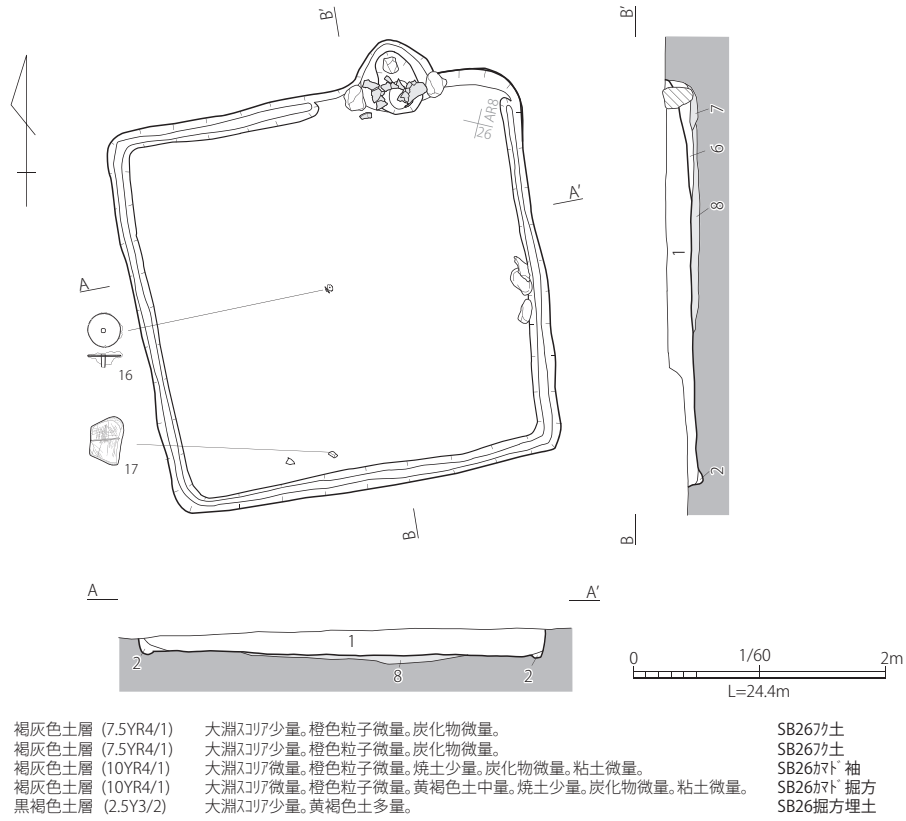
柱穴 確認されない。

床 北東部にのみ 5cm 程の厚さで貼り床が施されている。

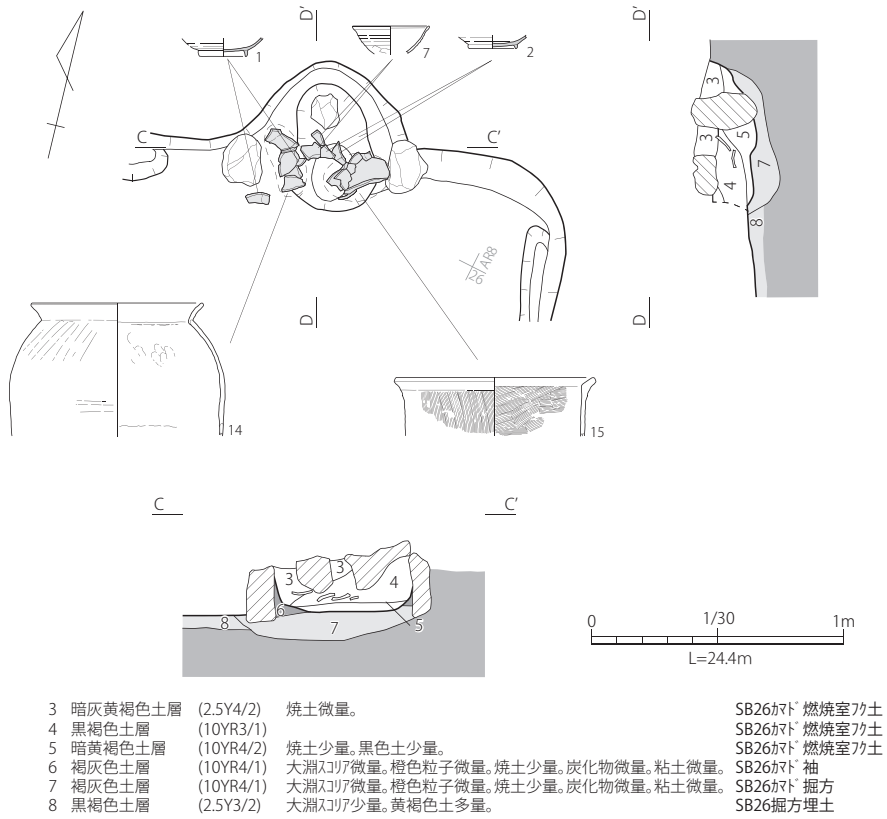
カマド 北壁東寄りに位置する。袖部は芯材の石材が残存するのみである。検出範囲内で全長 55cm、幅 80cm、燃焼室幅 35cm を測る。燃焼室から灰釉陶器碗 (1・2)、坏 (7)、長胴甕 (14)、甲斐型甕 (15) が出土している。

出土遺物 (第 72 図)

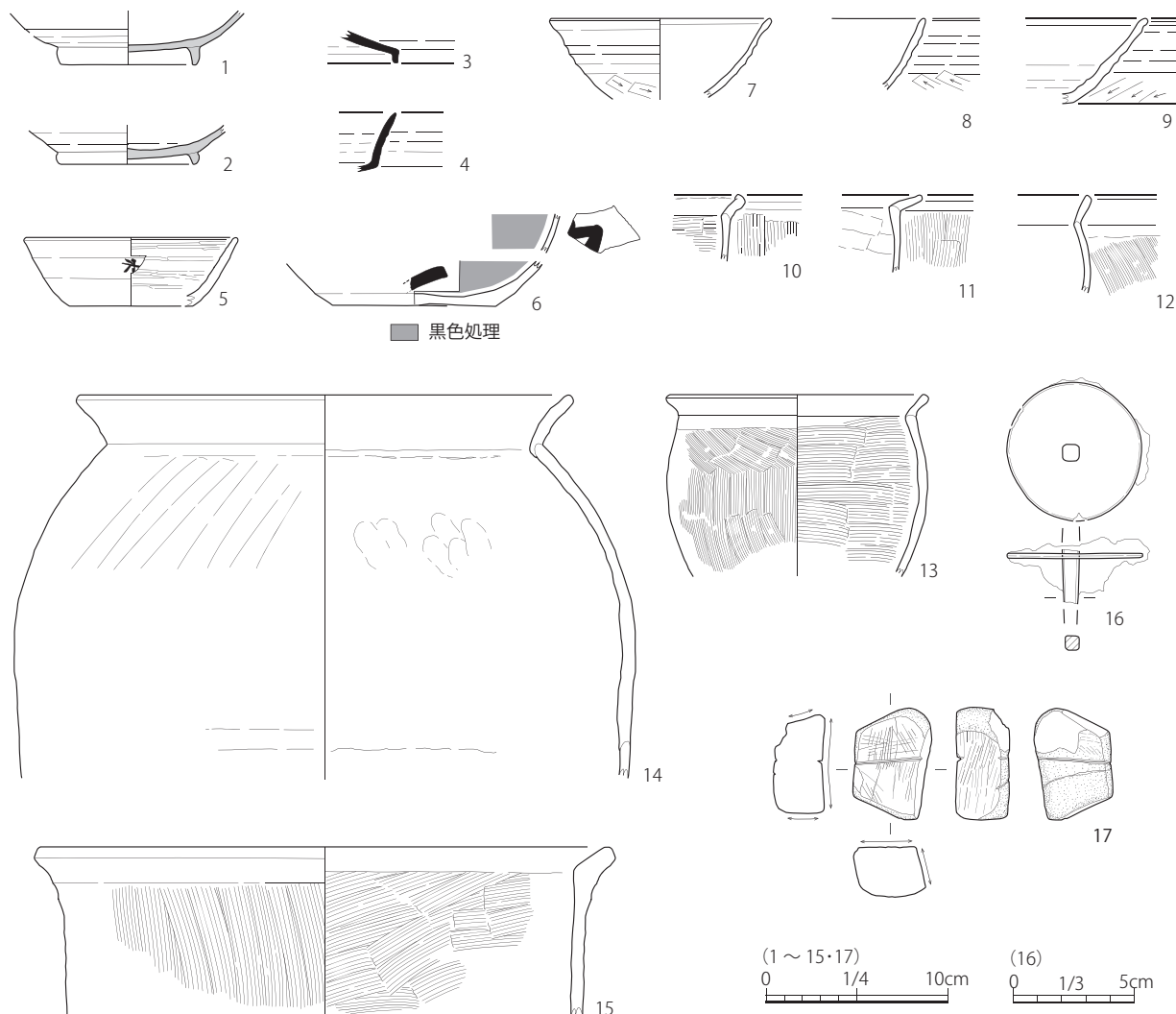
1・2 は灰釉陶器の碗である。1 の高台は内面が強くナデられ、内湾して高い三日月高台を示す。底部は糸切りと思われるが丁寧になでられており明確ではない。それに対して 2 の高台は低く内外面に弱いナデを施すのみである。底部はヘラケズリ後ナデ調整が加えられる。3 は須恵器の坏蓋、4 はおそらく有台坏身の破片である。5 は駿東型坏の破片で外面に墨書が見られ、「木」偏の一部と思われる。6 は底部回転糸切り後未調整の坏である。接合しないものの同一個体と考えられる破片もある。両破片ともに墨書が認められる。内面は黒色処理されている。7 から 9 は調整や形態が甲斐型坏に共通するものの胎土が駿東型坏と共通する坏である。甲斐型坏を模倣したものと位置づけられる。いずれも外面底部付近に斜め方向のヘラケズリが認められる。10・11 は甲斐型の小型の甕である。胎土に金雲母と考えられる粒子を多量に含む。外面は粗いハケ目調整で内面は 10 がヨコハケ、11 が横方向の板ナデである。12・13 は器形の似た小型



第70図 SB26 平面図・断面図



第71図 SB26 カマド 平面図・断面図



第72図 SB26 出土遺物実測図

甕である。肩は張らず頸部が屈曲した後、短くやや内湾した口縁部がつく。内面調整が異なるため、別の個体とした。14は胴部が直線的なことから長胴甕と考えられる。外面が板ナデ調整である。全体的に作りが粗雑で焼成も良好とはいえない。15は甲斐型甕と思われるが胎土にあまり金雲母を含まないことから、模倣の可能性を残す。調整は、粗いハケ目で仕上げられている。17は砥石である。

所見

3・4・5は混入の可能性が考えられるが、1・2の灰釉陶器や甲斐型甕から10世紀前半頃と考えられる。

SB27

遺構 (第73・74図)

位置 AR・20グリッド

重複関係 (古) SB33 → SB27 → SB26 (新)

主軸方位 N - 27.0° - W

残存状況 南西部の上層はSB26に削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅2.92m、直交(東西)幅2.76m、深さ55cmを測る。

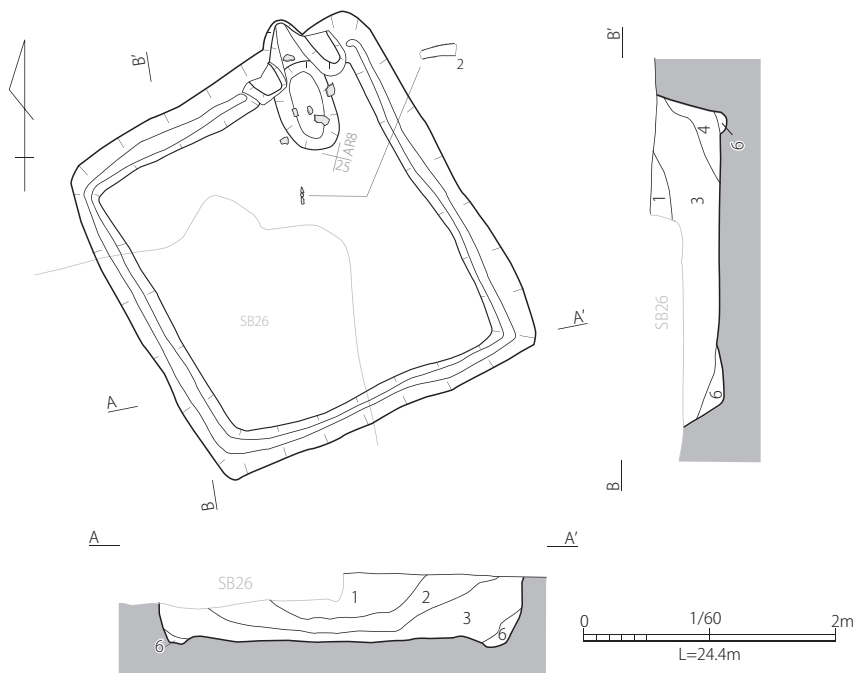
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅25cm、深さ5cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

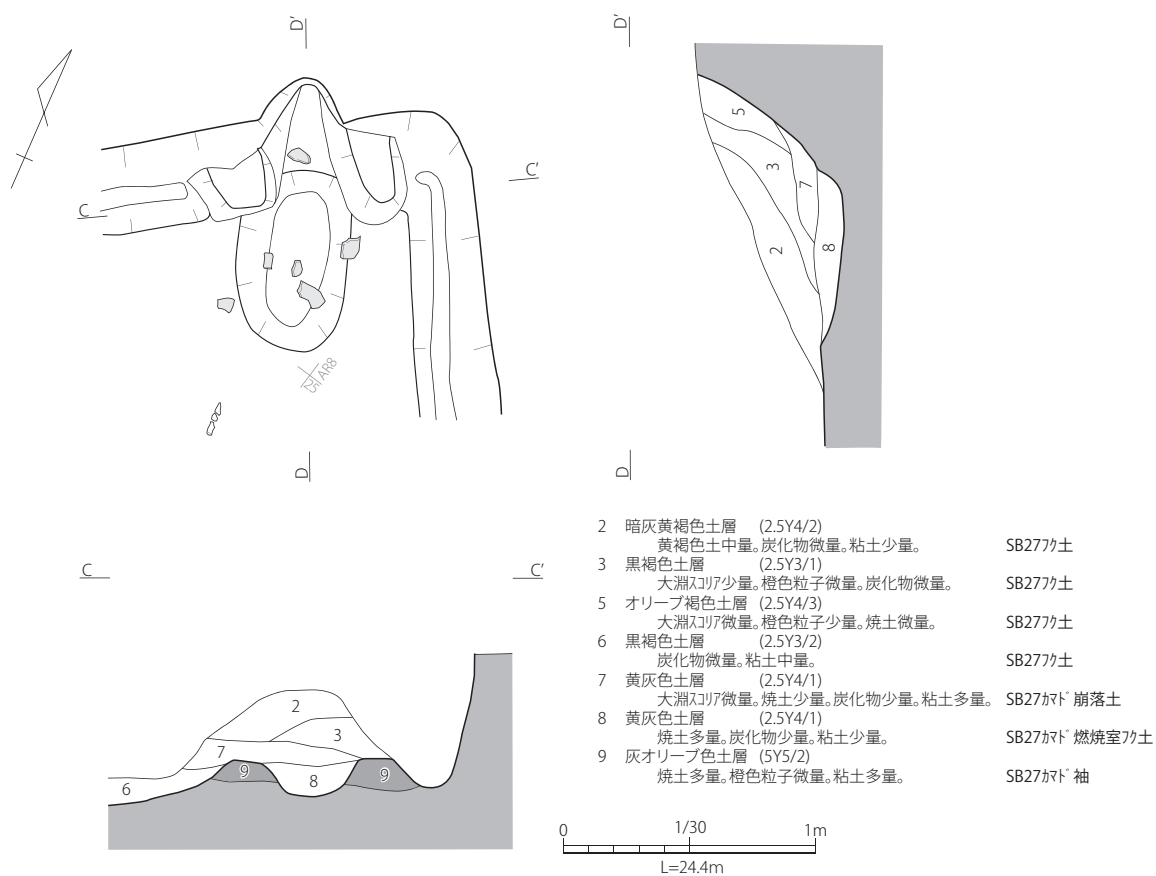
床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁東端に位置する。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長107cm、幅85cm、燃焼室幅26cmを測る。



- | | | |
|---------------------|----------------------|---------|
| 1 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 大淵入り少量。橙色粒子微量。 | SB277ヶ土 |
| 2 暗灰黄褐色土層 (2.5Y4/2) | 黄褐色土中量。炭化物微量。粘土少量。 | SB277ヶ土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 大淵入り少量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB277ヶ土 |
| 4 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 大淵入り微量。 | SB277ヶ土 |
| 6 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 炭化物微量。粘土中量。 | SB277ヶ土 |

第73図 SB26 平面図・断面図



- | | | |
|----------------------|-------------------------|----------------|
| 2 暗灰黄褐色土層 (2.5Y4/2) | 黄褐色土中量。炭化物微量。粘土少量。 | SB277ヶ土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 大淵入り少量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB277ヶ土 |
| 5 オリーブ褐色土層 (2.5Y4/3) | 大淵入り微量。橙色粒子少量。焼土微量。 | SB277ヶ土 |
| 6 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 炭化物微量。粘土中量。 | SB277ヶ土 |
| 7 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 大淵入り微量。焼土少量。炭化物少量。粘土多量。 | SB27カマド 崩落土 |
| 8 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 焼土多量。炭化物少量。粘土少量。 | SB27カマド 燃焼室7ヶ土 |
| 9 灰オリーブ色土層 (5Y5/2) | 焼土多量。橙色粒子微量。粘土多量。 | SB27カマド 袖 |

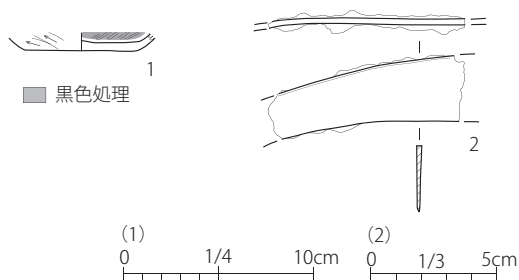
第74図 SB27 カマド 平面図・断面図

出土遺物 (第75図)

1は坯の破片である。底部裏面、外面ともにヘラケズリが入念に施されている。また、黒色処理された内側には放射状のヘラミガキが施される。2は曲刃鎌であるが、基部、先端部共に欠損する。

所見

9世紀後半から10世紀頃と考えられる。



第75図 SB27 出土遺物実測図

SB28

遺構 (第76・77図)

位置 AR・20グリッド

重複関係 (古) SB36 → SB28 → SB26 (新)

主軸方位 N - 12.0° - W

残存状況 北部の上層はSB26に削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅3.00m、直交(東西)幅2.96m、深さ48cmを測る。

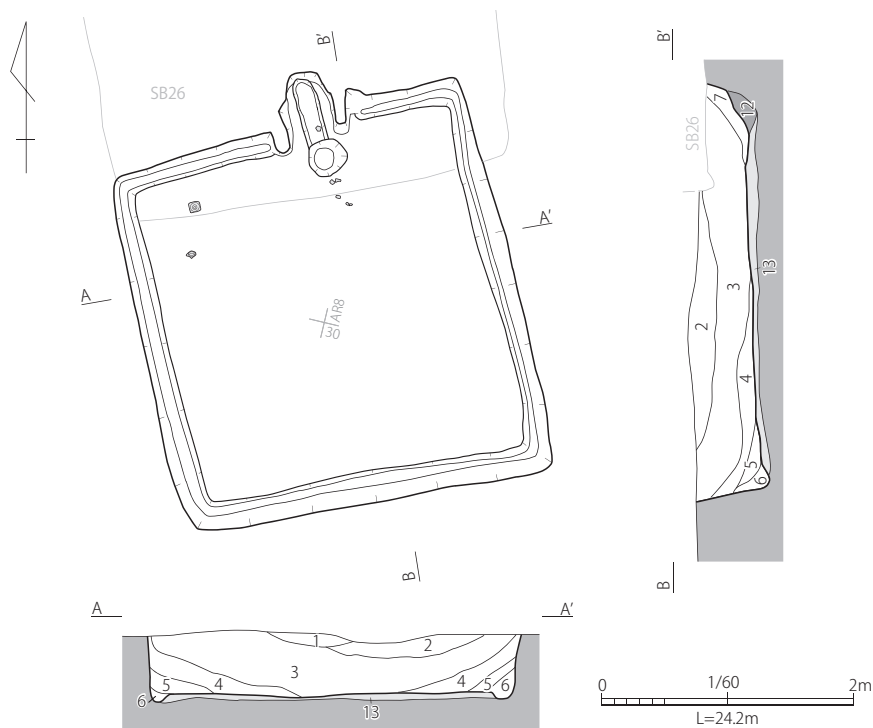
覆土 大淵スコリアが混じる暗灰黄色土。

壁溝 幅22cm、深さ5cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に5cm程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁やや東寄りに位置する。袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長84cm、幅62cm、燃烧室幅32cmを測る。



- | | | |
|--------------------|------------------|------------|
| 1 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | 大淵スコリア微量。黄褐色土少量。 | SB287k土 |
| 2 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) | 大淵スコリア微量。黄褐色土少量。 | SB287k土 |
| 3 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スコリア少量。 | SB287k土 |
| 4 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 黄褐色土少量。 | SB287k土 |
| 5 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 黄褐色土微量。 | SB287k土 |
| 6 黒褐色土層 (2.5Y3/1) | 黄褐色土少量。 | SB287k土 |
| 7 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 焼土微量。炭化物微量。粘土少量。 | SB28がド 崩落土 |
| 12 黒褐色土層 (10YR2/1) | 黄褐色土少量。 | SB28がド 袖 |
| 13 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | 焼土微量。炭化物微量。粘土多量。 | SB28掘方埋土 |

第76図 SB28 平面図・断面図

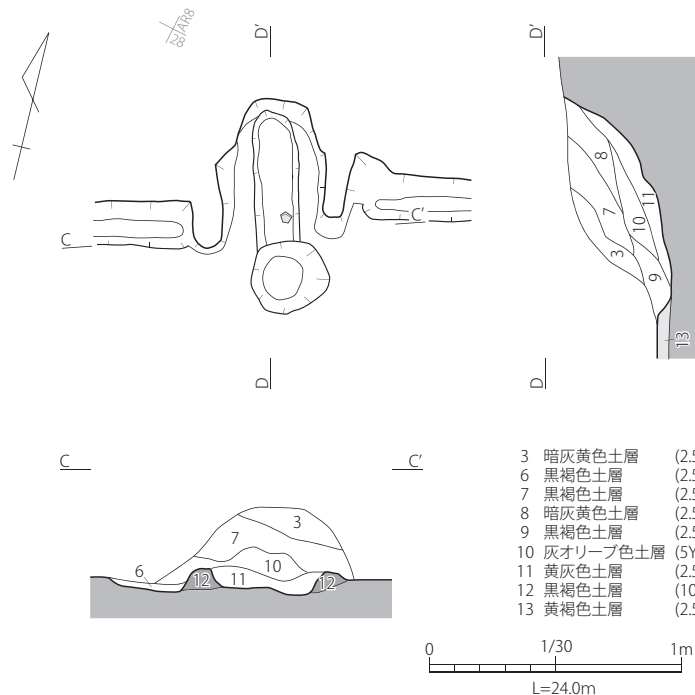
出土遺物 (第78図)

1・2は摘蓋の破片である。2の方が色調にやや黄色味がかかり、全体的に器壁が厚い。3・4は有台坏身である。3は胎土が砂っぽく色調は白色を呈する。5は蓋もしくは身の破片である。口唇部がしっかり面取りされている。6・7は壺の口縁部で全体的に器壁が厚い。8・9は土師器坏の破片である。8は胎土が精緻で光沢をもつ。見

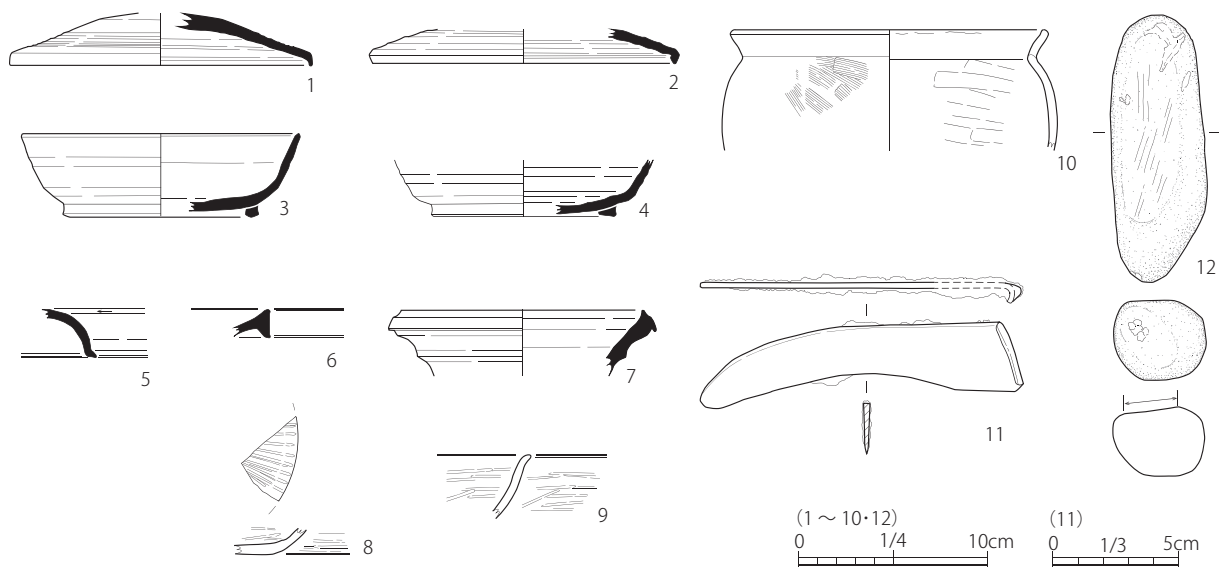
込み部に放射状のヘラミガキを施す。10は小型甕の破片である。口唇部先端がやや内側に突出する。外面はハケ目、内面はヨコナデが施される。11は曲刃鎌である。刃部が使用により磨り減っている。12は磨敲き石である。

所見

9世紀前半頃と考えられる。



第77図 SB28 カマド 平面図・断面図



第78図 SB28 出土遺物実測図

SB29

遺構 (第79・80図)

位置 AR・30 グリッド

重複関係 (古) SH01 → SB29 → SK113・SK116 (新)

主軸方位 N - 9.0° - W

残存状況 土坑により一部が削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅3.35m、直交(東西)幅3.50m、深さ40cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅25cm、深さ5cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁東寄りに位置し、遺存状態は良好である。

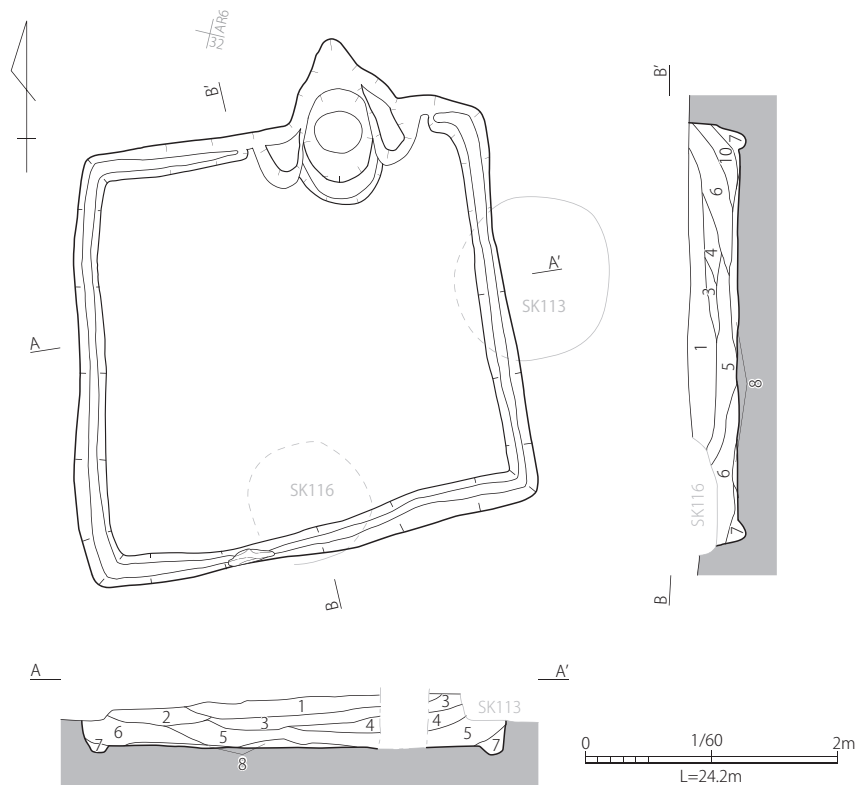
袖に芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長133cm、幅125cm、燃焼室幅58cmを測る。燃焼室より小型甕(5)、駿東型長胴甕(7)が出土している。

出土遺物 (第81図)

1は坏身の口縁部、2は有台坏身の破片である。調整が不十分で、全体的に丸みをもつ。3・4は駿東型坏の破片で3の墨書は「持」の可能性ある。4は底部が厚く、口縁部がやや外反する。5・6は小型の甕でいずれも内外面に細かなハケ目をもつ。頸部があまり強く屈曲せず緩やかな形態を示す。7は駿東型長胴甕である。肩はあまり張らず、頸部があまり窄まらない。頸部付近がもつとも薄く作られ、乾燥後、やや厚めの口縁部が接合される。内面は全面ヨコハケで外面は斜め方向のハケ目の後、ヘラ工具などによりナデられている。

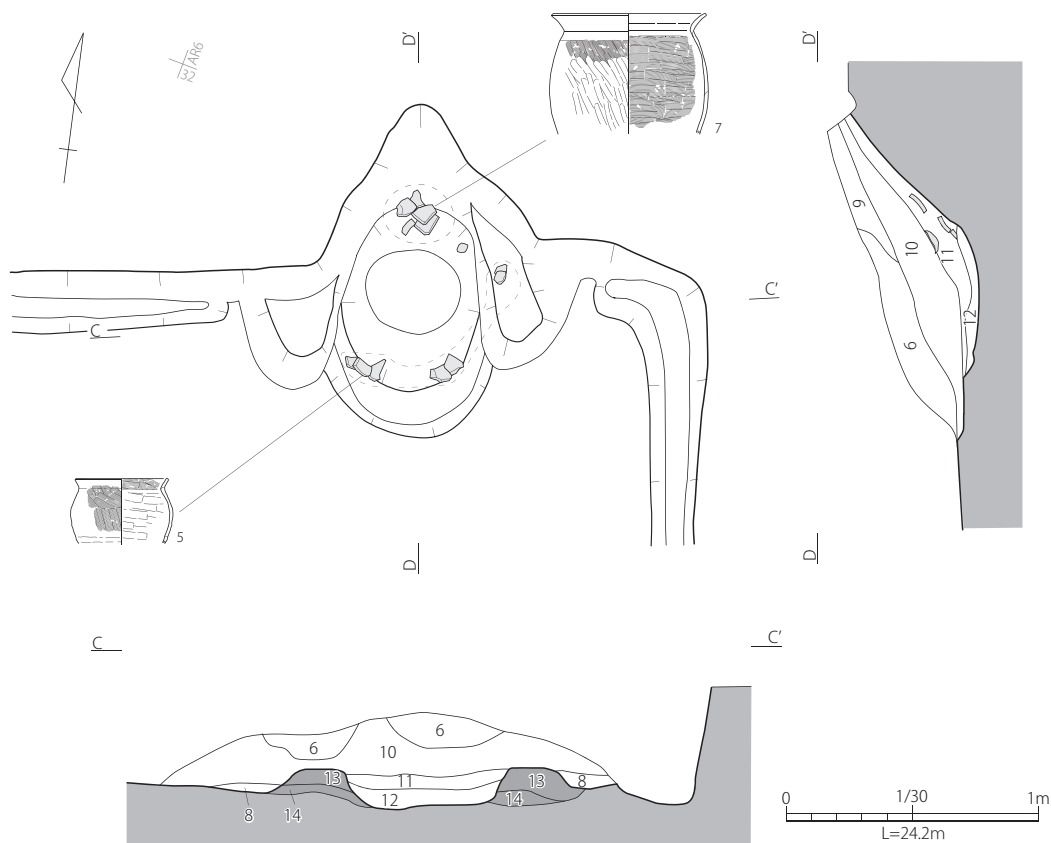
所見

9世紀前半頃と考えられる。



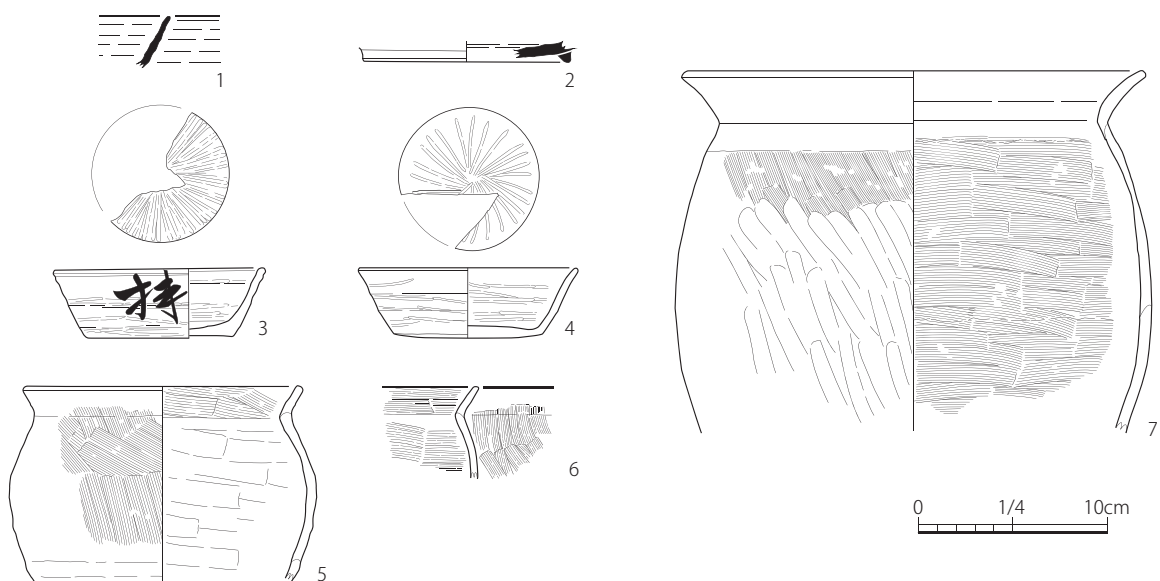
- | | | |
|-----------------------|-----------------------------|-------------|
| 1 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB2977土 |
| 2 黒褐色土層 (2.5Y3/3) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB2977土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB2977土 |
| 4 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スコリア少量。橙色粒子微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB2977土 |
| 5 黒褐色土層 (2.5Y3/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。炭化物少量。粘土少量。 | SB2977土 |
| 6 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB2977土 |
| 7 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 炭化物微量。 | SB2977土 |
| 8 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB2977土 |
| 10 暗オリーブ色土層 (5Y4/4) | 焼土少量。粘土多量。 | SB2977土 崩落土 |

第79図 SB29 平面図・断面図



- | | | | |
|----|------------------|----------------------|----------------|
| 6 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵入り微量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB2977土 |
| 8 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵入り微量。橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB2977土 |
| 9 | 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) | 焼土微量。粘土多量。 | SB29カマド 崩落土 |
| 10 | 暗オリーブ色土層 (5Y4/4) | 焼土少量。粘土多量。 | SB29カマド 崩落土 |
| 11 | 赤褐色土層 (5YR4/6) | 焼土多量。粘土少量。 | SB29カマド 燃烧室77土 |
| 12 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB29カマド 燃烧室77土 |
| 13 | 暗オリーブ色土層 (5Y4/3) | 焼土少量。粘土多量。 | SB29カマド 袖 |
| 14 | 灰オリーブ色土層 (5Y5/2) | 粘土中量。 | SB29カマド 袖 |

第80図 SB29 カマド 平面図・断面図



第81図 SB29 出土遺物実測図

SB30

遺構 (第83図)

位置 AS・10 グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 29.0° - W

残存状況 北西部は攪乱により削平されているが、ほかは良好に遺存する。平面形は方形を呈し、主軸 (南北)

幅 3.03m、直交 (東西) 幅 2.86m、深さ 24cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 確認されない。

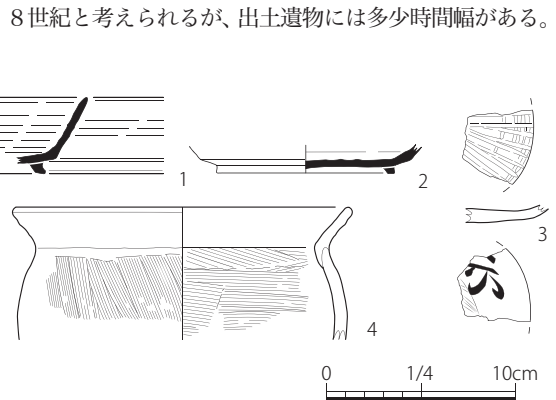
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

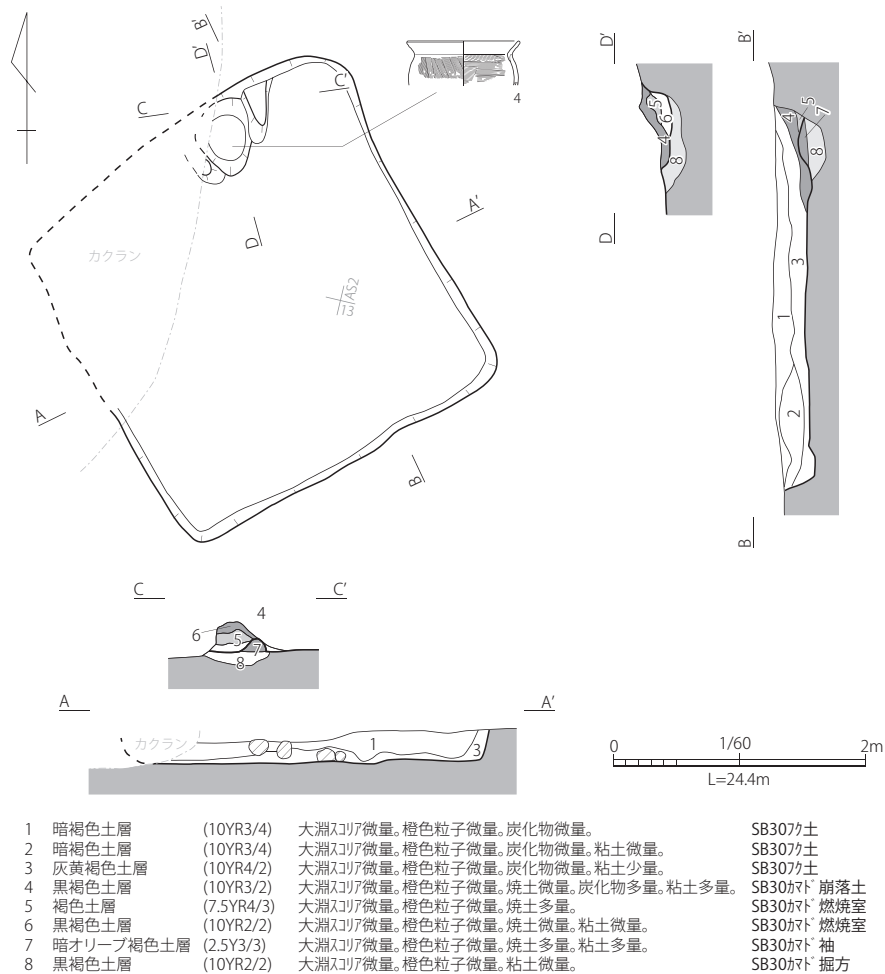
カマド 北壁やや東寄りに位置し、攪乱により左袖が削平されている。検出範囲内で、全長 65cmを測る。燃烧室より駿東型長胴甕 (4) が出土している。

出土遺物 (第82図)

1・2は有台坏身の破片である。1は底部の屈曲が比較的するどい。2の高台は低く細い。3の駿東型坏は底部外面に墨書をもつが判読できない。4は駿東型長胴甕だがやや小型である。内外面とも粗いハケ目が施される。所見



第82図 SB30 出土遺物実測図



第83図 SB30 平面図・断面図

SB31

遺構 (第84・85図)

位置 AR・10 グリッド

重複関係 (古) SB31 → SB24 (新)

主軸方位 N - 21.0° - W

残存状況 西壁北側部分はSB24により削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅3.14m、直交(東西)幅3.14m、深さ35cmを測る。南壁沿いの壁溝付近からは須恵器坏蓋(2・3)、有台坏身(6)、甲斐型坏(13)等の遺物がまとも出土する。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅18cm、深さ16cmで全体的に確認される。

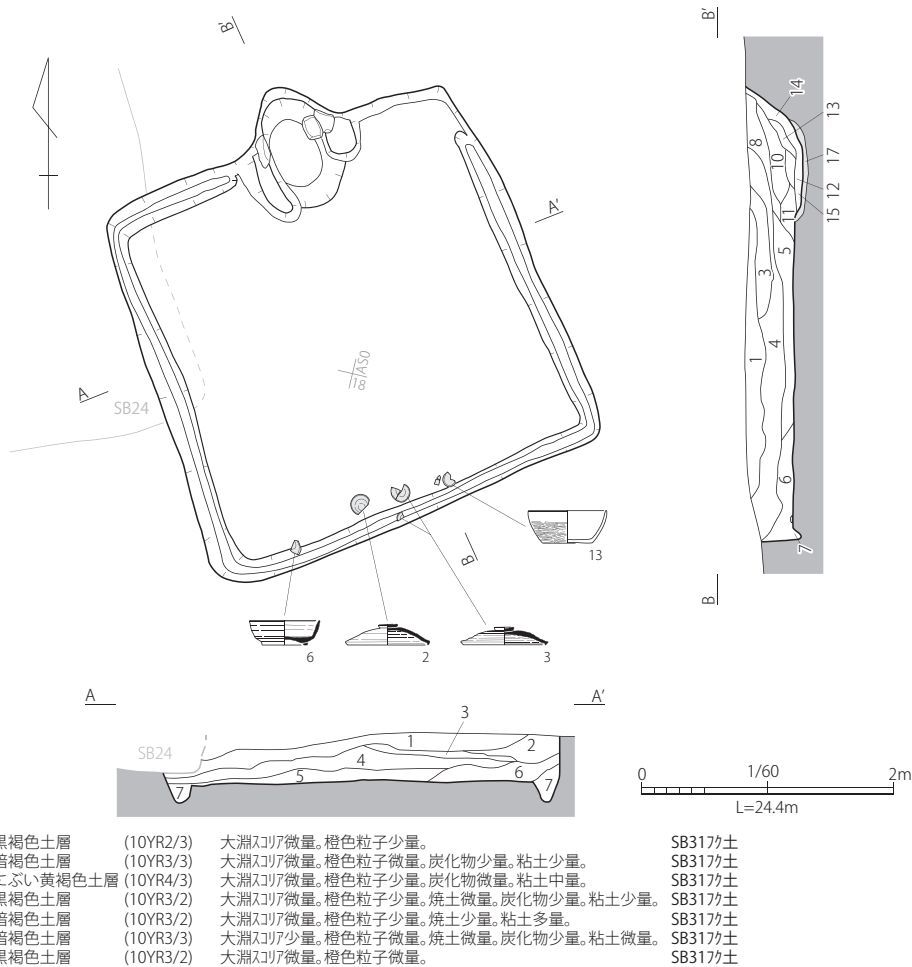
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

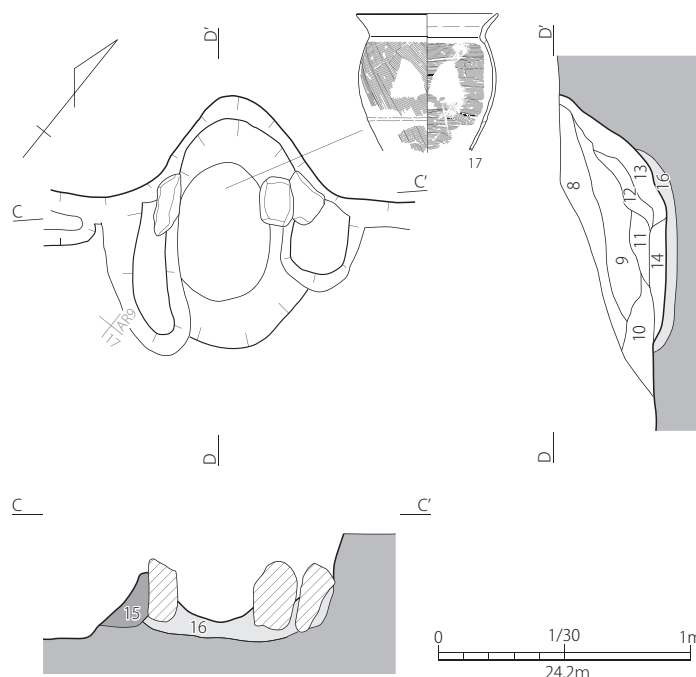
カマド 北壁中央に位置する。両袖に芯材となる石材が認められ、全長100cm、幅100cm、燃烧室幅40cmを測る。燃烧室から駿東型長胴甕(17)が出土している。

出土遺物 (第86図)

1から5は摘蓋である。胎土から1、2・3・4、5の3つに区分される。1は胎土に白色粒子を多く含む。2から4は白色粒子を含むものの粒子が細かく全体的に精緻である。一方、5は砂っぽく焼成も不十分であり、色調も白色を呈し調整が十分に観察できないほど器面がもろい。2から4は摘みを含めて器形が類似している。6は有台坏身である。やや小ぶりのサイズである。底部は回転糸切りで上げ底状になっている。7は箱坏で胎土に白色粒子を多く含む。底部は回転ヘラケズリが施されている。8・9はやや大型の坏と考えられる。10・11は甕の胴部片である。10は外面タタキ、内面ナデ調整である。断面はいわゆる「セピア色」をしている。外面はカキメのような細かなハケ目が施され、内面は青海波状の充て具痕が認められる。12はミニチュアの甕でユビオサエで整形されている。13・14は胎土が精緻で深

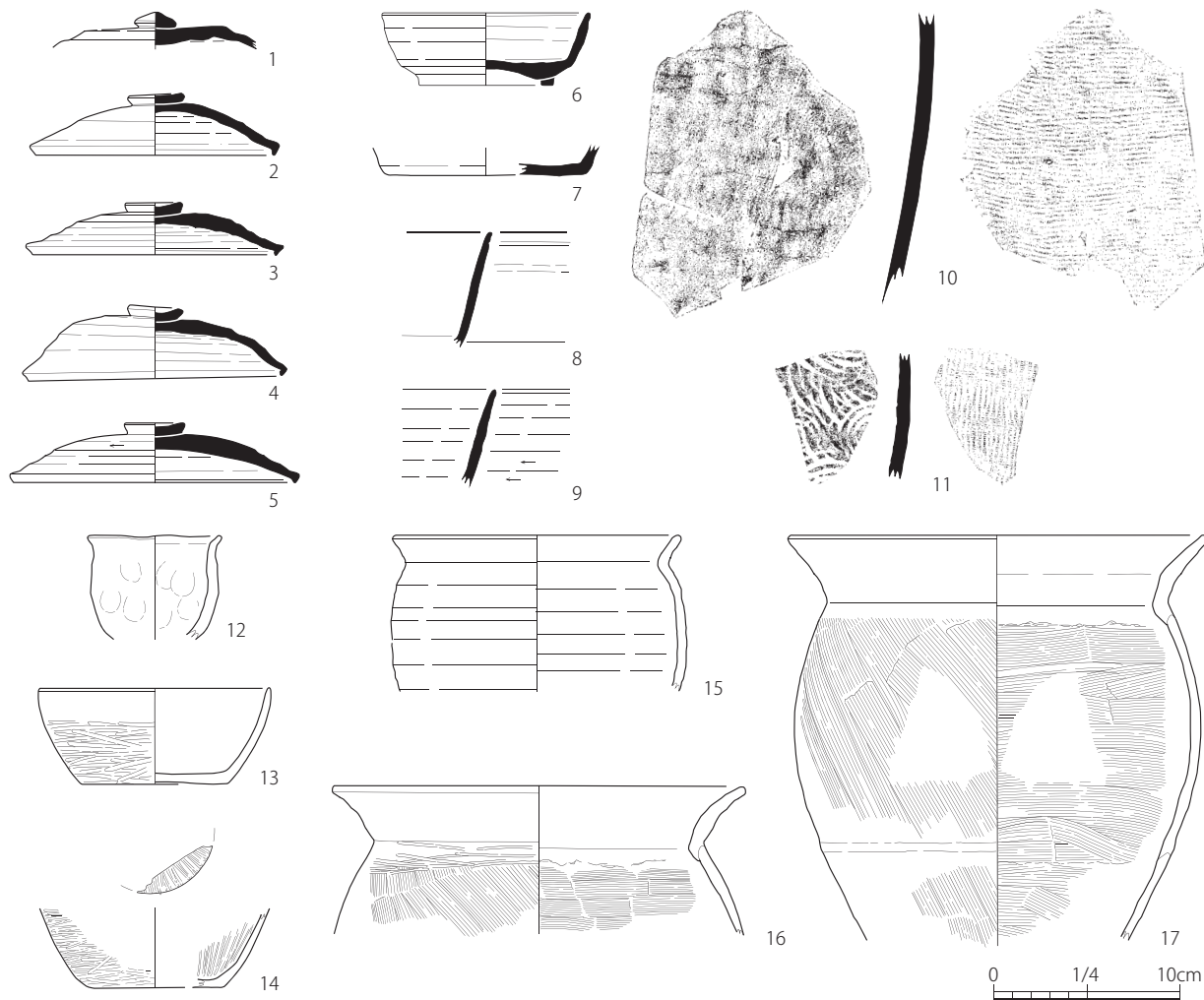


第84図 SB31 平面図・断面図



- | | | |
|----|--|-------------|
| 8 | オリーブ褐色土層 (2.5Y4/4)
大淵スリ微量。橙色粒子少量。焼土微量。粘土少量。 | SB317カ土 |
| 9 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2)
橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB31カマド 燃烧室 |
| 10 | 灰オリーブ色土層 (5Y5/2)
大淵スリ微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土中量。 | SB31カマド 燃烧室 |
| 11 | 灰オリーブ色土層 (5Y5/3)
大淵スリ微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土多量。 | SB31カマド 燃烧室 |
| 12 | 黒褐色土層 (2.5Y3/1)
橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。 | SB31カマド 燃烧室 |
| 13 | 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2)
焼土多量。炭化物微量。粘土微量。 | SB31カマド 燃烧室 |
| 14 | 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2)
焼土多量。炭化物多量。粘土微量。 | SB31カマド 燃烧室 |
| 15 | オリーブ黄色土層 (5Y6/3)
焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB31カマド 袖 |
| 16 | 黒褐色土層 (2.5Y3/2)
大淵スリ微量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB31カマド 掘方 |

第85図 SB31 カマド 平面図・断面図



第86図 SB31 出土遺物実測図

さをもつ坏で、全面ヘラミガキが施される。見込み部の放射状のヘラミガキや胎土から甲斐型坏の初現期のものと考えられる。15はロクロ整形甕である。直線的な胴部にゆるやかに屈曲する頸部をもち口縁部は短い。16・17は駿東型長胴甕である。肩のあまり張らない胴部と長くて大きく外反する口縁部をもつ。頸部内面に段差をもつ。内外面ともにやや粗いハケ目が施される。

所見

甲斐型坏や長胴甕から8世紀後半頃と考えられる。

SB32

遺構 (第87・88図)

位置 AS・20 グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 16.0° - W

残存状況 覆土の上層の一部が攪乱により削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅2.46m、直交(東西)幅2.71m、深さ25cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅16cm、深さ3cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

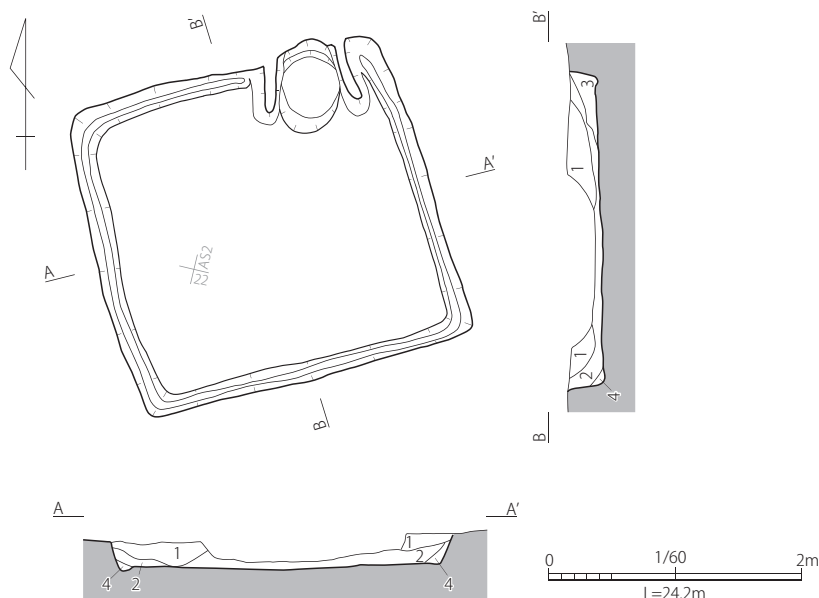
カマド 北壁東端に位置する。芯材は認められず粘土主体でつくられている。全長72cm、幅94cm、燃焼室幅45cmを測る。燃焼室から土師器甕の破片が出土したが図化出来ない。

出土遺物 (第89図)

1・2は摘蓋でいずれも白色粒子を多量に含む。4は土師器坏で口縁部が強いヨコナデにより若干外反する。器壁は全体的に厚い。外面はヘラケズリを施すもののヨコナデが不十分なため、器壁に凹凸が目立つ。5は肩部から内側に窄まる形態の小型の甕である。遠江系と考えられる。6は駿東型球胴甕の影響を受けた埴の口縁部である。7は遠江系水平口縁甕の胴部下半である。器壁が全体的に薄い。内面はナデおよびユビオサエで外面は細かく深いハケ目が施される。

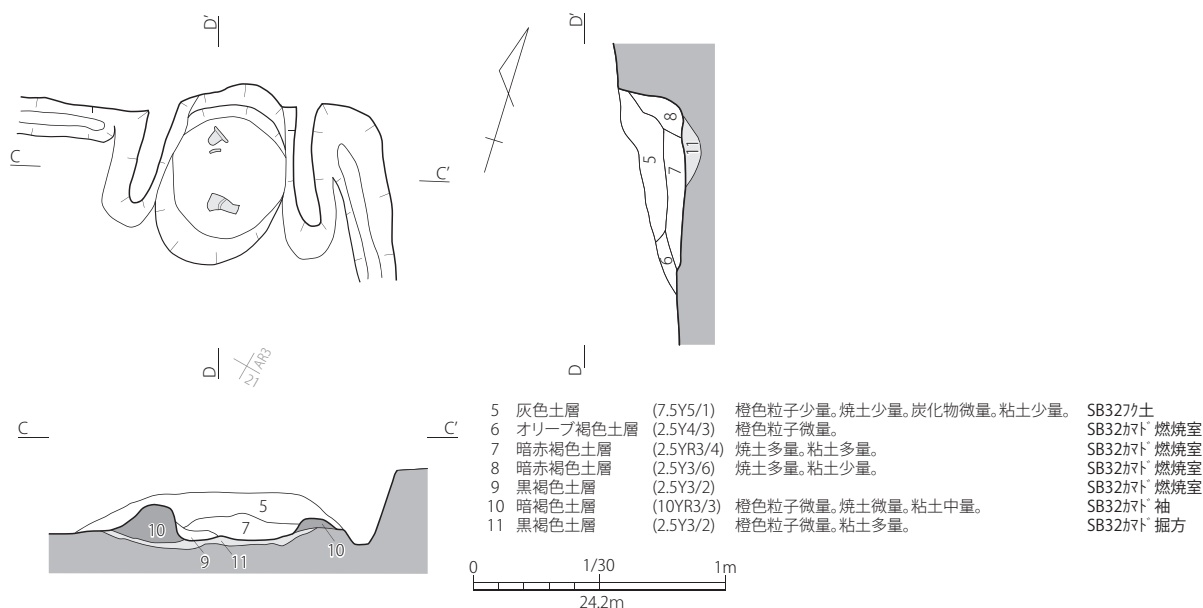
所見

8世紀後半頃と考えられる。

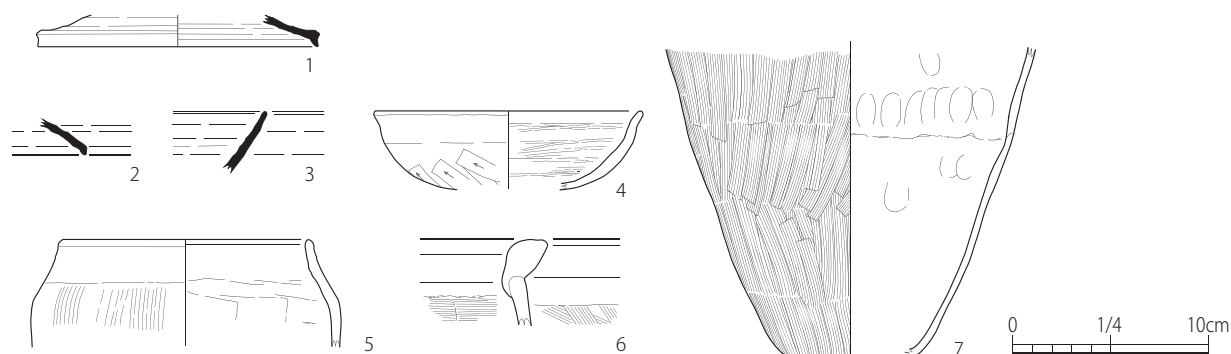


- | | | | |
|---|--------------------|----------------------------------|------------|
| 1 | にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB327カ土 |
| 2 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物中量。粘土中量。 | SB327カ土 |
| 3 | 灰黄褐色土層 (10YR5/2) | 粘土多量。 | SB32カド 崩落土 |
| 4 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物中量。粘土中量。 | SB327カ土 |

第87図 SB32 平面図・断面図



第88図 SB32 カマド 平面図・断面図



第89図 SB32 出土遺物実測図

SB33

遺構 (第91・92図)

位置 AR・20 グリッド

重複関係 (古) SB33 → SB27 (新)

主軸方位 N - 1.5° - E

残存状況 西側がSB27により削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅2.65m、直交(東西)幅2.88m、深さ50cmを測る。

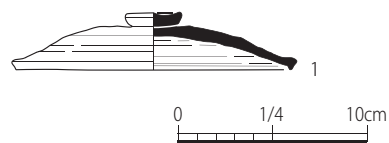
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅20cm、深さ5cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に5cm程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁やや東寄りに位置する。芯材は認められず粘土主体でつくられている。全長84cm、幅95cm、燃烧室幅46cmを測る。



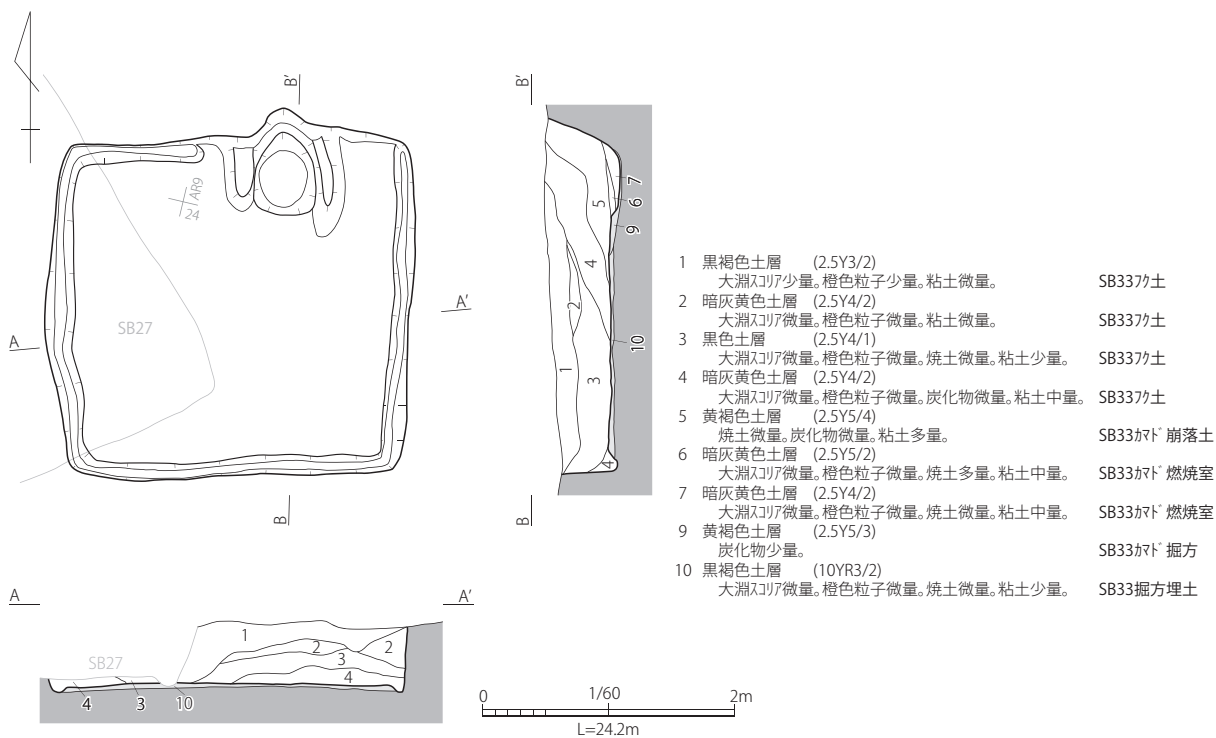
第90図 SB33 出土遺物実測図

出土遺物 (第90図)

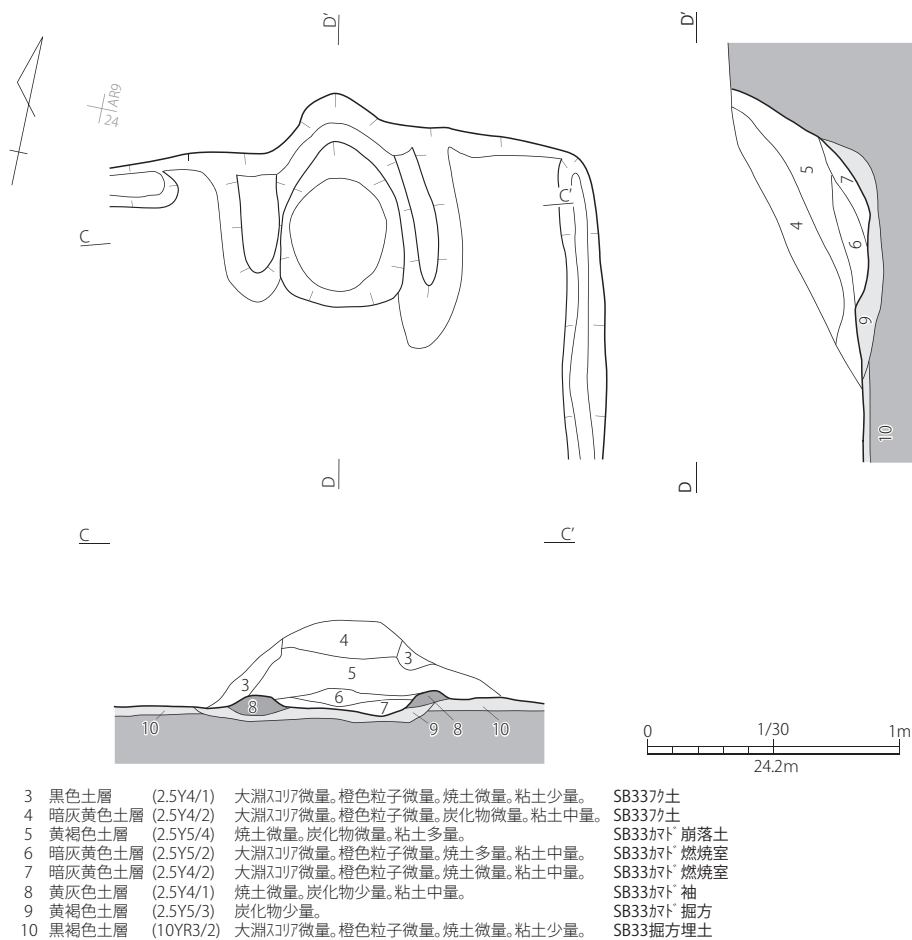
1は摘蓋である。胎土が砂っぽく色調は白色を呈する。焼成が不十分なため、器面が荒れており、調整などの観察が出来ない。

所見

8世紀後半から9世紀頃と考えられる。



第91図 SB33 平面図・断面図



第92図 SB33 カマド 平面図・断面図

SB34

遺構 (第93図)

位置 AS・20 グリッド

重複関係 (古) SB35 → SB34 (新)

主軸方位 N - 29.5° - W

残存状況 遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸 (南北) 幅 2.18m、直交 (東西) 幅 2.56m、深さ 42cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅 15cm、深さ 10cm の壁溝が南東コーナーにのみ確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に 15cm 程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁やや東寄りに位置する。右袖のみ残存し、芯材は認められない。検出範囲内で全長 54cm、幅

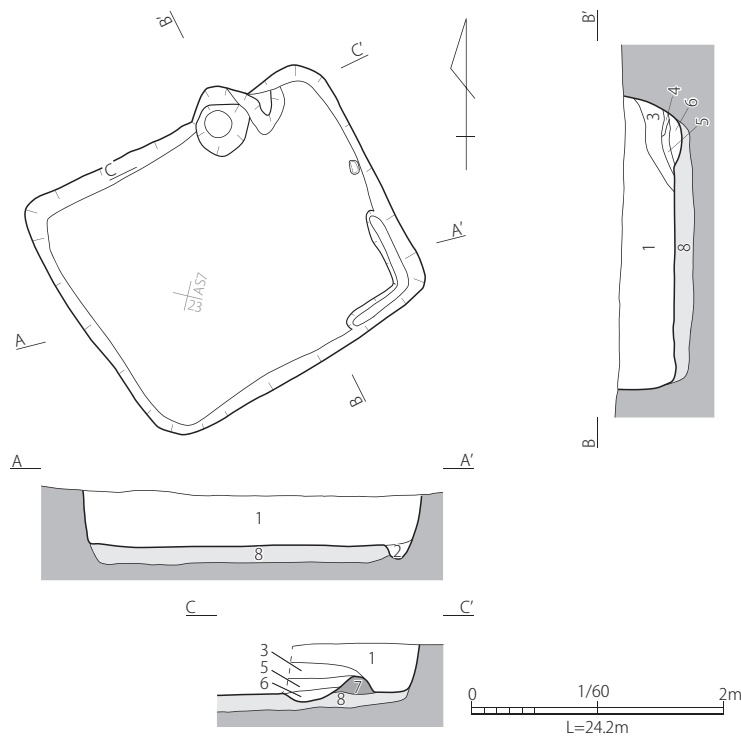
75cm、燃烧室幅 45cm を測る。

出土遺物 (第94図)

1・2は摘蓋の破片である。1はノタ目が強く凹凸が目立つ。2は、焼成が不十分で器面荒れのため、調整があまり観察されない。3は碗形坏身である。底部は丸底で体部のノタ目も明瞭である。4・5は有台坏身だが、高台を中心にその形態は大きく異なる。4は底部の屈曲が明瞭で高台は低く幅が広い。5は底部の屈曲が緩やかで幅の狭い高台を呈する。6は高台が丸みをもっている。底部は回転ヘラケズリである。7は土師器の坏で器壁は厚く、口縁部が緩やかに屈曲する。内外面ともに丁寧なヘラミガキが施され、底部外面にのみヘラケズリが施される。8は土錘である。

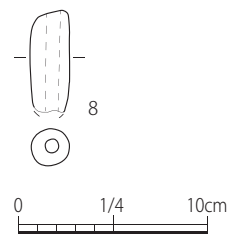
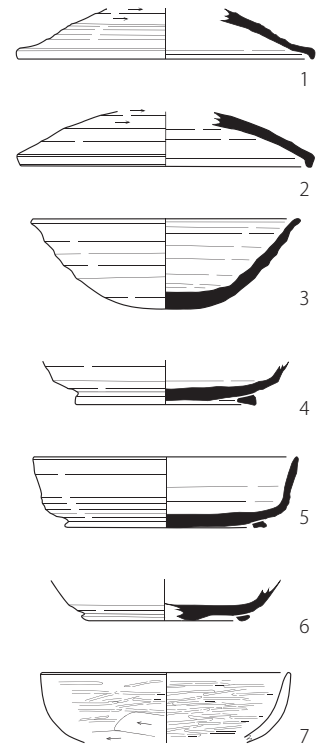
所見

8世紀前半頃と考えられる。



- 1 暗褐色土層 (10YR3/3)
大淵入り少。橙色粒子少量。礫(3cm)中量。炭化物微量。粘土微量。
- 2 黒褐色土層 (10YR2/3)
大淵入り少。橙色粒子少量。
- 3 黄褐色土層 (82.5Y5/4)
大淵入り少。橙色粒子少量。粘土多量。
- 4 灰オリーブ色土層 (5Y5/2)
粘土多量。
- 5 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)
焼土多量。炭化物微量。粘土微量。
- 6 黒褐色土層 (10YR2/2)
焼土微量。炭化物中量。粘土微量。
- 7 オリーブ褐色土層 (2.5Y4/2)
焼土微量。炭化物微量。粘土多量。
- 8 暗褐色土層 (10YR3/3)
焼土微量。炭化物微量。粘土少量。

- SB327ヶ土
- SB327ヶ土
- SB34カマド 崩落土
- SB34カマド 燃烧室
- SB34カマド 燃烧室
- SB34カマド 燃烧室
- SB34カマド 袖
- SB34掘方埋土



第93図 SB34 平面図・断面図

第94図 SB34 出土遺物実測図

SB35

遺構 (第95・96図)

位置 AS・20グリッド

重複関係 (古) SB35 → SB34 (新)

主軸方位 N - 14.5° - W

残存状況 東側を中心にSB34により削平されている。
平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅3.32m、直交(東西)幅3.27m、深さ40cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅22cm、深さ20cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に12cm程の厚さで貼り床が施されている。

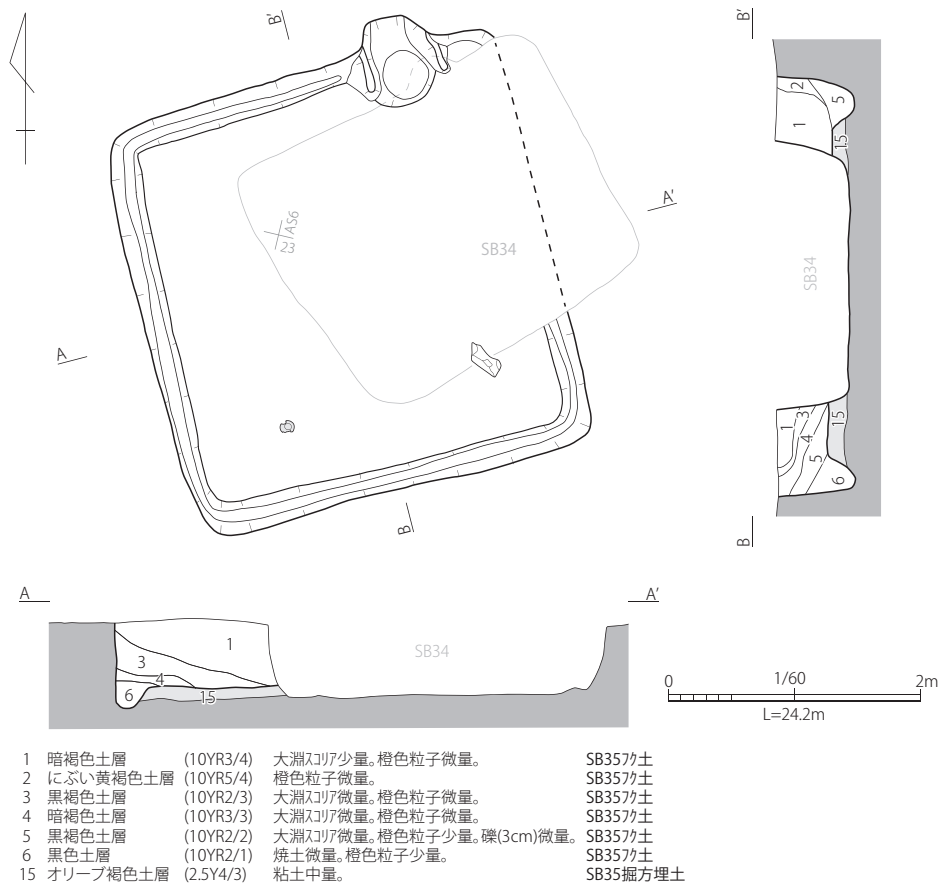
カマド 北壁東寄りに位置し、焚口付近はSB34により削平されている。芯材は認められず、粘土主体でつくられている。検出範囲内で全長70cm、幅78cm、燃烧室幅36cmを測る。

出土遺物 (第97図)

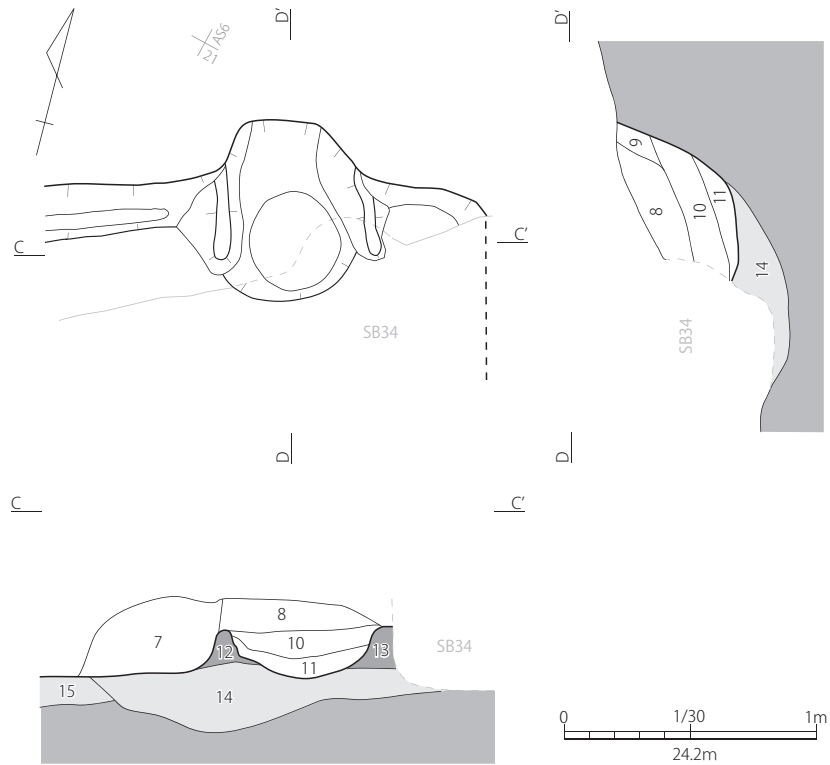
1から3は摘蓋の破片である。いずれも胎土に白色粒子を多く含む。やや小型である。4・5は有台坏身である。4の高台は細く小型である。5は幅広く低い高台が付く。6・7は壺の破片と考えられる。内外面に自然釉が認められる。8は深い坏と考えられる。色調は橙色を呈し焼成が不十分なためか器面が荒れ調整は観察できない。9・10は手づくねの坏である。胎土はいずれも砂っぽく色調は白色からやや橙色を呈する。11は駿東型長胴甕と考えられる。12は布目をもつ平瓦の破片である。

所見

切り合いから8世紀前半頃と考えられる。

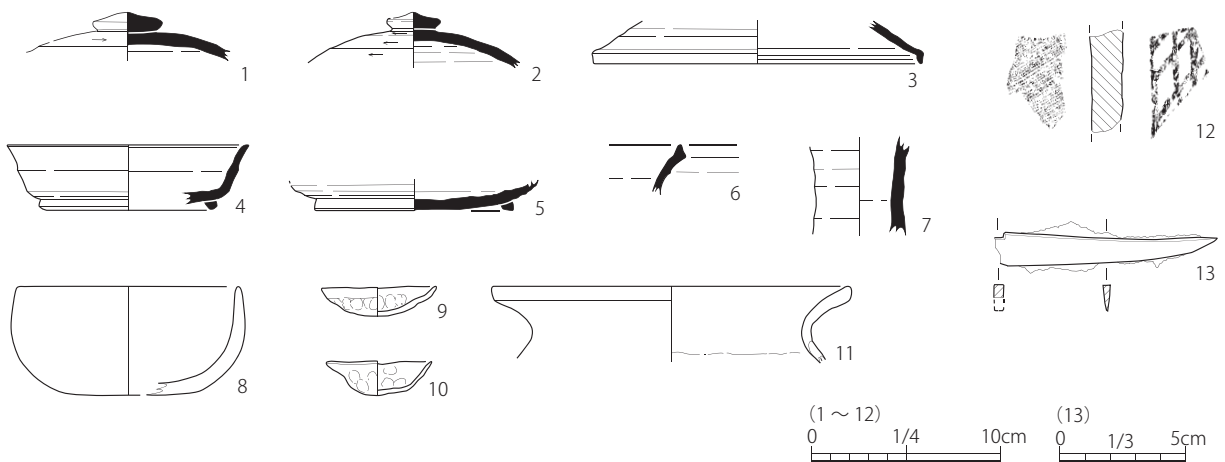


第95図 SB35 平面図・断面図



- | | | | |
|-------------|------------|---------------------------|-------------|
| 7 黒褐色土層 | (10YR3/2) | 大淵スリ7微量。橙色粒子少量。粘土微量。 | SB357カ土 |
| 8 暗褐色土層 | (10YR3/4) | 大淵スリ7微量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土微量。 | SB35カマド 燃烧室 |
| 9 褐色土層 | (10YR4/6) | 大淵スリ7微量。橙色粒子微量。焼土多量。 | SB35カマド 燃烧室 |
| 10 暗褐色土層 | (10YR3/3) | 大淵スリ7微量。橙色粒子微量。粘土少量。 | SB35カマド 燃烧室 |
| 11 褐色土層 | (7.5YR4/4) | 橙色粒子微量。焼土多量。炭化物少量。 | SB35カマド 燃烧室 |
| 12 黄褐色土層 | (2.5Y5/4) | 粘土多量。 | SB35カマド 袖 |
| 13 灰オリーブ色土層 | (5Y5/2) | 粘土多量。 | SB35カマド 袖 |
| 14 黒褐色土層 | (2.5Y3/1) | 橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。 | SB35カマド 掘方 |
| 15 オリーブ褐色土層 | (2.5Y4/3) | 粘土中量。 | SB35掘方埋土 |

第96図 SB35 カマド 平面図・断面図



第97図 SB35 出土遺物実測図

SB36

遺構 (第98・99図)

位置 AS・20 グリッド

重複関係 (古) SB37・SB39 → SB36

→ SB28・SB38・SB50 (新)

主軸方位 N - 9.0° - W

残存状況 SB28・SB38・SB50 により削平されているが、遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸 (南北) 幅 3.72m、直交 (東西) 幅 4.05m、深さ 28cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 20cm、深さ 10cm で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に 8cm 程の厚さで貼り床が施されている。

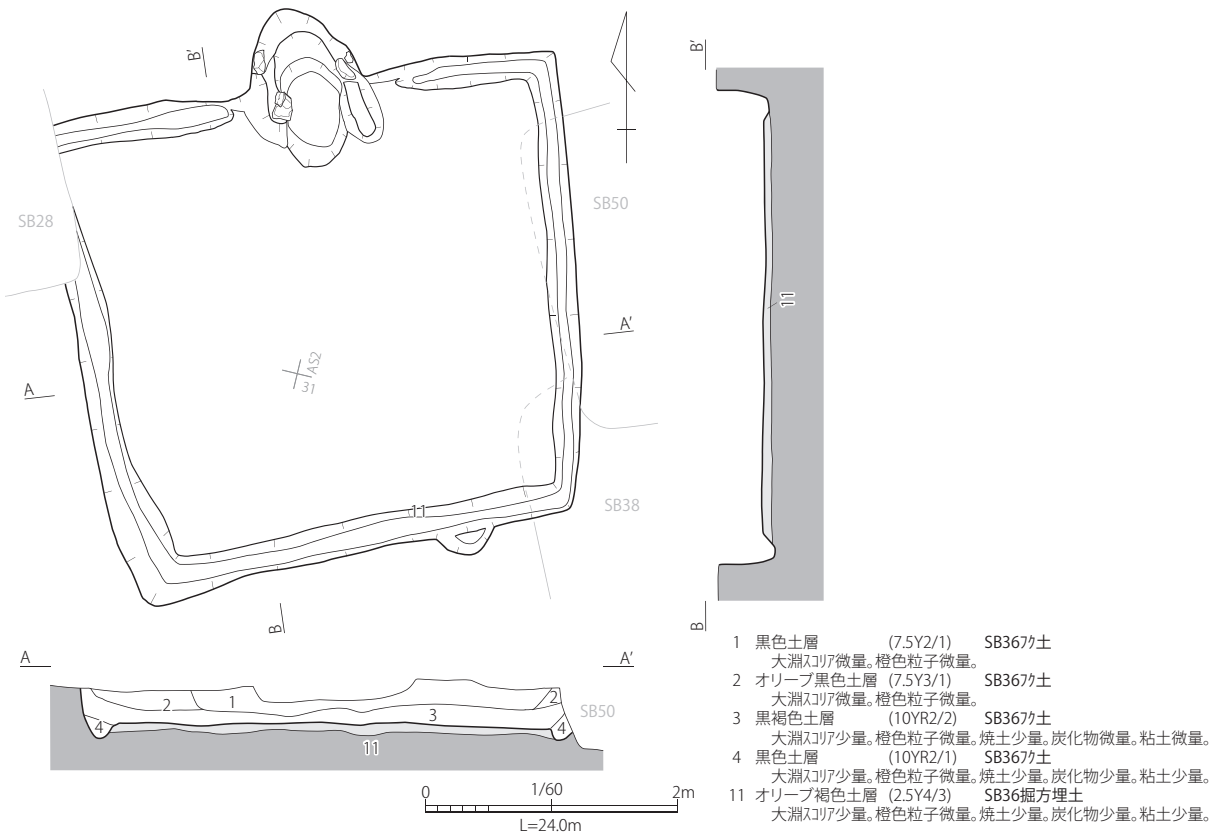
カマド 北壁中央に位置し、遺存状態は良好である。左袖に芯材となる石材が残存したほか、カマド周辺から数点の石材を検出した。全長 131cm、幅 102cm、燃烧室幅 42cm を測る。燃烧室から小型甕 (15)、駿東型長胴甕 (17) が出土している。

出土遺物 (第100図)

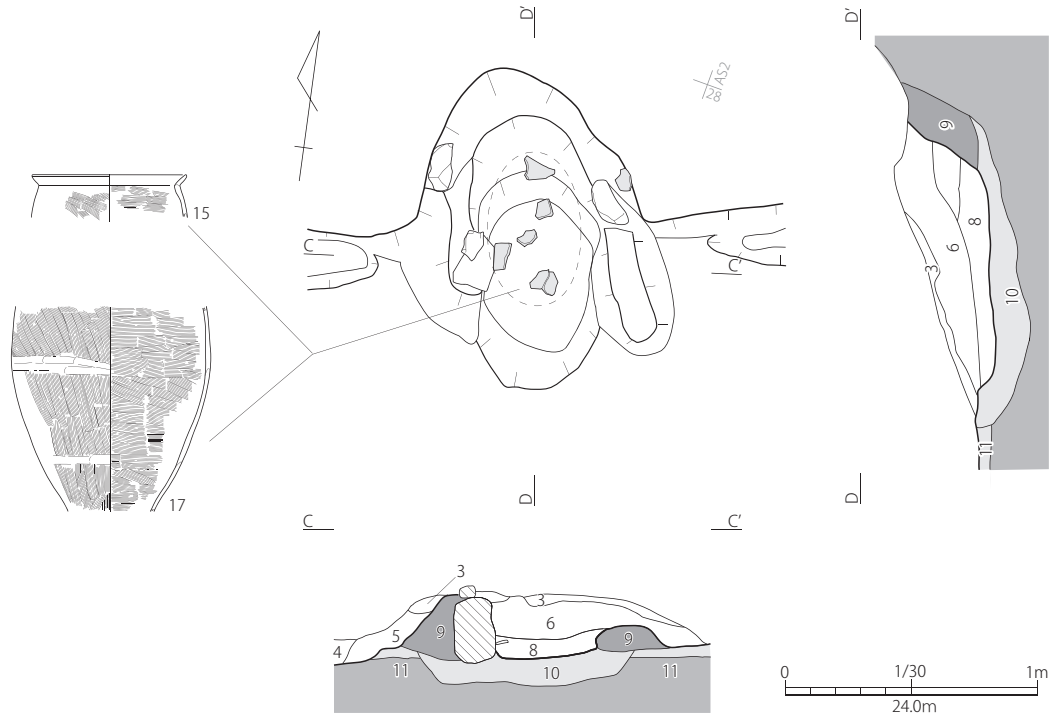
1 から 5 は摘蓋である。胎土はやや砂っぽい 1・4 と灰色でやや硬質の 2・5、断面がセピア色の 3 に分けられる。砂っぽい 1・4 は全体的に器壁が厚い。6 は平頂蓋でほぼ完形である。内面がやや赤みを帯びている箇所があるが要因は明らかではない。7 は有台坏身である。全体的に器壁が薄く丁寧な調整が施されている。8 は大型の箱坏もしくは有台坏身の破片と考えられる。断面がセピア色を呈する。9 は壺の頸部、10 は甕の破片である。11 から 13 は駿東型坏である。いずれも底部が小さい段階のものである。13 の見込み部は放射状のヘラミガキを有する。14・15 は小型の甕である。内外面とも細かなハケ目により調整されているが 14 の内面は最終的にヨコナデ、板状工具によるナデが施される。16・17 は駿東型長胴甕である。口縁部はヨコナデにより仕上げられている。胴部はあまり張らない形態を示し、直線的に底部付近に至る。内外面ともに細かなハケ目が施される。

所見

平頂蓋や長胴甕から 9 世紀前半頃と考えられる。

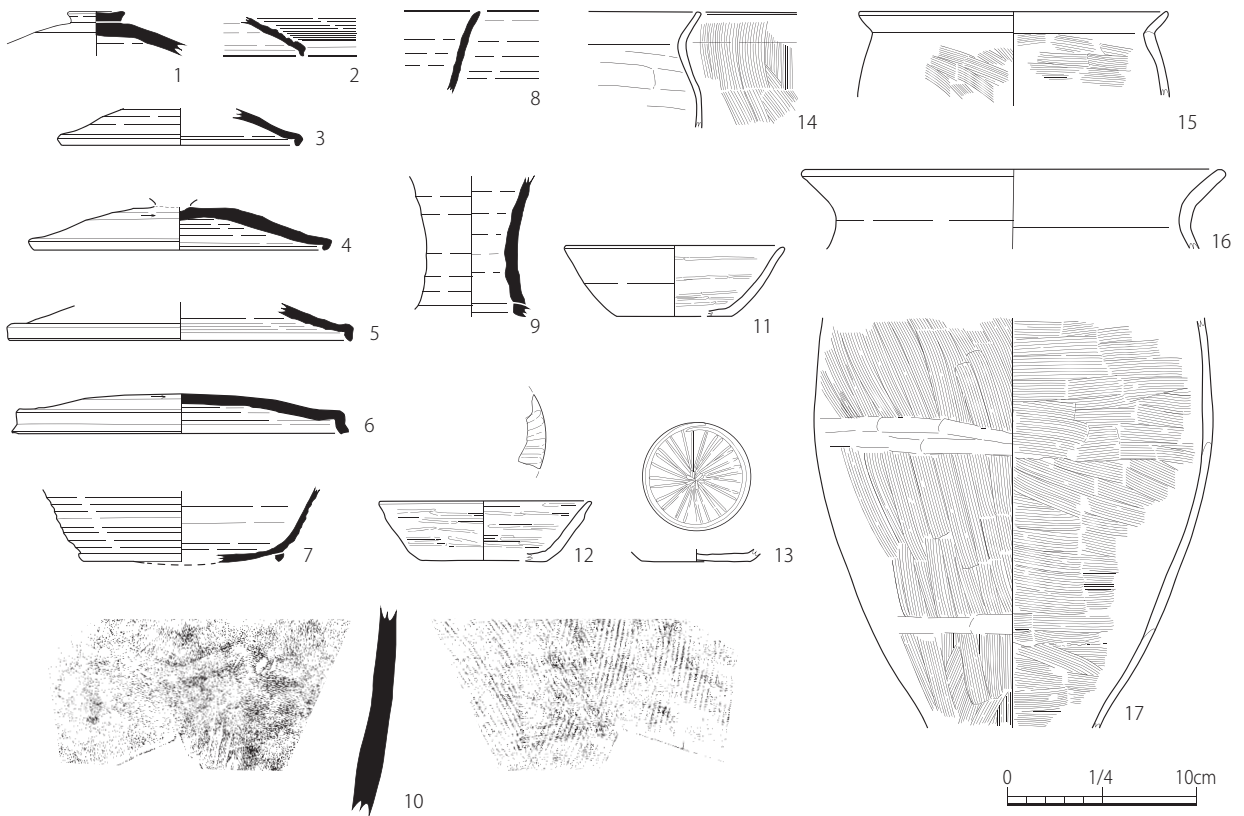


第98図 SB36 平面図・断面図



- | | | |
|-----------------------|---------------------------------|------------|
| 3 黒褐色土層 (10YR2/2) | 大淵スリア少量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物微量。粘土微量。 | SB367カ土 |
| 4 黒色土層 (10YR2/1) | 大淵スリア少量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。 | SB367カ土 |
| 5 灰オリーブ色土層 (5Y4/2) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。 | SB367カ土 |
| 6 灰オリーブ色土層 (5Y5/3) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土少量。粘土多量。 | SB36カド 崩落土 |
| 8 灰褐色土層 (7.5YR3/1) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土多量。炭化物少量。粘土中量。 | SB36カド 燃焼室 |
| 9 灰オリーブ色土層 (5Y4/2) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土多量。 | SB36カド 袖 |
| 10 オリーブ褐色土層 (2.5Y4/3) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物微量。粘土多量。 | SB36カド 掘方 |
| 11 オリーブ褐色土層 (2.5Y4/3) | 大淵スリア少量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。粘土少量。 | SB36掘方埋土 |

第99図 SB36 カマド 平面図・断面図



第100図 SB36 出土遺物実測図

SB37

遺構 (第 101 図)

位置 AS・20 グリッド

重複関係 (古) SB37 → SB36 → SB38 → SB50 (新)

主軸方位 N - 8.0° - W

残存状況 SB36・SB38・SB50 により削平されている。平面形は東西に長い長方形を呈し、主軸 (南北) 幅 3.37m、直交 (東西) 幅 4.10m、深さ 37cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 22cm、深さ 5cm で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に 5cm 程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁中央に位置し、焚口付近は SB50 により削平されている。芯材は認められず粘土主体でつくられて

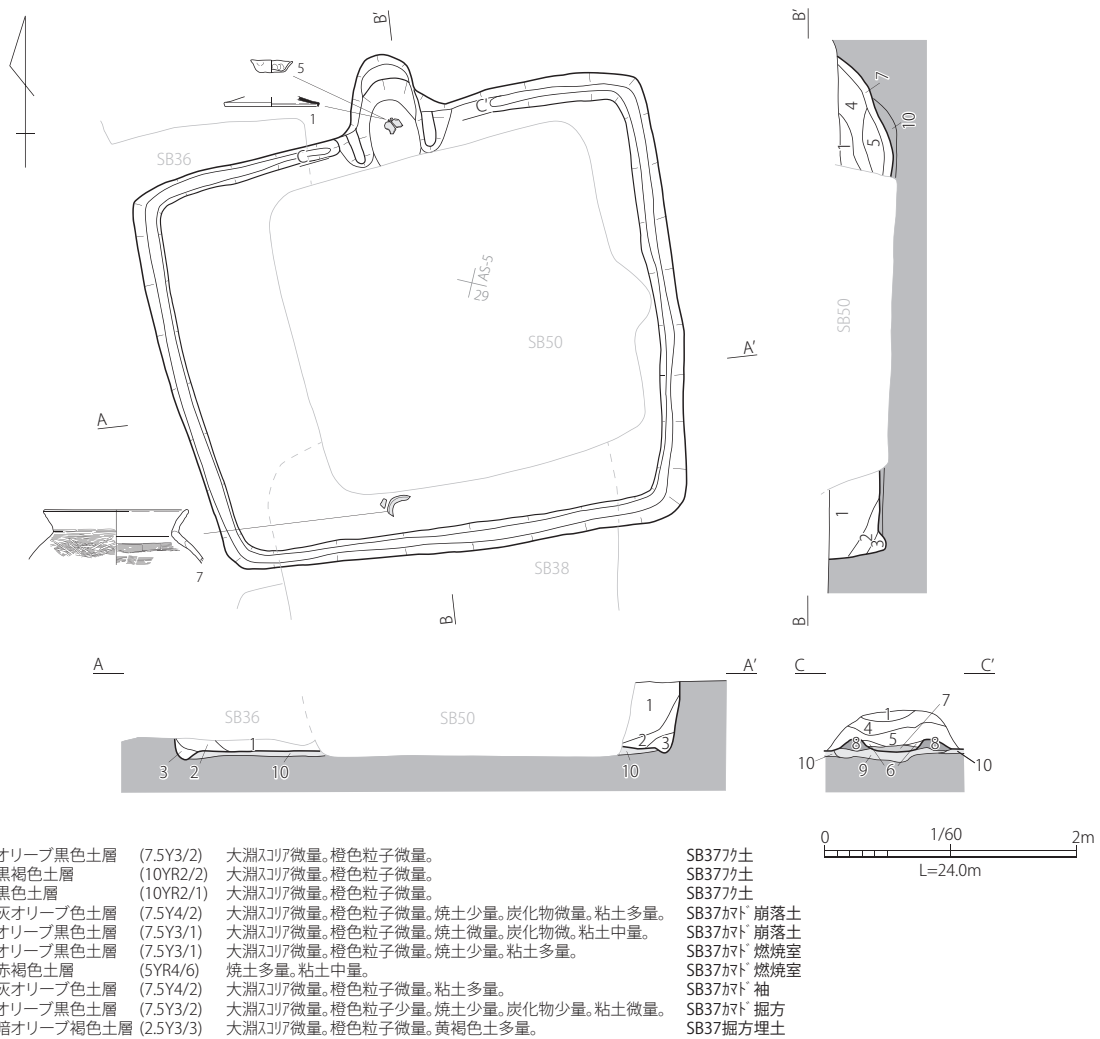
ている。検出範囲内で全長 85cm、幅 94cm、燃焼室幅 38cm を測る。燃焼室から手づくね (5)、摘蓋 (1) が出土している。

出土遺物 (第 102 図)

1 は摘蓋、2・3 は有台坏身の破片と考えられる。3 の胎土は砂っぽく色調も白色を呈する。4 は厚みや大きさから長頸壺の底部の可能性が高い。5 は手づくね、6 は駿東型長胴甕である。7 は駿東型球胴甕の破片である。口唇部内面は肥厚させない。外面はハケ目調整の後、ヘラミガキが施される。

所見

8 世紀中頃から後半と考えられるが、7 の球胴甕はもう少し古くなる可能性が高い。



第 101 図 SB37 平面図・断面図

SB38

遺構 (第103図)

位置 AS・30 グリッド

重複関係 (古) SB37 → SB36 → SB38 → SB50 (新)

主軸方位 N - 82.5° - E

残存状況 上面が削平されており立ち上がりが浅い。平面形は方形を呈し、主軸(東西)幅2.78m、直交(南北)幅2.65m、深さ13cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

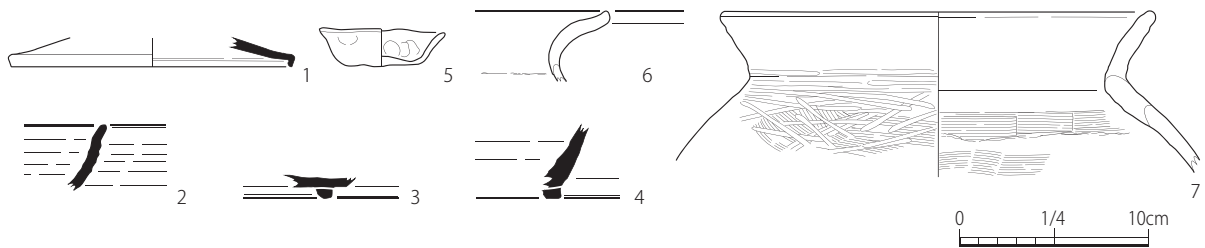
カマド 削平によりほとんど残存せず、東壁南端に燃焼室の一部とカマドの掘り方を検出したのみである。規模、構造等は不明。

出土遺物 (第104図)

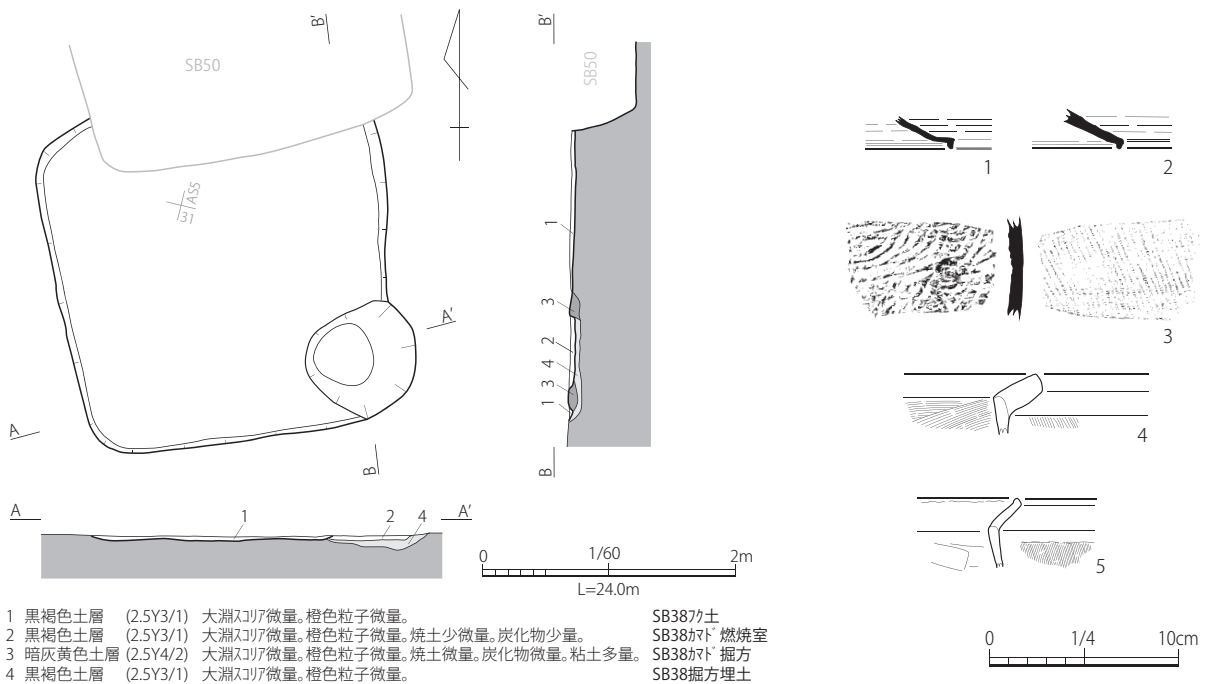
1・2は摘蓋の破片である。3の甕は断面セピア色で焼成がよく、外面は黒色を呈する。外面はタタキの後、部分的にカキメ状の調整が認められる。内面は青海波状の充て具痕が認められる。4は金雲母を多量に含む甲斐型の甕である。口縁部は短く厚い。5は小型甕の破片で外面は細かなハケ目、内面は板状工具によるナデが施される。

所見

4は9世紀後半から10世紀前半と考えられるが断定できない。



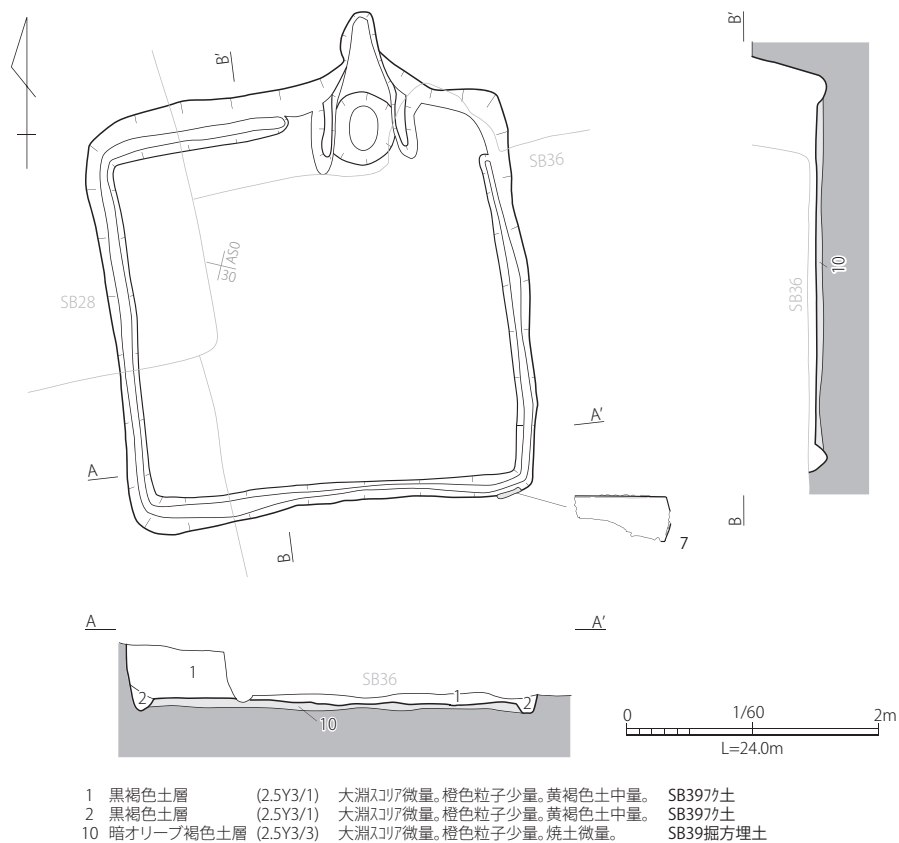
第102図 SB37 出土遺物実測図



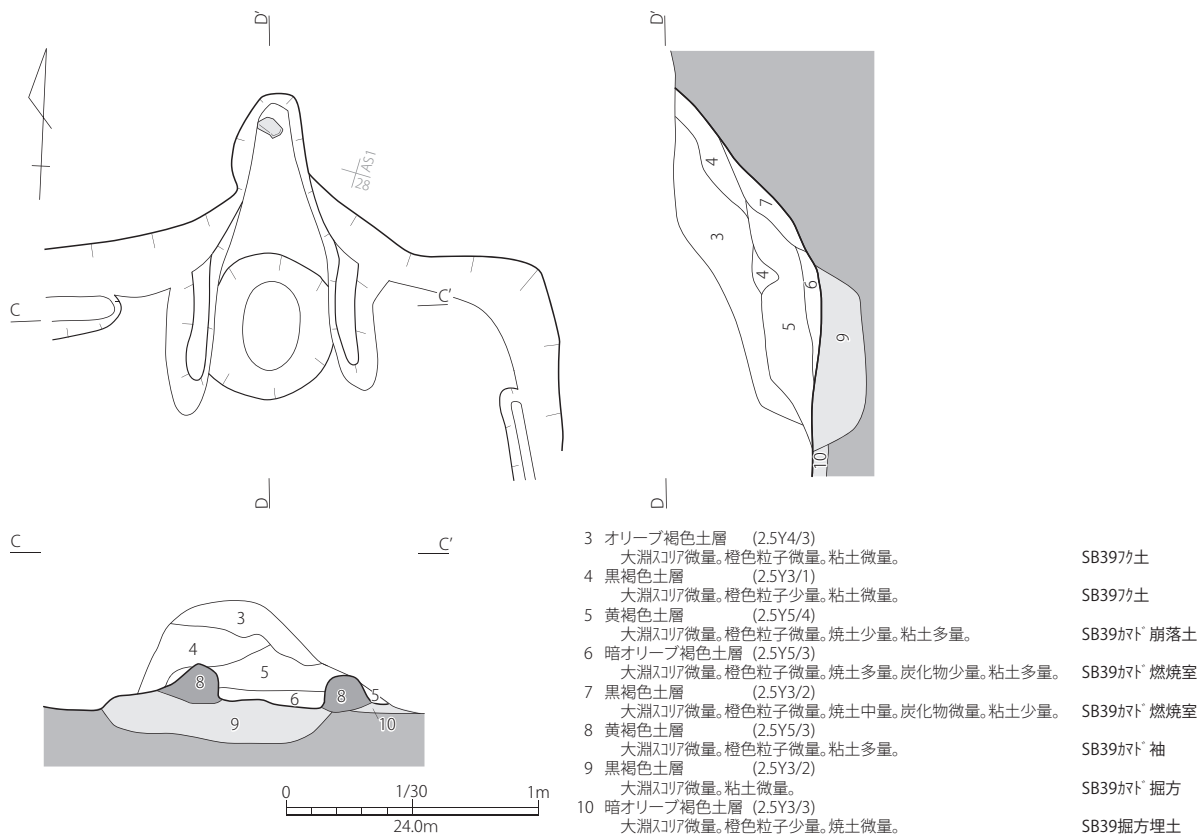
- 1 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。 SB387土
- 2 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物少量。 SB38カマド 燃焼室
- 3 暗灰黄色土層 (2.5Y4/2) 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土多量。 SB38カマド 掘方
- 4 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。 SB38掘方埋土

第103図 SB38 平面図・断面図

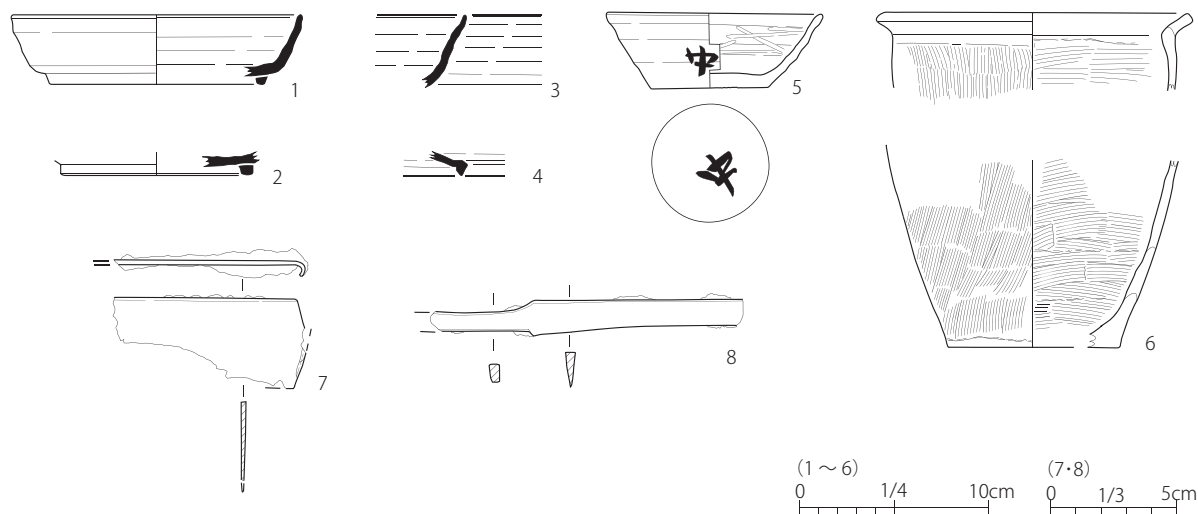
第104図 SB38 出土遺物実測図



第105図 SB39 平面図・断面図



第106図 SB39 カマド 平面図・断面図



第107図 SB39 出土遺物実測図

SB39

遺構 (第105・106図)

位置 AS・20 グリッド

重複関係 (古) SB39 → SB28・SB36 (新)

主軸方位 N - 5.5° - W

残存状況 SB28・SB36により覆土の大部分が削平されている。主軸(南北)幅3.34m、直交(東西)幅3.30m、深さ46cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅20cm、深さ15cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に5cm程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁やや東寄りに位置し、比較的良好に残存した。芯材は認められず粘土主体でつくられている。全長121cm、幅80cm、燃烧室幅44cmを測る。

出土遺物 (第107図)

1・2は有台坏身の破片である。1は口径の大ききの割りに対して器高が低い。5は駿東型坏である。外面と底部裏面に「中」の墨書が認められる。6は金雲母を多く含む小型の甲斐型甕である。内外面ともに粗いハケ目が特徴的である。7は基部の一部が残存する鎌である。8は刀子と考えられる。茎尻と切先の先端が欠損する。

所見

5の坏や6の甕などから9世紀前半頃と考えられる。

SB40

遺構 (第108・109図)

位置 AT・40 グリッド

重複関係 (古) SB43・SB53・SB57 → SB40 (新)

主軸方位 N - 19.0° - W

残存状況 南壁は調査区域外となり検出できなかった。平面形はやや不整形な方形を呈し、検出範囲内で主軸(南北)幅3.50m、直交(東西)幅4.68m、深さ28cmを測る。

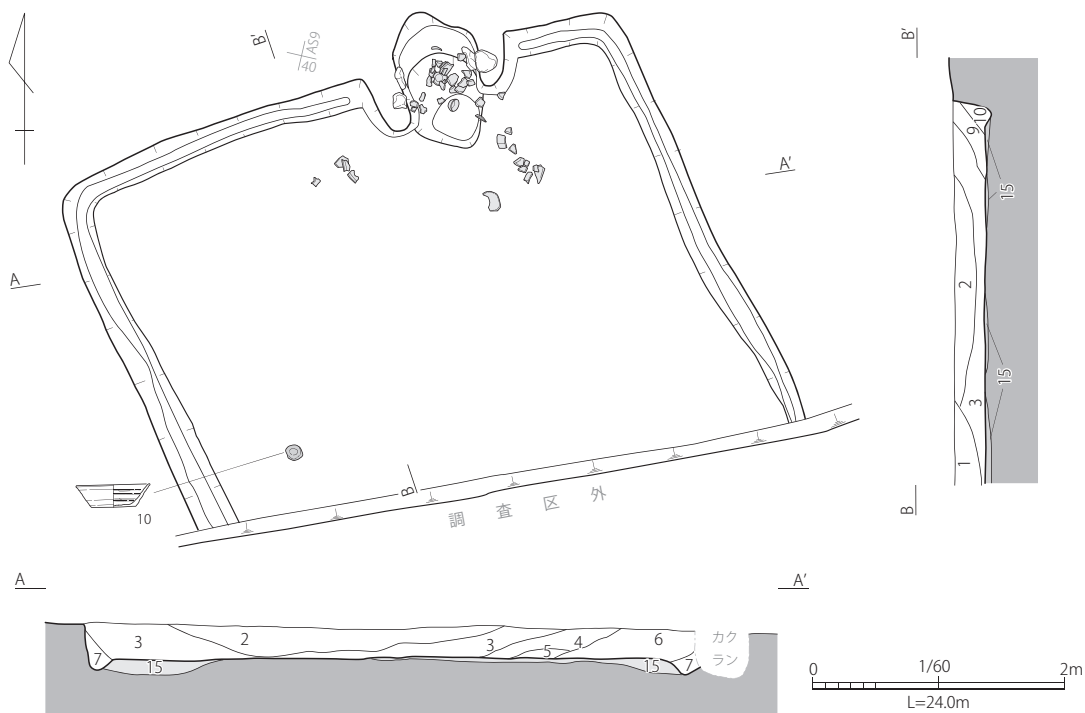
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅23cm、深さ8cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

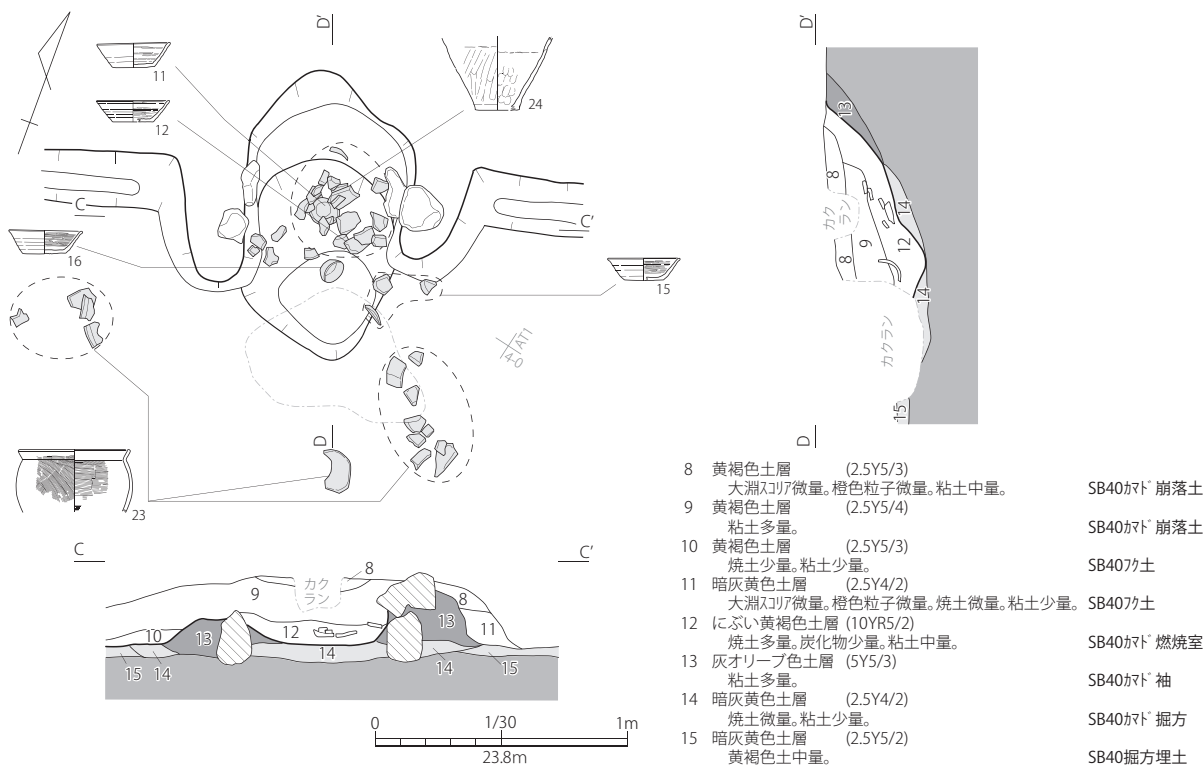
床 ほぼ全面に10cm程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁東寄りに位置する。両袖には芯材となる石材が残存し、全長114cm、幅128cm、燃烧室幅50cmを測る。燃烧室から駿東型坏(11・12・15・16)、駿東型長胴甕(24)が出土している。加えて、カマド前面において小型甕(23)が出土している。



- | | | |
|-----------------------|---------------------------------|------------|
| 1 黒色土層 (10YR2/1) | 大淵スリア少量。橙色粒子少量。 | SB407カ土 |
| 2 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スリア少量。橙色粒子少量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB407カ土 |
| 3 灰黄褐色土層 (10YR4/2) | 大淵スリア微量。橙色粒子少量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB407カ土 |
| 4 褐灰色土層 (10YR4/1) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。 | SB407カ土 |
| 5 暗黄灰色土層 (2.5Y5/2) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。粘土中量。 | SB407カ土 |
| 6 褐灰色土層 (10YR4/1) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。黄褐色土中量。 | SB407カ土 |
| 7 暗オリーブ褐色土層 (2.5Y3/3) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。 | SB407カ土 |
| 9 黄褐色土層 (2.5Y5/4) | 粘土多量。 | SB40カド 崩落土 |
| 10 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | 焼土少量。粘土少量。 | SB407カ土 |
| 15 暗黄灰色土層 (2.5Y5/2) | 黄褐色土中量。 | SB40掘方埋土 |

第108図 SB40 平面図・断面図



- | | | |
|-----------------------|---------------------------|------------|
| 8 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。粘土中量。 | SB40カド 崩落土 |
| 9 黄褐色土層 (2.5Y5/4) | 粘土多量。 | SB40カド 崩落土 |
| 10 黄褐色土層 (2.5Y5/3) | 焼土少量。粘土少量。 | SB407カ土 |
| 11 暗黄灰色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スリア微量。橙色粒子微量。焼土微量。粘土少量。 | SB407カ土 |
| 12 にぶい黄褐色土層 (10YR5/2) | 焼土多量。炭化物少量。粘土中量。 | SB40カド 燃烧室 |
| 13 灰オリーブ色土層 (5Y5/3) | 粘土多量。 | SB40カド 袖 |
| 14 暗黄灰色土層 (2.5Y4/2) | 焼土微量。粘土少量。 | SB40カド 掘方 |
| 15 暗黄灰色土層 (2.5Y5/2) | 黄褐色土中量。 | SB40掘方埋土 |

第109図 SB40 カマド 平面図・断面図

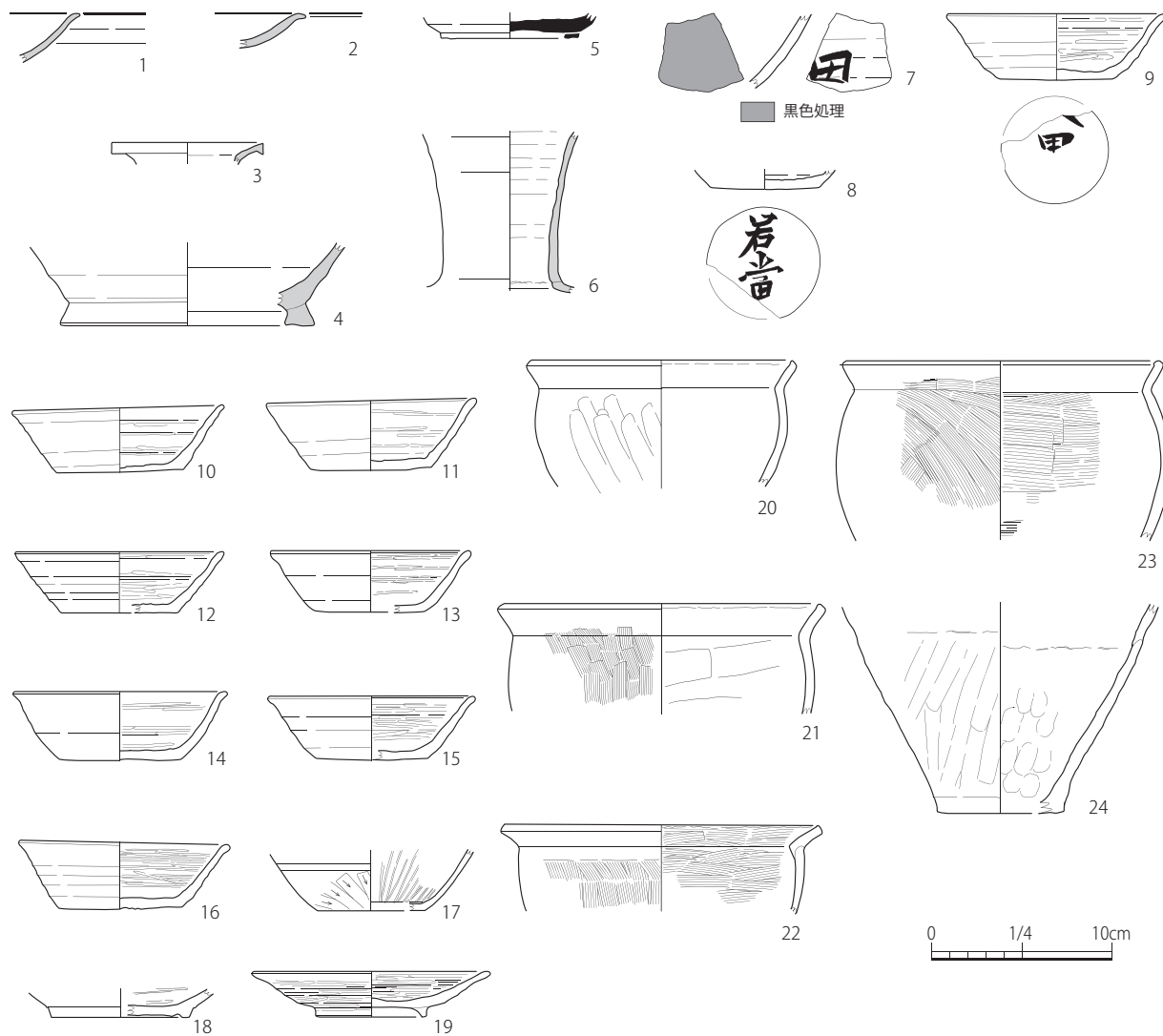
出土遺物（第110図）

1・3・4・6は灰釉陶器、2は緑釉陶器と考えられる破片である。1の碗は内面に釉葉が認められハケ塗りと考えられる。2は緑釉陶器の皿と考えられる。釉葉は内外面ともに認められる。口縁部端部が外反する。4・6は長頸壺と考えられ、同一個体の可能性がある。高台は断面台形を呈する。5は須恵器の有台坏身で、高台は低く扁平である。7から16は駿東型坏である。7・8・9には墨書が認められ、特に8の底部の墨書は「若當」と読むことが出来る。17は甲斐型坏である。胎土が精緻で表面に光沢をもつ。外面はナデ調整の後、底部付近をヘラケズリする。一方、内面は幅1から2mmのヘラミガキを放射状に施す。18は削り出し高台の坏である。19は高台付きの皿で胎土や内外面のヘラミガキなど駿

東型坏と共通する。20はナデ調整の小型甕である。頸部は緩やかに屈曲し口唇部内面を若干、内側に摘み上げる。21・23はハケ目調整の小型甕である。口唇部内側の摘み上げは20と共通する。21の内側は板状工具によるナデ調整であるが、23の内側はヨコハケ調整である。22は金雲母を多量に含む胎土の甲斐型の小型甕である。全体的に薄く口唇部は短く直線的に広がる。24は駿東型長胴甕と考えられるが、外面にハケ目調整が認められない。

所見

駿東型坏や灰釉陶器、甲斐型甕から9世紀前半と考えられる。



第110図 SB40 出土遺物実測図

SB42

遺構 (第 111・112 図)

位置 AS・30 グリッド

重複関係 (古) SB58 → SB42 → SB44・SB49 (新)

主軸方位 N - 3.0° - E

残存状況 SB44・SB49 に東壁の一部を削平されているものの遺存状況は良好である。平面形は南北に長い長方形を呈し、主軸(南北)幅4.14 m、直交(東西)幅3.37m、深さ 58cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 幅 25cm、深さ 10cm で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

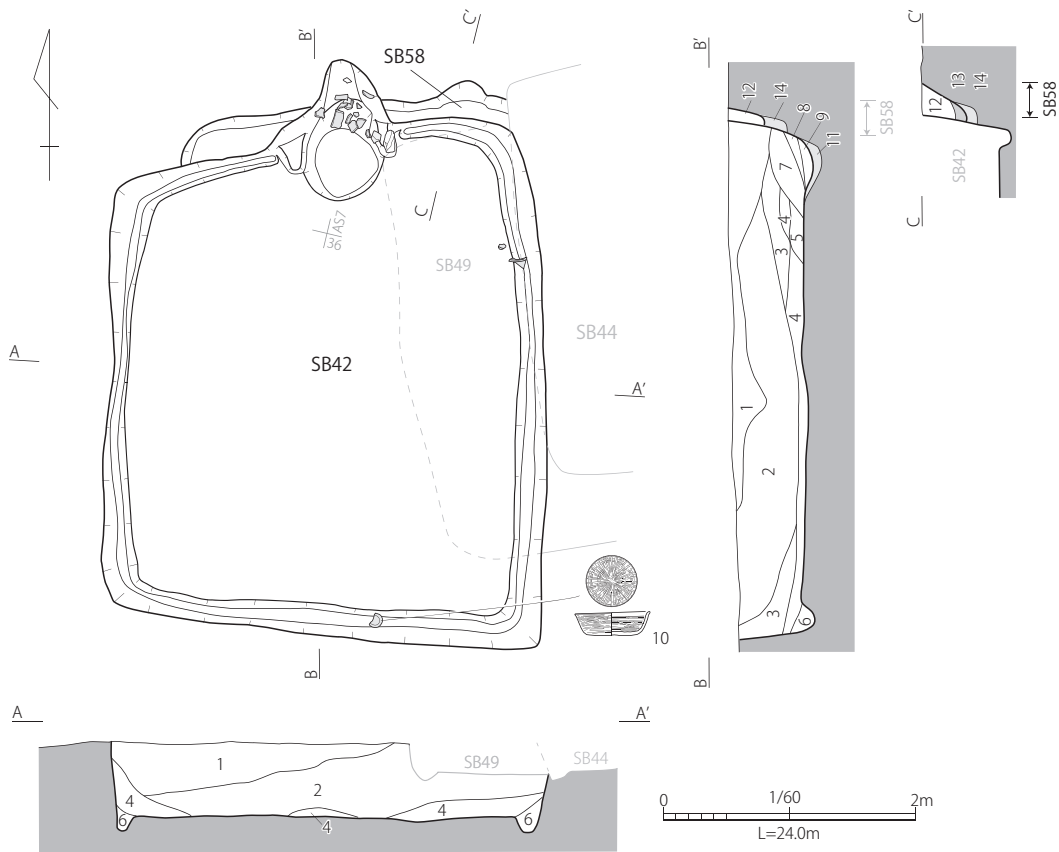
床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁中央に位置する。右袖には芯材となる石材

が残存し、全長114cm、幅92cm、燃焼室幅62cmを測る。燃焼室内から小型甕(12)、駿東型長胴甕(14・15)が出土している。

出土遺物 (第 113 図)

1 は灰釉陶器の皿である。高台は低く断面四角形で弱いナデ調整が認められる。内面に施釉の痕跡が認められる。2 は灰釉陶器の小型の壺である。施釉が厚く表面が若干、緑白を呈する。3 は須恵器の坏身、4 は有台坏身である。胎土が砂っぽく全体的に白っぽい。高台は細く比較的高い。5 は広口壺の胴部から肩部にかけての破片と考えられる。6 は環状紐をもつ蓋である。高さをもつ蓋で紐以外は須恵器の摘蓋と形態的に共通する。7・8 は甲斐型坏である。7 は特に器壁が薄い。外面底部はへ



- | | | |
|---------------------|------------------------------|-------------|
| 1 暗褐色土層 (10YR3/4) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。黄褐色土微量。焼土微量。 | SB427カ土 |
| 2 暗褐色土層 (7.5YR3/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。黄褐色土多量。 | SB427カ土 |
| 3 黒褐色土層 (7.5YR3/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。黄褐色土少量。 | SB427カ土 |
| 4 灰黄褐色土層 (10YR6/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。黄褐色土多量。 | SB427カ土 |
| 5 黒褐色土層 (10YR3/2) | 橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土中量。 | SB427カ土 |
| 6 黒褐色土層 (10YR3/2) | 黄褐色土中量。 | SB427カ土 |
| 7 灰黄褐色土層 (10YR6/2) | | SB427カ土 |
| 8 灰オリーブ褐色土層 (5Y4/2) | 焼土微量。粘土多量。 | SB427カ土 崩落土 |
| 9 褐色土層 (7.5YR4/4) | 焼土多量。炭化物少量。 | SB427カ土 崩落土 |
| 11 黒褐色土層 (10YR3/2) | 橙色粒子微量。黄褐色土微量。 | SB427カ土 燃焼室 |
| 12 暗褐色土層 (7.5YR3/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。黄褐色土中量。 | SB427カ土 掘方 |
| 13 黒褐色土層 (10YR3/2) | 焼土少量。炭化物少量。粘土多量。 | SB587カ土 |
| 14 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) | 黄褐色土中量。 | SB587カ土燃焼室 |
| | | SB58掘方埋土 |

第 111 図 SB42・58 平面図・断面図

ラケズリが施される。内面は幅1から2mmのヘラミガキが暗文状に二重に施される。9から11は駿東型坏である。底径が口径に対して比較的大きい。9の内面には甲斐型坏8と似た暗文状のヘラミガキが認められる。また、10・11の見込み部にも放射状のヘラミガキが認められる。12は小型甕である。底部の形態や胎土、ハケ目工具などは駿東型長胴甕と共通する。胴部はあまり張らず頸部はくの字に屈曲する。内外面ともに弱いハケ目が施される。13から15は駿東型長胴甕である。いずれも口縁部がやや反りながら外側へ広がる。口縁部がヨコナデされている。16は駿東型長胴甕と共通した特徴を持つ埴である。口縁部は短いものやや反りながら外側へ広がる。17は袋状鉄斧（無肩鉄斧）である。袋部と刃部幅がほぼ等しく中央部分にも括れ部をもたない。袋部基部の断面は方形を呈する。

所見

駿東型坏や甲斐型坏から8世紀末から9世紀初頭頃と考えられる。

SB58

遺構（第111図）

位置 AS・30グリッド

重複関係（古）SB58 → SB42 → SB44・SB49（新）

主軸方位 不明

残存状況 SB42に大部分を削平されていて北壁の一部のみを検出した。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸（南北）幅2.56m、直交（東西）幅0.30m、深さ24cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 検出範囲内では16cm程の厚さで貼り床が施されている。

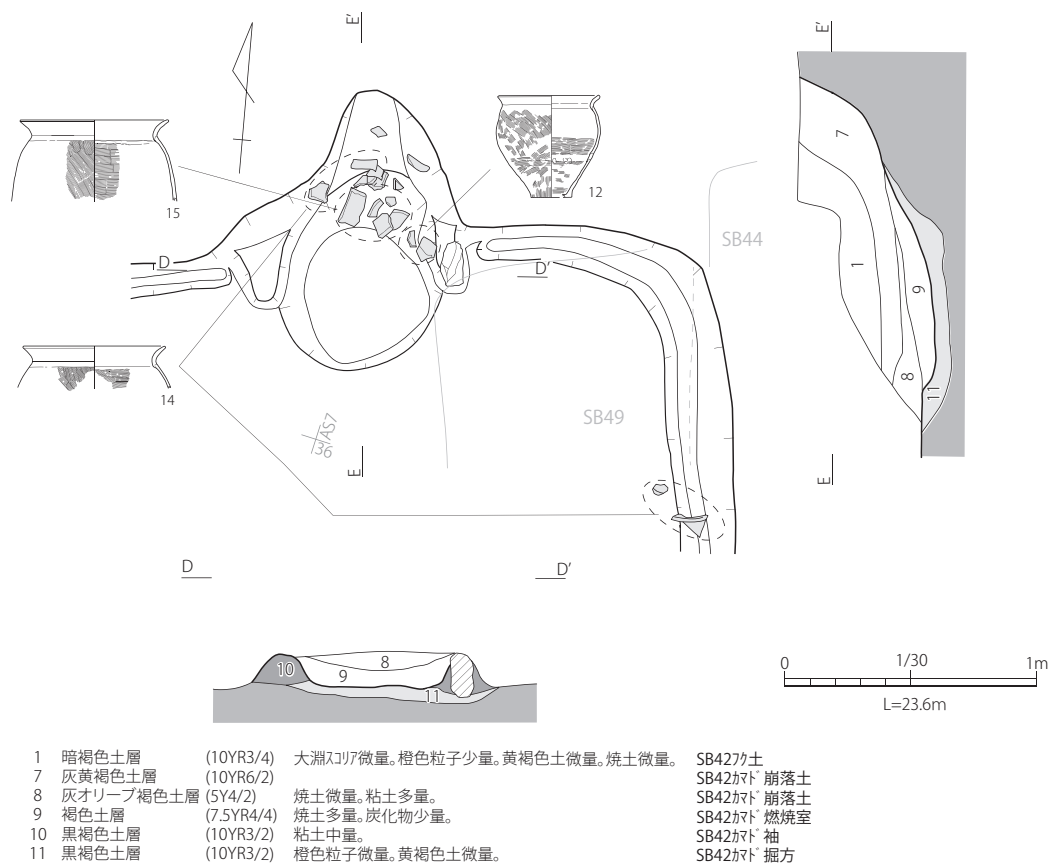
カマド 北壁に位置する。ほとんど削平されていて燃焼室の一部を検出したのみで、規模、構造等は不明である。

出土遺物

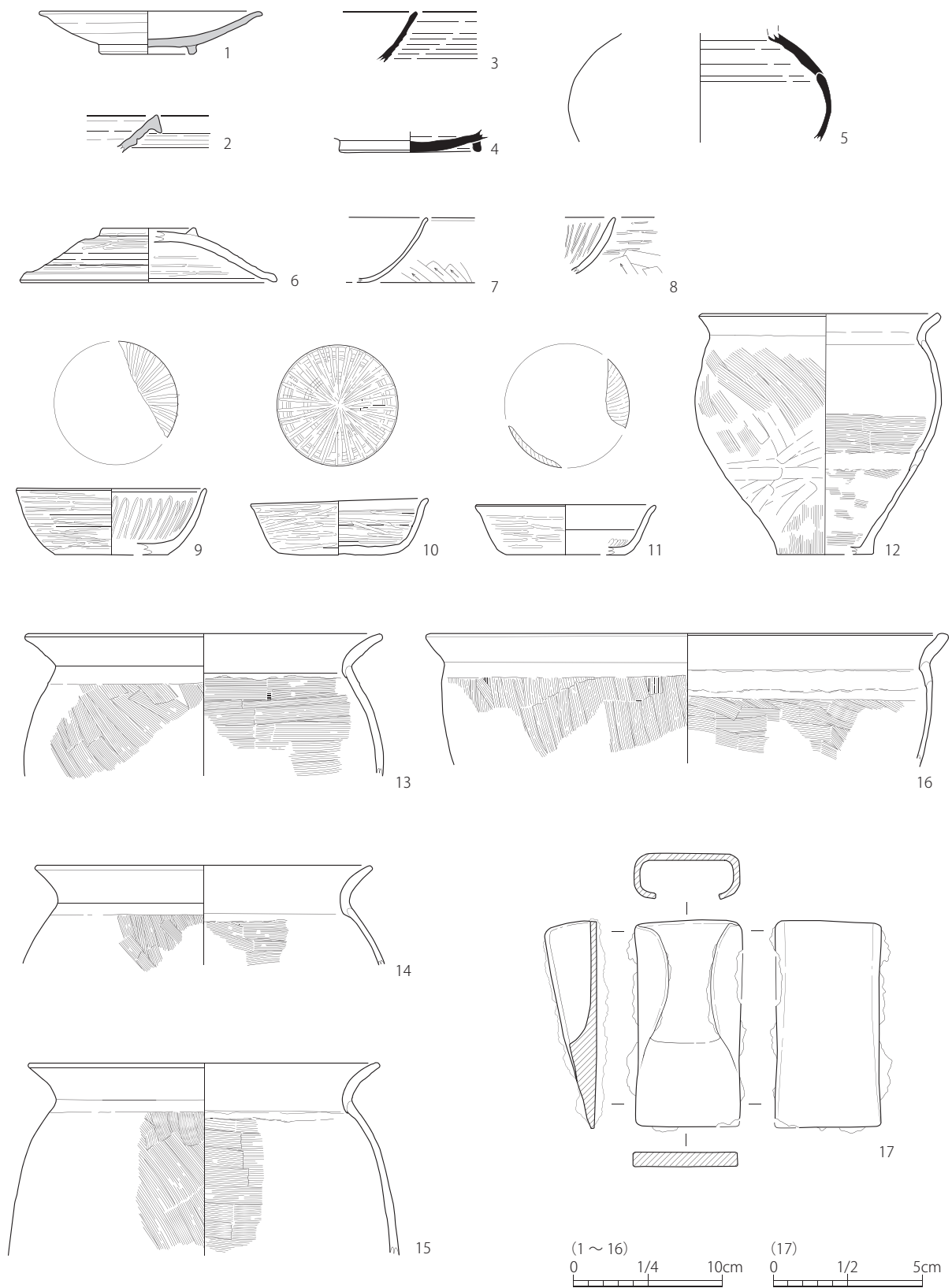
図化できる遺物はない。

所見

遺構の切り合い関係から8世紀の建物跡と考えられる。



第112図 SB42カマド 平面図・断面図



第 113 図 SB42 出土遺物実測図

SB43

遺構 (第114図)

位置 AS・40 グリッド

重複関係 (古) SB43 → SB40 (新)

主軸方位 N - 2.5° - E

残存状況 SB40により南東部が削平されている。平面形は方形を呈し、主軸(南北)幅4.03m、直交(東西)幅3.98m、深さ24cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅16cm、深さ5cmで全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に5cm程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 北壁東寄りに位置する。両袖は残存せず、燃

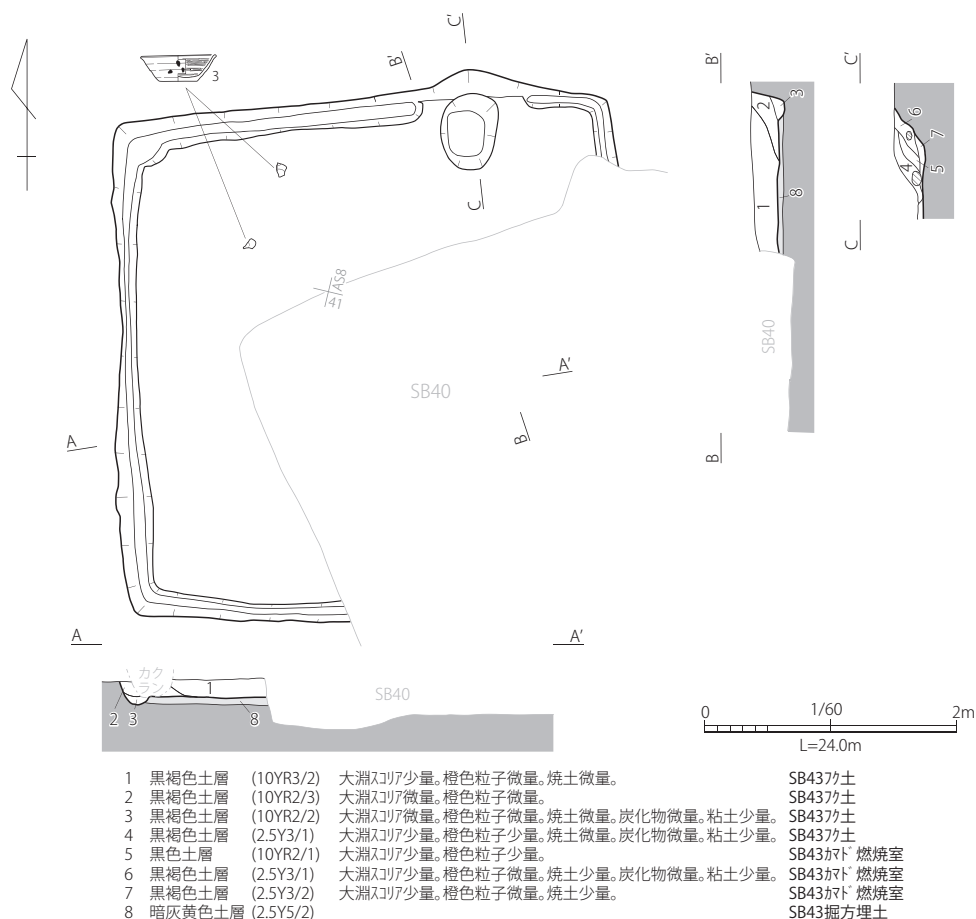
焼室の掘り込みのみ検出した。全長80cm、燃焼室幅45cmを測る。

出土遺物 (第115図)

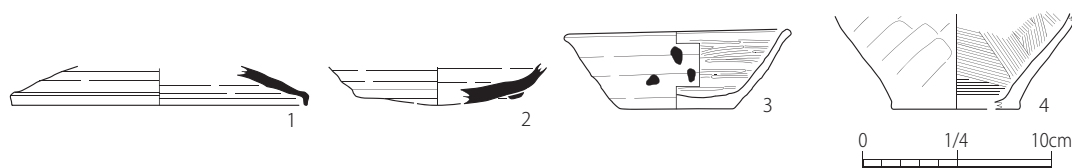
1は須恵器の摘蓋、2は有台坏身である。高台は低く全体的に丸みを帯びている。底部が高台よりも突出する。3は駿東型坏である。底部裏面に削り出し高台を意識したような痕跡が認められる。外面には墨書のような黒色の痕跡が認められるが判然としない。4は駿東型長胴甕の底部である。底部からやや反りながら立ち上がる。外面は板状工具によるナデ、内面はハケ目調整が施される。

所見

切り合いと1・2から8世紀後半と考えられる。



第114図 SB43 平面図・断面図



第115図 SB43 出土遺物実測図

SB44

遺構 (第 116 図)

位置 AS・30 グリッド

重複関係 (古) SB45・SB49 → SB44 (新)

主軸方位 N - 7.5° - W

残存状況 上面が削平されており、立ち上がりが浅い。
平面形は方形を呈し、主軸 (南北) 幅 3.50m、直交 (東西) 幅 3.16m、深さ 15cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 18cm、深さ 4cm の壁溝が、北東コーナーが途切れる状況で確認される。

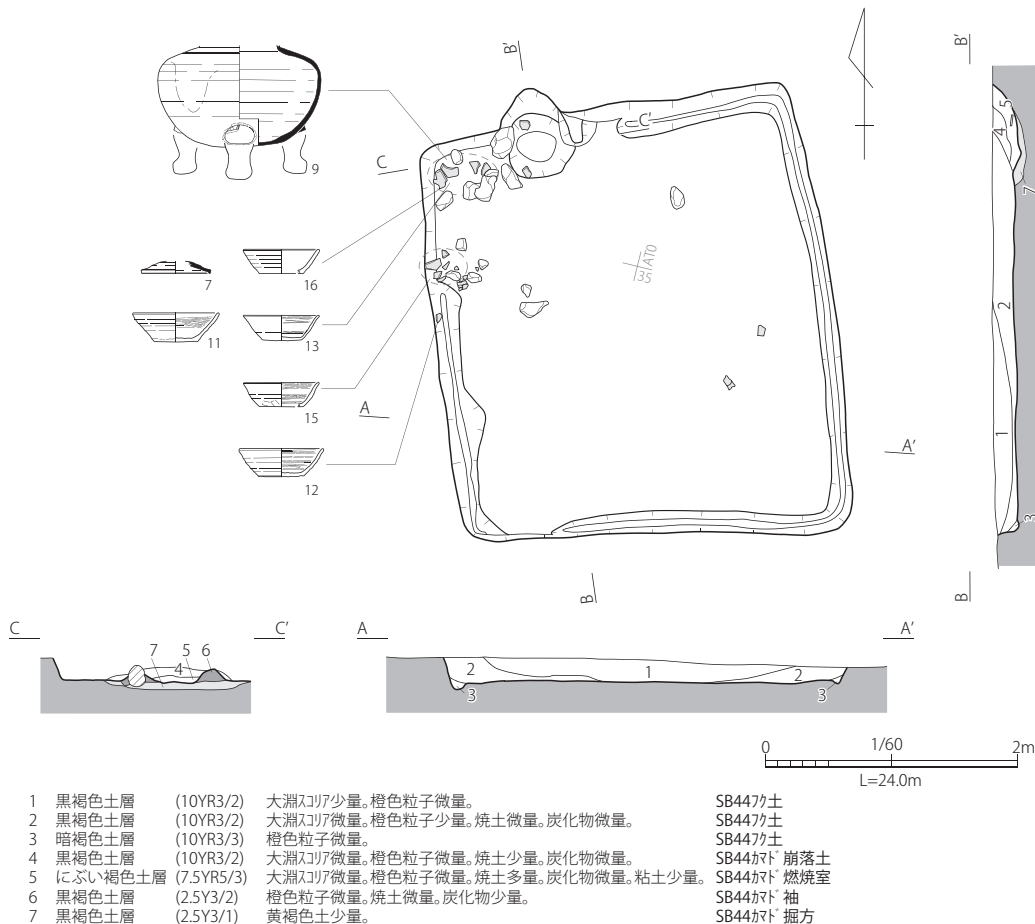
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 北壁西寄りに位置する。左袖には芯材となる石材が残存する。全長 70cm、幅 92cm、燃焼室幅 38cm を測る。カマドに近い北東部の床面には石材が点在し、この周辺から摘蓋 (7)、足付き短頸壺 (9)、駿東型坏 (11 ~ 13、15 ~ 16) が出土している。

出土遺物 (第 117 図)

1 から 6 は灰釉陶器である。1 から 4 は碗の破片で口縁部が外反するのが特徴である。5 は皿で高台は内面が強くナデられ内湾し、高い三日月高台を呈する。6 は小型の壺である。口縁部が大きく外反し、外面に面をもつ。7 は須恵器の摘蓋である。口径が小さいことから壺などの蓋と考えられる。9 は足付き短頸壺である。足部分は残存しないものの外面に残る剥離痕から足付きと判断した。胴部が大きく膨らみ肩部から頸部にやや直線的な形を示す。外面には自然釉が認められる。10 から 16 は駿東型坏である。口径に対して底径が小さく最終段階に近い形態を示す。10 の内面全面には放射状のヘラミガキが比較的細かく施される。12 の底部は削り出し高台を意識したかのようなヘラケズリが認められる。また、14・15 の外面のヘラケズリは甲斐型坏からの影響と考えられる。17 は胎土に金雲母を多量に含む甲斐型の小型甕である。口縁部は短いものの比較的薄く直線的であ



第 116 図 SB44 平面図・断面図

る。内外面にハケ目調整が施される。18・19は小型の甕である。口唇部内側を若干内側に突出させる。全面ナデ調整である。20は駿東型長胴甕である。頸部は大きく屈曲せず、緩やかにカーブを描きながら口縁部に至る。ハケ目調整ではなく内外面ともに板状工具などによるナデ調整である。

所見

9世紀後半と考えられる。

SB45

遺構 (第118・119図)

位置 AT・30グリッド

重複関係 (古) SB45 → SB44 (新)

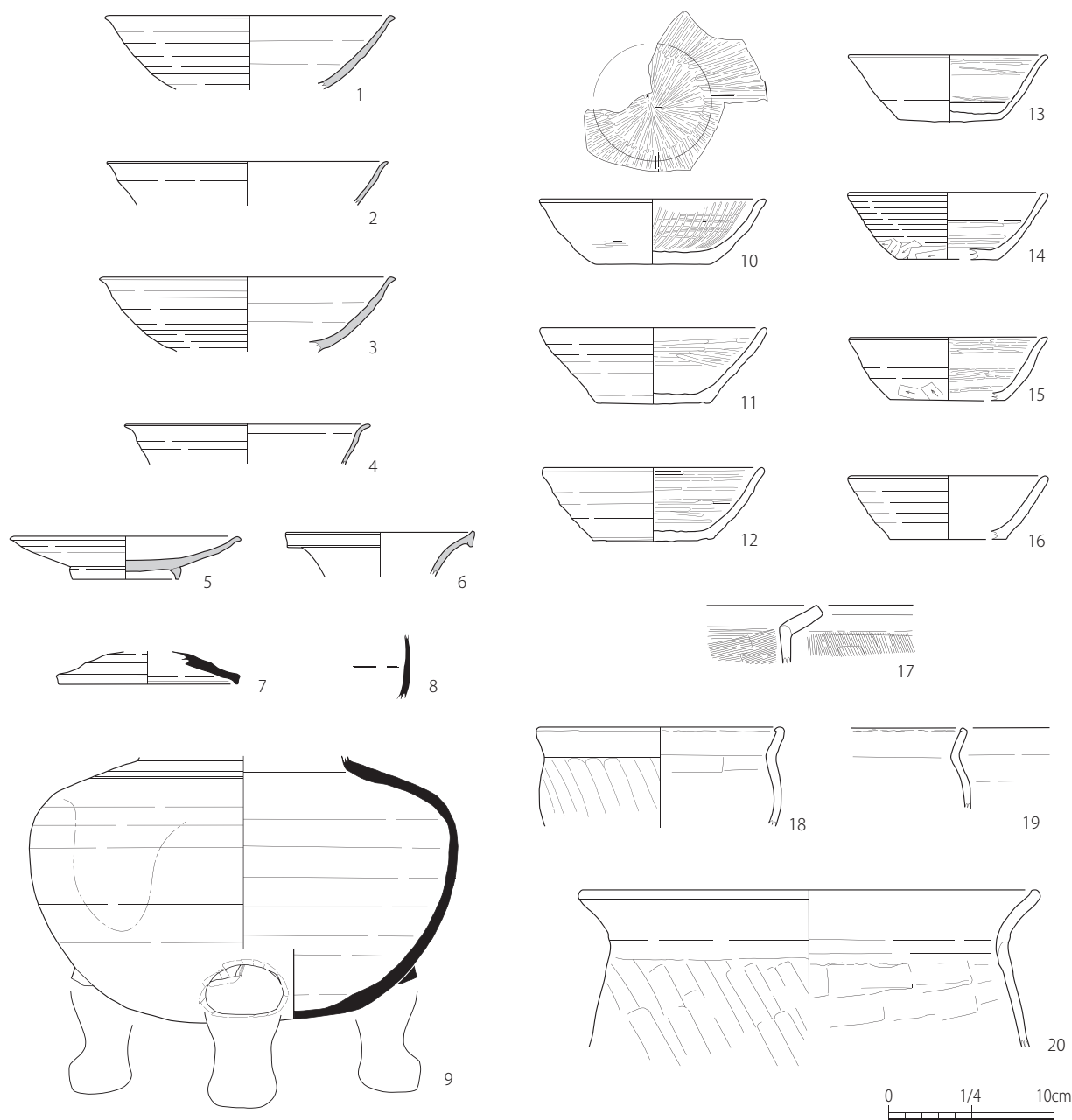
主軸方位 N - 79.0° - E

残存状況 南西部の上層をSB44に削平されているものの遺存状況は良好である。平面形は方形を呈し、主軸(東西)幅3.00m、直交(南北)幅2.96m、深さ40cmを測る。

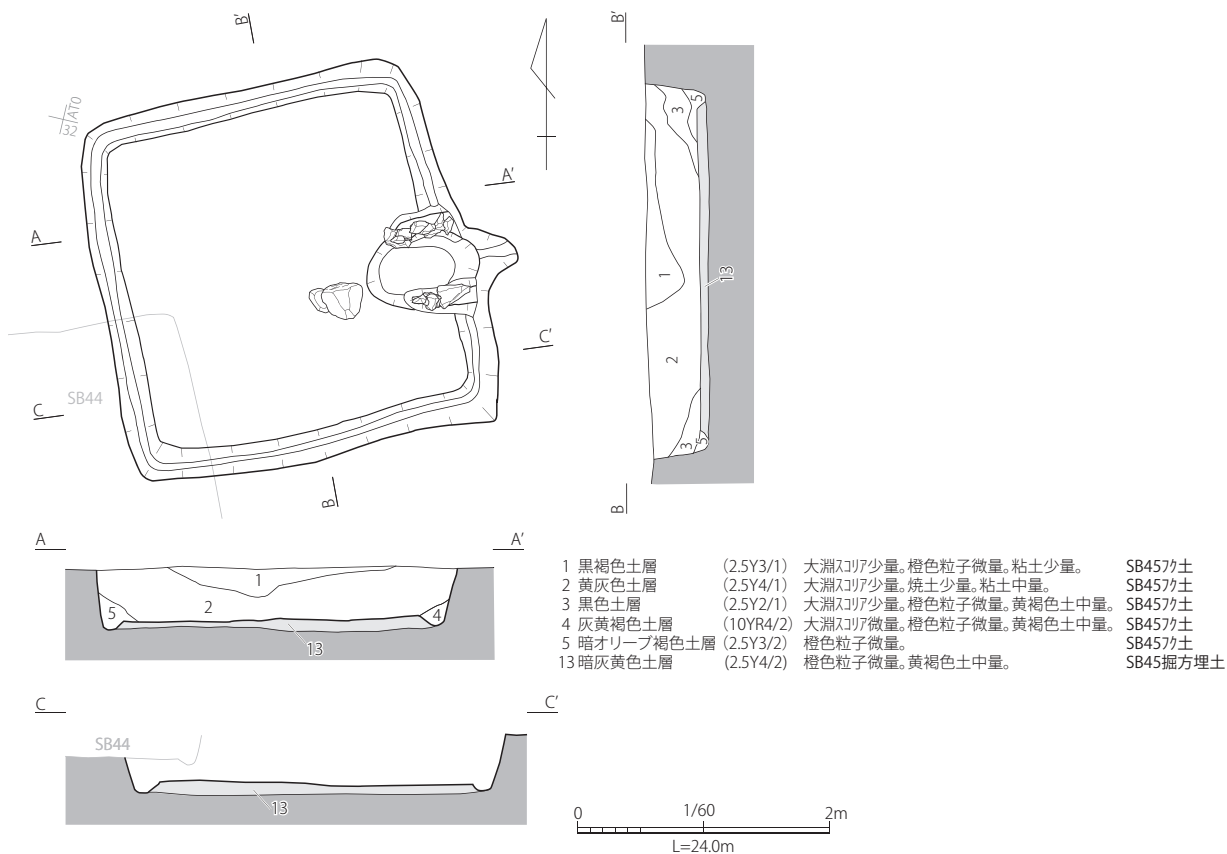
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅25cm、深さ9cmで、全体的に確認される。

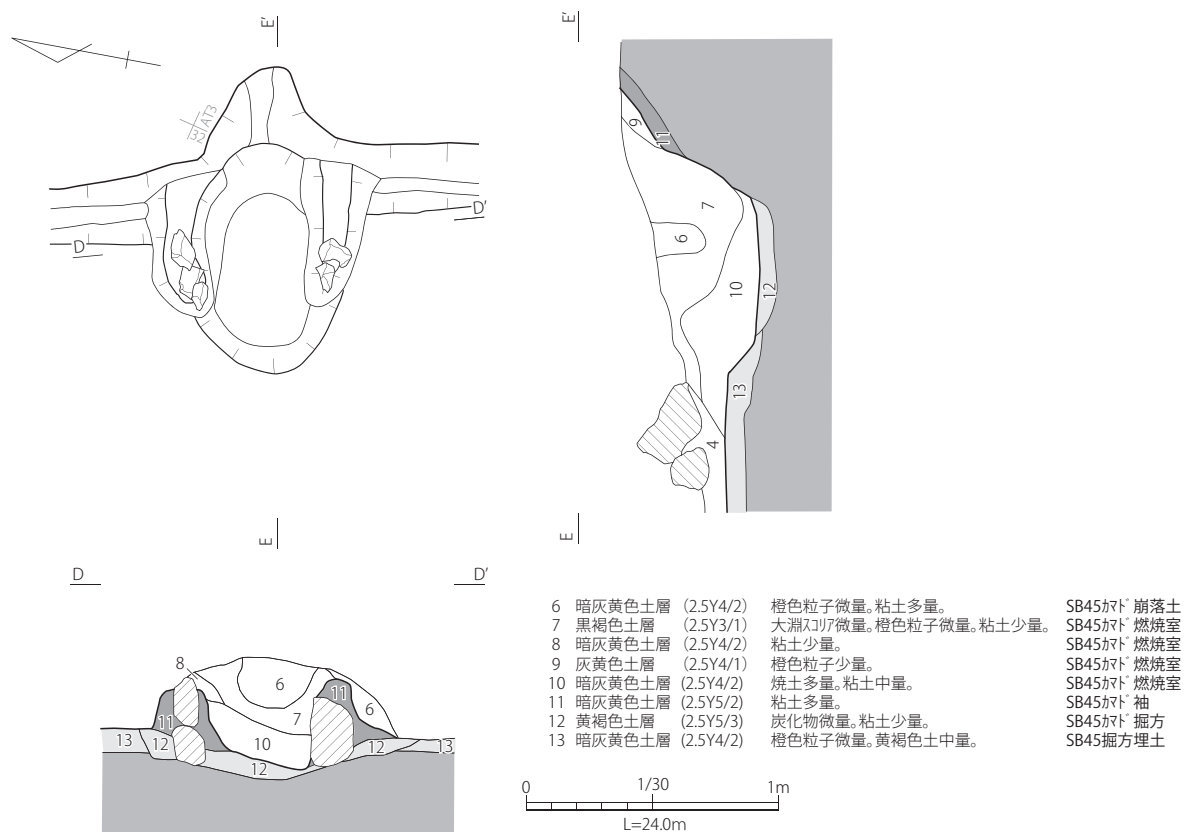
柱穴 確認されない。



第117図 SB44 出土遺物実測図



第118図 SB45 平面図・断面図



第119図 SB45 カマド 平面図・断面図

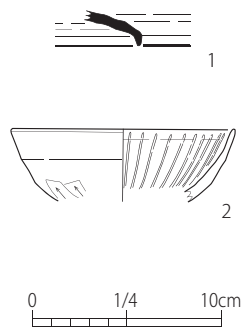
床 ほぼ全面に6cm程の厚さで貼り床が施されている。
カマド 東壁中央に位置し、両袖内には燃焼室を囲むように複数の石材が配置されていた。焚口手前の床面には比較的規模の大きい石材が検出されており、焚口に高架された可能性が考えられる。全長121cm、幅81cm、燃焼室幅36cmを測る。

出土遺物 (第120図)

1は須恵器の摘蓋、2は甲斐型環を模倣した駿東型環である。甲斐型環の特徴である底部外面のヘラケズリや内面の放射状のヘラミガキが認められるものの器壁が厚く胎土も異なることから駿東型環とした。

所見

8世紀から9世紀と考えられるが判然としない。



第120図 SB45 出土遺物実測図

SB46

遺構 (第121・122図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古) SB47 → SB46 → SB48 (新)

主軸方位 N - 7.0° - W

残存状況 東側は調査区域外、南壁はSB48に削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸(南北)幅2.54m、直交(東西)幅1.76m、深さ44cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗灰褐色土。

壁溝 幅20cm、深さ10cmの壁溝が、全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に4cm程の厚さで貼り床が施されている。
カマド 北壁に位置し、東側は調査区域外となり右袖は検出されなかった。検出範囲内で全長94cm、燃焼室幅34cmを測る。左袖付近から駿東型環(9・10)が出土している。

出土遺物 (第123図)

1から6は灰釉陶器である。1・3は皿である。1の高台は摩滅のため、判然としないが低い角高台に近い。2・4・5は碗である。2・5は1・3の皿に比べて器壁が薄い。その一方で4は全体的に器壁が厚い。高台は内面がよくナゲられ、内湾した三日月高台を呈する。6は段皿である。口縁部近くで垂直に立ち上がり段を形成する。全体的に直線的に作られている。高台は断面が四

角で高い角高台を呈する。底部には回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。7・8は甲斐型環である。7は底部が小さく器壁が薄い。外面のヘラケズリは上半部にまで達しており、凹凸が目立つ。内面にはヘラミガキの痕跡は認められない。外面と底部裏面に墨書が認められ、両方とも「中」と判読できる。一方、8の甲斐型環は胎土が精緻で光沢を持つ。外面はヘラケズリ、内面は放射状のヘラミガキが認められる。9・10は駿東型環である。9は外面にノタ目の痕跡がほとんど確認されず、平坦なつくりである。10は鉢とされる大きさであるが、胎土や色調は駿東型環と共通する。黒色処理はされていないものの外面底部のヘラケズリは甲斐型の影響とも考えられる。底部には打ち掻きによる穿孔が認められる。11は駿東型長胴甕である。頸部は緩やかに屈曲し口唇部内面を若干摘みあげる。外面は板状工具によるナゲである。12は甲斐型甕である。金雲母の粒子を多量に含む。器壁は全体的に薄く頸部はくの字に屈曲し短く薄い直線的な口縁部がのびる。内外面ともに粗いハケ目調整が施される。13は布目瓦の破片である。内面には格子状のタタキの痕跡が認められる。14は刀装具や鑿子とも考えられるが判断が付かない。

所見

6の段皿や甲斐型土器から9世紀後半頃と考えられる。

SB47

遺構 (第 121 図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古) SB47 → SB46 → SB48 (新)

主軸方位 N - 9.0° - W

残存状況 東側は調査区域外、南壁は SB46 に削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸 (南北) 幅 2.20m、直交 (東西) 幅 0.68m、深さ 23cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

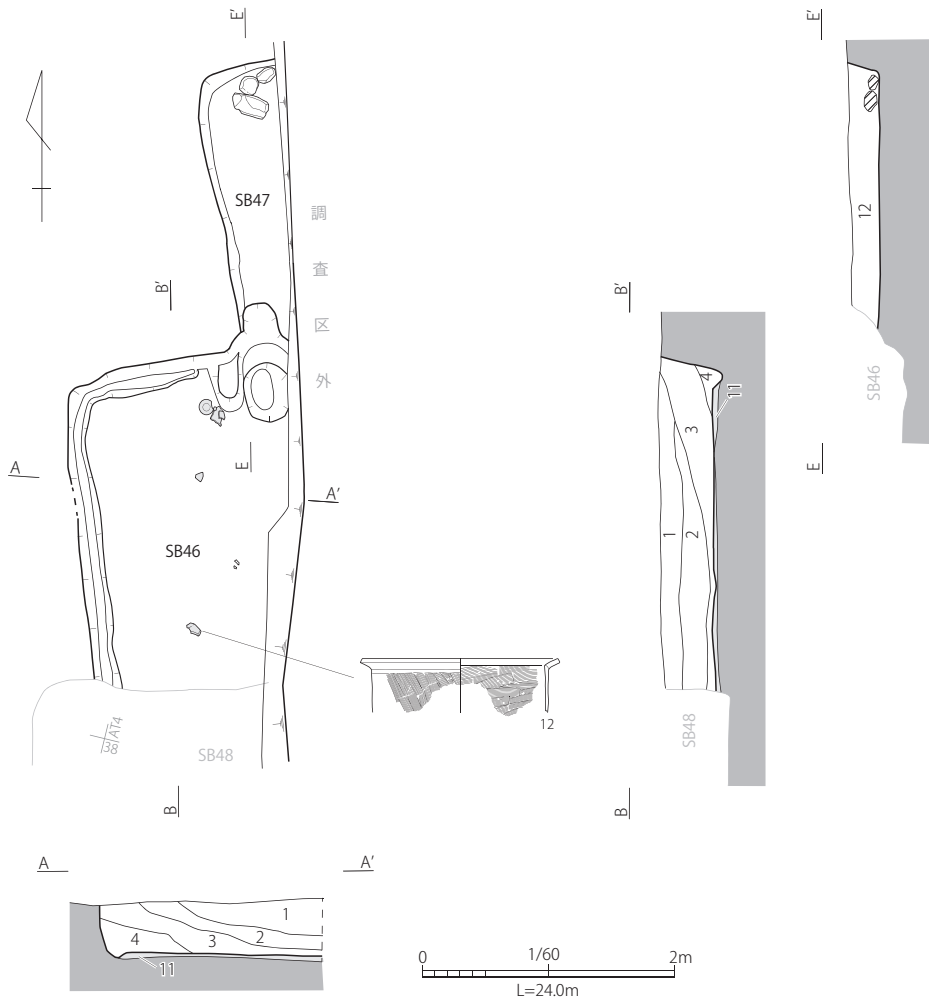
カマド 確認されない。

出土遺物

図化できる遺物は無い。

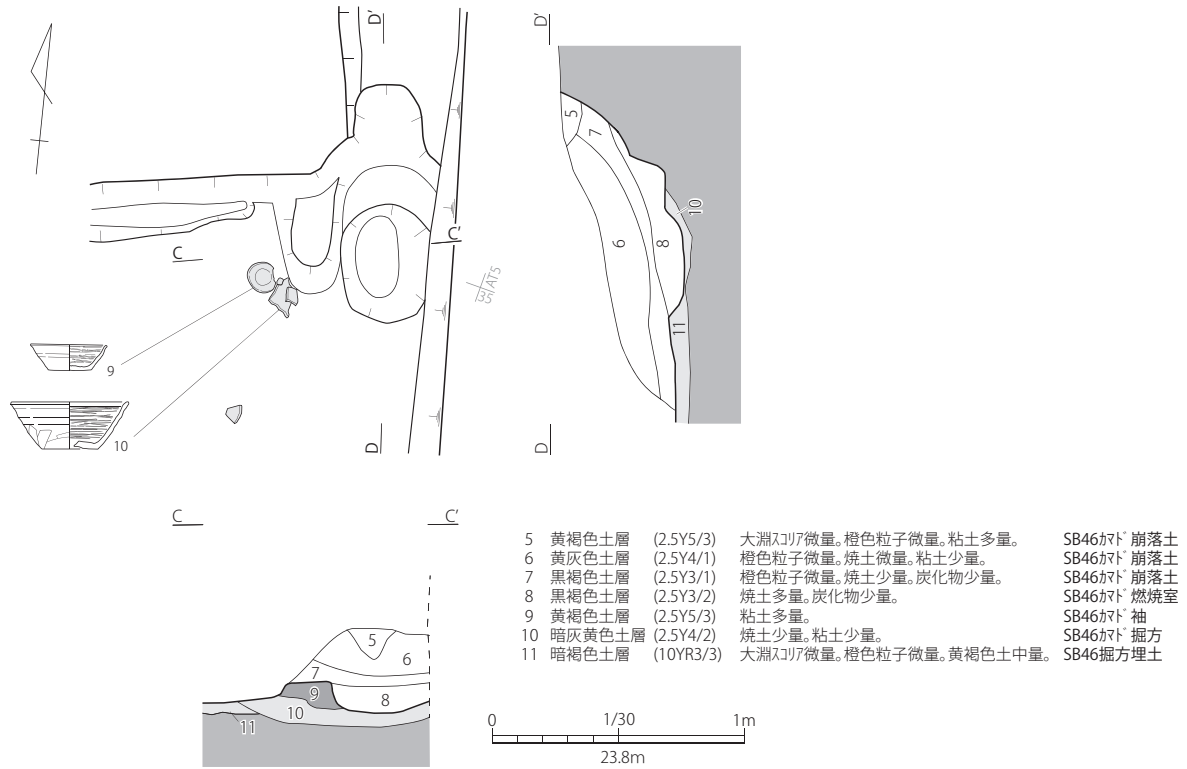
所見

遺構の切り合い関係から 9 世紀後半以前の建物跡と考えられる。

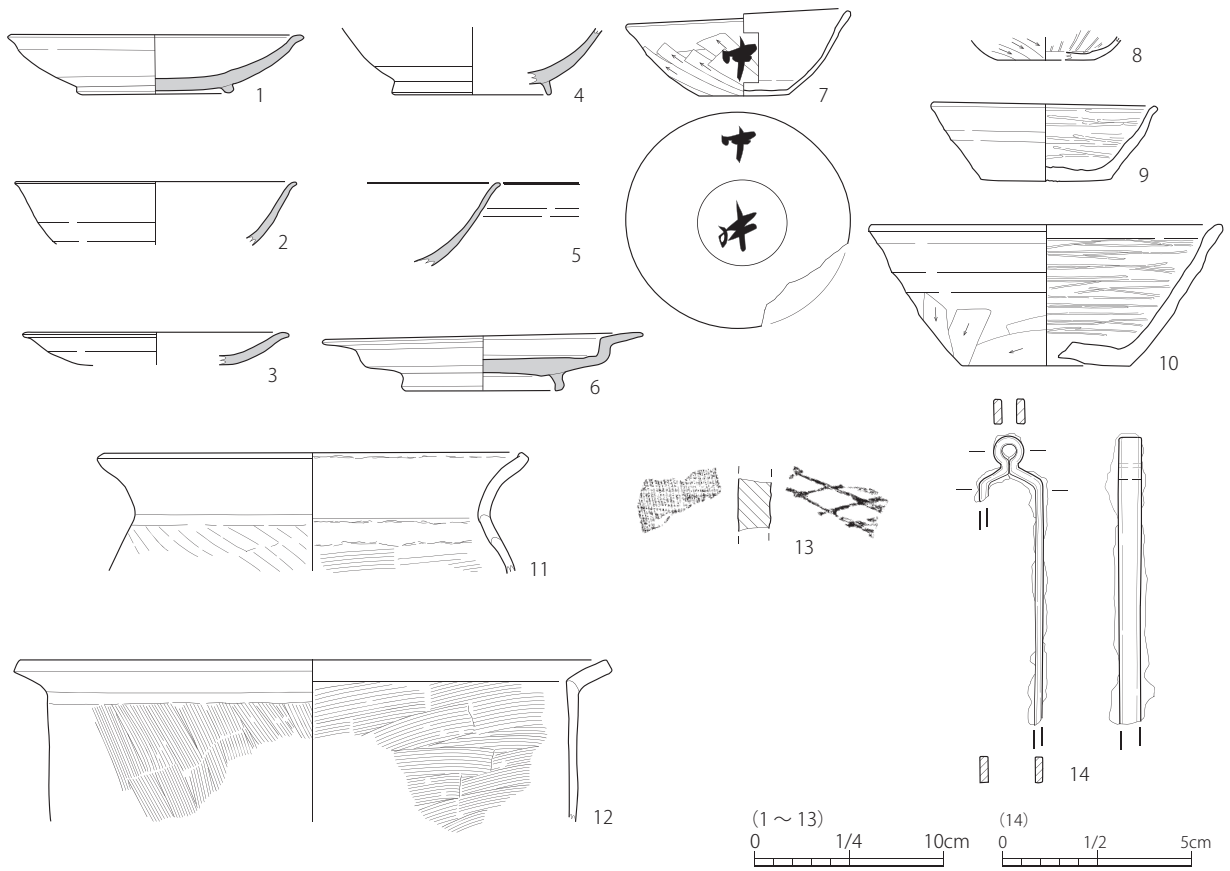


- | | | |
|--------------------|----------------------------------|----------|
| 1 暗灰褐色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。焼土微量。炭化物微量。 | SB467土 |
| 2 暗灰褐色土層 (2.5Y4/2) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB467土 |
| 3 黄灰色土層 (2.5Y4/1) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。焼土中量。炭化物少量。粘土少量。 | SB467土 |
| 4 黒褐色土層 (2.5Y3/4) | 橙色粒子微量。炭化物微量。 | SB467土 |
| 11 暗褐色土層 (10YR3/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。黄褐色土中量。 | SB46掘方埋土 |
| 12 黒褐色土層 (2.5Y5/3) | 大淵スコリア微量。橙色粒子少量。黄褐色土少量。 | SB477土 |

第 121 図 SB46・47 平面図・断面図



第122図 SB46カマド 平面図・断面図



第123図 SB46 出土遺物実測図

SB48

遺構 (第 124 図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古) SB47 → SB46 → SB48 (新)

主軸方位 N - 2.5° - W

残存状況 東側は調査区域外となり検出されていない。

平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主

軸 (南北) 幅 3.12m、直交 (東西) 幅 1.90m、深さ 42

cmを測る。床面中央付近から紡錘 (10) が出土し、他に刀子 (11)、鉄鏃 (12~15) などの鉄製品が他の建物跡と比べて多く出土している。

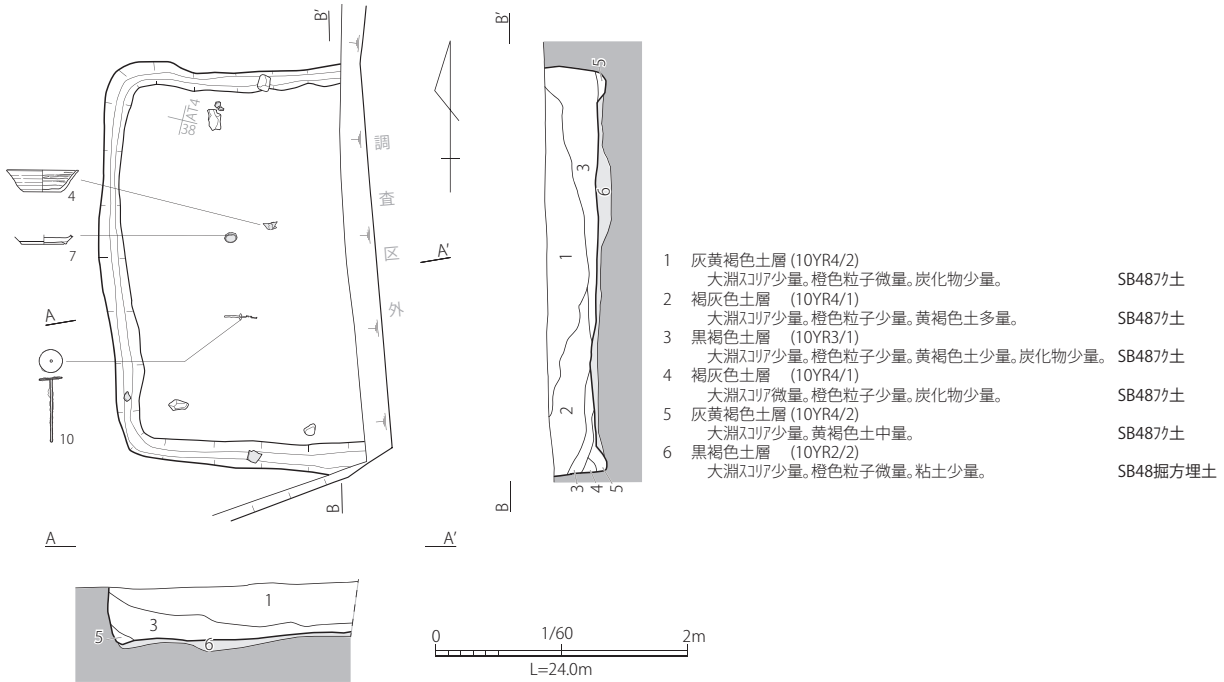
覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 20cm、深さ 6cm で、全体的に確認される。

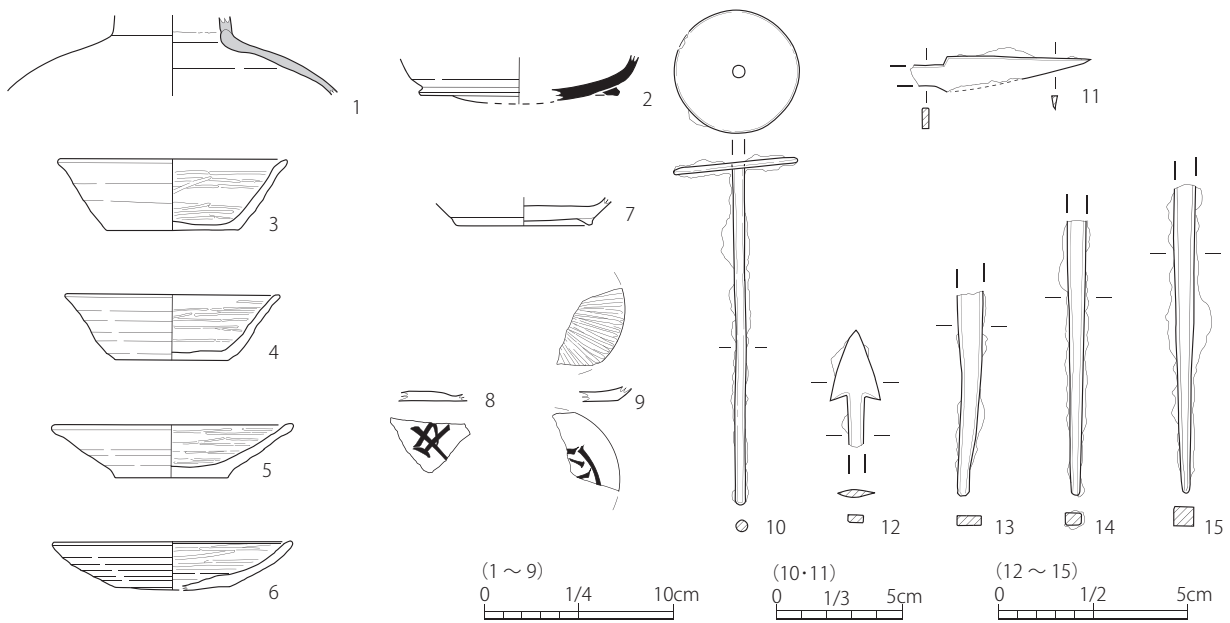
柱穴 確認されない。

床 ほぼ全面に 8cm 程の厚さで貼り床が施されている。

カマド 確認されない。



第 124 図 SB48 平面図・断面図



第 125 図 SB48 出土遺物実測図

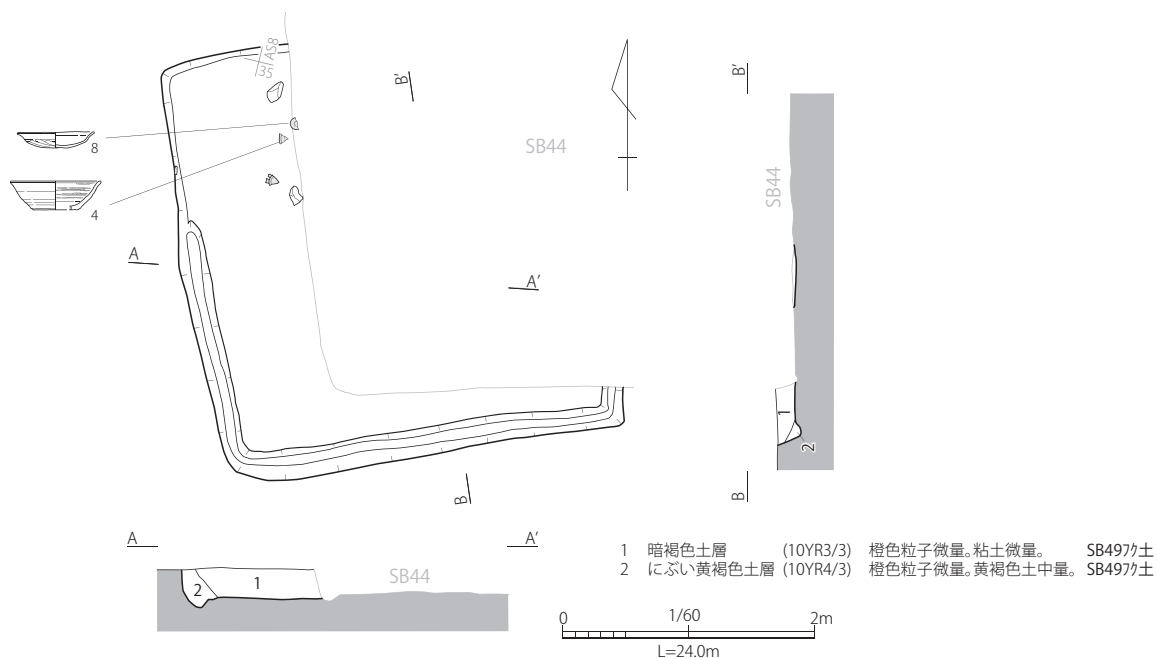
出土遺物 (第 125 図)

1は灰釉陶器である。壺や瓶の肩部から頸部の破片である。肩は張らずに丸みをもつ形態である。残存部の外面全面に釉が認められる。2は須恵器の有台坏身の底部である。回転ヘラケズリの後、高台を貼り付ける。胎土が砂っぽく色調は灰色から白色を呈する。3・4は駿東型坏である。駿東型坏の中でも小型の部類といえる。調整は比較的丁寧である。5は胎土・色調ともに駿東型坏と共通するものの底部が厚く底部が突出している。6も5同様、駿東型坏と共通する調整・胎土だが全体的に内湾しながら口縁部に至るなどの特徴をもつ。形状は甲斐

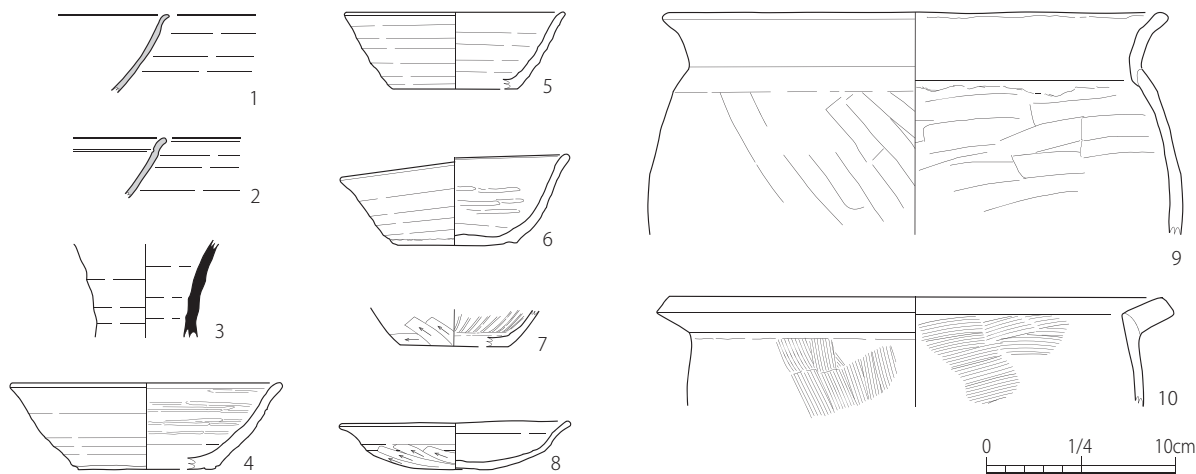
型坏の影響の可能性もある。7は須恵器の有台坏身の模倣の土師器である。高台は三角形で低い。8・9は駿東型坏の底部裏面に墨書の認められるものである。8は「中」と判読できるものの9は判然としない。10は鉄製紡錘である。紡茎は紡輪より先が欠損する。紡輪は直径4.9cmで断面が長方形で扁平な形状を示す。11は刀子の刃部である。研ぎ減りにより長さが短くなっている。12は尖根三角形式鉄鎌である。13から15は鉄鎌の茎部と考えられる。

所見

時期の異なる遺物があるが9世紀後半と考えられる。



第 126 図 SB49 平面図・断面図



第 127 図 SB49 出土遺物実測図

SB49

遺構 (第 126 図)

位置 AS・30 グリッド

重複関係 (古) SB42・SB58 → SB49 → SB44 (新)

主軸方位 N - 7.5° - W

残存状況 東側を中心に SB44 により削平されあまり遺存状況は良好でない。平面形は方形を呈し、主軸 (南北) 幅 3.43m、直交 (東西) 幅 3.20m、深さ 23cm を測る。

覆土 大淵スコリアを含まない暗褐色土。

壁溝 幅 22cm、深さ 6cm の壁溝が南側にのみ確認でき、北西コーナー付近で途切れている。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 確認されない。

出土遺物 (第 127 図)

1・2 は灰釉陶器の碗である。器壁は薄く口縁部端部が反りながら外方へ広がる。2 の内面には沈線状の段が 1 段認められる。3 は須恵器の壺の頸部から口縁部である。細くやや広がりながら口縁部に至ると考えられる。外面に自然釉が認められる。4 から 6 は駿東型坏である。4・6 の底部は削り出し高台を意識したケズリが認められる。7 は甲斐型の坏、8 は甲斐型の皿である。7 は胎土が精緻で丁寧な調整のため、光沢を有する。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキが施される。8 の皿は外面ヘラケズリの影響で底部の形状がはっきりしない。口縁部の屈曲はヘラケズリの有無によって作り出されている。口唇部はさらに外反している。9 は駿東型長胴甕である。全体的に器壁が厚く作られている。外面はハケ目ではなくケズリに近い板状工具によるナデである。10 は甲斐型の甕である。胴部の器壁は比較的薄く作られているものの口縁部は厚く短い。胎土には金雲母を多量に含む。

所見

9 世紀末から 10 世紀前半頃と考えられる。

SB50

遺構 (第 128・129 図)

位置 AS・20 グリッド

重複関係 (古) SB37 → SB36 → SB38 → SB50 (新)

主軸方位 N - 77.0° - E

残存状況 良好な状態で残存し、平面形は方形を呈する。主軸 (東西) 幅 2.53m、直交 (南北) 幅 2.54m、深さ 64cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 確認されない。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

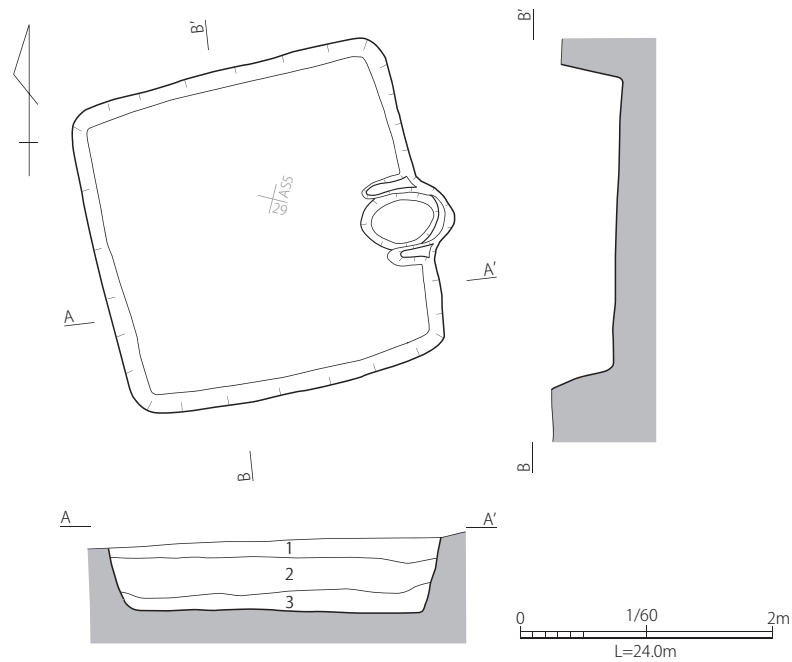
カマド 東壁中央に位置する。芯材は認められず、粘土主体でつくられている。全長 70cm、幅 75cm、燃焼室幅 45cm を測る。燃焼室から駿東型球胴甕 (10) が出土している。

出土遺物 (第 130 図)

1 は灰釉陶器の碗である。低く幅の狭い高台から腰が張らずに口縁部に至る。底部付近の器壁が厚い一方で口縁部は薄く作られる。底部は回転糸切りである。施釉は内面にのみ認められハケ塗りと考えられる。2・3 は摘蓋の口縁部である。2 の蓋は高さがあり、口縁部が小さい。4 は坏身、5 は有台坏身でヘラケズリが認められる。6 は小型の壺である。比較的小さな底部から胴中位まで広がり、稜をもって頸部に至り算盤玉のような形状を示す。底部は回転ヘラケズリである。7・8 は駿東型坏である。7 は大型で外面のヘラケズリや内面見込みヘラミガキなど甲斐型坏の影響を受けているものと考えられる。9・12 は駿東型長胴甕、10・11・13 は駿東型球胴甕である。

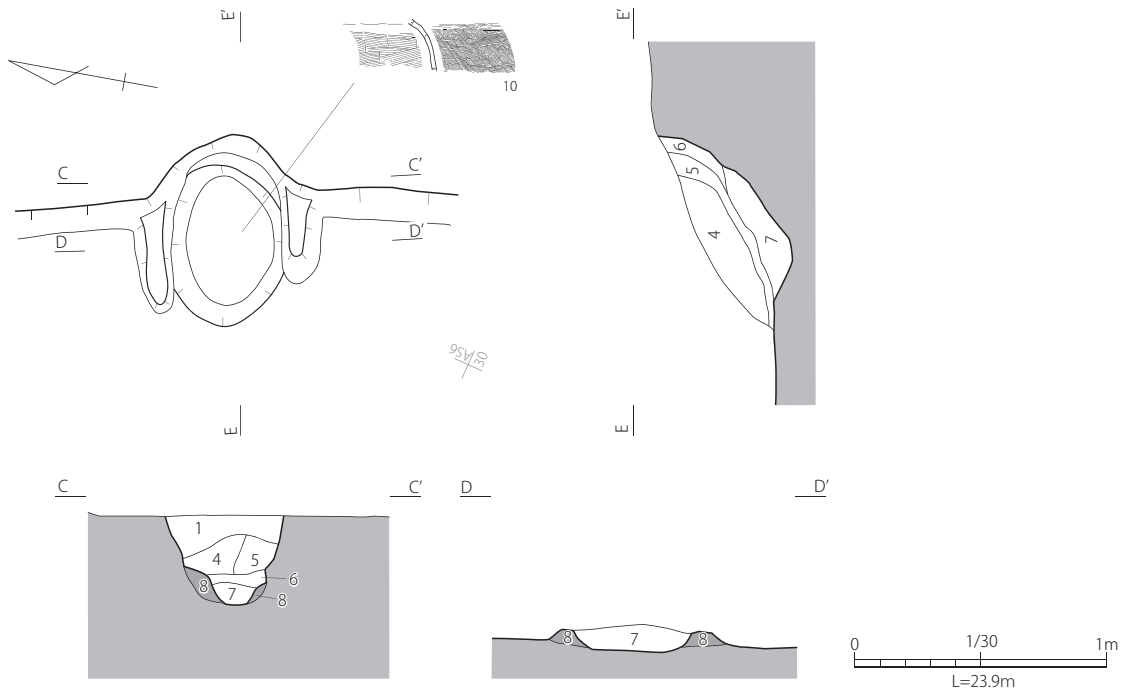
所見

球胴甕は 8 世紀前半頃、他の土器は 9 世紀頃と考えられるが、切り合いからは 10 世紀の遺構と考えられる。



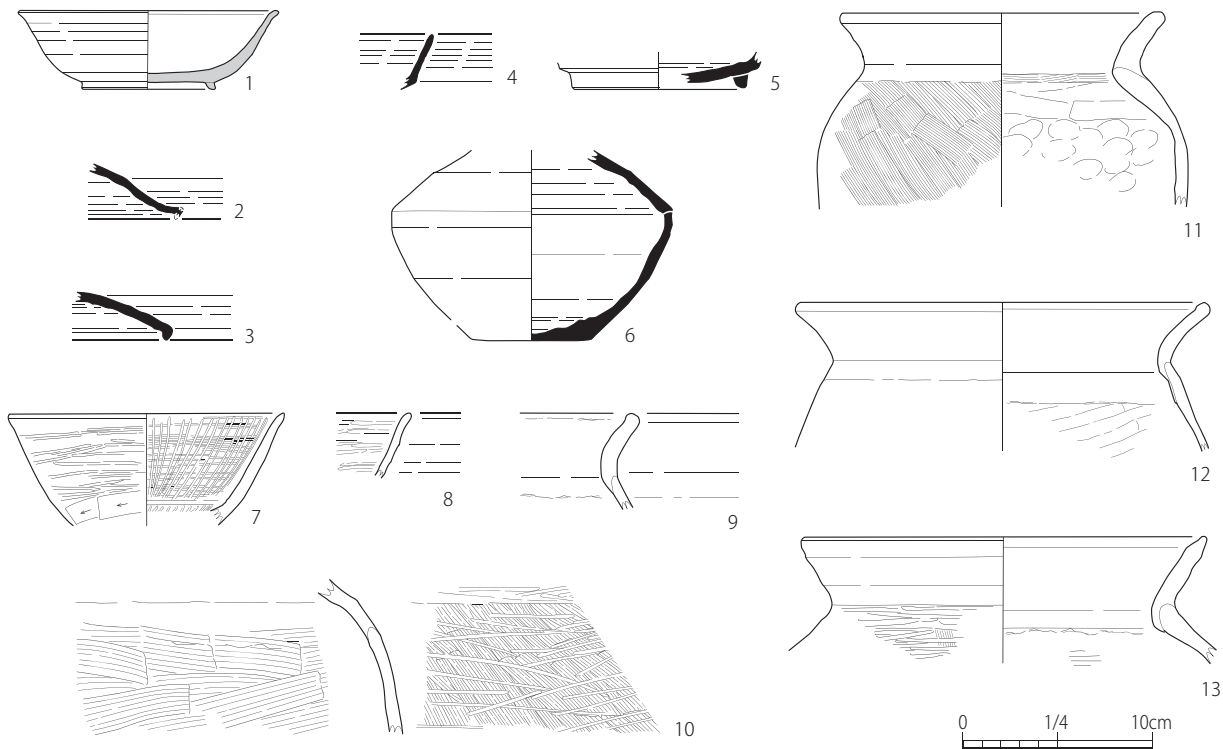
- | | | | |
|---|------------------|---------------------------------|---------|
| 1 | 黒褐色土層 (10YR3/1) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB507カ土 |
| 2 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子少量。焼土微量。炭化物微量。粘土少量。 | SB507カ土 |
| 3 | 黒褐色土層 (2.5YR3/2) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子少量。黄褐色土多量。焼土微量。 | SB507カ土 |

第128図 SB50 平面図・断面図

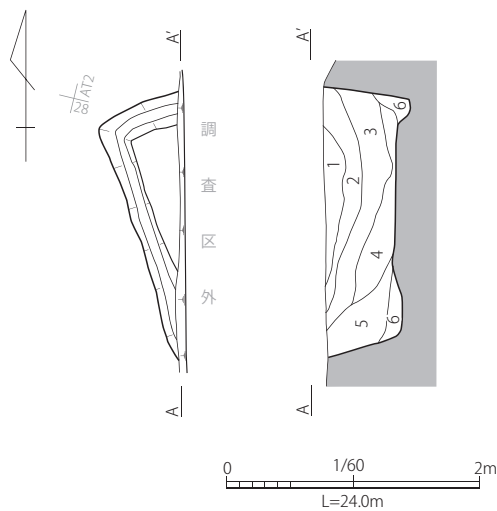


- | | | | |
|---|---------------------|---------------------------------|----------------|
| 1 | 黒褐色土層 (10YR3/1) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子微量。焼土微量。炭化物微量。粘土微量。 | SB507カ土 |
| 4 | 黒色土層 (7.5YR2/1) | 焼土微量。 | SB507カ土 |
| 5 | オリーブ黒色土層 (7.5Y3/1) | 焼土微量。炭化物微量。粘土多量。 | SB50カマド7カ土 |
| 6 | 極暗褐色土層 (7.5YR2/3) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子微量。焼土少量。炭化物微量。粘土少量。 | SB50カマド7カ土 |
| 7 | 極暗褐色土層 (7.5Y2/3) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子微量。焼土多量。炭化物少量。粘土微量。 | SB50カマド 燃烧室7カ土 |
| 8 | オリーブ黒色土層 (7.5YR3/1) | 大淵スリヤ微量。橙色粒子微量。焼土少量。粘土多量。 | SB50カマド 燃烧室7カ土 |

第129図 SB50 カマド 平面図・断面図

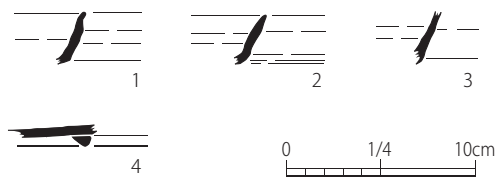


第130図 SB50 出土遺物実測図



- | | | |
|--------------------|------------------|---------|
| 1 黒褐色土層 (10YR3/1) | 大淵スコリア微量。黄褐色土少量。 | SB517粘土 |
| 2 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) | 大淵スコリア微量。黄褐色土少量。 | SB517粘土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/2) | 大淵スコリア少量。 | SB517粘土 |
| 4 黒褐色土層 (10YR3/2) | 黄褐色土少量。 | SB517粘土 |
| 5 暗褐色土層 (10YR3/3) | 黄褐色土微量。 | SB517粘土 |
| 6 黒色土層 (10YR2/1) | 大淵スコリア微量。橙色粒子微量。 | SB517粘土 |

第131図 SB51 平面図・断面図



第132図 SB51 出土遺物実測図

SB51

遺構 (第131図)

位置 AT・20グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 18.0° - W

残存状況 遺構の大部分は調査区域外となり北東コーナーのみ検出した。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸(南北)幅1.90m、直交(東西)幅0.72m、深さ57cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅18cm、深さ8cmで、全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

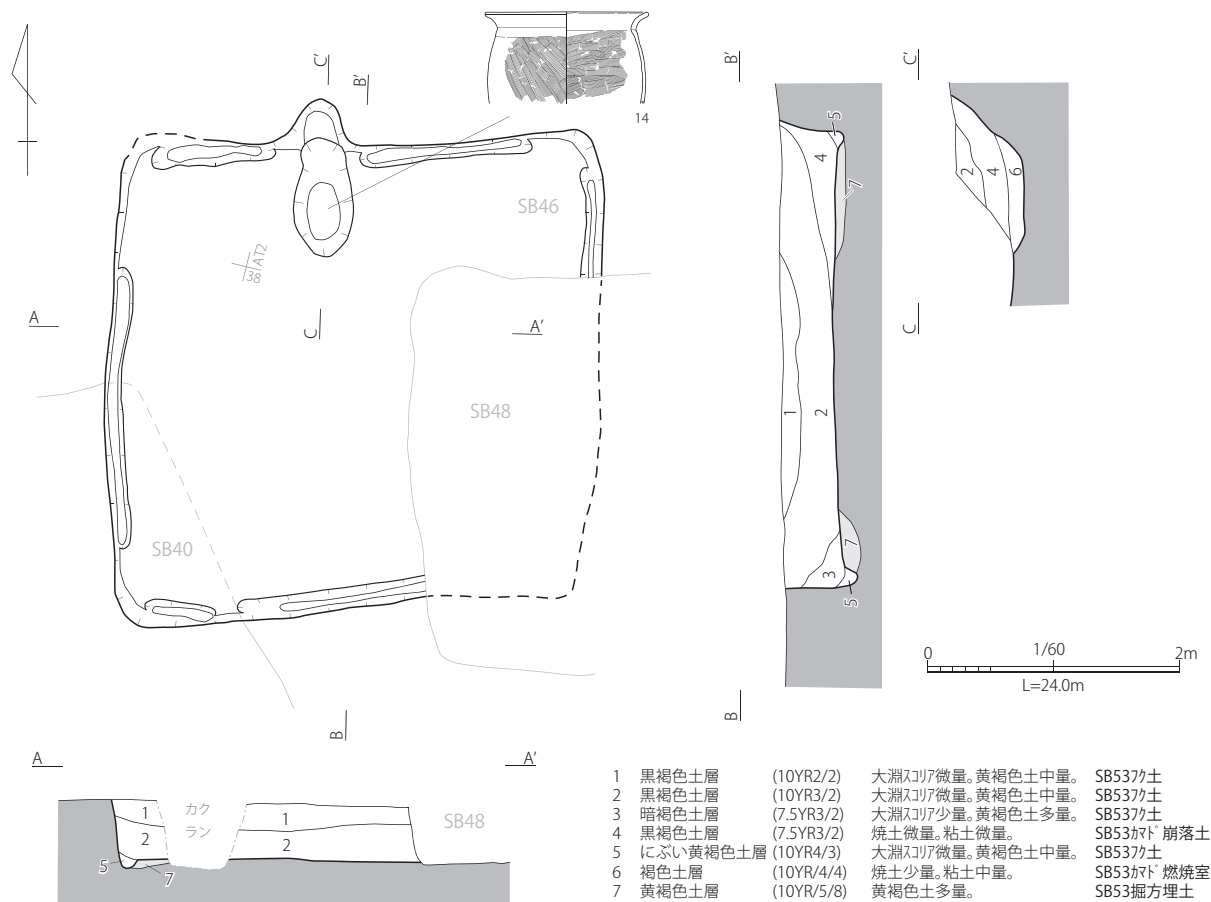
カマド 確認されない。

出土遺物 (第132図)

1から4はいずれも須恵器の有台坏身と考えられるが全体の形状が明らかではない。4は胎土が砂っぽく色調が白色を呈する。高台は端部が丸い。

所見

時期は明らかではない。



第133図 SB53 平面図・断面図

SB53

遺構 (第133図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古)SB57 → SB53 → SB40・SB46・SB48(新)

主軸方位 N - 2.5° - W

残存状況 南東部はSB48により削平されているが、全体的な規模等は把握できた。平面形は方形を呈するものと考えられ、主軸(南北)幅3.78m、直交(東西)幅3.90m、深さ44cmを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅20cm、深さ10cmの壁溝が、途切れる箇所もあるが全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 部分的で北東部にのみ厚さ8cmの貼り床が施されている。

カマド 北壁やや西寄りに位置する。袖は残存せず焼室の掘り込みのみ検出される。全長144cm、焼室幅50cmを測る。焼室から駿東型長胴甕(14)が出土している。

出土遺物 (第134図)

1は灰釉陶器と考えられる。胎土が精緻で器壁が非常に薄い。瓶と考えられるが全体の形状は不明。2から4は須恵器である。2は摘蓋、3は有台坏身である。胎土が砂っぽく高台は低く幅広い。4は甕の口縁部付近と考えられる。器壁が厚い。外面に二条の稜線を有し、その上方には波状文と推定される文様の一部が確認される。5から9はいずれも駿東型坏の特徴を有する坏、もしくは皿である。5・6は底部が平らに調整されている一方で8は調整が丁寧ではなく底部が突出する。いずれも坏内面に湾曲にあわせたヘラミガキが施される。8の外面には墨書と推測される黒斑が3ヶ所認められる。7は通常の駿東型坏の調整、胎土と共通するが、高台を貼り付けている。10から15は甕の破片である。10、13から15は駿東型長胴甕である。10は頸部が「C」の字に緩やかにカーブする。内外面に細かなハケ目を有する。11は金雲母の混入が少ないものの小型の甲斐型甕である。器壁が薄く頸部が明確に屈曲する。12は駿東型球

胴甕系の埴である。口唇部を内側及び外側に肥厚させる。
13 から 15 は駿東型長胴甕である。

所見

甲斐型土器や駿東型坏から 9 世紀中頃から後半と考えられる。

SB54

遺構 (第 135・136 図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古) SB56 → SB54 → SB53・SB46 (新)

主軸方位 N - 1.0° - W

残存状況 南側は SB53 に東側は SB46 に削平され、建物跡の北側の一部のみを検出した。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸 (南北) 幅 1.13m、直交 (東西) 幅 2.52m、深さ 36cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗灰黄色土。

壁溝 幅 20cm、深さ 8cm の壁溝が、途切れる箇所もあるが検出範囲内で全体的に確認される。

柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

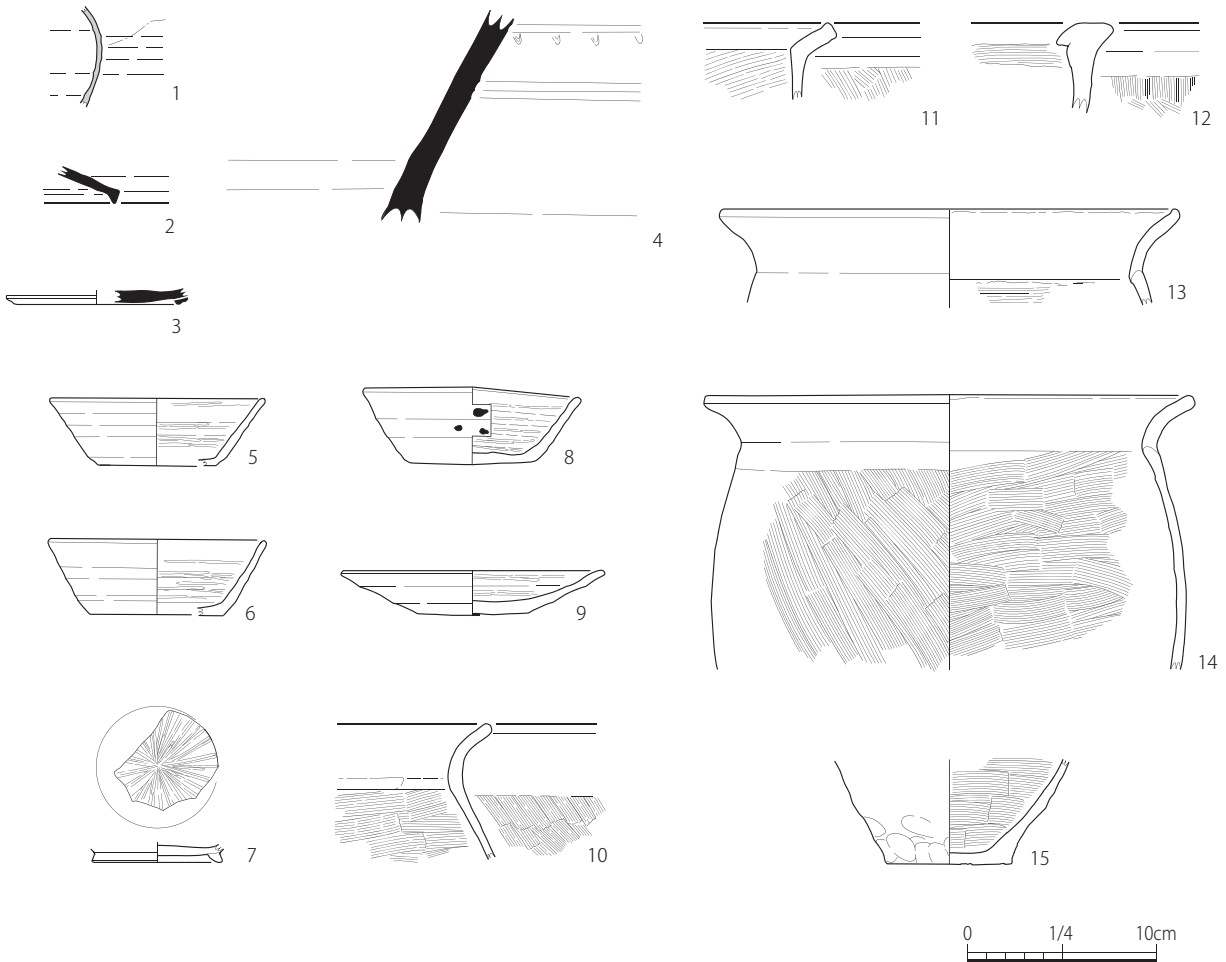
カマド 北壁に位置する。右袖の一部が SB46 により削平されているものの、燃烧室の奥側には芯材が残存する。検出範囲内で全長 98cm、幅 80cm、燃烧室幅 56cm を測る。燃烧室から駿東型長胴甕 (4・6) が出土している。

出土遺物 (第 137 図)

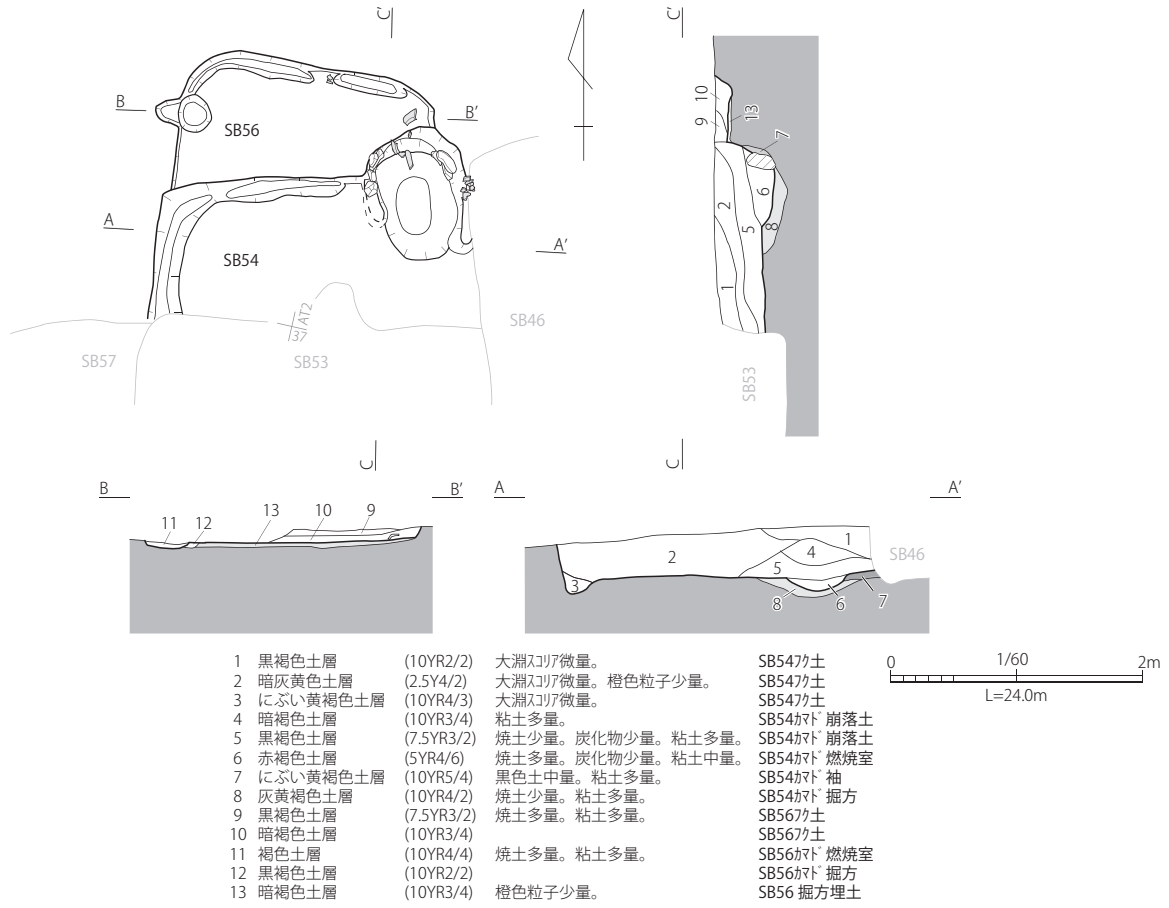
1 は須恵器の摘蓋、2 は箱坏と考えられる。3 は有台坏身を模倣した土師器坏で、胎土、調整は駿東型坏に共通する。4 から 6 はいずれも駿東型長胴甕である。いずれも頸部で屈曲した後、直立することなくそのまま外方へ直線的に広がる。

所見

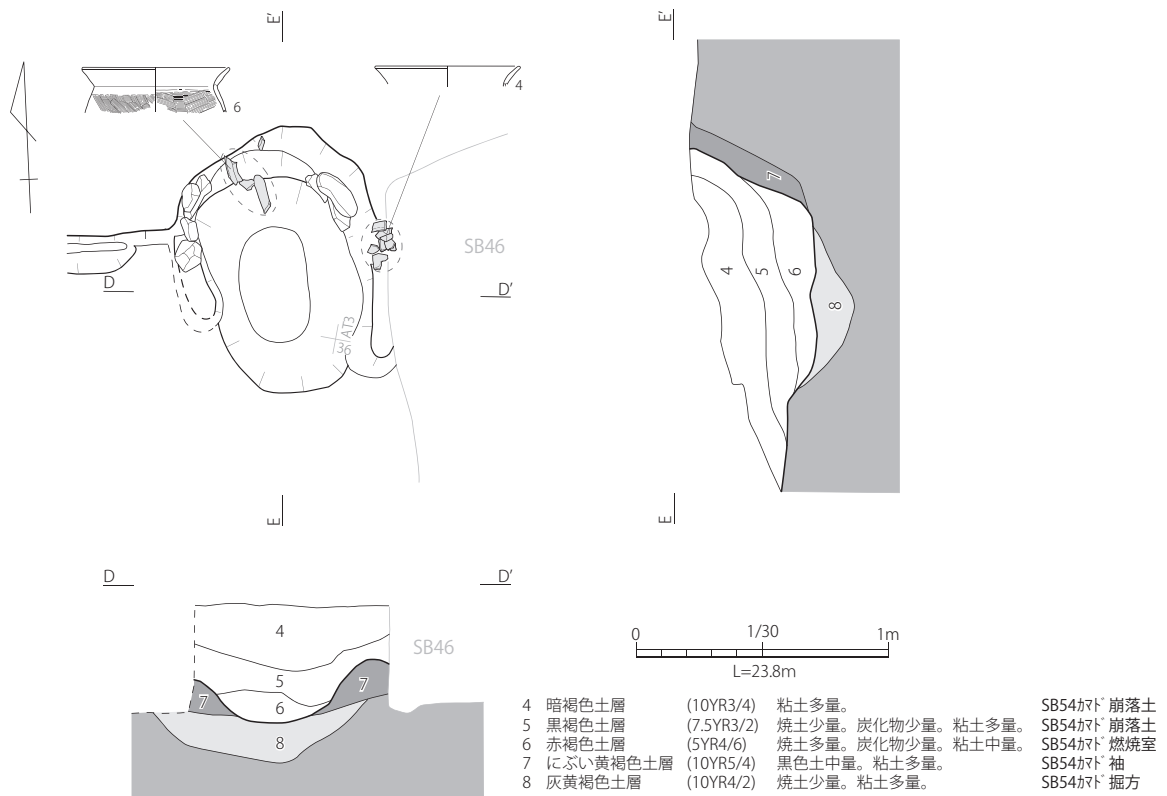
9 世紀頃と考えられる。



第 134 図 SB53 出土遺物実測図



第135図 SB54・56 平面図・断面図



第136図 SB54 カマド 平面図・断面図

SB56

遺構 (第 135 図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古) SB56 → SB54 → SB53・SB46 (新)

主軸方位 N - 79.0° - W

残存状況 上面が削平されており立ち上がりは浅い。南側は SB54 に削平されており、建物跡北側のみを検出した。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸 (東西) 幅 1.90m、直交 (南北) 幅 1.05m、深さ 12cm を測る。

覆土 大淵スコリアを含まない暗褐色土。

壁溝 幅 15cm、深さ 4cm の壁溝が、北壁沿いに途切れながら検出される。

柱穴 確認されない。

床 検出範囲内では厚さ 4cm 程度の貼り床が施されている。

カマド 西壁北端に位置する。上層部はほとんど削平されていて、燃烧室と煙道の掘り込みのみを検出した。検出範囲内で全長 46cm、燃烧室幅 52cm を測る。

出土遺物

図化できる遺物は無い。

所見

遺構の切り合い関係から 9 世紀後半以前の建物跡と考えられる。

SB57

遺構 (第 138 図)

位置 AT・30 グリッド

重複関係 (古) SB57 → SB40・SB53・SB48 (新)

主軸方位 N - 1.0° - W

残存状況 SB53・SB48 に削平され建物跡の西側 1/3 程度しか残存していない。また南西部の上層は SB40 により削平されている。平面形は東西に長い長方形を呈するものと考えられ、検出範囲内で主軸 (南北) 幅 3.64m、直交 (東西) 幅 3.60m、深さ 44cm を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

壁溝 幅 15cm、深さ 5cm の壁溝が、検出範囲内で全体的に検出される。

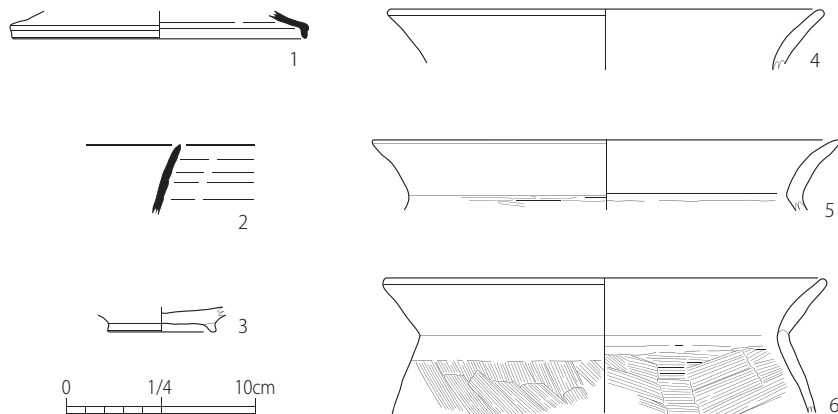
柱穴 確認されない。

床 掘り方を床面としている。

カマド 確認されない。

出土遺物 (第 139 図)

1 は須恵器の甕の底部と考えられる。底部は薄いものの立ち上がる部分からは厚く作られている。外面にはタタキ目の痕跡の一部が確認される。2 は駿東型坏で外面に「好」の墨書が認められる。3 も駿東型坏で、底が厚く平坦に調整されていない。4・5 は駿東型坏であるが内外面のヘラミガキが丁寧に施されている。4 は上方にむかって器壁が厚くなる。外面はヨコ方向の磨きがやや



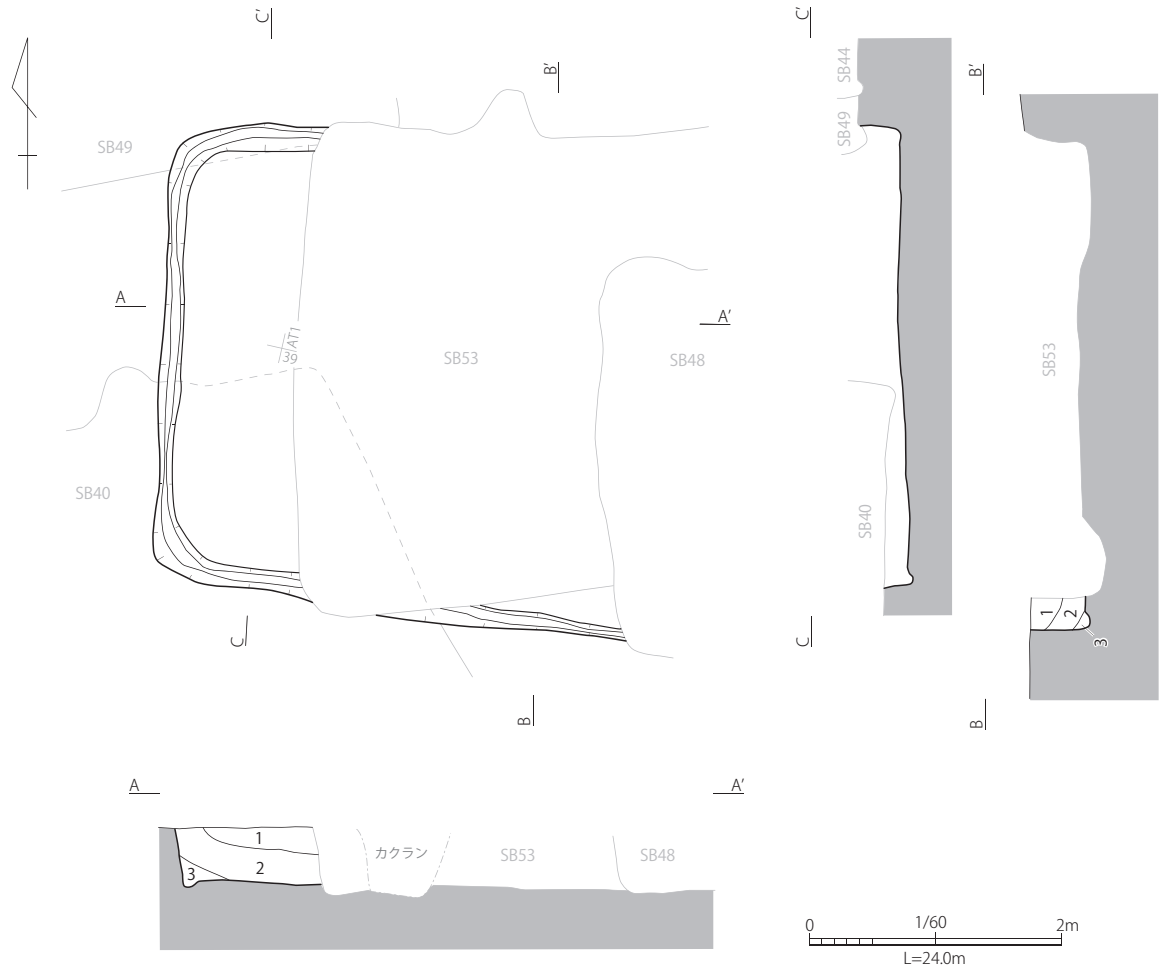
第 137 図 SB54 出土遺物実測図

間隔をあけながら施される。内面は横方向のヘラミガキの後、暗文状のヘラミガキが施される。5はやや大型の坏で口縁部が薄くなりながらやや外反させる。外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキの後、暗文状のヘラミガキが施される。6は小型甕で全体

的にナデ調整で仕上げられる。7は駿東型長胴甕である。頸部はやや緩やかに屈曲し口唇部に至る。口唇部内面を突出させる。外面は細かなハケ目が施される。

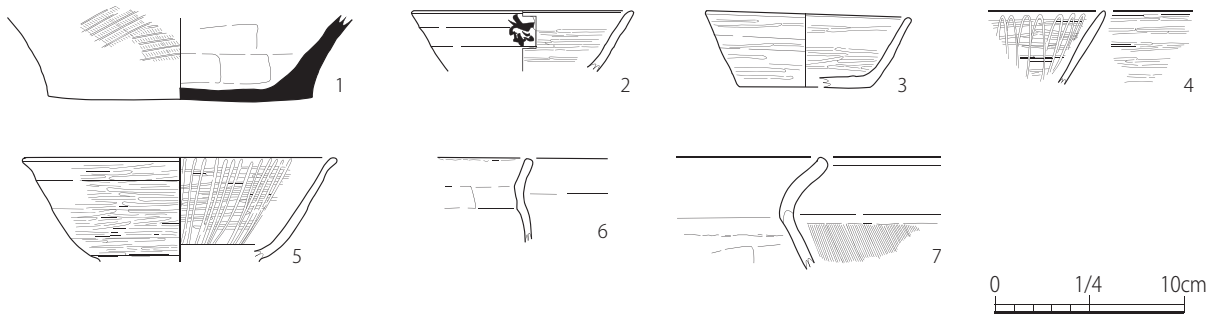
所見

9世紀後半頃と考えられる。



- 1 黒褐色土層 (10YR2/2) 大淵入リア微量。SB577ヶ土
- 2 黒褐色土層 (10YR3/2) 大淵入リア微量。SB577ヶ土
- 3 暗褐色土層 (7.5YR3/2) 大淵入リア少量。SB577ヶ土

第138図 SB57 平面図・断面図



第139図 SB57 出土遺物実測図

第2節 掘立柱建物跡

SH01

遺構 (第140図)

位置 AR・30グリッド

重複関係 (古) SH01 → SB22 (新)

主軸方位 N - 9.0° - W

残存状況 13基の柱穴を検出したが、南西部がSB22により削平されて一部の柱穴を検出できなかった。東西3間×南北4間の掘立柱建物跡で、規模は東西5.0m、南北7.5mを測る。芯々で東西の柱穴間は1.70～2.00m、南北の柱穴間は1.55～1.75mを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は方形で、規模は長軸が65～115cm、短軸が65～90cm、検出面からの深さは43～63cmである。4・16・18・20・21層は柱痕と考えられる。

所見

SB22との切り合い関係から8世紀後半以前の建物跡と考えられる。

SH02

遺構 (第141図)

位置 AR・50グリッド

重複関係 (古) SH03・SD03 → SH02 (新)

主軸方位 N - 3.0° - W

残存状況 東西1間×南北4間の7基の柱穴を検出した掘立柱建物跡で、西側が調査区域外となりさらに延びる可能性をもつ。検出範囲内での規模は、東西1.7m、南北4.5mを測る。芯々で東西の柱穴間は1.25m、南北の柱穴間は1.05～1.25mを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は方形で、規模は長軸が55～70cm、短軸が50～60cm、検出面からの深さは50～62cmである。1層は柱痕と考えられる。

所見

出土遺物が少なく、遺構の切り合い関係からも時期を特定できない。

SH03

遺構 (第142図)

位置 AR・50グリッド

重複関係 (古) SH03 → SH02 (新)

主軸方位 N - 0° - W

残存状況 東西3間×南北1間の5基の柱穴を検出した掘立柱建物跡で、西側及び南側が調査区域外となりさらに延びる可能性をもつ。検出範囲内での規模は、東西4.0m、南北1.4mを測る。芯々で東西の柱穴間は1.3m、南北の柱穴間は1.35mを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる暗褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は円形で、規模は長軸が35～45cm、短軸が33～45cm、検出面からの深さは20～35cmである。

所見

出土遺物が少なく、遺構の切り合い関係からも時期を特定できない。

SH04

遺構 (第143図)

位置 AS・20グリッド

重複関係 なし

主軸方位 N - 4.0° - W

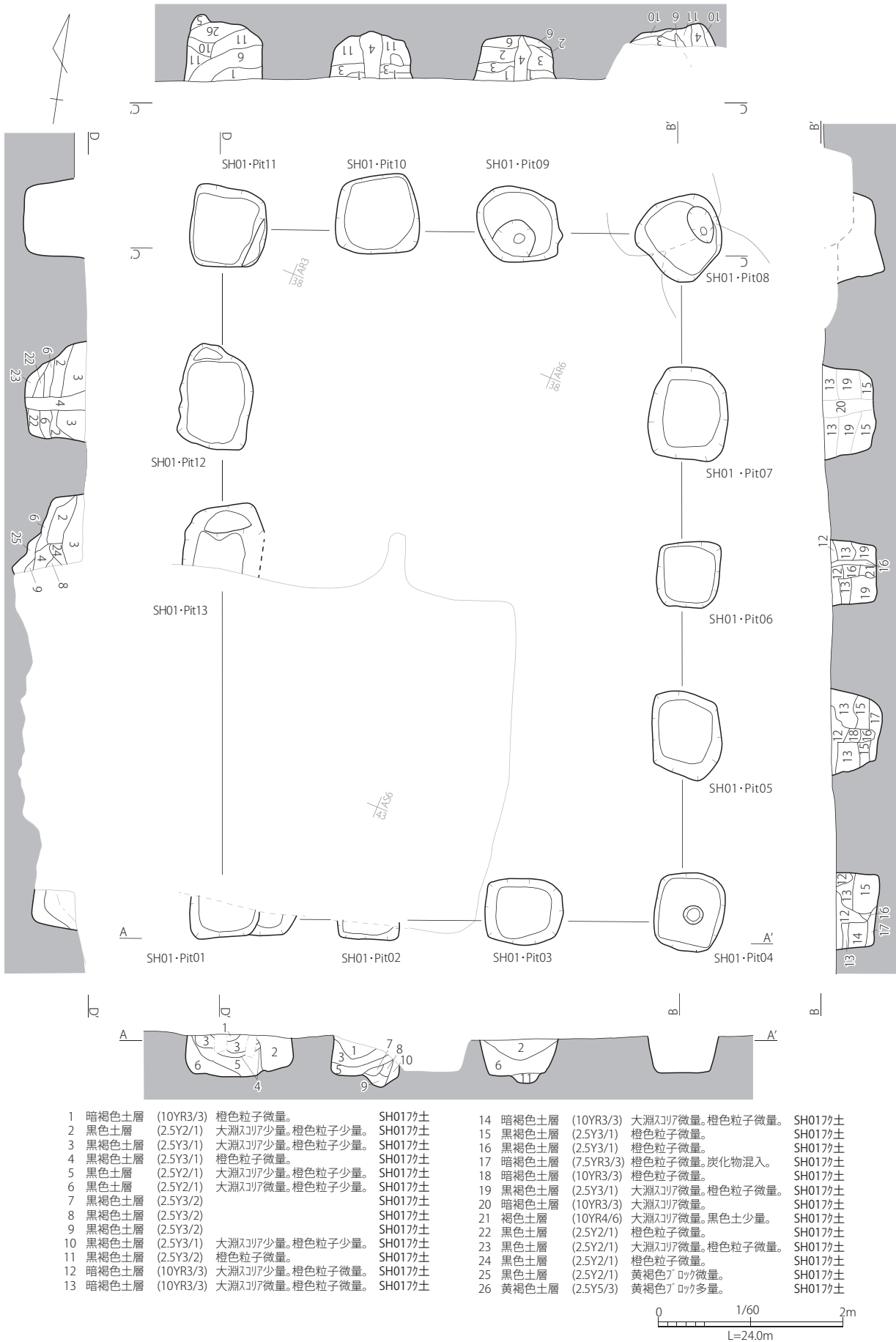
残存状況 東西3間×南北2間の10基の柱穴を検出した掘立柱建物跡で、規模は東西4.3m、南北3.75mを測る。芯々で東西の柱穴間は1.40～1.45m、南北の柱穴間は1.80～1.90mを測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は楕円形で、規模は長軸が45～65cm、短軸が43～56cm、検出面からの深さは23～45cmである。3・14・16層は柱痕と考えられる。

所見

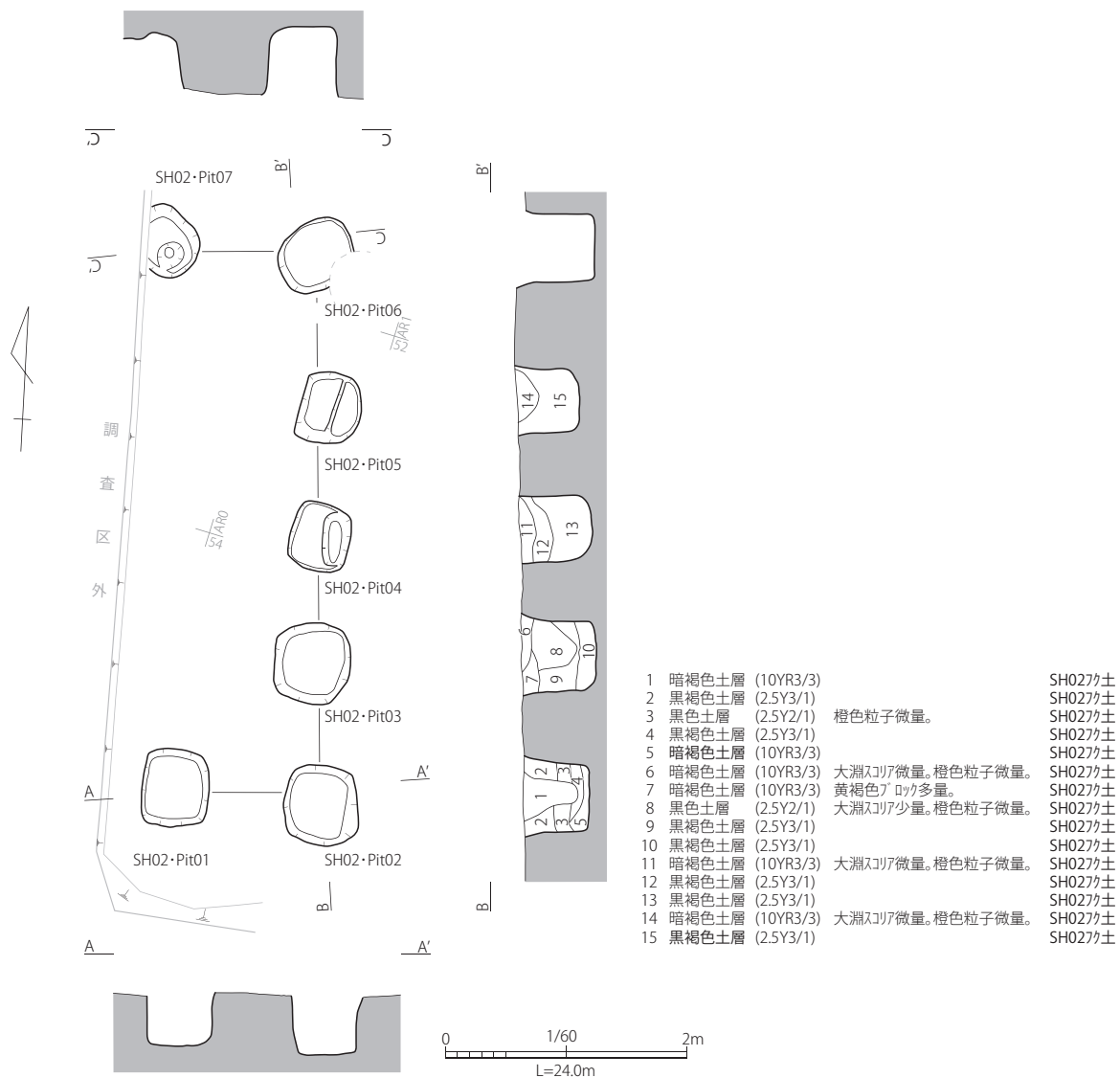
出土遺物が少なく、遺構の切り合い関係からも時期を特定できない。



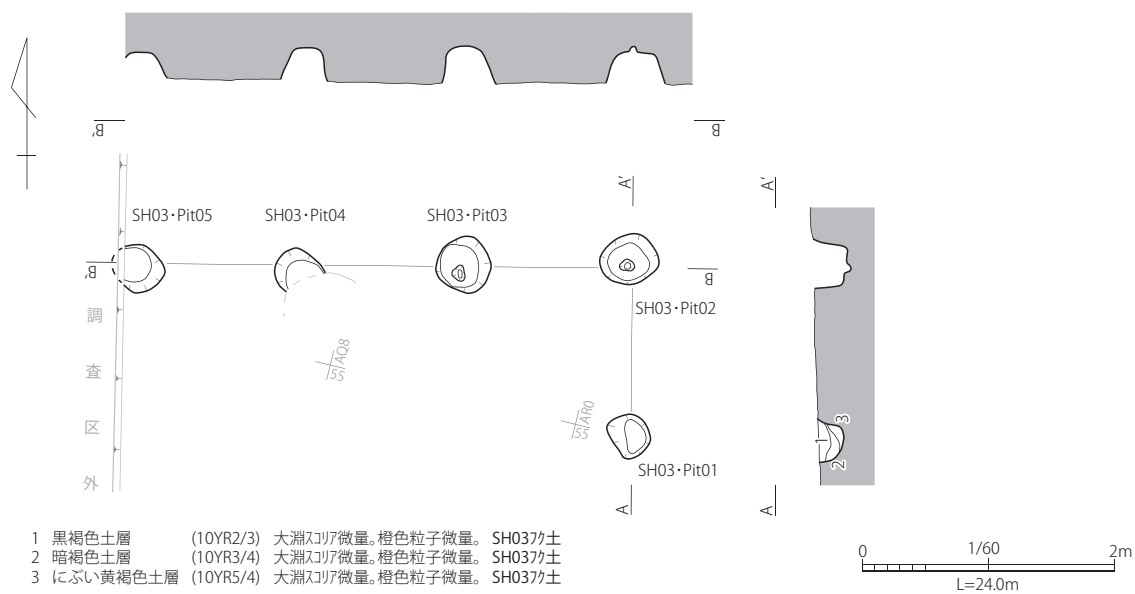
- | | | | |
|------------------------------------|--------|------------------------------------|--------|
| 1 暗褐色土層 (10YR3/3) 橙色粒子微量。 | SH017土 | 14 暗褐色土層 (10YR3/3) 大淵入り7微量。橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 2 黒色土層 (2.5Y2/1) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 15 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 3 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 16 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 4 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 橙色粒子微量。 | SH017土 | 17 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 橙色粒子微量。炭化物混入。 | SH017土 |
| 5 黒色土層 (2.5Y2/1) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 18 暗褐色土層 (10YR3/3) 橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 6 黒色土層 (2.5Y2/1) 大淵入り7微量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 19 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 大淵入り7微量。橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 7 黒褐色土層 (2.5Y3/2) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 20 暗褐色土層 (10YR3/3) 大淵入り7微量。 | SH017土 |
| 8 黒褐色土層 (2.5Y3/2) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 21 褐色土層 (10YR4/6) 大淵入り7微量。黒色土少量。 | SH017土 |
| 9 黒褐色土層 (2.5Y3/2) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 22 黒色土層 (2.5Y2/1) 橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 10 黒褐色土層 (2.5Y3/1) 大淵入り7少量。橙色粒子少量。 | SH017土 | 23 黒色土層 (2.5Y2/1) 大淵入り7微量。橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 11 黒褐色土層 (2.5Y3/2) 橙色粒子微量。 | SH017土 | 24 黒色土層 (2.5Y2/1) 橙色粒子微量。 | SH017土 |
| 12 暗褐色土層 (10YR3/3) 大淵入り7少量。橙色粒子微量。 | SH017土 | 25 黒色土層 (2.5Y2/1) 黄褐色7ロツク微量。 | SH017土 |
| 13 暗褐色土層 (10YR3/3) 大淵入り7微量。橙色粒子微量。 | SH017土 | 26 黄褐色土層 (2.5Y5/3) 黄褐色7ロツク多量。 | SH017土 |

0 1/60 2m
L=24.0m

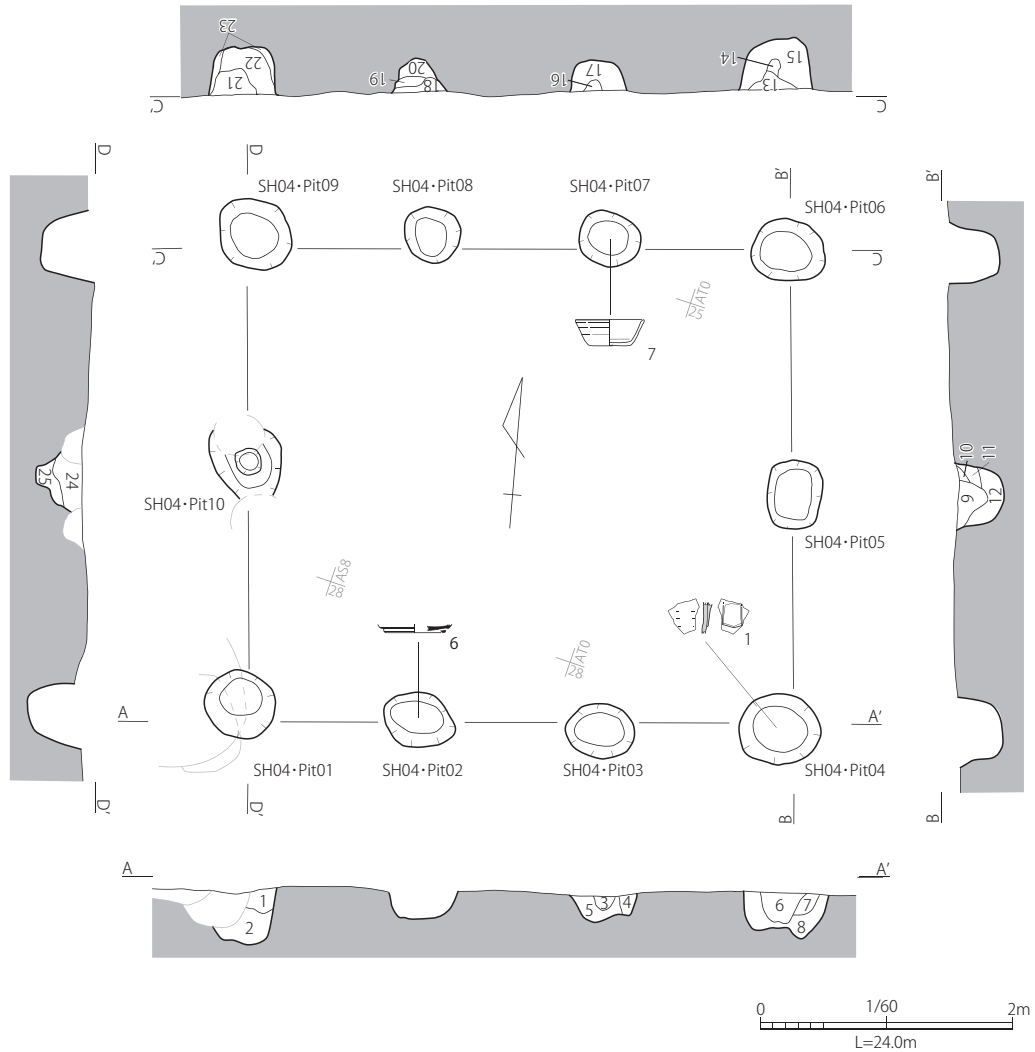
第140図 SH01 平面図・断面図



第 141 図 SH02 平面図・断面図



第 142 図 SH03 平面図・断面図



- | | | | |
|----|-----------------|-----------------|---------|
| 1 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 2 | 黒褐色土層 (10YR3/1) | 大淵スツア多量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 3 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 4 | 黒褐色土層 (10YR2/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 5 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 6 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 7 | 黒褐色土層 (10YR2/2) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 8 | 黒褐色土層 (10YR2/2) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 9 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 10 | 暗褐色土層 (10YR3/3) | 大淵スツア多量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 11 | 暗褐色土層 (10YR3/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 12 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 13 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 14 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア少量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 15 | 黒褐色土層 (10YR3/1) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 16 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 17 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア少量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 18 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア多量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 19 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 20 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 21 | 黒褐色土層 (10YR2/3) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 22 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 23 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア微量。橙色粒子微量。 | SH0477土 |
| 24 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |
| 25 | 黒褐色土層 (10YR3/2) | 大淵スツア少量。橙色粒子少量。 | SH0477土 |

第143図 SH04 平面図・断面図

第3節 溝状遺構・土坑・ピット

SD01

遺構 (第144図)

位置 AR・40グリッド

重複関係 なし

残存状況 南北方向の溝状遺構で、南端は調査区域外となりやや東方向に曲がる。検出範囲内で全長3.4m、幅45cmを測り、断面形は緩やかなV字形を呈し検出面からの深さ16cmを測る。

覆土 大淵スコリアを含まない黒褐色土。

所見

出土遺物が少なく、遺構の切り合い関係からも時期を特定できない。

SD02

遺構 (第144図)

位置 AR・40グリッド

重複関係 なし

残存状況 主軸方向がSD01より西側に傾く溝状遺構で、検出範囲内で南北2方向に分かれるが、北側の溝は攪乱により削平されほとんど残存せず、南側の溝は調査区域外まで延びる。検出範囲内での規模は、全長6.2m、幅25～60cmを測り、断面形はU字形を呈し検出面からの深さ18cmを測る。

覆土 黒褐色土で、上層には一部大淵スコリアが混入するが、下層には混入しない。

所見

出土遺物が少なく、遺構の切り合い関係からも時期を特定できない。

SD03

遺構 (第145図)

位置 AR・50グリッド

重複関係 (古)SD03→SH02(新)

残存状況 東西方向の溝状遺構で、両端は調査区域外となる。検出範囲内での規模は、全長6.2m、幅25～45cmを測り、断面形はU字形を呈し検出面からの深さ16cmを測る。

覆土 暗褐色土で下層に大淵スコリアが混入する。

所見

出土遺物が少なく、遺構の切り合い関係からも時期を特定できない。

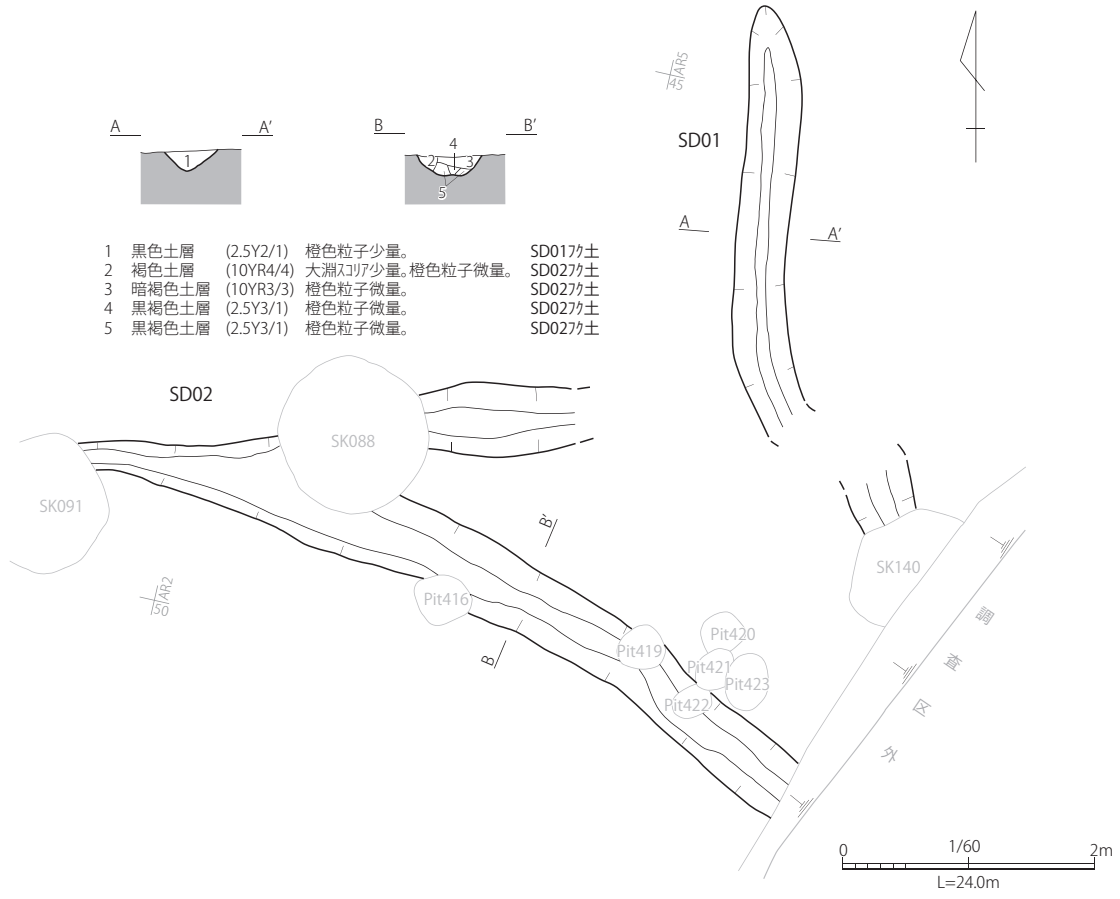
土坑 (第146図)

残存状況 調査区域内で257基を検出した。その多くが径1.0～1.5mの円形の土坑で、竪穴建物跡等を掘り込む状態で検出されたことから近世の遺構の可能性が高い。調査区南東部のSK172では集石が認められた。

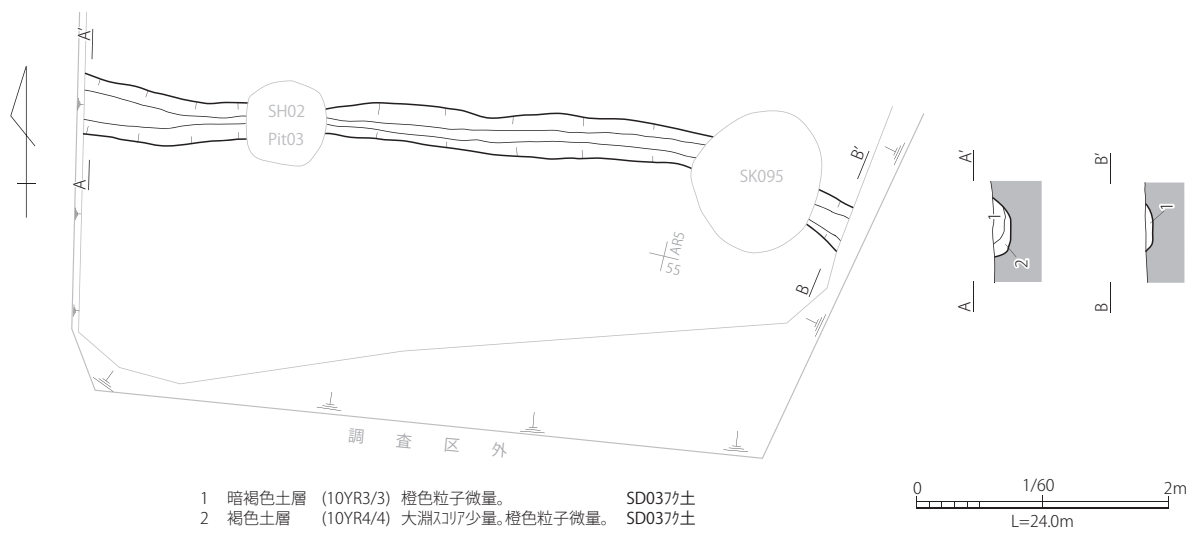
覆土 多くの土坑の覆土は、大淵スコリアを微量に含む黒褐色土または暗褐色土である。

ピット (第146図)

残存状況 調査区域内で149基を検出し、その多くが径50cm前後の円形のピットである。この中には掘立柱建物跡や柵列跡等を構成する柱穴が含まれる可能性もあるが検出状況からは判断できない。



第 144 図 SD01・02 平面図・断面図



第 145 図 SD03 平面図・断面図

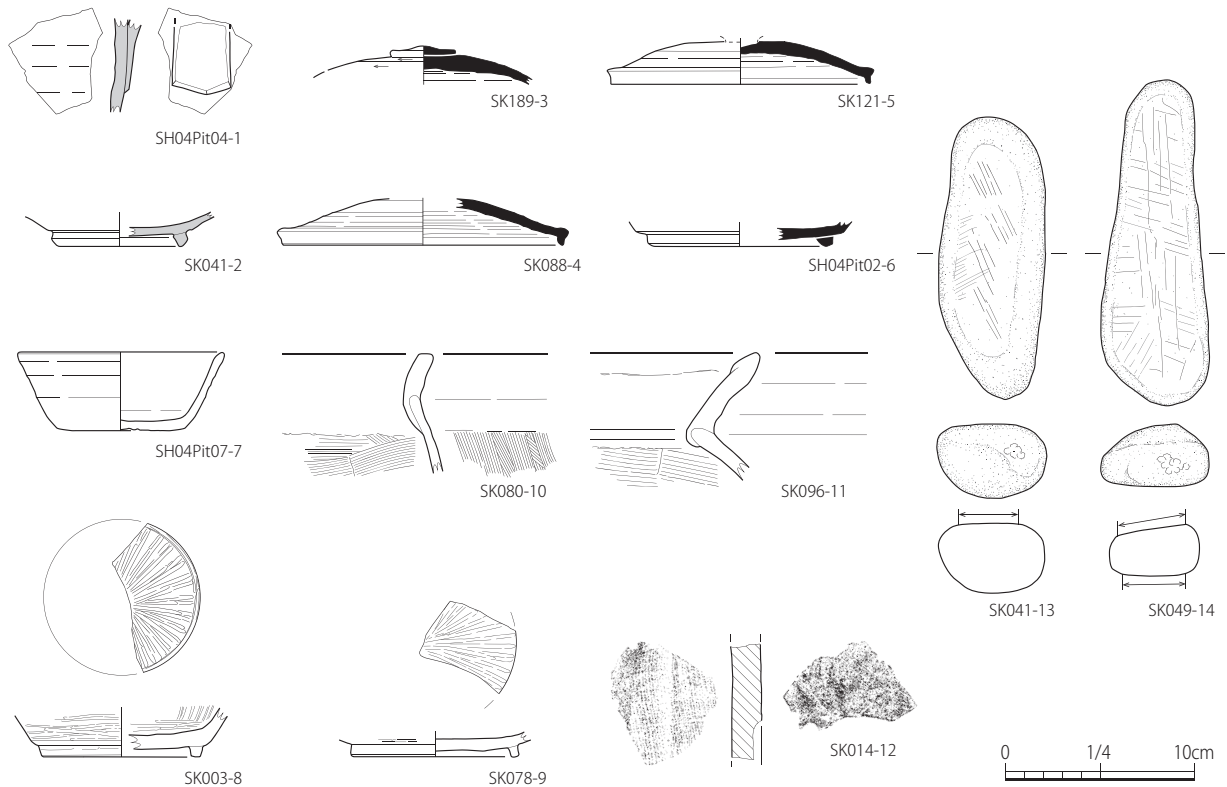


第146図 土坑・ピット 平面図

第4節 掘立柱建物跡・土坑・遺構外出土遺物

掘立柱建物跡・土坑出土遺物 (第147図)

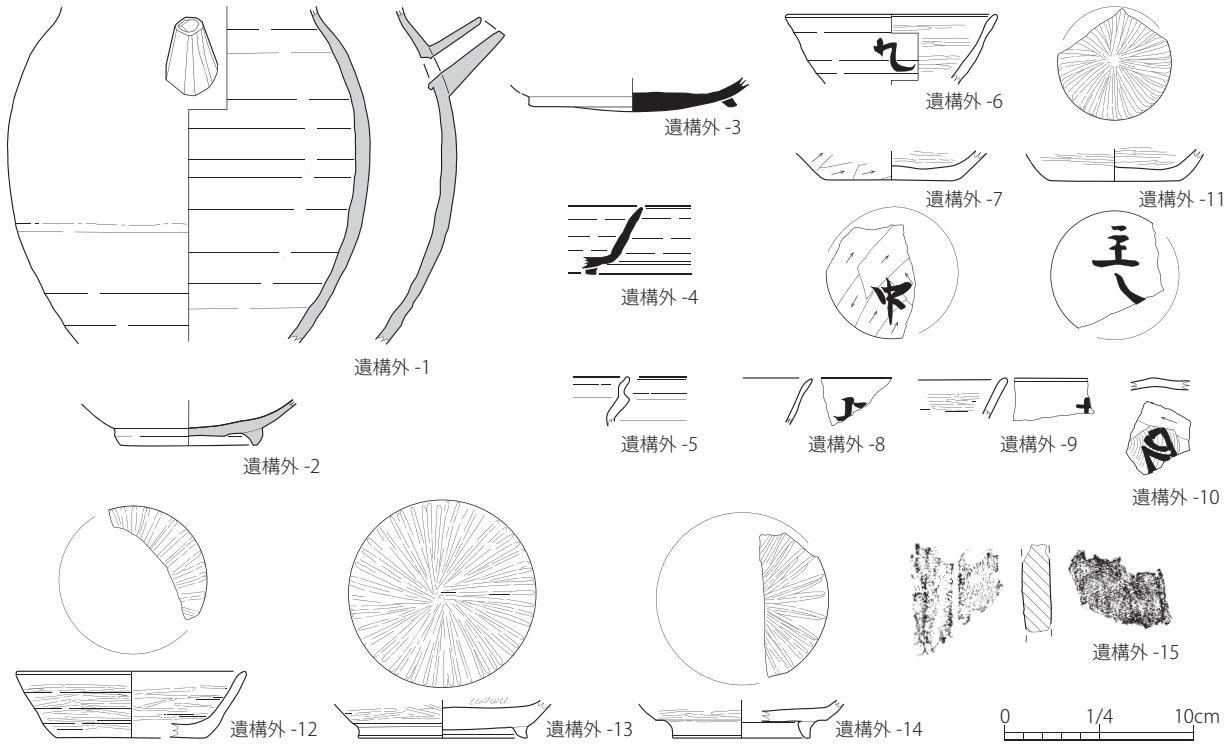
1は灰釉陶器の手付瓶の把手の基部と考えられる。丁寧に面取りされ角も尖っている。2は灰釉陶器の碗である。底部回転ヘラケズリの後高台が付けられる。高台は低く内側が強くナデられ内湾した三日月高台を呈する。3から5はいずれも摘蓋である。高さは低い。ノタ目はあまり明瞭ではない。6は有台坏身で胎土が砂っぽく色調は白色を呈する。高台の幅は広さ、高さともない。全体的に丸みをもつ。7は駿東型坏である。調整があまり丁寧にない。8・9は有台坏身を模倣した土師器坏である。高台は方形で丁寧に調整されている。いずれも回転ヘラケズリである。見込み部には放射状のヘラミガキを有する。10は駿東型長胴甕である。口縁部全体を厚くしている。11は駿東型球胴甕である。口唇部内側を肥厚させる。12は布目の丸瓦である。色調は灰色を呈する。13、14は磨敲き石である。



遺構外出土遺物 (第148図)

1は灰釉陶器の水注である。胴部のあまり張らない形状で長胴である。底部及び口縁部を欠く。胴上半部に注口が付く。注口は八面体に丁寧に面取りされている。瀬戸市広久手20・30号窯(10世紀後半)の出土品に類似する。2は灰釉陶器の碗である。底部は回転ヘラケズリである。高台は低く内側が強くナデられ内湾した三日月高台を呈する。3・4は須恵器の有台坏身、5は古墳時代前期のS字甕である。6から12はいずれも駿東型坏である。6から11には墨書が認められる。7は「中」、11は「主人」と読める。13・14は胎土、調整ともに駿東型坏に類似している高台付きの坏である。15は布目を有する丸瓦の破片である。

第147図 SH・SK 出土遺物実測図



第 148 図 遺構外 出土遺物実測図

第 5 節 柱穴列

SA01

遺構 (第 149 図)

位置 AS・10 グリッド

主軸方位 N - 28.0° - W

残存状況 南北方向に直線状に並ぶ 4 基の柱穴で、さらに延びる可能性をもつ。検出範囲内で全長 5.5m を測り、柱穴間は芯々で 1.80 ~ 1.90m を測る。SA02 と連なる柵列跡である可能性をもつ。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は円形で、規模は長軸が 70 ~ 95cm、短軸が 40 ~ 75cm、検出面からの深さは 45 ~ 52cm である。

所見

時期を特定できない。

SA02

遺構 (第 149 図)

位置 AS・0 グリッド

主軸方位 N - 21.0° - W

残存状況 南北方向に直線状に並ぶ 4 基の柱穴で、さらに延びる可能性をもつ。検出範囲内で全長 4.5m を測

り、柱穴間は芯々で 1.40 ~ 1.70m を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は円形で、規模は長軸が 68 ~ 75cm、短軸が 56 ~ 60cm、検出面からの深さは 45 ~ 65cm である。

所見

時期を特定できない。

SA03

遺構 (第 149 図)

位置 AS・0 グリッド

主軸方位 N - 11.5° - W

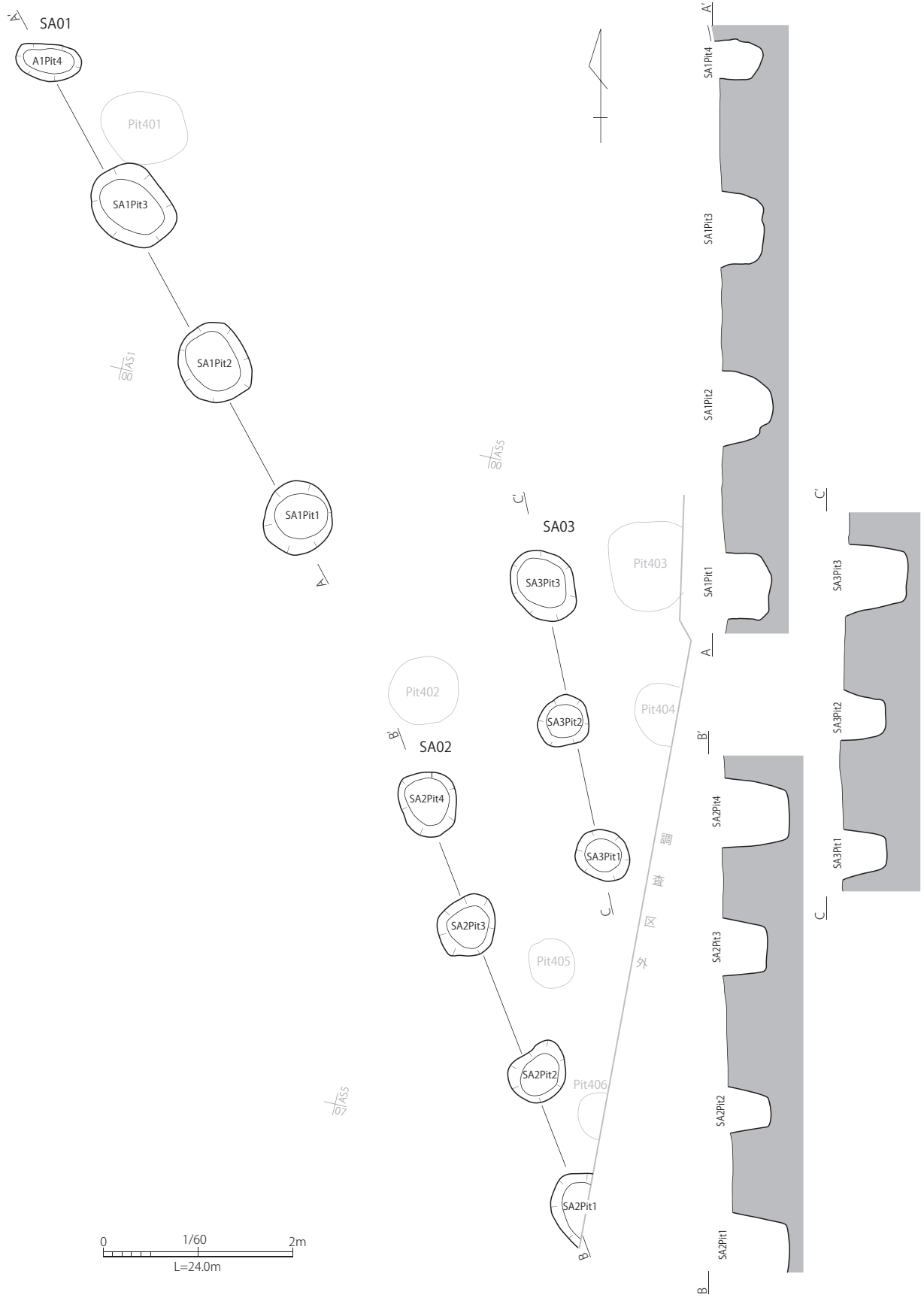
残存状況 直線状に並ぶ 3 基の柱穴で、掘立柱建物跡を構成する柱穴列である可能性もある。検出範囲内で全長 3.0m を測り、柱穴間は芯々で 1.50m を測る。

覆土 大淵スコリアが混じる黒褐色土。

柱穴 柱穴の平面形は円形で、規模は長軸が 55 ~ 76cm、短軸が 52 ~ 66cm、検出面からの深さは 45 ~ 62cm である。

所見

時期を特定できない。



第 149 図 SA01 ~ 03 平面図・断面図

第4章 総括

墨書土器 これまで東平遺跡では8世紀後半から9世紀にかけての墨書土器が数多く出土している。第20地区において注目されるのは9世紀前半のSB40から出土した坯の底部に「若當」とある墨書である。東平遺跡第2地区においても詳細な出土場所は分からないものの、「若當」の墨書土器が出土している（富士市教委1981）。「若當」とは若舎人部や「大伴部若足」（平城木簡天平7年）などと関連して人名などの一部の可能性もあり、今後、詳細な検討をする必要がある。

土器様相 第20地区は後述するとおり、遺構密度が高く、長期間継続的に集落が展開するため、遺構の切り合いが激しく良好な一括遺物に恵まれなかった。特に8世紀の建物跡は9世紀以降の建物に破壊されていることが多い。そのような状況において、「若當」の墨書土器が出土したSB40は9世紀前半の良好な資料である。そのほかにも9世紀中葉のSB24、9世紀後半のSB46、10世紀前半のSB06、SB26などで駿東型土器と甲斐型土器、灰釉陶器の良好なセット関係を把握することができる。

灰釉陶器では、9世紀後半のSB44から足付短頸壺や遺構外からの出土ながら水注が注目される。水注の注口は八面体に丁寧な面取りされており、瀬戸市広久手20・30号窯（10世紀後半）の出土品に類似する。

鉄製品の様相 第20地区では多くの鉄製品が認められ、鉄斧（SB08・SB42）、鉄鎌（SB24・SB27・SB28・SB39）、刀子（SB35・SB39）、紡錘（SB48）、鉄鍬（SB48）が出土している。工具としての鉄製品が多いのが特徴である。平成28年に調査した第41地区においても建物内から鑿が出土しており、郡家である東平遺跡の北側など中心部から少し離れた範囲では、工房やそれに関する職人たちが居住していた可能性が考えられる。

集落の展開 東平遺跡第20地区では、1,559㎡を対象として掘削を行い、竪穴建物跡54軒を調査した。これは、第2地区の107軒や129軒を調査した第3地区に次ぐ建物数である。しかも、100㎡あたりの建物数は3.46軒と東平遺跡の中においてもっとも遺構密度が高い。所属時期の明らかではない1軒を除くと、8世紀前半：19軒、8世紀後半：8軒、9世紀前半：11軒、9世紀後半：8軒、10世紀前半：7軒となる。8世紀前半がもっとも多く、後半になると半減しながら10世紀前半までは継続した集落展開を見せている。8世紀前半から後半への減少は第3地区において倍増する傾向と対応するかのような動きとも言える。また、第20地区においては8世紀後半に減少しながらも10世紀前半まで遺構数あまり変化することなく継続している現象は他の地区では見られない特徴といえる。

第2表 東平遺跡における時期別建物数

遺跡名	地区名	調査面積 (㎡)	建物 軒数	軒数/ 100㎡	5C 後半	6C 前半	6C 後半	7C 前半	7C 後半	8C 前半	8C 後半	9C 前半	9C 後半	10C 前半	10C 後半	11C 前半	時期 不明	未報告
東平遺跡	第3地区	13,570	129	0.95	0	0	0	0	0	35	74	20	0	0	0	0	0	0
	第9地区	2,955	11	0.37	0	0	0	0	0	1	6	1	0	0	0	0	3	0
	第15地区	2,356	23	0.98	0	0	0	0	0	10	2	5	0	4	0	0	2	0
	第16地区	670	19	2.84	0	0	0	3	7	0	2	1	2	0	0	0	4	0
	第24地区	545	1	0.18	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	第27地区	120	1	0.83	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	第28地区	1,008	16	1.59	1	0	0	4	2	3	1	0	0	0	0	0	5	0
	第30地区	275	2	0.73	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
	第37地区-2次	246	1	0.41	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	第37地区-4次	766	14	1.83	0	0	0	0	0	3	5	0	2	1	0	0	3	0
	第60地区	99	5	5.05	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	1	0
	第20地区	1,559	54	3.46	0	0	0	0	0	19	8	11	8	7	0	0	1	0
	第2地区	6,435	107	1.66	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	107
	合計	30,604	383	1.25	1	0	0	7	10	76	100	38	12	12	0	0	20	107
	合計軒数に対する時期ごとの割合 (%)					0.36	0	0	2.54	3.62	27.54	36.23	13.77	4.35	4.35	0	0	7.25

付 表

遺構概要一覧表
出土遺物観察表

- ※ 遺構・遺物ともに、法量の（ ）は残存値、〔 〕は推定値である。
- ※ 残存率は図示中での残存率を示した。

・遺構概要一覧表

竪穴建物跡

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	南北幅 (m)	東西幅 (m)	平面形	主軸方位	燃焼施設	調査	グリッド	調査時の遺構名
SB01	9頁	PL.1	8C前半	3.36	3.66	方形	N-17.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・0	1号住居址
SB02	10頁	PL.1	8C前半	3.31	2.75	方形	N-33.0°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・10	2号住居址
SB03	13頁	PL.1	8C前半	4.18	4.00	方形	N-40.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・10	3号住居址
SB04	14頁	PL.2	8C前半	3.66	3.63	方形	N-27.5°-W	カマド：北壁	本調査	AR・10	4号住居址
SB05	16頁	PL.2	9C中葉～9C後半	3.20	3.00	方形	N-6.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・20	5号住居址
SB06	17頁	PL.2	10C前半	3.27	3.22	方形	N-8.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・20	6号住居址
SB07	19頁		8C前半	3.98	(1.48)	方形	N-2.5°-E	-	本調査	AQ・20	7号住居址
SB08	20頁	PL.2	8C末～9C前半	3.10	2.98	方形	N-16.0°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・20	8号住居址
SB09	23頁	PL.2	8C前半～8C中葉	3.08	3.48	方形	N-22.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・20	9号住居址
SB10	25頁	PL.2	9C前半	2.91	3.36	方形	N-79.5°-E	カマド：東壁	本調査	AR・20	10号住居址
SB11	26頁	PL.2	8C前半	(1.67)	2.71	方形	N-22.0°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・10	11号住居址
SB12	28頁	PL.3	8C前半以前	(1.42)	2.55	方形	N-13.0°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・10	12号住居址
SB13	28頁	PL.3	8C前半	4.70	(2.85)	方形	N-17.5°-W	-	本調査	AQ・10	13号住居址
SB14	29頁	PL.3	8C前半	2.45	(1.90)	方形	N-71.0°-E	カマド：東壁	本調査	AQ・10	14号住居址
SB15	31頁	PL.3	8C前半	3.70	(3.00)	方形	N-21.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・10	15号住居址
SB17	33頁	PL.3	8C前半	2.95	2.50	方形	N-54.0°-E	カマド：東壁	本調査	AQ・10	17号住居址
SB18	35頁		8C	3.62	(3.00)	方形	N-14.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・10	18号住居址
SB19	34頁		8C前半以前	(1.50)	(1.70)	方形	N-10.0°-E	カマド：北壁	本調査	AQ・10	19号住居址
SB20	36頁	PL.3	10C前半	3.73	(1.84)	方形	N-3.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・20	20号住居址
SB21	39頁		8C後半	3.10	3.05	方形	N-5.5°-W	カマド：北壁	本調査	AQ・40	21号住居址
SB22	39頁	PL.3	8C後半	3.52	4.16	長方形	N-0.5°-W	カマド：北壁	本調査	AR・40	22号住居址
SB23	41頁	PL.4	8C中葉～8C後半	3.35	3.36	方形	N-87.5°-E	カマド：(旧)東壁 (新)北壁	本調査	AR・40	23号住居址
SB24	43頁	PL.4	9C中葉	4.22	4.22	方形	N-14.0°-W	カマド：北壁	本調査	AR・10	24号住居址
SB25	45頁	PL.4	8C末	3.60	4.15	長方形	N-13.5°-W	カマド：北壁	本調査	AR・20	25号住居址
SB26	47頁		10C前半	3.16	3.22	方形	N-5.0°-W	カマド：北壁	本調査	AR・20	26号住居址
SB27	49頁	PL.4	9C後半～10C	2.92	2.76	方形	N-27.0°-W	カマド：北壁	本調査	AR・20	27号住居址
SB28	51頁	PL.4	9C前半	3.00	2.96	方形	N-12.0°-W	カマド：北壁	本調査	AR・20	28号住居址
SB29	53頁	PL.4	9C前半	3.35	3.50	方形	N-9.0°-W	カマド：北壁	本調査	AR・30	29号住居址
SB30	55頁		8C	3.03	2.86	方形	N-29.0°-W	カマド：北壁	本調査	AS・10	30号住居址
SB31	56頁	PL.6	8C後半	3.14	3.14	方形	N-21.0°-W	カマド：北壁	本調査	AR・10	31号住居址
SB32	58頁	PL.6	8C後半	2.46	2.71	方形	N-16.0°-W	カマド：北壁	本調査	AS・20	32号住居址
SB33	59頁	PL.6	8C後半～9C	2.65	2.88	方形	N-1.5°-E	カマド：北壁	本調査	AR・20	33号住居址
SB34	61頁	PL.6	8C前半	2.18	2.56	方形	N-29.5°-W	カマド：北壁	本調査	AS・20	34号住居址
SB35	62頁	PL.6	8C前半	3.32	3.27	方形	N-14.5°-W	カマド：北壁	本調査	AS・20	35号住居址
SB36	64頁	PL.6	9C前半	3.72	4.05	方形	N-9.0°-W	カマド：北壁	本調査	AS・20	36号住居址
SB37	66頁	PL.6	8C中頃～8C後半	3.37	4.10	長方形	N-8.0°-W	カマド：北壁	本調査	AS・20	37号住居址
SB38	67頁	PL.6	9C後半～10C前半	2.65	2.78	方形	N-82.5°-E	カマド：東壁	本調査	AS・30	38号住居址
SB39	69頁	PL.6	9C前半	3.34	3.30	方形	N-5.5°-W	カマド：北壁	本調査	AS・20	39号住居址
SB40	69頁	PL.7	9C前半	(3.50)	4.68	方形	N-19.0°-W	カマド：北壁	本調査	AT・40	40号住居址
SB42	72頁	PL.7	8C末～9C初頭	4.14	3.37	長方形	N-3.0°-W	カマド：北壁	本調査	AS・30	42号住居址
SB43	75頁	PL.7	8C後半	4.03	3.98	方形	N-2.5°-E	カマド：北壁	本調査	AS・40	43号住居址
SB44	76頁	PL.7	9C後半	3.50	3.16	方形	N-7.5°-W	カマド：北壁	本調査	AS・30	44号住居址
SB45	77頁	PL.7	8C～9C	2.96	3.00	方形	N-79.0°-E	カマド：東壁	本調査	AT・30	45号住居址
SB46	79頁	PL.8	9C後半	(2.54)	(1.76)	方形	N-7.0°-W	カマド：北壁	本調査	AT・30	46号住居址
SB47	80頁		9C後半以前	(2.20)	(0.68)	方形	N-9.0°-W	-	本調査	AT・30	47号住居址
SB48	82頁		9C後半	3.12	(1.90)	方形	N-2.5°-W	-	本調査	AT・30	48号住居址
SB49	84頁	PL.8	9C末～10C前半	3.43	3.20	方形	N-7.5°-W	-	本調査	AS・30	49号住居址
SB50	84頁	PL.8	10C	2.54	2.53	方形	N-77.0°-E	カマド：東壁	本調査	AS・20	50号住居址
SB51	86頁		?	(1.90)	(0.72)	方形	N-18.0°-W	-	本調査	AT・20	51号住居址
SB53	87頁	PL.7	9C中頃～9C後半	3.78	3.90	方形	N-2.5°-W	カマド：北壁	本調査	AT・30	53号住居址
SB54	88頁		9C	(1.13)	(2.52)	方形	N-1.0°-W	カマド：北壁	本調査	AT・30	54号住居址
SB56	90頁		9C後半以前	(1.05)	1.90	隅丸方形	N-79.0°-W	カマド：西壁	本調査	AT・30	56号住居址
SB57	90頁		9C後半	3.64	(3.60)	長方形	N-1.0°-W	-	本調査	AT・30	57号住居址
SB58	73頁		8C	(2.56)	(0.30)	方形	不明	カマド：北壁	本調査	AS・30	58号住居址

付表 遺構概要一覧表

掘立柱建物跡

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	南北幅 (m)	東西幅 (m)	平面形	主軸方位	調査	グリッド	調査時の遺構名
SH01	92頁		8C後半以前	7.50	5.00	長方形	N-9.0°-W	本調査	AR・30	1号掘立柱建物跡
SH02	92頁		?	4.50	(1.70)	方形	N-3.0°-W	本調査	AR・50	2号掘立柱建物跡
SH03	92頁		?	(1.40)	(4.00)	方形	N-0°-W	本調査	AR・50	3号掘立柱建物跡
SH04	92頁	PL.8	?	3.75	4.30	長方形	N-4.0°-W	本調査	AS・20	4号掘立柱建物跡

溝状遺構

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	全長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	調査	グリッド	調査時の遺構名
SD01	96頁	PL.8	?	(3.40)	45	16	本調査	AR・40	1号溝状遺構
SD02	96頁	PL.8	?	(6.20)	25～60	18	本調査	AR・40	2号溝状遺構
SD03	96頁	PL.8	?	(6.20)	25～45	16	本調査	AR・50	3号溝状遺構

柱穴列

遺構名	掲載頁	図版	遺構の時期	全長 (m)	主軸方位	調査	グリッド	調査時の遺構名
SA01	100頁		?	(5.50)	N-28.0°-W	本調査	AS・10	柱穴列
SA02	100頁		?	(4.50)	N-21.0°-W	本調査	AS・0	柱穴列
SA03	100頁		?	(3.00)	N-11.5°-W	本調査	AS・0	5号掘立柱建物跡

遺構番号	グリッド	平面形	規模 (cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
SK166	AR-30	円形	90	76	9	
SK167	AR-40	円形	111	105	5	
SK168	AR-40	円形	120	117	29	
SK170	AS-30	円形	129	126	9	
SK171	AT-30	不定形	126	117	6	
SK172	AT-30	円形	129	126	5	集石遺構
SK173	AT-30	円形	96	92	3	
SK174	AT-30	円形	138	135	8	
SK175	AS-30	楕円形	156	148	40	
SK176	AS-30	円形	213	210	15	
SK177	AS-30	円形	150	(108)	17	
SK178	AS-30	円形	(114)	(78)	6	
SK179	AS-20	不定形	132	129	19	
SK180	AS-20	円形	129	129	22	
SK181	AS-30	円形	99	84	16	
SK184	AT-40	円形	108	108	20	
SK185	AT-40	円形	105	(61)	7	1/2 残存調査区外
SK187	AS-10	円形	(111)	(45)	18	1/2 残存
SK188	AS-20	円形	144	(87)	10	1/2 残存
SK189	AS-20	円形	108	105	6	
SK190	AS-30	円形	129	129	12	
SK191	AS-30	円形	105	105	8	
SK192	AS-30	円形	144	120	8	
SK193	AS-30	円形	144	117	14	
SK194	AS-30	円形	114	96	4	
SK195	AS-30	円形	144	132	10	
SK196	AS-30	円形	111	111	8	
SK197	AS-30	不定形	159	153	13	
SK198	AS-30	円形	99	93	8	
SK199	AS-30	円形	117	(102)	12	
SK200	AS-30	円形	×	×	3	1/4 残存
SK201	AS-40	円形	(78)	(78)	6	1/2 残存
SK202	AS-40	円形	123	(102)	13	1/2 残存
SK203	AS-40	円形	129	126	16	
SK204	AS-40	円形	114	96	8	
SK205	AS-40	円形	(63)	(39)	3	1/2 残存
SK206	AS-40	円形	108	102	8	
SK207	AS-40	円形	105	102	4	
SK208	AS-40	円形	120	120	20	
SK209	AS-40	円形	114	105	5	1/2 残存
SK210	AS-40	楕円形	162	138	14	
SK211	AS-40	円形	117	108	7	
SK212	AS-40	円形	141	129	7	
SK213	AS-40	円形	72	69	17	
SK214	AS-40	円形	84	(78)	5	
SK215	AS-40	円形	111	(93)	4	
SK216	AS-40	不定形	129	(90)	×	1/2 残存調査区外

遺構番号	グリッド	平面形	規模 (cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
SK217	AS-30	円形	×	×	5	1/4 残存
SK218	AS-30	円形	(120)	(78)	7	
SK219	AR-10	円形	141	132	21	
SK220	AS-20	円形	90	81	9	
SK221	AS-20	円形	159	141	12	
SK222	AS-10	円形	135	(62)	13	1/2 残存
SK228	AS-10	楕円形	90	75	39	
SK229	AS-00	円形	75	75	43	
SK230	AS-00	円形	99	78	30	1/2 残存調査区外
SK231	AS-00	円形	69	(51)	52	1/2 残存調査区外
SK233	AR-00	不定形	81	72	16	
SK234	AS-20	不定形	78	78	28	
SK235	AS-20	不定形	75	48	27	
SK237	AT-20	不定形	(51)	(48)	3	1/2 残存
SK238	AT-20	不定形	(84)	(69)	13	1/2 残存調査区外
SK239	AT-20	円形	126	120	20	
SK240	AT-30	楕円形	81	54	3	
SK241	AT-30	楕円形	93	54	5	
SK242	AT-30	円形	63	63	16	
SK243	AT-30	不定形	117	75	8	
SK244	AT-30	円形	69	36	6	1/2 残存
SK245	AT-30	円形	57	57	7	
SK246	AT-40	円形	60	57	24	
SK247	AT-30	不定形	60	57	36	
SK248	AS-40	円形	66	(36)	3	1/2 残存
SK249	AS-30	楕円形	(78)	(54)	9	1/2 残存
SK250	AS-30	楕円形	×	×	4	1/5 残存
SK251	AS-30	楕円形	×	×	4	1/4 残存
SK252	AS-30	不定形	114	45	48	
SK253	AS-30	円形	60	57	34	
SK254	AS-30	楕円形	66	43	25	
SK255	AS-30	不定形	93	60	41	
SK256	AS-20	円形	×	×	26	1/4 残存
SK257	AS-20	楕円形	90	81	17	
SK258	AS-20	円形	66	66	14	
SK259	AS-20	円形	72	69	27	
SK260	AS-20	不定形	120	57	14	
SK261	AR-10	円形	138	132	24	
SK262	AS-10	楕円形	75	51	17	
SK263	AS-20	円形	60	48	15	
SK264	AS-10	円形	63	60	9	
SK265	AS-20	円形	57	50	38	
SK266	AS-20	楕円形	×	×	14	1/4 残存
SK271	AT-20	楕円形	75	60	29	
SK287	AS-20	方形	81	54	40	
SK288	AS-20	円形	99	93	25	

ピット

遺構番号	グリッド	平面形	規模 (cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P35	AQ-40	円形	60	57	28	
P36	AQ-40	楕円形	90	66	23	
P50	AS-00	円形	39	36	24	
P51	AS-10	円形	81	81	35	
P52	AS-10	円形	69	66	10	
P53	AS-10	円形	54	42	11	
P54	AS-00	円形	36	33	35	
P55	AS-10	円形	48	39	35	
P56	AS-10	円形	30	(21)	12	1/2 残存
P57	AS-10	円形	45	45	18	
P58	AS-10	円形	54	51	18	
P59	AS-10	円形	42	39	29	
P60	AS-10	楕円形	45	30	13	
P61	AS-10	円形	36	33	10	
P62	AS-10	円形	39	39	25	
P63	AS-10	円形	33	33	9	
P64	AS-10	円形	30	30	18	
P65	AS-10	円形	30	30	15	
P66	AS-10	円形	33	30	20	
P67	AS-10	円形	63	57	21	
P68	AS-10	円形	60	57	10	
P69	AS-20	円形	33	30	38	
P70	AS-20	円形	57	(45)	15	
P71	AS-20	円形	24	21	22	
P72	AS-20	円形	60	57	29	
P73	AS-10	円形	36	33	8	
P74	AS-10	円形	48	42	43	
P75	AS-20	楕円形	(66)	51	25	
P76	AS-20	円形	78	45	45	
P77	AS-20	円形	54	51	18	
P87	AS-30	円形	42	42	15	
P88	AT-30	円形	63	60	23	
P89	AT-30	円形	51	48	7	
P90	AS-30	不定形	57	48	34	
P92	AS-10	不定形	60	(51)	8	
P93	AS-20	円形	51	51	33	
P94	AS-20	円形	42	40	25	
P96	AS-10	円形	48	45	25	1/2 残存
P98	AS-10	楕円形	45	33	13	
P99	AS-30	円形	63	48	33	
P100	AS-10	楕円形	36	24	20	
P278	AS-20	円形	42	36	65	
P280	AS-20	円形	42	42	11	
P401	AQ-10	円形	51	51	32	
P402	AR-20	円形	(51)	(45)	10	1/2 残存
P403	AR-20	円形	60	(45)	13	
P404	AQ-30	円形	54	51	12	
P405	AR-30	円形	51	42	10	1/2 残存
P406	AR-30	不定形	75	60	25	
P407	AQ-40	不定形	42	39	18	
P408	AQ-40	円形	51	45	6	
P409	AQ-40	楕円形	51	36	5	
P410	AQ-40	円形	57	45	9	1/2 残存
P411	AQ-40	円形	60	51	39	
P412	AQ-40	円形	33	30	49	
P413	AR-40	円形	48	48	53	
P414	AR-50	円形	48	48	28	
P415	AR-40	円形	42	42	42	
P416	AR-40	円形	51	48	6	
P417	AR-50	円形	63	60	39	
P418	AR-50	楕円形	54	39	15	
P419	AR-40	円形	42	36	30	
P420	AR-40	円形	36	33	22	
P421	AR-40	円形	36	33	20	
P422	AR-40	楕円形	39	30	12	
P423	AR-40	楕円形	48	36	8	
P424	AR-50	円形	42	36	22	
P425	AR-20	円形	51	49	10	
P426	AR-30	円形	63	(51)	9	
P427	AR-40	円形	39	39	30	
P428	AR-40	円形	42	39	5	
P429	AR-40	円形	39	36	18	
P430	AS-40	円形	42	36	7	
P431	AS-40	楕円形	63	45	45	
P432	AS-40	円形	54	38	15	

遺構番号	グリッド	平面形	規模 (cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P433	AS-40	円形	54	40	6	
P434	AS-40	円形	42	42	10	
P435	AS-40	円形	33	30	19	
P436	AS-40	円形	30	30	9	
P437	AS-10	円形	57	51	8	
P438	AS-10	円形	42	33	7	
P439	AS-00	円形	51	42	31	
P440	AS-00	円形	54	48	21	
P441	AS-00	円形	39	33	13	
P442	AS-00	楕円形	48	34	14	
P443	AS-00	円形	57	54	48	
P444	AS-00	円形	54	54	12	
P445	AS-00	不定形	57	57	13	
P446	AS-00	円形	60	60	13	
P447	AS-00	円形	57	36	43	1/2 残存
P448	AR-00	円形	48	45	24	
P449	AR-10	円形	39	36	34	
P450	AR-10	円形	54	48	27	
P451	AS-10	円形	36	36	15	
P452	AS-10	楕円形	63	39	17	
P453	AS-20	円形	51	36	19	
P454	AS-10	円形	27	24	5	
P455	AS-10	円形	48	45	18	
P456	AS-10	円形	42	39	7	
P457	AS-10	不定形	63	57	30	
P458	AS-10	円形	36	33	22	
P459	AS-10	円形	33	24	14	
P460	AS-10	楕円形	57	42	14	
P461	AS-10	円形	(33)	(33)	15	1/2 残存
P462	AS-10	楕円形	60	39	30	
P463	AS-10	円形	36	36	25	
P464	AS-20	円形	39	36	27	
P465	AS-20	円形	30	30	22	
P466	AS-20	円形	33	33	24	
P467	AS-20	円形	27	26	33	
P468	AS-20	円形	54	51	14	
P469	AS-20	不定形	63	42	73	
P470	AS-20	円形	48	45	17	
P471	AS-20	楕円形	72	60	12	
P472	AS-20	楕円形	42	36	75	
P473	AS-20	楕円形	51	39	66	
P474	AS-20	円形	36		29	1/2 残存
P475	AS-20	円形	48	45	30	
P476	AS-20	円形	45	39	11	
P477	AT-20	円形	45	43	14	
P478	AS-30	円形	(54)	54	37	
P479	AS-20	円形	42	42	28	
P480	AS-20	円形	42	42	8	
P481	AT-20	円形	39	39		
P482	AT-20	円形	(48)	42	14	1/2 残存
P483	AT-20	円形	(51)	48	36	
P484	AT-20	円形	63	60	26	
P485	AT-20	円形	(53)	54	25	1/2 残存
P486	AS-30	楕円形	30	21	37	
P487	AS-30	円形	51	42	34	
P488	AT-30	円形	36	33	14	
P489	AT-30	円形	51	48	25	1/2 残存
P490	AT-30	楕円形	33	27	19	1/2 残存
P491	AS-30	円形	33	30	8	
P492	AS-30	楕円形	48	39	16	
P493	AS-30	円形	51	27	19	
P494	AS-30	円形	39	37	23	
P495	AS-30	円形	51	45	29	
P496	AS-30	楕円形	39	30	12	
P497	AS-30	円形?	×	×	8	1/3 残存
P498	AS-30	円形	45	41	33	
P499	AS-30	円形	33	30	16	
P500	AT-30	円形	36	33	15	
P501	AT-30	円形	37	33	20	
P502	AS-40	円形	33	30	8	
P503	AS-40	円形	27	24	4	
P504	AS-40	不定形	51	45	4	
P505	AS-40	円形	(45)	39	23	1/2 残存
P506	AS-40	円形	48	45	24	

石製品

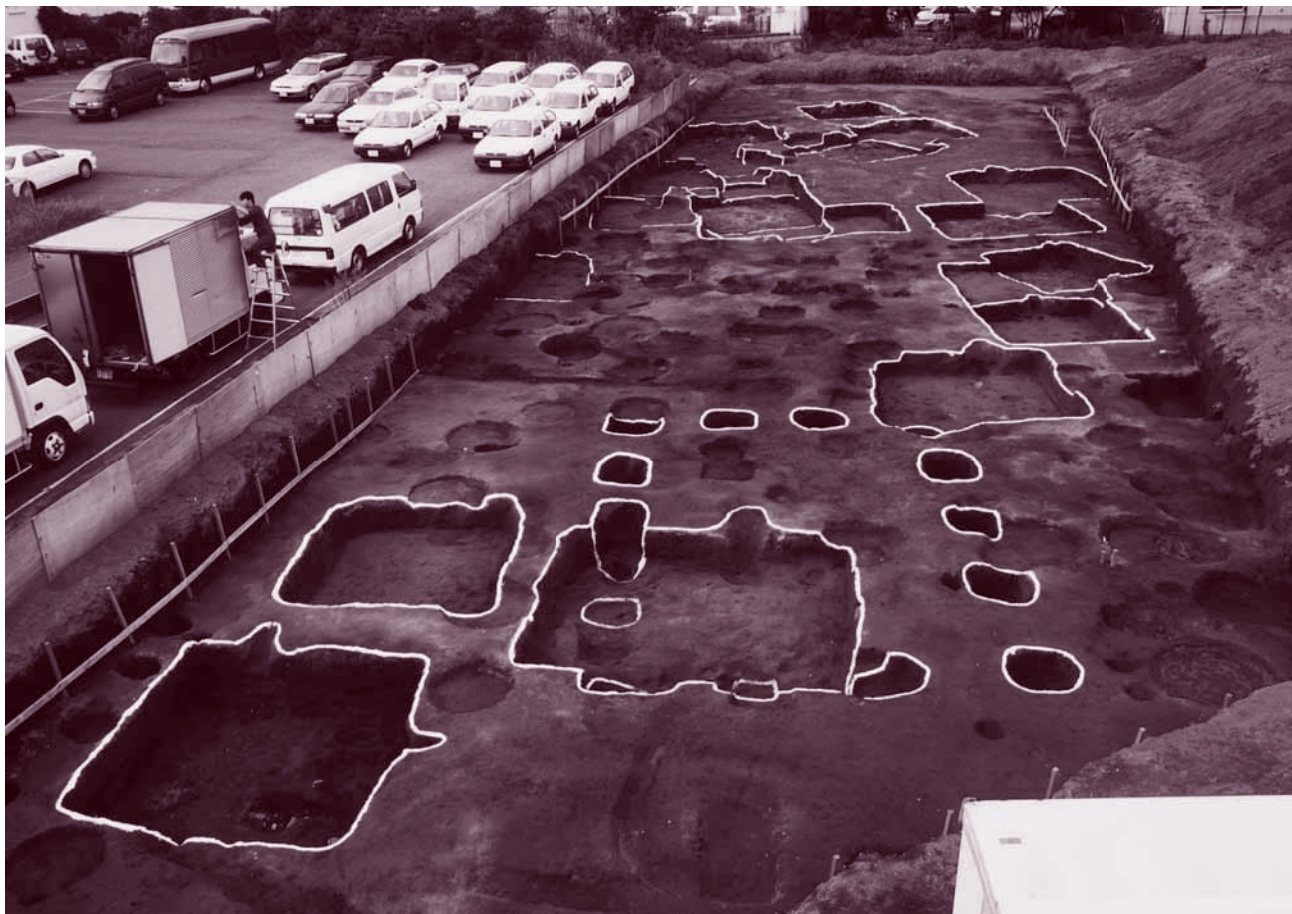
挿図	図版	報告書番号	R 番号	遺構名	種別	器種	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
第 11 図	PL.10	SB02-7	128	SB02	石製品	磨礫石	14.2	5.2	3.8	433
第 51 図	PL.15	SB18-5	397	SB18	石製品	礫石	4.0	4.5	1.8	49.6
第 57 図	PL.16	SB21-6	172	SB21	石製品	磨礫石	11.4	4.7	4.0	302.3
第 63 図	PL.17	SB23-20	241	SB23	石製品	磨礫石	16.7	6.05	4.9	835.8
第 72 図	PL.19	SB26-17	209	SB26	石製品	礫石	6.2	4.3	2.9	92
第 78 図	PL.20	SB28-12	228	SB28	石製品	磨礫石	14.2	5.0	4.2	458
第 147 図	PL.34	SK041-13	097	SK041	石製品	磨礫石	15.0	5.7	4.0	536.2
第 147 図	PL.34	SK049-14	025	SK049	石製品	磨礫石	17.25	5.7	3.2	414.3

鉄製品

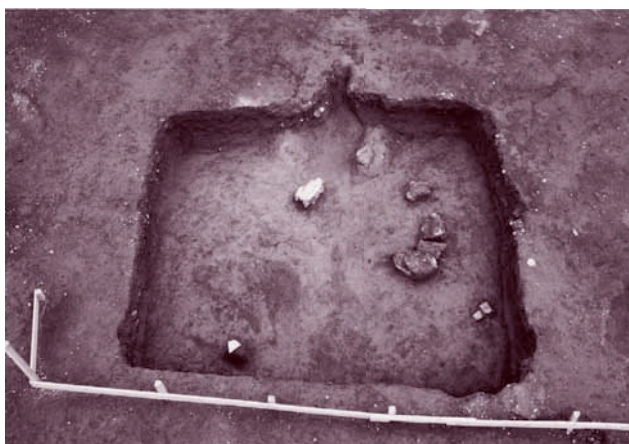
挿図	図版	報告書番号	R 番号	遺構名	種別	器種	重量 (g)	全長 (cm)	刃部・鐵身部 (cm)		茎部 (cm)			頸部 (cm)			袋部 (cm)		紡輪 (cm)		紡茎 (cm)	
									長	幅	長	幅	厚	長	幅	厚	幅	厚	直径	厚	長	径
第 28 図	PL.12	SB08-18	260	SB08	鉄製品	袋状鉄斧	149.15	8.0	[4.7]					4.1 2.4								
第 66 図	PL.18	SB24-13	252	SB24	鉄製品	鎌	69.72	(16.2)	3.0	0.2												
第 72 図	PL.20	SB26-16	210	SB26	鉄製品	紡錘	49.8							5.5 0.2		(2.2) 0.55						
第 75 図	PL.20	SB27-2	336	SB27	鉄製品	鎌	18.72	7.8	2.4	0.2												
第 78 図	PL.20	SB28-11	211	SB28	鉄製品	鎌	31.55	12.7	1.9	0.2												
第 97 図	PL.23	SB35-13	560	SB35	鉄製品	刀子	15.21	(8.8)	8.5	1.3	0.3	0.4										
第 107 図	PL.24	SB39-7	692	SB39	鉄製品	鎌	28.93	(7.6)														
第 107 図	PL.24	SB39-8	693	SB39	鉄製品	刀子	23.21	(12.5)	(5.3)	1.3	0.35	(4.2)	0.7	0.4								
第 113 図	PL.27	SB42-17	759	SB42	鉄製品	袋状鉄斧	88.94	6.9	[3.5]					3.6 1.7								
第 123 図	PL.30	SB46-14	536	SB46	鉄製品	不明	2.68	7.7														
第 125 図	PL.31	SB48-10	760	SB48	鉄製品	紡錘	34.86	(13.6)						4.9 0.25		0.45						
第 125 図	PL.31	SB48-11	545	SB48	鉄製品	刀子	6.88	(7.0)	5.7	1.4	0.2	1.3	0.8	0.25								
第 125 図	PL.31	SB48-12	545	SB48	鉄製品	鉄鏝	1.82	(3.1)	1.9	1.5	1.3				1.4	1.4	0.2					
第 125 図	PL.31	SB48-13	545	SB48	鉄製品	鉄鏝	3.33	(5.4)						0.65	0.25							
第 125 図	PL.31	SB48-14	760	SB48	鉄製品	鉄鏝	4.69	(5.3)						0.4	0.4							
第 125 図	PL.31	SB48-15	760	SB48	鉄製品	鉄鏝	9.25	(8.2)						0.5	0.5							

写真図版

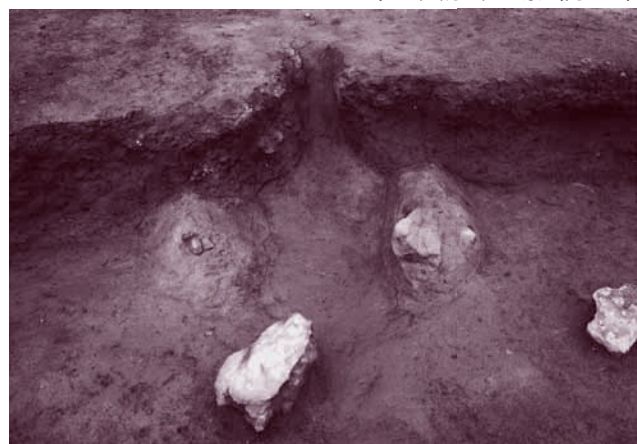
PLATE



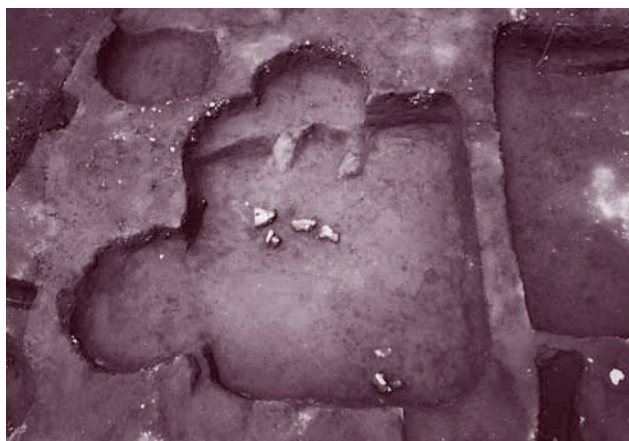
1. 1区調査区全景 (南から)



2. SB01 (南から)



3. SB01 カマド (南から)



4. SB02 (南東から)



5. SB03 (南東から)



1. SB04 (南東から)



2. SB05 (南から)



3. SB06 (南から)



4. SB06 カマド (南から)



5. SB08 (南から)



6. SB09 (南から)



7. SB10 (南から)



8. SB11 (南から)



1. SB12 (南から)



2. SB13 (南東から)



3. SB14 (南から)



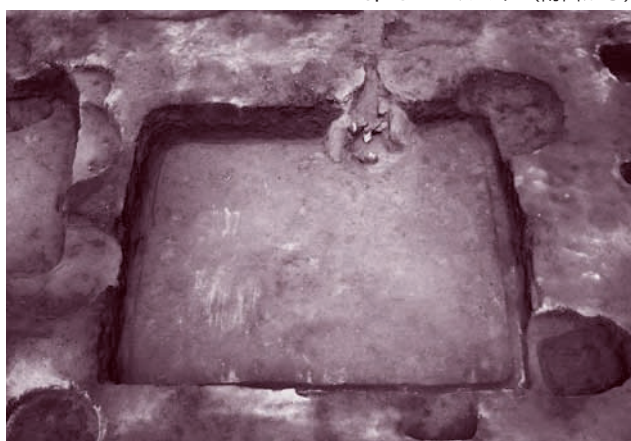
4. SB15 (南から)



5. SB17 カマド (南西から)



6. SB20 (南から)



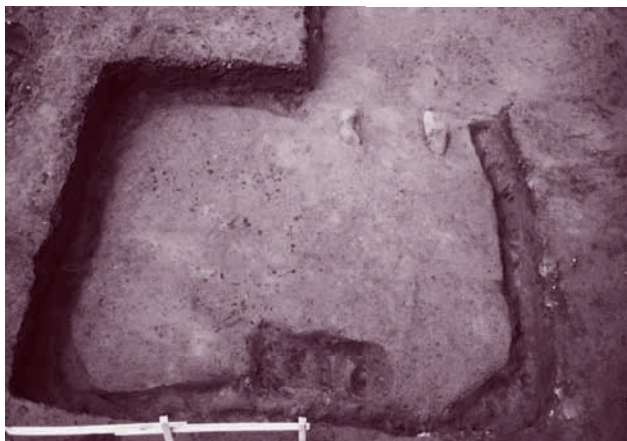
7. SB22 (南から)



8. SB22 カマド (南から)



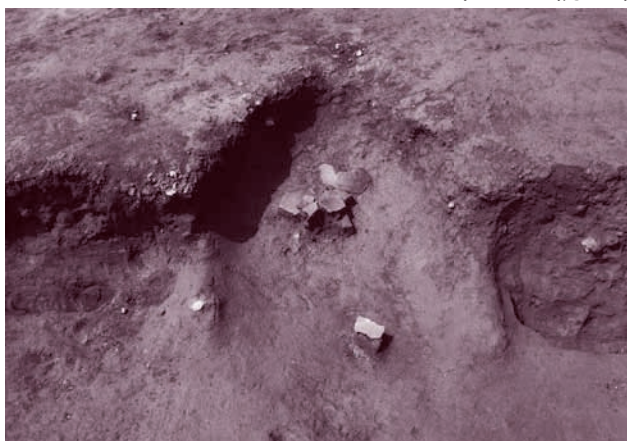
1. SB23 (南から)



2. SB25 (南から)



3. SB24 (南から)



4. SB24 カマド (南から)



5. SB27 (南から)



6. SB28 (南から)



7. SB29 (南から)



8. SB29 カマド (南から)



1. 2区調査区全景（南から）



1. SB31 (南東から)



2. SB32 (南東から)



3. SB33 (南から)



4. SB34・SB35 (南から)



5. SB36 カマド (南から)



6. SB37 カマド (南から)



7. SB38 (南から)



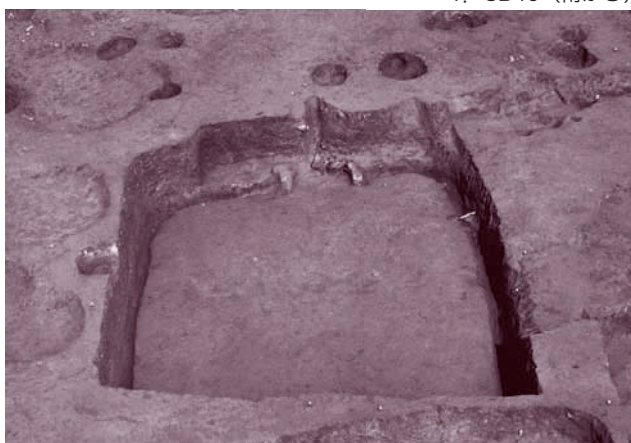
8. SB39 (南から)



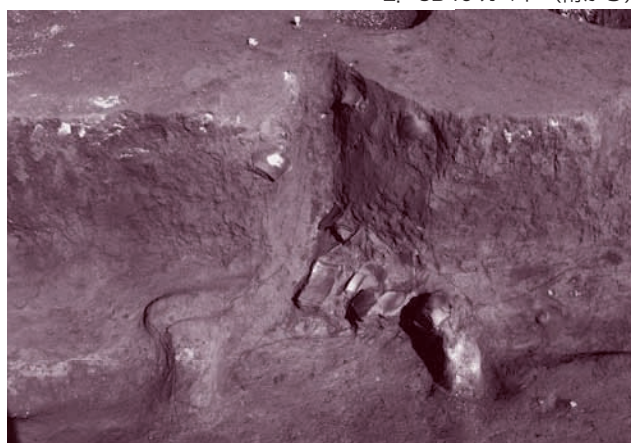
1. SB40 (南から)



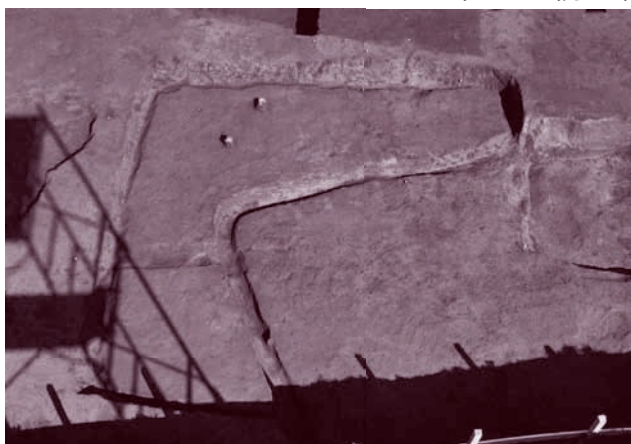
2. SB40 カマド (南から)



3. SB42 (南から)



4. SB42 カマド (南から)



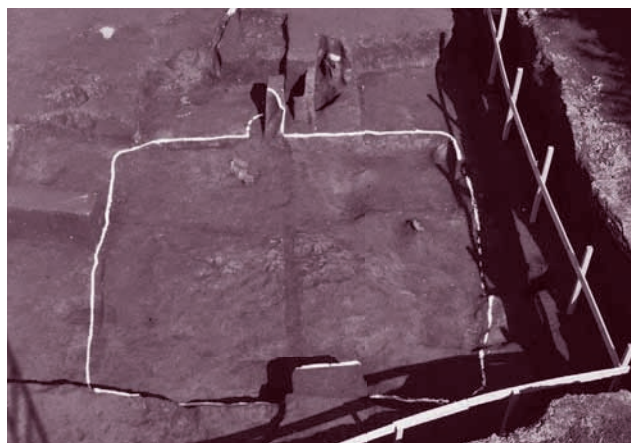
5. SB43 (南から)



6. SB44 (南から)



7. SB45 (西から)



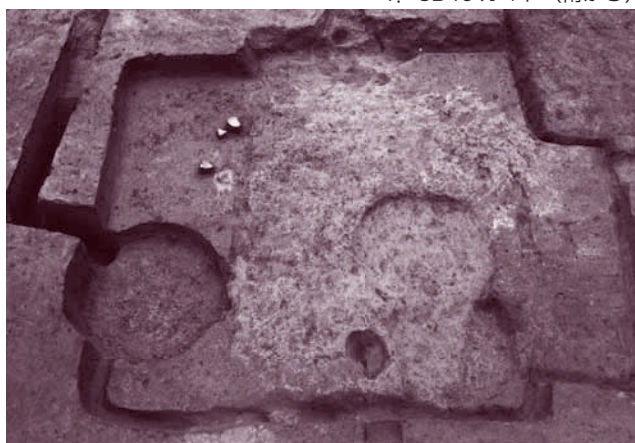
8. SB53 (南から)



1. SB46 カマド (南から)



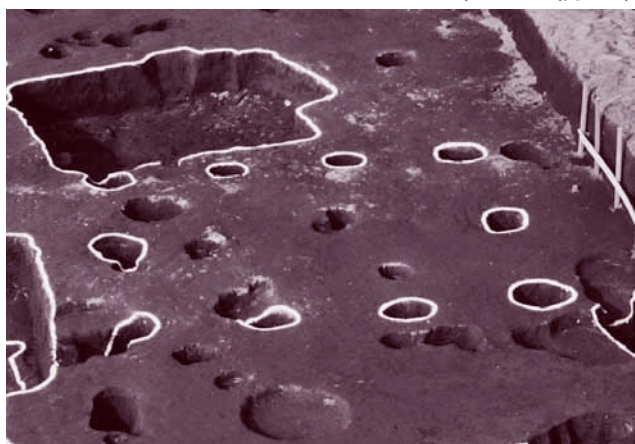
2. SB46 カマド遺物出土状況



3. SB49 (南から)



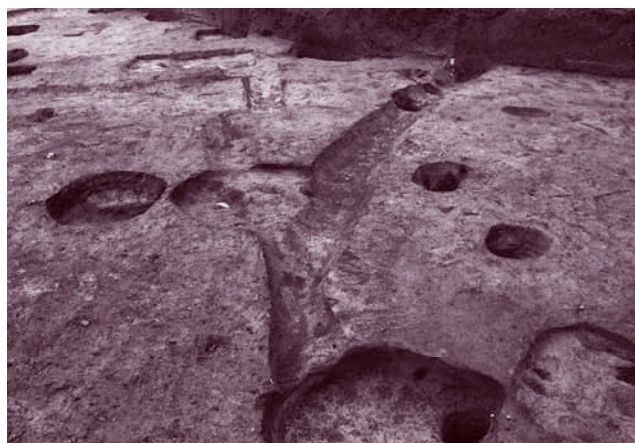
4. SB50 (南から)



5. SH04 (南から)



6. SD01 (南から)



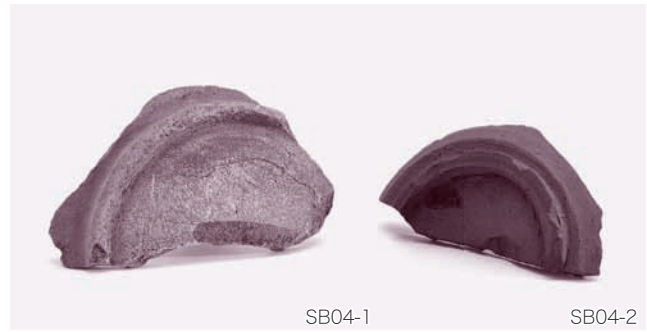
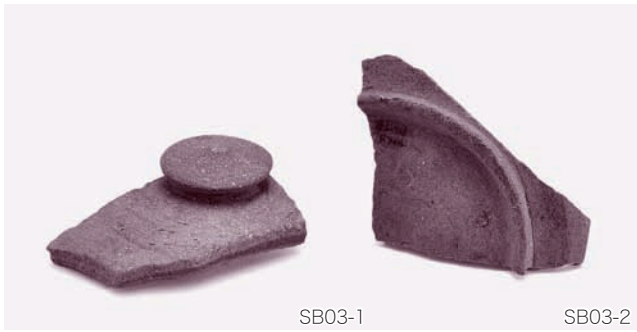
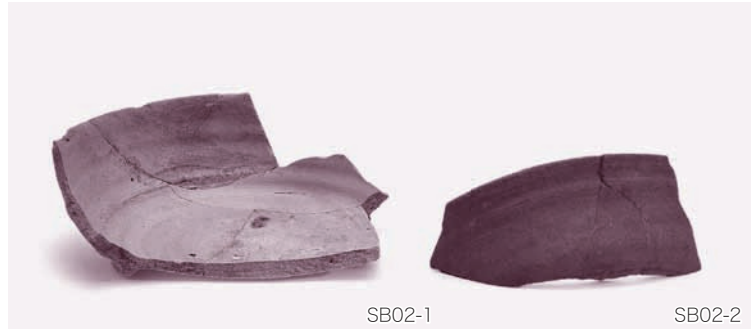
7. SD02 (西から)



8. SD03 (西から)



1. 出土遺物集合

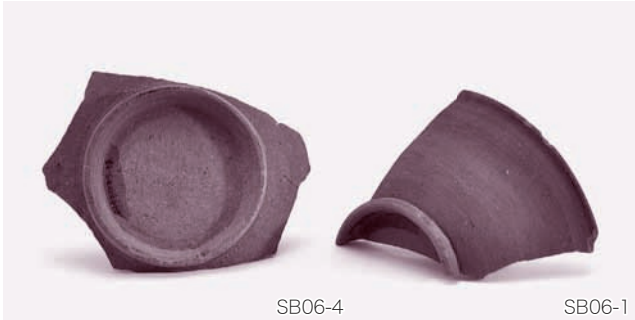




SB06-2



SB06-3

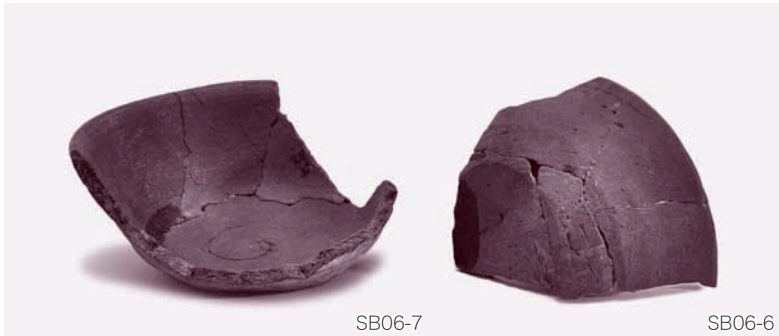


SB06-4

SB06-1



SB06-5



SB06-7

SB06-6



SB06-8



SB06-12



SB06-13



SB06-10



SB06-16

SB06-14



SB06-15



SB07-1



SB07-4

SB07-2



SB07-5



SB08-8

SB08-6



SB08-7



SB07-8



SB08-18



SB08-17



SB09-7

SB09-6



SB10-2



SB10-5

SB10-4



SB09-4



SB10-6



SB09-5



SB10-7



SB10-8



SB11-1

SB11-3



SB11-4



SB11-2



SB13-1



SB15-3



SB14-1



SB11-5



SB14-4



SB13-6



SB15-4







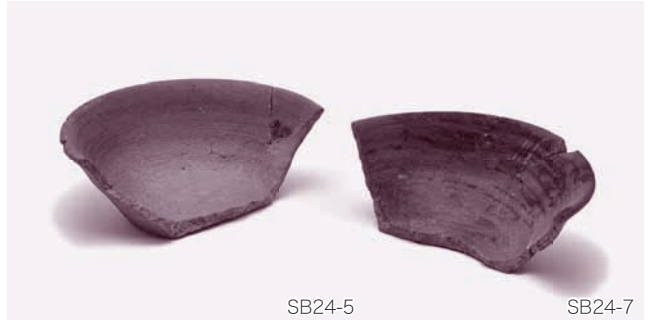
SB23-18



SB24-1



SB23-17



SB24-5

SB24-7



SB24-6



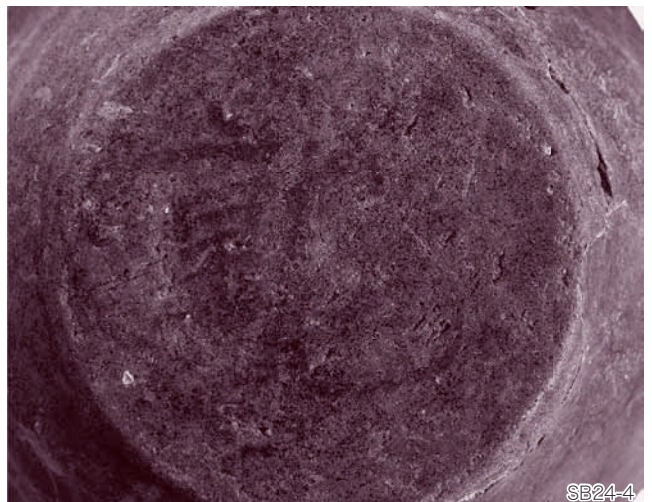
SB23-19



SB24-4



SB23-20



SB24-4



SB24-9



SB25-11



SB24-12



SB25-12



SB24-13



SB25-6



SB25-6



SB25-12



SB25-5



SB25-8



SB25-13



SB25-15



SB25-16



SB25-17



SB25-18



SB26-13



SB26-14



SB26-15



SB26-17



SB26-2

SB26-1



SB26-16



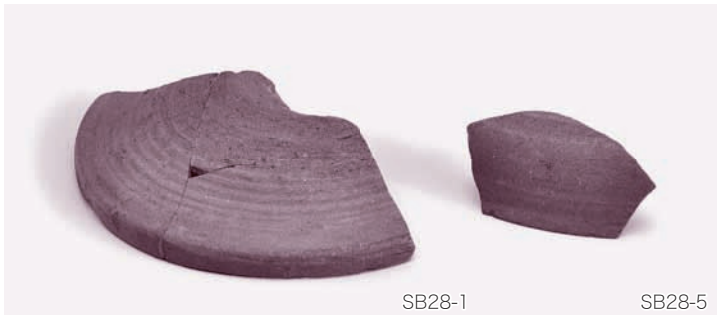
SB26-5



SB26-6



SB26-6



SB28-1

SB28-5



SB28-3



SB29-3



SB29-4



SB29-3



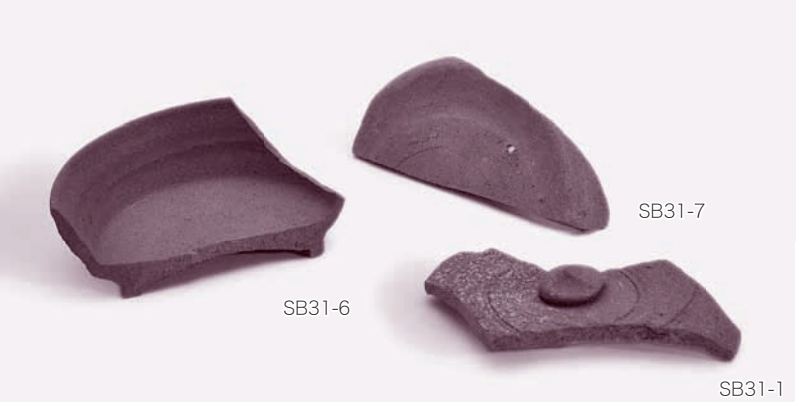
SB28-12



SB27-2



SB28-11





SB31-12



SB31-13



SB31-15



SB32-5



SB31-17



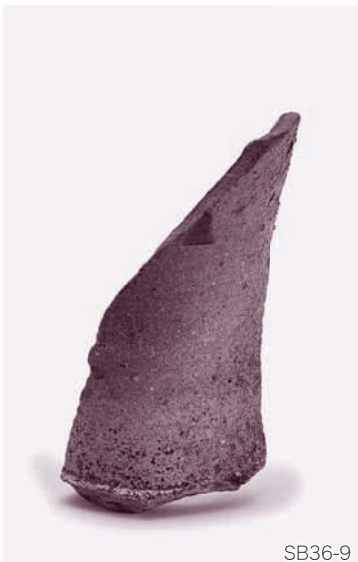
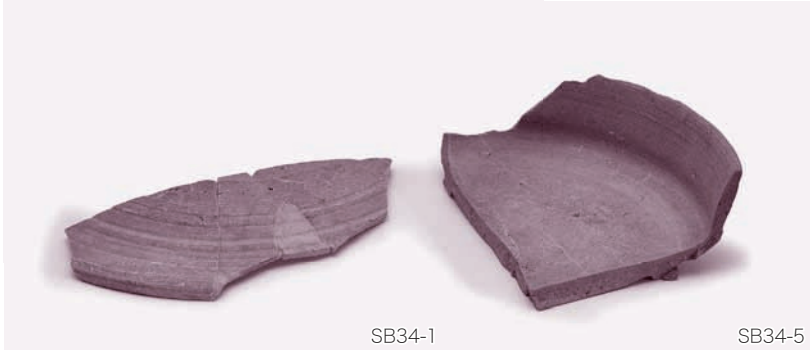
SB32-7

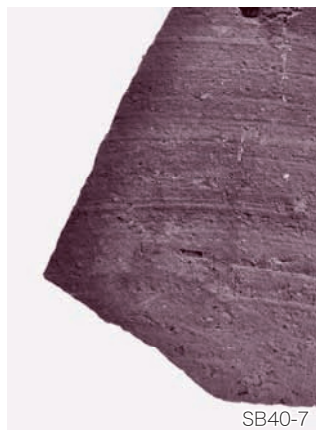


SB33-1



SB34-8



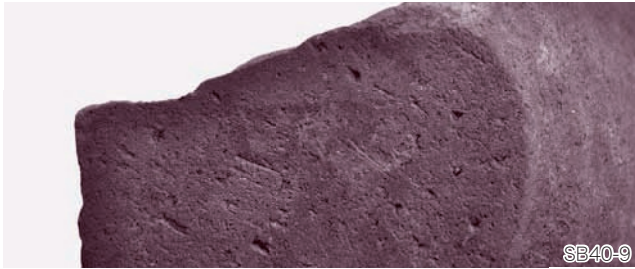




SB40-9



SB40-14



SB40-9



SB40-15



SB40-10



SB40-16



SB40-11



SB40-18



SB40-12



SB40-19



SB40-20



SB40-22



SB40-23



SB40-24



SB42-1



SB42-5

SB42-2



SB42-6



SB42-9



SB42-10



SB42-11



SB43-3



SB42-12



SB43-3



SB42-14



SB42-13



SB42-15



SB42-17



SB42-16



SB43-4



SB44-10



SB44-3



SB44-11



SB44-5



SB44-9



SB44-12



SB44-13



SB44-16

SB44-14



SB44-18



SB44-20



SB46-1



SB46-6



SB46-7



SB46-9



SB46-7

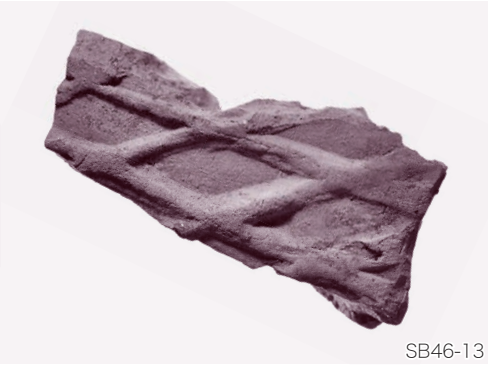


SB46-10



SB46-11

SB46-12



SB46-13



SB46-14



SB48-5



SB48-6



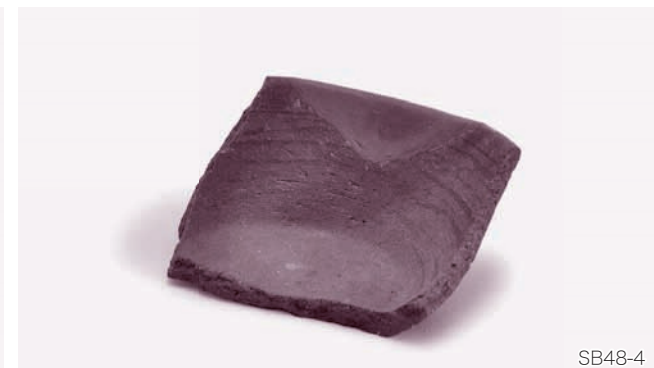
SB48-1



SB48-2



SB48-3



SB48-4



SB48-7



SB48-8



SB48-9





SB50-1



SB50-6



SB50-11



SB50-12

SB50-9



SB50-13



SB53-4



SB53-8



SB53-3



SB53-9



SB53-10

SB53-13



SB53-15



SB53-14



SB54-6



SB57-3



SB54-3



SB57-1



SB57-2



SH04Pit04-1



SK003-9

SK003-8



SK189-3



SH04Pit07-7



SK088-4



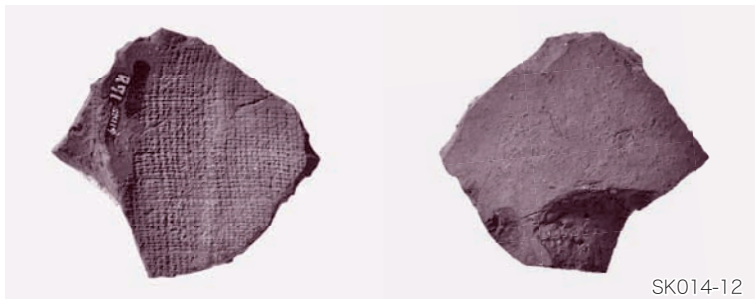
SK121-5



SK041-13



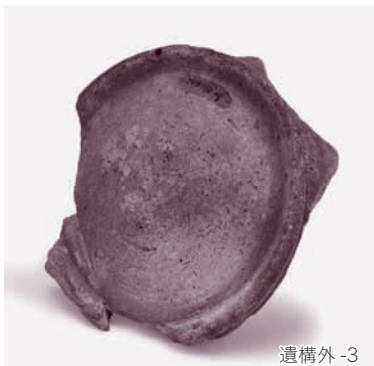
SK049-14



SK014-12



遺構外-1



遺構外-3



遺構外-13



遺構外-6



遺構外-7



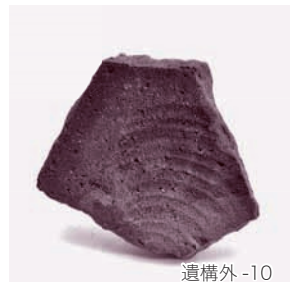
遺構外-8



遺構外-12



遺構外-9



遺構外-10



遺構外-11



遺構外-15

報告書抄録

ふりがな	ひがしだいらいせき だい20 ちく
書名	東平遺跡 第20地区
副書名	
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第61集
編著者名	佐藤祐樹（編著）・小島利史
編集機関	富士市教育委員会（担当課：文化振興課）
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL 0545-55-2875
発行年月日	平成29年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしだいら いせき	しずおかけん ふじし でんぼう	22210	42	35°10'18.70423" 138°40'38.62101"	第20地区	19950907 ∩ 19950914	310	試掘調査
東平遺跡	静岡県 富士市 伝法					19960527 ∩ 19961027		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
東平遺跡	集落跡	奈良・平安時代		竪穴建物跡 54 掘立柱建物跡 4 柱穴列 3 溝状遺構 3 土坑 257 ピット 149	土師器・須恵器 灰釉陶器・瓦 石製品（砥石、磨敲石） 鉄製品（鉄鏃、刀子、 鉄斧、鎌、紡錘）			

要 約	<p>東平遺跡が所在する富士市は、静岡県の東部に位置し、駿河湾を南に臨み、北には富士山がそびえ、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵と岩淵火山地が、東には既に火山としての活動を停止している愛鷹山が存在する。また、遺跡の南西には潤井川が流れ、その河川沿いには古墳時代中期後半以降、沢東A遺跡や中桁・中ノ坪遺跡などの集落が展開する。</p> <p>東平遺跡は奈良時代における駿河国富士郡の郡家と考えられている遺跡で、これまでに380軒近くの竪穴建物跡が調査されている。遺跡内には郡衙周辺寺院に位置づけられる寺院（三日市廃寺跡）が存在したことが布目瓦の分布から明らかとなっている。</p> <p>本書において報告する東平遺跡第20地区は、平成8年に宅地分譲に伴い本発掘調査が行われ、奈良・平安時代を中心とした竪穴建物跡が54軒検出された。建物は8世紀前半がもっとも多く、後半になると半減しながら10世紀前半までは継続した集落展開をみせている。遺跡の縁辺部における本地区では、鉄斧、鉄鎌、刀子、紡錘、鉄鏃など工具としての鉄製品が多いのが特徴と言える。</p>
-----	---

富士市埋蔵文化財調査報告 第 61 集

東平遺跡 第 20 地区

発行年月日 平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行 富士市教育委員会

〒 417-8601 静岡県富士市永田町一丁目 100 番地

TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社

〒 410-0871 静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

(富士市行政資料登録番号 28-51)